

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXII — (本文編)

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在古墳群の調査

1978

福岡県教育委員会

# 九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

— XXII — (本文編)

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在古墳群の調査

1978

福岡県教育委員会

## 序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査地点となった、鞍手郡若宮町・宮田町の両町にわたり所在する汐井掛遺跡群の調査は昭和49年10月から昭和51年4月までの3ヶ年にわたり実施しました。

筑豊西インターチェンジの周辺で発掘された先土器時代から歴史時代のうち、古墳群の調査成果を報告するものであります。

発掘調査にあたって、筑波大学教授増田精一先生、同助教授加藤晋平先生をはじめ、筑波大学歴史人類学系の学生の皆さん方の御指導と御協力に対し深甚の意を表します。

この報告書が「くらて」の古墳時代研究の一助になれば幸甚です。

本書の刊行にあたって、発掘作業に参加して頂いた地元各位、その後の整理作業に協力して頂いた方々、及び日本道路公団等関係各位に対して深く御礼申し上げますとともに、本書を通じて文化財についての御理解を深められんことを祈りつつ、序といたします。

昭和53年 3月31日

福岡県教育委員会

教育長 浦 山 太 郎

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和49年度から昭和51年度にかけて発掘した福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在の汐井掛古墳群の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の受託事業であり、昭和51年度は一部について筑波大学歴史人類学系教室の増田精一教授・加藤晋平助教授その他学生によって実施され、その他は福岡県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に当っては、若宮町・宮田町教育委員会、若宮町老人会及び町内在住の多くの方々の助力を得た。
4. 本書の執筆は、つぎのとおりである。
  - I ……………上野精志
  - II ……………上野精志
  - III ……………池辺元明・上野精志・渡辺健二・酒井仁夫・中牟田賢治・副島邦弘  
中間研志・石山勲・増田精一・蒲原宏行
  - IV ……………上野精志・渡辺健二
5. 昭和49年度から昭和51年度にかけて行った九州縦貫自動車道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦、石山勲、酒井仁夫、副島邦弘、上野精志、児玉真一、中間研志、池辺元明各技師が担当した。
6. 掲載写真のうち遺構写真は各担当者が撮影し、図版目次に上げたとおりであり、遺物写真は九州歴史資料館技師石丸洋の指導の下に岡紀久夫、前田次郎が撮影した。
7. 実測図作成は、遺構については、挿図目次に上げたとおりであり、遺物の実測は上野精志、渡辺健二、平田春美が担当した。
8. 製図については、二神和子、馬場由貴子が主として担当した。
9. 本書の編集は平田春美嬢の協力により上野が担当した。

## 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書-XXII-

## 福岡県鞍手郡若宮町・宮田町所在古墳群の調査

## 目 次

	頁
I はしがき .....	1
1. 昭和49年度の調査の経過 .....	1
2. 昭和50年度の調査の経過 .....	2
3. 昭和51年度の調査の経過 .....	2
4. 発掘調査の方法 .....	4
II 犬鳴川流域の古墳の分布 .....	5
III 汐井掛古墳の調査 .....	21
1. 第1号古墳 .....	21
2. 第2号古墳 .....	31
3. 第3号古墳 .....	42
4. 第4号古墳 .....	51
5. 第5号古墳 .....	61
6. 第6号古墳 .....	69
7. 第7号古墳 .....	74
8. 第8号古墳 .....	79
9. 第9号古墳 .....	83
10. 第10号古墳 .....	95
11. 第11号古墳 .....	100
12. 第12号古墳 .....	109
13. 第13号古墳 .....	113
14. 第14号古墳 .....	119
15. 第15号古墳 .....	134
16. 第18号古墳 .....	138
17. 第19号古墳 .....	141
18. 第20号古墳 .....	151

19. 第21号古墳	151
20. 第22号古墳	157
21. 第23号古墳	161
22. 第24号古墳	166
23. 第25号古墳	173
24. 第26号古墳	178
25. 第27号古墳	180
26. 第28号古墳	183
27. 第29号古墳	185
28. 第30号古墳	187
29. 第31号古墳	189
30. 第32号古墳	191
31. 第33号古墳	193
32. 第34号古墳	194
33. 第35号古墳	196
34. 第36号古墳	199
35. 第37号古墳	202
36. 第38号古墳	203
37. 第39号古墳	204
38. 第40号古墳	206
IV 結 語	210
1 汐井掛古墳群の諸問題	210
1. 各古墳の立地と小支群について	210
2. 墳丘について	211
3. 石室構造について	213
4. 出土遺物の考察	220
a. 出土状況	220
b. 須恵器について	223
c. その他の遺物	227
5. 古墳群の形成過程について	229
2. 考 察	235
1. 犬鳴川流域の古墳文化と汐井掛古墳について	235
a. 犬鳴川における古墳の出現	235



- PL. 13 汐井掛第1号古墳出土遺物 須恵器(2) (岡・前田撮影) ……26
- PL. 14 (1) 汐井掛第1号古墳出土遺物 須恵器(3) (岡・前田撮影) ……28  
 (2) 汐井掛第1号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……29
- PL. 15 (1) 汐井掛第2号古墳発掘前の全景 東から (上野撮影) ……31  
 (2) 汐井掛第2号古墳発掘前の全景 南西から (上野撮影) ……31
- PL. 16 (1) 汐井掛第2号古墳墳丘現存状況全景の航空写真 南西から  
 (上野撮影) ……32  
 (2) 汐井掛第2号古墳墳丘現存状況全景の航空写真 南西から  
 (上野撮影) ……32
- PL. 17 (1) 汐井掛第2号古墳側壁側墳丘盛土の状況 南西から (上野撮影) ……34  
 (2) 汐井掛第2号古墳第2トレンチ奥壁側墳丘盛土の状況 北西から  
 (上野撮影) ……34
- PL. 18 (1) 汐井掛第2号古墳第1トレンチ左側壁側墳丘盛土の状況 南西から  
 (上野撮影) ……34  
 (2) 汐井掛第2号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 南西から  
 (上野撮影) ……34
- PL. 19 (右) 汐井掛第2号古墳石室全景 南西から (上野撮影) ……34  
 (下) 汐井掛第2号古墳石室全景 北西から (上野撮影) ……34
- PL. 20 (1) 汐井掛第2号古墳玄門 羨道より 南西から (上野撮影) ……34  
 (2) 汐井掛第2号古墳玄門 石室より 北東から (上野撮影) ……34
- PL. 21 (1) 汐井掛第2号古墳奥壁 南西から (上野撮影) ……34  
 (2) 汐井掛第2号古墳地山整形面全景 南西から (上野撮影) ……35
- PL. 22 (1) 汐井掛第2号古墳Ⅳ区墓道直上の遺物出土状況 南西から  
 (上野撮影) ……36  
 (2) 汐井掛第2号古墳墳丘内の遺物出土状況 南西から (上野撮影) ……36
- PL. 23 (1) 汐井掛第2号古墳Ⅰ区墳丘内の遺物出土状況と石室 西から  
 (上野撮影) ……36  
 (2) 汐井掛第2号古墳Ⅰ区墳丘内の遺物出土状況 西から (上野撮影) ……36
- PL. 24 (1) 汐井掛第2号古墳Ⅳ区墳丘内の遺物出土状況と石室 南から  
 (上野撮影) ……36  
 (2) 汐井掛第2号古墳Ⅳ区墳丘内の遺物出土状況 南から (上野撮影) ……36
- PL. 25 (1) 汐井掛第2号古墳Ⅳ区地山整形面上の遺物出土状況と石室 南から  
 (上野撮影) ……36



PL. 25	(2) 汐井掛第2号古墳Ⅳ区地山整形面上の遺物出土状況 南から (上野撮影) ……	36
PL. 26	汐井掛第2号古墳出土遺物 須恵器(1) (岡・前田撮影) ……	36
PL. 27	汐井掛第2号古墳出土遺物 須恵器(2) (岡・前田撮影) ……	38
PL. 28	(1) 汐井掛第2号古墳出土遺物 須恵器(3) (岡・前田撮影) ……	38
	(2) 汐井掛第2号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……	40
	(3) 汐井掛第2号古墳出土遺物 鉄環 (前田撮影) ……	41
PL. 29	(1) 汐井掛第3号古墳発掘前の全景 南西から (池辺撮影) ……	42
	(2) 汐井掛第3号古墳墳丘現存状況全景の航空写真 南東から (酒井撮影) ……	43
PL. 30	(1) 汐井掛第3号古墳墳丘現存状況全景 南西から (池辺撮影) ……	43
	(2) 汐井掛第3号古墳側壁側墳丘盛土の状況 南西から (池辺撮影) ……	44
PL. 31	(1) 汐井掛第3号古墳第2トレンチ奥壁側墳丘盛土の状況 南東から (池辺撮影) ……	44
	(2) 汐井掛第3号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 南東から (池辺撮影) ……	44
PL. 32	(右) 汐井掛第3号古墳石室全景 南西から (池辺撮影) ……	45
	(下) 汐井掛第3号古墳石室全景 北西から (池辺撮影) ……	45
PL. 33	(1) 汐井掛第3号古墳地山整形面全景 南西から (池辺撮影) ……	45
	(2) 汐井掛第3号古墳Ⅰ区墳丘上の遺物出土状況 南西から (池辺撮影) ……	46
PL. 34	汐井掛第3号古墳出土遺物 須恵器 (池辺撮影) ……	46
PL. 35	(1) 汐井掛第3号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……	48
	(2) 汐井掛第3号古墳出土遺物 耳環・鉄鏃 (岡・前田撮影) ……	49
PL. 36	(1) 汐井掛古墳E群発掘前の全景の航空写真 北東から (酒井撮影) ……	51
	(2) 汐井掛古墳E群発掘前の全景 北東から (池辺撮影) ……	51
PL. 37	(1) 汐井掛古墳E群発掘前の全景の航空写真 南東から (上野撮影) ……	51
	(2) 汐井掛古墳E群発掘前の全景 南西から (上野撮影) ……	51
PL. 38	(1) 汐井掛古墳E群の発掘前の全景 南東から (上野撮影) ……	51
	(2) 汐井掛第4号古墳発掘前の全景 北東から (上野撮影) ……	51
PL. 39	(1) 汐井掛第4号古墳発掘前の全景 東から (上野撮影) ……	51
	(2) 汐井掛第4号古墳墓道の埋土状況 南東から (上野撮影) ……	51
PL. 40	(1) 汐井掛第4号古墳墳丘現存状況全景 東から (上野撮影) ……	51

- PL. 40 (2) 汐井掛第4号古墳閉塞石の状況 墓道より 東から(上野撮影) ……51
- PL. 41 (1) 汐井掛第4号古墳側壁側墳丘盛土と閉塞石の状況 東から  
(上野撮影) ……51
- (2) 汐井掛第4号古墳閉塞石の状況 石室内より 西から(上野撮影) ……51
- PL. 42 (1) 汐井掛第4号古墳第1トレンチ左側壁側墳丘盛土と石室掘り方埋土内遺物の出土状況 東から(上野撮影) ……51
- (2) 汐井掛第4号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 東から  
(上野撮影) ……51
- PL. 43 (1) 汐井掛第4号古墳第2トレンチ奥壁側墳丘盛土の状況 南から  
(上野撮影) ……51
- (2) 汐井掛第4号古墳石室全景 東から(上野撮影) ……53
- PL. 44 (1) 汐井掛第4号古墳石室全景 東から(上野撮影) ……53
- (2) 汐井掛第4号古墳墳丘地山整形面の状況 東から(上野撮影) ……55
- PL. 45 (1) 汐井掛第4号古墳前室遺物出土状況 東から(上野撮影) ……55
- (2) 汐井掛第4号古墳前室須恵器出土状況 南から(上野撮影) ……55
- PL. 46 (1) 汐井掛第4号古墳地山整形面全景 北東から(上野撮影) ……55
- (2) 汐井掛古墳E群の発掘後全景 北東から(酒井撮影) ……55
- PL. 47 汐井掛第4号古墳出土遺物 須恵器(1)(岡・前田撮影) ……56
- PL. 48 汐井掛第4号古墳出土遺物 須恵器(2)(岡・前田撮影) ……56
- PL. 49 (1) 汐井掛第4号古墳出土遺物 土師器(岡・前田撮影) ……58
- (2) 汐井掛第4号古墳出土遺物 耳環・刀子(岡撮影) ……60
- PL. 50 (1) 汐井掛第5号古墳発掘前の全景 東から(上野撮影) ……61
- (2) 汐井掛第5号古墳墳丘現存状況全景 南から(池辺撮影) ……61
- PL. 51 (1) 汐井掛第5号古墳墳丘現存状況全景 東から(上野撮影) ……61
- (2) 汐井掛第5号古墳側壁側墳丘盛土の状況 東から(上野撮影) ……61
- PL. 52 (1) 汐井掛第5号古墳第1トレンチ左側壁側墳丘盛土の状況 東から  
(上野撮影) ……61
- (2) 汐井掛第5号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 東から  
(上野撮影) ……61
- PL. 53 (1) 汐井掛第5号古墳全景 東から(上野撮影) ……62
- (2) 汐井掛第5号古墳石室全景 西から(上野撮影) ……62
- PL. 54 (1) 汐井掛第5号古墳石室内耳環出土状況 東から(上野撮影) ……63
- (2) 汐井掛第5号古墳地山整形面全景 東から(上野撮影) ……63

- PL. 55 汐井掛第5号古墳出土遺物 須恵器(1) (岡・前田撮影) ……64
- PL. 56 汐井掛第5号古墳出土遺物 須恵器(2) (岡・前田撮影) ……65
- PL. 57 (1) 汐井掛第5号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……67  
 (2) 汐井掛第5号古墳出土遺物 耳環 (岡・前田撮影) ……67  
 (3) 汐井掛第5号古墳出土遺物 鉄器 (岡・前田撮影) ……67
- PL. 58 (1) 汐井掛第6号古墳発掘前の全景 東から (上野撮影) ……69  
 (2) 汐井掛第6号古墳墳丘現存状況全景 東から (上野撮影) ……69
- PL. 59 (1) 汐井掛第6号古墳側壁側墳丘盛土の状況 東から (上野撮影) ……70  
 (2) 汐井掛第6号古墳第3トレンチ右壁側墳丘盛土の状況 東から  
 (上野撮影) ……70
- PL. 60 (1) 汐井掛第6号古墳閉塞石の状況 墓道より 東から (上野撮影) ……70  
 (2) 汐井掛第6号古墳閉塞石の状況 石室内より 西から (上野撮影) ……70
- PL. 61 (1) 汐井掛第6号古墳石室全景 東から (上野撮影) ……70  
 (2) 汐井掛第6号古墳石室全景 南から (上野撮影) ……70
- PL. 62 (1) 汐井掛第6号古墳地山整形面全景の航空写真 東から (上野撮影) ……71  
 (2) 汐井掛第6号古墳石室内耳環出土状況 東から (上野撮影) ……71
- PL. 63 (1) 汐井掛第6号古墳出土遺物 須恵器 (岡・前田撮影) ……72  
 (2) 汐井掛第6号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……72  
 (3) 汐井掛第6号古墳出土遺物 耳環 (岡・前田撮影) ……73
- PL. 64 (1) 汐井掛第7号古墳発掘前の全景 東から (上野撮影) ……74  
 (2) 汐井掛第7号古墳墳丘現存状況全景 南東から (上野撮影) ……74
- PL. 65 (1) 汐井掛第7号古墳側壁側墳丘盛土の状況 南東から (上野撮影) ……74  
 (2) 汐井掛第7号古墳第2トレンチ奥壁側墳丘盛土の状況 南西から  
 (上野撮影) ……74
- PL. 66 (1) 汐井掛第7号古墳第1トレンチ左側壁側墳丘盛土の状況 南東から  
 (上野撮影) ……74  
 (2) 汐井掛第7号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 南東から  
 (上野撮影) ……74
- PL. 67 (1) 汐井掛第7号古墳閉塞石の状況 墓道より 南東から (上野撮影) ……74  
 (2) 汐井掛第7号古墳閉塞石の状況 石室内より 北西から  
 (上野撮影) ……74
- PL. 68 (1) 汐井掛第7号古墳石室全景 南東から (酒井撮影) ……74  
 (2) 汐井掛第7号古墳全景 北東から (酒井撮影) ……74

- PL. 69 (1) 汐井掛第7号古墳左側壁の部分 北東から(酒井撮影) ……75  
 (2) 汐井掛第7号古墳地山整形面全景の航空写真 北東から  
 (酒井撮影) ……76
- PL. 70 (1) 汐井掛第7号古墳出土遺物 須恵器(岡・前田撮影) ……76  
 (2) 汐井掛第7号古墳出土遺物 土師器・陶器(岡・前田撮影) ……78
- PL. 71 (1) 汐井掛第8号古墳発掘前の全景 北東から(上野撮影) ……79  
 (2) 汐井掛第8号古墳墳丘現存状況 北東から(上野撮影) ……79
- PL. 72 (1) 汐井掛第8号古墳石室の玄門 北東から(上野撮影) ……79  
 (2) 汐井掛第8号古墳石室全景 北西から(上野撮影) ……79
- PL. 73 (左) 汐井掛第8号古墳石室と掘り方 北東から(上野撮影) ……80  
 (右) 汐井掛第8号古墳根石と掘り方全景 北東から(上野撮影) ……80
- PL. 74 (1) 汐井掛第8号古墳地山整形面全景の航空写真 北から(池辺撮影) ……80  
 (2) 汐井掛第8号古墳出土遺物 耳環(岡・前田撮影) ……81
- PL. 75 (1) 汐井掛第9号古墳発掘前の全景 東から(池辺撮影) ……83  
 (2) 汐井掛第9号古墳墳丘現存状況全景 東から(池辺撮影) ……83
- PL. 76 (1) 汐井掛第9号古墳閉塞石の状況 東から(池辺撮影) ……83  
 (2) 汐井掛第9号古墳第2トレンチ左側壁側墳丘盛土の状況 東から  
 (池辺撮影) ……83
- PL. 77 (1) 汐井掛第9号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 東から  
 (池辺撮影) ……83  
 (2) 汐井掛第9号古墳石室全景 東から(池辺撮影) ……84
- PL. 78 (1) 汐井掛第9号古墳石室全景 東から(池辺撮影) ……84  
 (2) 汐井掛第9号古墳玄室全景 西から(池辺撮影) ……85
- PL. 79 (1) 汐井掛第9号古墳石室全景 南から(池辺撮影) ……85  
 (2) 汐井掛第9号古墳腰石と掘り方全景の航空写真 北から  
 (池辺撮影) ……85
- PL. 80 (1) 汐井掛第9号古墳玄室内遺物出土状況 北から(池辺撮影) ……86  
 (2) 汐井掛第9号古墳玄室内人骨遺存状況 北から(池辺撮影) ……86
- PL. 81 汐井掛第9号古墳出土遺物 須恵器(1)(岡・前田撮影) ……86
- PL. 82 汐井掛第9号古墳出土遺物 須恵器(2)(岡・前田撮影) ……89
- PL. 83 汐井掛第9号古墳出土遺物 須恵器(3)(岡・前田撮影) ……90
- PL. 84 汐井掛第9号古墳出土遺物 須恵器(4)(岡・前田撮影) ……91

- PL. 85 (1) 汐井掛第9号古墳出土遺物 土師器(岡・前田撮影) ……92  
 (2) 汐井掛第9号古墳出土遺物 耳環(岡・前田撮影) ……92  
 (3) 汐井掛第9号古墳出土遺物 玉類(岡・前田撮影) ……92  
 (4) 汐井掛第9号古墳出土遺物 鉄鏃(岡・前田撮影) ……92
- PL. 86 (1) 汐井掛第10号古墳発掘前の全景 南東から(上野撮影) ……95  
 (2) 汐井掛第10号古墳発掘前の全景 東から(上野撮影) ……95
- PL. 87 (1) 汐井掛第10号古墳現存状況全景の航空写真 北から(池辺撮影) ……95  
 (2) 汐井掛第10号古墳石室全景 北東から(副島邦弘撮影) ……96
- PL. 88 (1) 汐井掛第10号古墳側壁側掘り方内埋土の状況 北東から  
 (副島撮影) ……96  
 (2) 汐井掛第10号古墳腰石の状況 北東から(副島撮影) ……96
- PL. 89 (1) 汐井掛第10号古墳掘り方全景 北東から(副島撮影) ……97  
 (2) 汐井掛第10号古墳出土遺物 須恵器・土師器・刀(岡・前田撮影) ……98
- PL. 90 (1) 汐井掛古墳B群発掘前の全景 南西から(上野撮影) ……100  
 (2) 汐井掛古墳B群発掘前の全景 東から(上野撮影) ……100
- PL. 91 (1) 汐井掛古墳B群発掘状況 北西から(上野撮影) ……100  
 (2) 汐井掛古墳B群発掘状況 西から(酒井撮影) ……100
- PL. 92 (1) 汐井掛第11号古墳発掘前の全景 北西から(上野撮影) ……100  
 (2) 汐井掛第11号古墳墳丘現存状況全景 北西から  
 (中間研二撮影) ……100
- PL. 93 (1) 汐井掛第11号古墳墳丘現存状況全景 南から(中間撮影) ……100  
 (2) 汐井掛第11号古墳側壁側墳丘盛土の状況 北西から(中間撮影) ……101
- PL. 94 (左) 汐井掛第11号古墳石室全景 北西から(中間撮影) ……101  
 (下) 汐井掛第11号古墳石室全景 北東から(中間撮影) ……101
- PL. 95 (1) 汐井掛第11号古墳石室全景 北東から(中間撮影) ……102  
 (2) 汐井掛第11号古墳玄門と奥壁 北西から(中間撮影) ……102
- PL. 96 (左) 汐井掛第11号古墳腰石と掘り方全景 北西から(中間撮影) ……103  
 (下) 汐井掛第11号古墳出土遺物 須恵器(1)(岡・前田撮影) ……103
- PL. 97 汐井掛第11号古墳出土遺物 須恵器(2)(岡・前田撮影) ……106
- PL. 98 汐井掛第11号古墳出土遺物 須恵器(3)(岡・前田撮影) ……106
- PL. 99 (1) 汐井掛第11号古墳出土遺物 左-須恵器(4) 右-土師器  
 (岡・前田撮影) ……107
- PL. (2) 汐井掛第11号古墳出土遺物 鉄器(岡・前田撮影) ……107

- PL. 100 (1) 汐井掛第12号古墳発掘前の全景 西から(上野撮影)…………… 109  
 (2) 汐井掛第12号古墳発掘前の全景 東から(上野撮影)…………… 109
- PL. 101 (1) 汐井掛第12号古墳発掘状況の航空写真 南東から(上野撮影)……… 109  
 (2) 汐井掛第12号古墳墳丘現存状況全景 北西から(石山勲撮影)……… 109
- PL. 102 (1) 汐井掛第12号古墳腰石と掘り方全景 北西から(中間撮影)…………… 110  
 (2) 汐井掛第12号古墳出土遺物 須恵器(岡・前田撮影)…………… 112  
 (3) 汐井掛第12号古墳出土遺物 玉類(岡・前田撮影)…………… 112
- PL. 103 (1) 汐井掛第13号古墳発掘前の全景 北西から(上野撮影)…………… 113  
 (2) 汐井掛第13号古墳発掘前の全景 東から(上野撮影)…………… 113
- PL. 104 (1) 汐井掛第13号古墳発掘状況の航空写真 南から(上野撮影)…………… 113  
 (2) 汐井掛第13号古墳墳丘現存状況全景 北西から(石山撮影)…………… 113
- PL. 105 (上) 汐井掛第13号古墳閉塞石の状況 墓道より 西から(石山撮影)… 114  
 (右) 汐井掛第13号古墳閉塞石の状況 石室より 西から(石山撮影)… 114
- PL. 106 (1) 汐井掛第13号古墳羨道の状況 西から(石山撮影)…………… 114  
 (2) 汐井掛第13号古墳羨道左側壁の状況 南西から(石山撮影)…………… 115
- PL. 107 (上) 汐井掛第13号古墳羨道左側壁の状況 北西から(石山撮影)…………… 115  
 (右) 汐井掛第13号古墳と掘り方全景 西から(石山撮影)…………… 115
- PL. 108 (1) 汐井掛第13号古墳出土遺物 須恵器(岡・前田撮影)…………… 116  
 (2) 汐井掛第13号古墳出土遺物 鉄器(岡・前田撮影)…………… 116
- PL. 109 (1) 汐井掛第14号古墳発掘前の全景 西から(上野撮影)…………… 119  
 (2) 汐井掛第14号古墳発掘前の全景 東から(上野撮影)…………… 119
- PL. 110 (1) 汐井掛第14号古墳墳丘現存状況全景の航空写真 南西から  
 (上野撮影)…………… 119  
 (2) 汐井掛第14号古墳羨道の状況 西から(副島撮影)…………… 120
- PL. 111 (上) 汐井掛第14号古墳玄門の状況 石室より 東から(副島撮影)……… 121  
 (右) 汐井掛第14号古墳腰石と掘り方全景 西から(副島撮影)…………… 121
- PL. 112 (1) 汐井掛第14号古墳石室内遺物出土状況 東から(酒井撮影)…………… 121  
 (2) 汐井掛第14号古墳Ⅳ区墳丘上遺物出土状況 西から(酒井撮影)… 121
- PL. 113 (1) 汐井掛第14号古墳Ⅳ区墳丘上遺物出土状況 南西から  
 (酒井撮影)…………… 121  
 (2) 汐井掛第14号古墳墳丘盛土内遺物出土状況 西から(酒井撮影)… 121
- PL. 114 (1) 汐井掛第14号古墳Ⅰ区墳丘盛土内遺物出土状況 西から  
 (酒井撮影)…………… 121

PL. 114	(2) 汐井掛第14号古墳Ⅳ区墳丘盛土内遺物出土状況 西から (酒井撮影) ……	121
PL. 115	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(1) (岡・前田撮影) ……	123
PL. 116	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(2) (岡・前田撮影) ……	124
PL. 117	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(3) (岡・前田撮影) ……	124
PL. 118	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(4) (岡・前田撮影) ……	127
PL. 119	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(5) (岡・前田撮影) ……	127
PL. 120	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(6) (岡・前田撮影) ……	128
PL. 121	汐井掛第14号古墳出土遺物 須恵器(7) (岡・前田撮影) ……	129
PL. 122	(1) 汐井掛第14号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) ……	131
	(2) 汐井掛第14号古墳出土遺物 玉・鉄器類 (岡・前田撮影) ……	132
PL. 123	(1) 汐井掛第15号古墳発掘前の全景 北西から (上野撮影) ……	134
	(2) 汐井掛第15号古墳発掘前の全景 東から (上野撮影) ……	134
PL. 124	(1) 汐井掛第15号古墳墳丘現存状況全景 西から (中間撮影) ……	134
	(2) 汐井掛第15号古墳発掘状況 東から (中間撮影) ……	134
PL. 125	(㊦) 汐井掛第15号古墳石室全景 墓道より 西から (中間撮影) ……	135
	(㊧) 汐井掛第15号古墳石室全景 奥壁より 東から (中間撮影) ……	135
PL. 126	(1) 汐井掛第16号・第17号古墳全景 北東から (上野撮影) ……	137
	(2) 汐井掛第16号古墳 南西から (上野撮影) ……	137
PL. 127	(1) 汐井掛第18号古墳発掘前の全景 東から (池辺撮影) ……	139
	(2) 汐井掛第18号古墳発掘前の全景 東から (池辺撮影) ……	139
PL. 128	(1) 汐井掛第18号古墳墳丘現存状況全景の航空写真 南から (上野撮影) ……	139
	(2) 汐井掛第18号古墳と汐井掛古墳H群全景の航空写真 南西から (上野撮影) ……	139
PL. 129	(1) 汐井掛第18号古墳トレンチ墳丘盛土の状況 南西から (石山撮影) ……	139
	(2) 汐井掛第18号古墳トレンチ墳丘盛土の状況 北西から (石山撮影) ……	139
PL. 130	(1) 汐井掛第18号古墳主体部全景 南東から (石山撮影) ……	139
	(2) 汐井掛第18号古墳粘土槨全景 南東から (石山撮影) ……	139
PL. 131	(㊦) 汐井掛第19号古墳発掘前の全景航空写真 北西から (上野撮影) ……	143
	(㊧) 汐井掛第19号古墳全景 南西から (上野撮影) ……	144

- PL. 132 (1) 汐井掛第19号古墳閉塞石の状況 墓道より 南西から  
(上野撮影) … 144  
(2) 汐井掛第19号古墳閉塞石の状況 墓道より 南西から  
(上野撮影) …… 144
- PL. 133 (1) 汐井掛第19号古墳石室全景 南西から (上野撮影) …… 144  
(2) 汐井掛第19号古墳石室全景 南西から (上野撮影) …… 144
- PL. 134 (1) 汐井掛第19号古墳石室全景 北西から (上野撮影) …… 144  
(2) 汐井掛第19号古墳右側壁と根石 北西から (上野撮影) …… 145
- PL. 135 (上) 汐井掛第19号古墳左側壁と根石 南東から (上野撮影) …… 145  
(右) 汐井掛第19号古墳右室の根石 南西から (上野撮影) …… 145
- PL. 136 (1) 汐井掛第19号古墳右側壁の裏込め石 南西から (上野撮影) …… 145  
(2) 汐井掛第19号古墳左側壁の裏込め石 南西から (上野撮影) …… 145
- PL. 137 (1) 汐井掛第19号古墳玄室内遺物出土状況 北から (上野撮影) …… 145  
(2) 汐井掛第19号古墳奥壁下遺物出土状況 西から (上野撮影) …… 145
- PL. 138 (1) 汐井掛第19号古墳出土遺物 土器 (岡・前田撮影) …… 147  
(2) 汐井掛第19号古墳出土遺物 耳環・玉 (岡・前田撮影) …… 148  
(3) 汐井掛第19号古墳出土遺物 鉄器 (岡・前田撮影) …… 148
- PL. 139 (1) 汐井掛古墳D群発掘前の全景 北から (児玉撮影) …… 151  
(2) 汐井掛第20号古墳発掘前の全景の航空写真 東から (上野撮影) …… 151
- PL. 140 (上) 汐井掛第20号古墳発掘前の全景 北西から (児玉撮影) …… 151  
(右) 汐井掛第20号古墳全景 北西から (児玉撮影) …… 151
- PL. 141 (1) 汐井掛第21号古墳発掘前の全景 西から (児玉撮影) …… 152  
(2) 汐井掛第21号古墳墳丘現存状況 北西から (児玉撮影) …… 152
- PL. 142 (上) 汐井掛第21号古墳全景 西から (石山撮影) …… 153  
(右) 汐井掛第21号古墳石室全景 西から (石山撮影) …… 153
- PL. 143 (上) 汐井掛第21号古墳玄門 玄室より 東から (石山撮影) …… 153  
(右) 汐井掛第21号古墳腰石全景 西から (石山撮影) …… 153
- PL. 144 (1) 汐井掛第21号古墳遺物出土状況 北から (石山撮影) …… 153  
(2) 汐井掛第21号古墳出土遺物 土師器 (岡・前田撮影) …… 154  
(3) 汐井掛第21号古墳出土遺物 装身具 (岡・前田撮影) …… 155
- PL. 145 (1) 汐井掛第22号古墳発掘前の全景 南西から (児玉撮影) …… 157  
(2) 汐井掛第22号古墳墳丘現存状況全景 北から (児玉撮影) …… 157
- PL. 146 (1) 汐井掛第22号古墳墳丘現存状況 南西から (児玉撮影) …… 157



- (2) 汐井掛第22号古墳第3トレンチ右側壁側墳丘盛土の状況 南西から  
(児玉撮影) …… 158
- PL. 147 (1) 汐井掛第22号古墳石室全景 南西から(副島撮影) …… 158  
(2) 汐井掛第22号古墳前室全景 北西から(副島撮影) …… 159
- PL. 148 (1) 汐井掛第22号古墳奥壁 南西から(副島撮影) …… 159  
(2) 汐井掛第22号古墳腰石全景 南西から(副島撮影) …… 159
- PL. 149 (1) 汐井掛第23号古墳発掘前の全景航空写真 北から(上野撮影) …… 161  
(2) 汐井掛第23号古墳全景 西から(中間撮影) …… 161
- PL. 150 (1) 汐井掛第23号古墳石室全景 北から(中間撮影) …… 161  
(2) 汐井掛第23号古墳石室全景 東から(中間撮影) …… 161
- PL. 151 (上) 汐井掛第23号古墳閉塞石の状況 西から(中間撮影) …… 161  
(右) 汐井掛第23号古墳玄門 西から(中間撮影) …… 162
- PL. 152 (1) 汐井掛第23号古墳玄室内遺物出土状況 東から(中間撮影) …… 163  
(2) 汐井掛第23号古墳出土遺物 須恵器(岡・前田撮影) …… 163
- PL. 153 (1) 汐井掛古墳A群発掘前の全景航空写真 南西から(上野撮影) …… 165  
(2) 汐井掛古墳A群発掘前の全景航空写真 北東から(上野撮影) …… 165
- PL. 154 (1) 汐井掛古墳A群発掘前の全景 東から(上野撮影) …… 165  
(2) 汐井掛古墳A群発掘状況 東から(上野撮影) …… 165
- PL. 155 (1) 汐井掛第24号古墳全景 東から(上野撮影) …… 168  
(2) 汐井掛第24号古墳閉塞石の状況 墓道より 南西から  
(上野撮影) …… 168
- PL. 156 (1) 汐井掛第24号古墳閉塞石の状況 石室内より 北東から  
(上野撮影) …… 168  
(2) 汐井掛第24号古墳玄門 南西から(上野撮影) …… 168
- PL. 157 (下) 汐井掛第24号古墳石室全景 北西から(上野撮影) …… 168  
(右) 汐井掛第24号古墳石室全景 南西から(上野撮影) …… 168
- PL. 158 (1) 汐井掛第24号古墳奥壁 南西から(上野撮影) …… 168  
(2) 汐井掛第24号古墳左側壁 北東から(上野撮影) …… 168
- PL. 159 (1) 汐井掛第24号古墳前庭部遺物出土状況と石室 南西から  
(上野撮影) …… 169  
(2) 汐井掛第24号古墳前庭部遺物出土状況 北東から(上野撮影) …… 169
- PL. 160 (1) 汐井掛第24号古墳石室内遺物出土状況 南西から(上野撮影) …… 169  
(2) 汐井掛第24号古墳出土遺物 須恵器(岡・前田撮影) …… 170

PL. 161	汐井掛第24号古墳出土装身具（岡・前田撮影）	170
PL. 162	(左) 汐井掛第25号古墳全景 南西から（中間撮影）	173
	(右) 汐井掛第25号古墳石室全景 南西から（中間撮影）	173
PL. 163	(1) 汐井掛第25号古墳石室全景 北西から（中間撮影）	173
	(2) 汐井掛第25号古墳玄門 南西から（中間撮影）	173
PL. 164	(1) 汐井掛第25号古墳左袖石 南東から（中間撮影）	173
	(2) 汐井掛第25号古墳左側石 南東から（中間撮影）	173
PL. 165	(下) 汐井掛第25号古墳石室内遺物出土状況 南東から（中間撮影）	174
	(右) 汐井掛第25号古墳右側壁の裏込め石 南西から（中間撮影）	174
PL. 166	(1) 汐井掛第25号古墳出土遺物 須恵器（岡・前田撮影）	174
	(2) 汐井掛古墳A群出土古銭（前田撮影）	177
PL. 167	(1) 汐井掛第26号古墳石室全景 北西から（上野撮影）	178
	(2) 汐井掛第26号古墳石室全景 南西から（上野撮影）	178
PL. 168	(1) 汐井掛第27号古墳発掘前の全景 北東から（酒井撮影）	180
	(2) 汐井掛第27号古墳閉塞石の状況 墓道より 南西から （酒井撮影）	181
PL. 169	(1) 汐井掛第27号古墳閉塞石の状況 玄室より 北東から （酒井撮影）	181
	(2) 汐井掛第27号古墳閉塞時の石室全景 南東から（酒井撮影）	181
PL. 170	(左) 汐井掛第27号古墳石室全景 南西から（酒井撮影）	181
	(右) 汐井掛第27号古墳腰石の状況 南西から（酒井撮影）	181
PL. 171	(1) 汐井掛第27号古墳全景 北東から（酒井撮影）	181
	(2) 汐井掛第27号古墳出土遺物 須恵器（蒲原宏行撮影）	182
PL. 172	(1) 汐井掛第28号古墳発掘前の全景 北から（酒井撮影）	183
	(2) 汐井掛第28号古墳石室全景 北西から（酒井撮影）	183
PL. 173	(1) 汐井掛第28号古墳石室全景 南西から（酒井撮影）	183
	(2) 汐井掛第28号古墳床面の状況 北西から（酒井撮影）	184
PL. 174	(1) 汐井掛第28号古墳腰石の状況 北西から（上野撮影）	184
	(2) 汐井掛第28号古墳全景 北西から（上野撮影）	184
PL. 175	(1) 汐井掛古墳F群墳丘現存状況全景 北西から（上野撮影）	185
	(2) 汐井掛古墳F群全景 南西から（上野撮影）	185
PL. 176	(1) 汐井掛第29号古墳発掘前の全景 南から（池辺撮影）	185
	(2) 汐井掛第29号古墳墳丘現存状況全景 北東から（上野撮影）	185

PL. 177	(1)	汐井掛第29号古墳全景 南西から (上野撮影) ……………	186
	(2)	汐井掛第29号古墳閉塞石の状況 墓道より 南西から (酒井撮影) ……	186
PL. 178	(1)	汐井掛第29号古墳閉塞石の状況 石室内より 北東から (酒井撮影) ……	186
	(2)	汐井掛第29号古墳石室全景 南東から (酒井撮影) ……………	187
PL. 179	(1)	汐井掛第30号古墳発掘前の全景 南東から (上野撮影) ……………	187
	(2)	汐井掛第30号古墳全景 南西から (上野撮影) ……………	187
PL. 180	(右)	汐井掛第30号古墳石室全景 南西から (上野撮影) ……………	188
	(下)	汐井掛第30号古墳閉塞石の状況 南西から (上野撮影) ……………	188
PL. 181	(1)	汐井掛第30号古墳石室全景 北東から (上野撮影) ……………	188
	(2)	汐井掛第30号古墳石室全景 南西から (上野撮影) ……………	188
PL. 182	(1)	汐井掛第30号古墳奥壁 南西から (上野撮影) ……………	188
	(2)	汐井掛第30号古墳左側壁 南から (上野撮影) ……………	188
PL. 183	(1)	汐井掛第30号古墳右側壁 北西から (上野撮影) ……………	188
	(2)	汐井掛第30号古墳柵石と床面 南西から (上野撮影) ……………	188
	(3)	汐井掛第30号古墳出土遺物 鉄鏃 (前田撮影) ……………	189
PL. 184	(1)	汐井掛第31号古墳墳丘現存状況の全景 南西から (上野撮影) ……	190
	(2)	汐井掛第31号古墳発掘状況 南から (池辺撮影) ……………	190
PL. 185	(1)	汐井掛第31号古墳全景 南から (池辺撮影) ……………	190
	(2)	汐井掛第31号古墳床面 東から (池辺撮影) ……………	190
PL. 186	(1)	汐井掛第32号古墳墳丘現存状況の全景 西から (上野撮影) ……	191
	(2)	汐井掛第32号古墳発掘状況 南西から (上野撮影) ……………	191
PL. 187	(右)	汐井掛第32号古墳石室全景 南西から (上野撮影) ……………	191
	(下)	汐井掛第32号古墳石室全景 北西から (上野撮影) ……………	192
PL. 188	(1)	汐井掛第32号古墳奥壁 南西から (上野撮影) ……………	192
	(2)	汐井掛第32号古墳左側壁 南東から (上野撮影) ……………	192
PL. 189	(1)	汐井掛第33号古墳墳丘現存状況の全景 西から (上野撮影) ……	193
	(2)	汐井掛第33号古墳発掘状況 南西から (上野撮影) ……………	193
PL. 190	(1)	汐井掛第33号古墳閉塞石の状況 南西から (上野撮影) ……………	193
	(2)	汐井掛第33号古墳石室全景 南西から (上野撮影) ……………	193
PL. 191	(1)	汐井掛第33号古墳柵石 南西から (上野撮影) ……………	193
	(2)	汐井掛第33号古墳右側壁 北西から (上野撮影) ……………	193

PL. 192	(1)	汐井掛第34号古墳発掘状況	南西から (上野撮影)	194
	(2)	汐井掛第34号古墳全景	北東から (上野撮影)	194
PL. 193	(1)	汐井掛第34号古墳石室全景	南東から (上野撮影)	195
	(2)	汐井掛第34号古墳南東側壁	北西から (上野撮影)	195
PL. 194	(1)	汐井掛第34号古墳南西側壁	北東から (上野撮影)	195
	(2)	汐井掛第34号古墳北東側壁	南西から (上野撮影)	195
PL. 195	(1)	汐井掛第35号古墳墳丘現存状況の全景	北西から (上野撮影)	196
	(2)	汐井掛第35号古墳石室全景	北西から (池辺撮影)	196
PL. 196	(1)	汐井掛古墳G群全景の航空写真	西から (酒井撮影)	199
	(2)	汐井掛古墳G群全景の航空写真	東から (池辺撮影)	199
PL. 197	(1)	汐井掛第36号古墳石室全景	西から (池辺撮影)	201
	(2)	汐井掛第36号古墳石室全景	南から (池辺撮影)	201
PL. 198	(1)	汐井掛第37号古墳発掘状況	西から (副島撮影)	202
	(2)	汐井掛第37号古墳石室全景	南東から (池辺撮影)	202
PL. 199	(左)	汐井掛第38号古墳全景	南西から (酒井撮影)	203
	(右)	汐井掛第38号古墳石室全景	東から (池辺撮影)	203
PL. 200	(1)	汐井掛第38号古墳掘り方全景	南から (上野撮影)	203
	(2)	汐井掛第38号古墳出土遺物	青磁 (岡・前田撮影)	204
PL. 201	(1)	汐井掛第39号古墳石室全景	南東から (副島撮影)	205
	(2)	汐井掛第39号古墳奥壁	南東から (上野撮影)	205
PL. 202	(1)	汐井掛第39号古墳石室全景	奥壁側より 北西から (上野撮影)	205
	(2)	汐井掛第39号古墳右側壁	南西から (上野撮影)	205
PL. 203	(1)	汐井掛第39号古墳左側壁	北東から (上野撮影)	205
	(2)	汐井掛第39号古墳掘り方全景	南東から (上野撮影)	205
PL. 204	(1)	汐井掛第40号古墳全景	西から (酒井撮影)	206
	(2)	汐井掛第40号古墳とその東側出土須恵器の状況	南西から (池辺撮影)	206
PL. 205	(1)	汐井掛第40号古墳石室全景	東から (上野撮影)	206
	(2)	汐井掛第40号古墳東側壁	西から (上野撮影)	206
PL. 206	(1)	汐井掛第40号古墳北側壁	南から (上野撮影)	206
	(2)	汐井掛第40号古墳西側壁	東から (上野撮影)	206
PL. 207	(1)	汐井掛第40号古墳南側壁	北から (上野撮影)	206
	(2)	汐井掛第40号古墳掘り方全景	南から (上野撮影)	207

PL. 208 汐井掛第40号古墳周辺出土遺物 須恵器 (岡・前田撮影) …………… 207

## 挿 図 目 次

	頁
Fig. 1 若宮町・宮田町内遺跡分布図 (縮尺1/50,000) (上野精志作成) ……………	4-5
Fig. 2 汐井掛第1号・第2号・第3号古墳周辺地形図 (縮尺1/400) (酒井仁夫・上野精志・池辺元明・高田一弘・関晴彦・小味山ゆり実測, 二神和子製図) ……	22
Fig. 3 汐井掛第1号古墳地形図 (縮尺1/200) (上野・小味山実測, 二神製図) ……	23
Fig. 4 汐井掛第1号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200) (児玉真一・池辺実測, 二神製図) ……………	24
Fig. 5 汐井掛第1号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3) (渡辺健二・平田春美実測, 二神製図) ……………	27
Fig. 6 汐井掛第1号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6) (上野・平田実測, 二神製図) ……………	28
Fig. 7 汐井掛第1号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4) (渡辺実測, 二神製図) ……	29
Fig. 8 汐井掛第2号古墳地形図 (縮尺1/200) (上野・関・小味山実測, 二神製図) ……………	31
Fig. 9 汐井掛第2号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200) (上野・関・小味山実測, 二神製図) ……………	32
Fig. 10 汐井掛第2号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200) (上野実測, 二神製図) ……………	33
Fig. 11 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3) (渡辺・平田実測, 二神製図) ……………	37
Fig. 12 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(2) (縮尺1/3) (渡辺実測, 二神製図) ……………	39
Fig. 13 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(3) (縮尺1/6) (上野・平田実測, 二神製図) ……………	40
Fig. 14 汐井掛第2号古墳墳丘出土土師器実測図 (縮尺1/4) (渡辺実測, 二神製図) ……………	40
Fig. 15 汐井掛第2号古墳出土鉄環実測図 (縮尺1/2) (上野実測, 二神製図) ……	41
Fig. 16 汐井掛第3号古墳地形図 (縮尺1/200)	

- (上野・池辺・高田実測, 二神製図) .....42
- Fig. 17 汝井掛第3号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)
- (上野・池辺・高田実測, 二神製図) .....43
- Fig. 18 汝井掛第3号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)
- (上野・池辺・高田実測, 二神製図) .....44
- Fig. 19 汝井掛第3号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)
- (渡辺・平田実測, 二神製図) .....47
- Fig. 20 汝井掛第3号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) .....48
- Fig. 21 汝井掛第3号古墳出土耳環・鉄鏃実測図(縮尺1/2)
- (上野・実測, 二神製図) .....49
- Fig. 22 汝井掛第4号・第5号・第6号・第7号・第8号・第9号・第10号古墳周辺地形図(縮尺1/400)(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....52
- Fig. 23 汝井掛第4号古墳地形図(縮尺1/200)
- (上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....53
- Fig. 24 汝井掛第4号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)
- (上野・小味山実測, 二神製図) .....54
- Fig. 25 汝井掛第4号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)
- (上野・小味山実測, 二神製図) .....55
- Fig. 26 汝井掛第4号古墳出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)
- (渡辺・平田実測, 二神製図) .....57
- Fig. 27 汝井掛第4号古墳出土須恵器実測図(2)(縮尺1/6)
- (平田実測, 二神製図) .....58
- Fig. 28 汝井掛第4号古墳出土土師器実測図(縮尺1/2・1/6)
- (渡辺実測, 二神製図) .....59
- Fig. 29 汝井掛第4号古墳出土耳環・刀子実測図(縮尺1/2)
- (上野実測, 二神製図) .....60
- Fig. 30 汝井掛第5号古墳地形図(縮尺1/200)
- (上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....61
- Fig. 31 汝井掛第5号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)
- (高田・小味山実測, 二神製図) .....62
- Fig. 32 汝井掛第5号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)
- (上野・小味山実測, 二神製図) .....63
- Fig. 33 汝井掛第5号古墳出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)

- (渡辺・平田実測, 二神製図) .....65
- Fig. 34 汐井掛第5号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6)  
(平田実測, 二神製図) .....66
- Fig. 35 汐井掛第5号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/2・1/4)  
(渡辺実測, 二神製図) .....67
- Fig. 36 汐井掛第5号古墳出土耳環実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) ..... 67
- Fig. 37 汐井掛第5号古墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....67
- Fig. 38 汐井掛第6号古墳地形図 (縮尺1/200)  
(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....69
- Fig. 39 汐井掛第6号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)  
(上野・小味山実測, 二神製図) .....69
- Fig. 40 汐井掛第6号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(上野・小味山実測, 二神製図) .....70
- Fig. 41 汐井掛第6号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)  
(平田実測, 二神製図) .....72
- Fig. 42 汐井掛第6号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6)  
(平田実測, 二神製図) .....72
- Fig. 43 汐井掛第6号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) ... 73
- Fig. 44 汐井掛第6号古墳出土耳環実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....73
- Fig. 45 汐井掛第7号古墳地形図 (縮尺1/200)  
(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....74
- Fig. 46 汐井掛第7号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....75
- Fig. 47 汐井掛第7号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....75
- Fig. 48 汐井掛第7号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)  
(渡辺・平田実測, 二神製図) .....77
- Fig. 49 汐井掛第7号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) .....78
- Fig. 50 汐井掛第7号古墳出土陶器実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図)..... 78
- Fig. 51 汐井掛第8号古墳地形図 (縮尺1/200)(高田・小味山実測, 二神製図) .....79
- Fig. 52 汐井掛第8号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....79
- Fig. 53 汐井掛第8号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

- (高田・小味山実測, 二神製図) .....80
- Fig. 54 汐井掛第8号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) ... 81
- Fig. 55 汐井掛第8号古墳出土耳環・丸玉(縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....81
- Fig. 56 汐井掛第9号古墳地形図(縮尺1/200)(高田・小味山実測, 二神製図) .....83
- Fig. 57 汐井掛第9号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)(高田・小味山実測, 二神製図) 84
- Fig. 58 汐井掛第9号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....84
- Fig. 59 汐井掛第9号古墳石室内遺物出土状況実測図(縮尺1/20)  
(児玉・池辺・高田実測, 馬場由貴子製図).....87
- Fig. 60 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)  
(渡辺・平田実測, 二神製図) .....88
- Fig. 61 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(2)(縮尺1/3)  
(渡辺実測, 二神製図) .....91
- Fig. 62 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(3)(縮尺1/6)  
(平田実測, 二神製図) .....92
- Fig. 63 汐井掛第9号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4) 渡辺実測, 二神製図) ...92
- Fig. 64 汐井掛第9号古墳出土耳環・丸玉実測図(縮尺1/2)  
(上野実測, 二神製図) .....93
- Fig. 65 汐井掛第9号古墳出土鉄器実測図(縮尺1/2) 上野実測, 二神製図) .....93
- Fig. 66 汐井掛第10号古墳地形図(縮尺1/200) 高田・小味山実測, 二神製図) ...95
- Fig. 67 汐井掛第10号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....95
- Fig. 68 汐井掛第10号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)  
(高田・小味山実測, 二神製図) .....96
- Fig. 69 汐井掛第10号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) ...97
- Fig. 70 汐井掛第10号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) ...98
- Fig. 71 汐井掛第10号古墳出土鉄刀実測図(縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....98
- Fig. 72 汐井掛第11号・第12号・第13号・第14号・第15号・第16号・第17号・第18号  
・第37号・第38号・第39号・第40号古墳周辺地形図(縮尺1/400)  
(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....99
- Fig. 73 汐井掛第11号古墳地形図(縮尺1/200)  
(上野・高田・小味山実測, 二神製図) ..... 100
- Fig. 74 汐井掛第11号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)



	(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....	101
Fig. 75	汐井掛第11号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)	
	(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....	102
Fig. 76	汐井掛第11号古墳出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)	
	(渡辺・平田実測, 二神製図) .....	104
Fig. 77	汐井掛第11号古墳出土須恵器実測図(2)(縮尺1/3)	
	(渡辺実測, 二神製図) .....	105
Fig. 78	汐井掛第11号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図)...	107
Fig. 79	汐井掛第11号古墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....	107
Fig. 80	汐井掛第12号古墳地形図(縮尺1/200)(高田・小味山実測, 二神製図)...	109
Fig. 81	汐井掛第12号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)	
	(高田・小味山実測, 二神製図) .....	110
Fig. 82	汐井掛第12号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)	
	(高田・小味山実測, 二神製図) .....	110
Fig. 83	汐井掛第12号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図)...	112
Fig. 84	汐井掛第12号古墳出土土玉実測図(縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....	112
Fig. 85	汐井掛第13号古墳地形図(縮尺1/200)	
	(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....	113
Fig. 86	汐井掛第13号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)	
	(高田・小味山実測, 二神製図) .....	114
Fig. 87	汐井掛第13号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)	
	(高田・舟山実測, 二神製図) .....	114
Fig. 88	汐井掛第13号古墳出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)	
	(渡辺・平田実測, 二神製図) .....	117
Fig. 89	汐井掛第13号古墳出土須恵器実測図(2)(縮尺1/6)	
	(平田実測, 二神製図) .....	117
Fig. 90	汐井掛第13号古墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) .....	118
Fig. 91	汐井掛第14号古墳地形図(縮尺1/200)	
	(上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....	119
Fig. 92	汐井掛第14号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)	
	(高田・小味山実測, 二神製図) .....	120
Fig. 93	汐井掛第14号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)	
	(高田・舟山実測, 二神製図) .....	120

Fig. 94	汐井掛第14号古墳南側墳丘出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3) (渡辺・平田実測, 二神製図) .....	123
Fig. 95	汐井掛第14号古墳北側墳丘出土須恵器実測図(2) (縮尺1/3) (渡辺・平田実測, 二神製図) .....	125
Fig. 96	汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(3) (縮尺1/3) (渡辺・平田実測, 二神製図) .....	126
Fig. 97	汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(4) (縮尺1/3) (渡辺実測, 二神製図) .....	128
Fig. 98	汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(5) (縮尺1/6) (上野・平田実測, 二神製図) .....	130
Fig. 99	汐井掛第14号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4) (渡辺実測, 二神製図) .....	131
Fig. 100	汐井掛第14号古墳墳丘出土土師器実測図 (縮尺1/2) (渡辺実測, 二神製図) .....	132
Fig. 101	汐井掛第14号古墳出土装身具・鉄器実測図 (縮尺1/2) (上野実測, 二神製図) .....	133
Fig. 102	汐井掛第15号古墳地形図 (縮尺1/200) (上野・高田・小味山実測, 二神製図) .....	134
Fig. 103	汐井掛第15号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200) (高田・舟山実測, 二神製図) .....	135
Fig. 104	汐井掛第15号地山整形面測量図 (縮尺1/200) (高田・舟山実測, 二神製図) .....	135
Fig. 105	汐井掛第18号・第46号・第47号・第48号・第49号・第50号古墳周辺地形測量 図 (縮尺1/400)(高田・舟山実測, 二神製図) .....	138
Fig. 106	汐井掛第18号古墳地形図 (縮尺1/200)(高田・舟山実測, 二神製図) .....	139
Fig. 107	汐井掛第19号・第20号・第21号・第22号・第23号古墳周辺地形図 (縮尺1/400)(高田実測, 二神製図) .....	141
Fig. 108	汐井掛第19号古墳地形図 (縮尺1/200)(高田・舟山実測, 二神製図) .....	142
Fig. 109	汐井掛第19号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200) (上野・舟山実測, 二神製図) .....	143
Fig. 110	汐井掛第19号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺1/20) (上野実測, 馬場製図) .....	146
Fig. 111	汐井掛第19号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)(平田実測, 二神製図) .....	148

- Fig. 112 汐井掛第19号古墳出土瓦器実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) …… 148
- Fig. 113 汐井掛第19号古墳出土耳環・丸玉・管玉実測図 (縮尺1/2)  
(上野実測, 二神製図) …………… 148
- Fig. 114 汐井掛第19号古墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) …… 149
- Fig. 115 汐井掛第20号・第21号古墳地形図 (縮尺1/200)  
(高田・舟山実測, 二神製図) …………… 151
- Fig. 116 汐井掛第20号・第21号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(高田・舟山実測, 二神製図) …………… 152
- Fig. 117 汐井掛第21号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)(高田・舟山実測, 二神製図) 153
- Fig. 118 汐井掛第21号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺1/20)  
(石山実測, 馬場製図) …………… 154
- Fig. 119 汐井掛第21号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) …… 155
- Fig. 120 汐井掛第21号古墳出土装身具実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) …… 155
- Fig. 121 汐井掛第22号古墳地形図 (縮尺1/200)(上野実測, 二神製図) …………… 157
- Fig. 122 汐井掛第22号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)(上野実測, 二神製図) …… 158
- Fig. 123 汐井掛第22号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(上野実測, 二神製図) …………… 159
- Fig. 124 汐井掛第23号古墳地形図 (縮尺1/200) 上野実測, 二神製図) …………… 161
- Fig. 125 汐井掛第23号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(上野実測, 二神製図) …………… 162
- Fig. 126 汐井掛第23号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) …… 163
- Fig. 127 汐井掛第24号・第25号・第26号・第27号・第28号古墳周辺地形図)  
(縮尺1/400)(渡辺実測, 二神製図) …………… 165
- Fig. 128 汐井掛第24号・第25号・第26号古墳地形図 (縮尺1/200)  
(高田・舟山実測, 二神製図) …………… 166
- Fig. 129 汐井掛第24号・第25号・第26号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)  
(上野・中間・高田実測, 二神製図) …………… 167
- Fig. 130 汐井掛第24号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) …… 170
- Fig. 131 汐井掛第24号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)(渡辺実測, 二神製図) …… 170
- Fig. 132 汐井掛第24号古墳出土装身具実測図 (縮尺1/1)(上野実測, 二神製図) …… 171
- Fig. 133 汐井掛第25号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺1/20)  
(中間実測, 馬場製図) …………… 175
- Fig. 134 汐井掛第25号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) …… 176

Fig. 135	汝井掛第27号・第28号古墳地形図 (縮尺1/200) (高田・舟山実測, 二神製図) ……………	180
Fig. 136	汝井掛第27号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) (蒲原宏行実測, 二神製図) ……………	182
Fig. 137	汝井掛第29号・第30号・第31号・第32号・第33号・第34号・第35号古墳地形 図 (縮尺1/200)(上野・小味山実測, 二神製図) ……………	185
Fig. 138	汝井掛第29号・第30号・第31号・第32号・第33号・第34号・第35号古墳地山 整形面測量図 (縮尺1/200)(上野・小味山実測, 二神製図) ……………	186
Fig. 139	汝井掛第30号古墳出土鉄鍬実測図 (縮尺1/2)(上野実測, 二神製図) ……	189
Fig. 140	汝井掛第36号・第37号・第38号・第39号・第40号古墳地形図 (縮尺1/200) (上野・高田・小味山実測, 二神製図) ……………	199
Fig. 141	汝井掛第36号・第37号・第38号・第39号・第40号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)(高田・舟山実測, 二神製図) ……………	200
Fig. 142	汝井掛第38号古墳出土青磁実測図 (縮尺1/3)(渡辺実測, 二神製図) ……	204
Fig. 143	汝井掛第40号古墳附近出土須恵器実測図 (縮尺1/3) (平田実測, 二神製図) ……………	207
Fig. 144	汝井掛古墳群各石室平面図 (縮尺1/100)(二神製図) ……………	213—214
Fig. 145	汝井掛古墳群出土の須恵器へラ記号集成図 (縮尺1/2)(渡辺作成) ……	225
Fig. 146	福岡県内出土鉄製紡錘車実測図 (縮尺1/2)(二神製図) ……………	228
Fig. 147	汝井掛古墳群の形成過程図 (縮尺1/1,000)(上野・渡辺作成, 二神製図)	229

## 付 図 目 次

本文対照頁

Fig. ①	咲花・北田・汝井掛・都地原・都地・柳ヶ谷遺跡周辺地形図 (縮尺1/5,000) (若宮町・宮田町原図, 酒井・上野作成, 伊藤登美子・森和代製図) ……	1
Fig. ②	汝井掛古墳群地形図 (縮尺1/1,000) (日本道路公団原図, 上野作成, 二神製図) ……………	21
Fig. ③	汝井掛古墳群地形測量図 (縮尺1/600) (酒井・上野・池辺・高田・関・舟山実測, 二神製図) ……	21
Fig. ④	汝井掛古墳群墳丘測量図 (縮尺1/600) (酒井・上野・池辺・高田・関・舟山実測, 二神製図) ……	21
Fig. ⑤	汝井掛第1号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(児玉・池辺実測, 馬場製図) ……	21
Fig. ⑥	汝井掛第1号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(児玉・池辺実測, 馬場製図) ……	23

- Fig. ⑦ 汐井掛第2号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(上野・関実測, 馬場製図) ……34
- Fig. ⑧ 汐井掛第2号古墳石室実測図 (縮尺1/40) 上野・関実測, 伊東製図) ……34
- Fig. ⑨ 汐井掛第2号古墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/20)  
(上野・関実測, 馬場製図) ……………36
- Fig. ⑩ 汐井掛第3号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(池辺・関実測, 馬場製図) ……44
- Fig. ⑪ 汐井掛第3号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(上野・高測, 馬場製図) ……45
- Fig. ⑫ 汐井掛第4号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)  
(上野・高田・中牟田実測, 馬場製図) ……………51
- Fig. ⑬ 汐井掛第4号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(上野・高田・中牟田実測, 馬場製図) ……………53
- Fig. ⑭ 汐井掛第5号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)  
(上野・中牟田実測, 馬場製図) ……………61
- Fig. ⑮ 汐井掛第5号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(上野・中牟田実測, 馬場製図) ……………62
- Fig. ⑯ 汐井掛第6号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(上野実測, 馬場製図) ……70
- Fig. ⑰ 汐井掛第6号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(上野実測, 馬場製図) ……70
- Fig. ⑱ 汐井掛第7号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(酒井実測, 馬場製図) ……74
- Fig. ⑲ 汐井掛第7号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(酒井・中牟田実測, 馬場製図) 74
- Fig. ⑳ 汐井掛第8号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中牟田実測, 馬場製図) ……79
- Fig. ㉑ 汐井掛第9号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)  
(児玉・出利葉実測, 馬場製図) ……………83
- Fig. ㉒ 汐井掛第9号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(児玉・池辺・杉山・小味山実測, 馬場製図) ……………84
- Fig. ㉓ 汐井掛第9号古墳石室掘り方実測図 (縮尺1/40)  
(児玉・池辺実測, 馬場製図) ……………85
- Fig. ㉔ 汐井掛第10号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)  
(副島・酒井・中牟田実測, 馬場製図) ……………95
- Fig. ㉕ 汐井掛第10号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(副島・酒井・中牟田実測, 馬場製図) ……………96
- Fig. ㉖ 汐井掛第11号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(千野・飯島実測, 馬場製図) 101
- Fig. ㉗ 汐井掛第11号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中間・舟山実測, 馬場製図) 101
- Fig. ㉘ 汐井掛第12号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(副島実測, 馬場製図) ……109
- Fig. ㉙ 汐井掛第12号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(酒井実測, 馬場製図) ……109

- Fig. ③⑩ 汐井掛第13号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(酒井実測, 馬場製図) …… 113
- Fig. ③⑪ 汐井掛第13号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(石山実測, 馬場製図) …… 114
- Fig. ③⑫ 汐井掛第14号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(佐土原実測, 馬場製図) …… 119
- Fig. ③⑬ 汐井掛第14号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(副島・佐土原実測, 馬場製図) …… 120
- Fig. ③⑭ 汐井掛第14号古墳遺物出土状況実測図 (縮尺1/20)  
(副島実測, 馬場製図) …… 121
- Fig. ③⑮ 汐井掛第15号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 134
- Fig. ③⑯ 汐井掛第15号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 135
- Fig. ③⑰ 汐井掛第18号古墳墳丘断面図・主体部実測図 (縮尺1/40・1/20)  
(石山実測, 石山・馬場製図) …… 139
- Fig. ③⑱ 汐井掛第19号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(上野実測, 馬場製図) …… 144
- Fig. ③⑲ 汐井掛第20号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(児玉実測, 馬場製図) …… 151
- Fig. ④⑰ 汐井掛第21号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(石山実測, 馬場製図) …… 153
- Fig. ④⑱ 汐井掛第22号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(児玉実測, 馬場製図) …… 158
- Fig. ④⑲ 汐井掛第22号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 158
- Fig. ④⑳ 汐井掛第23号古墳墳丘断面図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 161
- Fig. ④㉑ 汐井掛第23号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 161
- Fig. ④㉒ 汐井掛第24号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(上野実測, 馬場製図) …… 168
- Fig. ④㉓ 汐井掛第25号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(中間実測, 馬場製図) …… 173
- Fig. ④㉔ 汐井掛第26号古墳石室実測図 (縮尺1/40)(高田実測, 馬場製図) …… 178
- Fig. ④㉕ 汐井掛第27号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(蒲原宏行・新開淑子・高崎光司・土田早苗実測, 蒲原製図) 181
- Fig. ④㉖ 汐井掛第28号古墳石室実測図 (縮尺1/40)  
(西口徹・洞口正史・坂部淳子・土田・渡辺敬子実測, 松尾冒彦製図) 183
- Fig. ④㉗ 汐井掛第29号古墳墳丘断面・石室実測図 (縮尺1/40)  
(酒井実測, 伊東製図) …… 186
- Fig. ④㉘ 汐井掛第30号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(中牟田実測, 伊東製図) …… 188
- Fig. ④㉙ 汐井掛第31号古墳石室実測図 (縮尺1/20)  
(池辺・関実測, 伊東製図) …… 190
- Fig. ④㉚ 汐井掛第32号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(上野実測, 伊東製図) …… 191
- Fig. ④㉛ 汐井掛第33号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(栗原・上野実測, 伊東製図) 193
- Fig. ④㉜ 汐井掛第34号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(中牟田実測, 伊東製図) …… 195

Fig. ⑤⑥	汐井掛第35号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(小味山実測, 伊東製図) ……	196
Fig. ⑤⑦	汐井掛第36号古墳石室・掘り方実測図 (縮尺1/20) (平ノ内実測, 伊東製図) ……	201
Fig. ⑤⑧	汐井掛第37号古墳石室・掘り方実測図 (縮尺1/20) (中牟田実測, 伊東製図) ……	202
Fig. ⑤⑨	汐井掛第38号古墳石室・掘り方実測図 (縮尺1/20) (中牟田・舟山実測, 伊東製図) ……	203
Fig. ⑥⑩	汐井掛第39号古墳石室・掘り方実測図 (縮尺1/20) (副島・上野実測, 二神製図) ……	205
Fig. ⑥⑪	汐井掛第40号古墳石室実測図 (縮尺1/20)(上野実測, 馬場製図) ……	206
Fig. ⑥⑫	汐井掛古墳群石室・遺物集成図 (縮尺1/60・1/4・1/2)(二神製図) ……	210

## 表 目 次

Tab. 1	汐井掛古墳群発掘調査行程表 (上野作成) ……	2-4
Tab. 2	若宮町内遺跡地名表 (上野作成) ……	9-12
Tab. 3	宮田町内遺跡地名表 (上野作成) ……	16-18
Tab. 4	汐井掛第24号古墳出土玉類計測表 (上野作成) ……	171
Tab. 5	汐井掛古墳群墳丘及び石室各部計測表 (上野作成) ……	214-215
Tab. 6	汐井掛古墳群出土須恵器の時期対比表 (上野・渡辺作成) ……	224

I は し が き



## I はしがき

福岡県内の九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は昭和44年度に始まり、昭和51年度には大牟田市から鞍手郡鞍手町までの全路線内の発掘調査を終了した。

直鞍地区では鞍手郡内のみに遺跡の存在が知られ、昭和49年度より昭和51年度までの3ヶ年間に渡って発掘調査が実施された。

若宮町・宮田町内では西方より(Y66)遠園遺跡、(Y4)茶白山遺跡、(Y67)茶白山城跡、(Y18)小原古墳、(Y5)小原墳跡、(Y49)咲花遺跡、(Y58)北田遺跡、(Y57)都地遺跡、(Y6・7)汐井掛遺跡群、(Y53)都地原遺跡、(Y9)柳ヶ谷遺跡、(M54)筒井田遺跡、(M51)平原遺跡を発掘調査し汐井掛古墳は(Y20)汐井掛遺跡群の一つで先土器時代より歴史時代までの複合遺跡であり、ここでは古墳についてのみ取り上げるもので汐井掛遺跡群の内第2番目の「古墳」篇となる。

( )内の番号はFig. 1の若宮町・宮田町内遺跡分布図の番号と同じ。以下も同じ。

鞍手郡若宮町・宮田町に係る全体的な発掘調査の経過は(「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—Ⅷ—)1977年(昭和52年)2月に詳細にわたり述べられているので、ここでは本報告に記載しようとする汐井掛古墳群についてのみ概略をふれることとする。(Fig.①, PL. 1~3)

### 1 昭和49年度の調査の経過

汐井掛古墳群は昭和43年度に実施された九州縦貫自動車道建設に伴う直鞍地区の遺跡分布調査の時に、宮田町大字上有木字高平所在の近世墓地(汐井掛第1号古墳の墳丘上に在る江戸時代の人、神谷武蔵墓)が調査予定地として回答されただけであり、当時は周辺一帯には草木の繁茂はなはだしく人を寄せつけない状況下であった。その後、第2回目の昭和45年春に路線決定後に必要となり実施された。その結果いくつかの遺跡が新たに確認されたが、汐井掛の丘陵一帯は未だ人を寄せつけず分布調査すらできない状況であった。

しかし、昭和49年春よりの発掘調査を控えて1月に第3回目の分布調査を、日本道路公団直方工事事務所担当者と共に実施した。調査は綿密を極め、つづいて神谷武蔵墓の直ぐ東側に円墳2基(第2号、第3号古墳)の存在を確めて調査対象地として追加した。本古墳群は筑豊西インターチェンジ内である。

実際の発掘調査に入ったのは昭和49年度でも後半に入ってから9月よりで、汐井掛B遺跡が終了するのをまって第3号古墳より開始した。昭和49年度は第3号古墳、第2号古墳と、さらにこの古墳群の調査の為に周辺を伐採した結果、南方側にも小さな墳丘ならしき高まりが確認





古墳名	年月 種別	昭和49年度			昭和50年度												昭和51年度	
		9月	10月	11月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月
第26号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第27号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第28号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第29号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第30号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第31号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第32号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第33号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第34号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第35号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第36号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第37号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第38号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第39号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	
第40号古墳	採掘・写真 地形測量 発掘 遺構検出 実測・写真																	

#### 4 発掘調査の方法

汐井掛古墳群の発掘調査で結果的に38基の古墳が検出できた。これらの発掘調査に当り、第18号古墳を欠き天井石がすでに失われていて玄室が荒されていることを知り、先ず石室床面プランを検出しそれによって軸を定めて各90度にトレンチを入れ、墳丘盛土を調べる方法を取る。墳丘は墓道の左方よりⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区、Ⅳ区とし、トレンチを左方よりⅠトレンチ、Ⅱトレンチ、Ⅲトレンチと統一した。石室内と墳丘の調査のみに終らず時間の許す限り、石室腰石を取り石室掘り方まで検出する。

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

先に、「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—XX—にて、若宮町・宮田町所在遺跡について概観したので重複をさけるためここでは古墳時代についてのみ主に古墳を取り上げることにする。

福岡県鞍手郡若宮町・宮田町は福岡県のほぼ中央部を南より北へ貫る遠賀川の一支流である犬鳴川の両側に広がる地域である。北の鞍手郡鞍手町、西は宗像郡福岡町、南は飯塚市と三郡山地をもって境とし、わずかに東の直方市と犬鳴川をもって接しており小盆地ともいえる地域であり、原始、古代より遠賀川流域に属する地域である。

古墳時代の犬鳴川流域の遺跡といえば古墳ばかりであったが、最近盛んになった各種開発事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査において古墳も何ヶ所か調査され新しい知見を加えたが、さらに特記すべきことは住居跡が発見され調査されたことである。これら最近の調査結果も加えて犬鳴川流域の古墳時代の遺跡についてその内でもとくに古墳の分布についてみてみたい。

犬鳴川は犬鳴山に源を発し、若宮町・宮田町を貫通して直方市に注ぐものである。この犬鳴川にはいくつかの支流があり、上流より犬鳴川の流れる丘陵各間の西方の丘陵下には黒丸川があってさらにその北方の丘陵下には山口川があってこれらは若宮町福丸で合流している。さらに下流に下ると宮田町より宗像町に通ずる赤木峠の谷間に有木川が、南下し、その東方にある丘陵の対下の倉久、四郎丸地区を流れる倉久川が南下しており、一方宮田町の南方面では八木山を源とする八木山川が北上して犬鳴川に流れ込んでいる。これらの犬鳴川を本流とする流域や各支流の形成する流域の両丘陵上に数多くの古墳が発見されており各流域ごとにある程度のグループをなしているようである。

汐井掛古墳群の位置する山口川の左右両丘陵上には左岸に九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査地点である(Y18)小原古墳群や、この古墳群を包括する(Y18)茶臼山古墳群があり、これには山口川に近い北方に(Y19)里古墳と、やや奥の南方に小原古墳がありこの内9基を昭和49年に調査した。その際の分布調査によると茶臼山古墳群は約80基からなり、里第1号古墳は小型の前方後円墳であることが調査後に確認され、石室内に石棚の存在も確かめられている。右岸のさらに下流になると、汐井掛古墳群の対岸になる沼口に萩野古墳がある。

左岸には汐井掛古墳群が中心で、この直ぐ西方の丘陵上に最近円墳4～5基が発見された。汐井掛古墳群はFig.②のように分布していて、総数53基の古墳群であるが、さらに数基存在した可能性はある。この汐井掛古墳群のE支群が位置する丘陵斜面の東方の丘陵上にも3基の古墳が確認されこれらは昭和52年度に産炭地域振興整備事業団の開発地域内に当り福岡県教育委

員会により発掘調査が実施された。なお、汐井掛古墳群の第16号、第17号古墳も同じ理由で調査されたものである。

又、同丘陵の東方の釜底池の西方で汐井掛古墳群と釜底池の中間あたりに最近あらたに古墳数基が発見されている。

さらに丘陵は東方に延びて犬鳴川の直ぐ端まで続いていて、金丸丘陵にも数多くの古墳が分布するがこれらは犬鳴川流域のところで述べる。金丸丘陵の古墳群と汐井掛丘陵の古墳群とに挟まれた中間地点附近に水原地区があり、この丘陵上にも数基の古墳が存在したというが開墾により全く破壊されていて詳細は不明である。

山口川より南方の黒丸川の右左両岸にも多くの古墳群が在り上流左岸では(Y28)宮永古墳群があり以前は宮永百塚と呼ばれていたという。黒丸川に突き出た丘陵上からその斜面にかけて数十基の古墳がみられるが、家屋建設や、開墾のために破壊された古墳が多いが、2つのグループには分けられるようである。やや下流に下って黒丸川とは離れた谷間の奥深くに(Y27)平古墳と(Y22)沼口古墳群とがある。ともに盗掘にあい開口している。

犬鳴川の合流点に近い山口川と黒丸川に挟まれて細長く突出した丘陵上に全国的に著名な(Y25)竹原古墳と、その東方約300m離れて(Y24)八幡塚古墳がある。竹原古墳の北西方の丘陵上に数基の(Y26)竹原古墳群と内部主体は箱式石棺からなる(Y26)竹原石棺群とがある。八幡塚古墳の東方直ぐ近くにも(Y23)別当塚古墳と(Y23)斎藤塚古墳が存在したようである。竹原古墳については各種の出版物により紹介されている。八幡塚古墳は山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査地点に当り、周溝と主体部の二度に渡る調査が福岡県教育委員会により実施されている。

黒丸川の右岸では宮永古墳群の対岸に(Y29)稲光古墳群がある。

犬鳴川本流の若宮町内になる両岸の丘陵上にはこれまた、数多くの古墳群が分布しており、これらの内でもとくに左岸の高野一帯の古墳群は重要である。

左岸の上流には今のところ石宗に2～3基の古墳が確認されているだけである。犬鳴川と黒丸川の合流する二つの川に挟まれて合流点に延びている丘陵上の先端部の低い位置に江戸時代より知られている前方後円墳の(Y30)剣塚古墳がある。全長約58m、後円部径約28mを測り、後円部墳頂より円筒埴輪の列が確認されている。その古墳の南方約500mの丘陵頂部に(Y31)高野古墳群があり第1号古墳は帆立貝式古墳で全長約40m、後円部径約30mを測る。高野古墳群の直ぐ西方の丘陵上より斜面にかけて数基の円墳があり高野西古墳とした。

これらの古墳群と前述の竹原・八幡塚古墳は若宮平野の中でも地形的に好位置に立地している点は見逃せない。

さらに下流になると前述の金丸丘陵がありこの丘陵にも犬鳴川を見下すように集中して古墳がみられる。最先端部に(Y45)天神山古墳群があり、その内金丸古墳は昭和49年度に福岡県教育委員会により調査され、西の浦古墳は九州大学考古学研究室により昭和44年調査された。県

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

道を挟んで北方の丘陵にも続いており、さらに小さな谷一つ越えた東方の丘陵上にも数基の古墳がある。

右岸では上流より犬鳴川に突き出した丘陵先端部にいくつもの小古墳群があるが、調査が一基も実施されていなく詳細なことは不明である。上流より(Y34)庄屋村南古墳群、日吉神社裏手の(Y35)庄屋村古墳群、さらに(Y36)庄野村西古墳群、(Y37)庄屋村東古墳群と続いている。やや離れた金生には白山神社裏の(Y39)上金生古墳群があり約20基が接近して営まれている。さらに(Y40)向田古墳と続く。そして金丸丘陵の古墳群の向い側の丘陵先端部には(Y41)大浦西古墳群、(Y42)大浦東古墳群、(Y43)損ヶ熊古墳群がある。

以上で若宮町の古墳分布状況を終り、次に宮田町にうつる。宮田町では先ず有木川の兩岸丘陵上をみると若宮町寄りの右岸上流では(M22)百塚古墳がある。現在69基まで確認されている大古墳群であり、第1号古墳の玄室は主軸に対してよこながの「T」の字型石室でありしかも右側壁には石棚がある特異な石室の古墳である。この古墳群の直ぐ南方の丘陵上にも(M21)百塚南古墳群、(M20)四ッ塚古墳群、(M18)向の畑古墳、(M17)神田古墳などがある。

左岸では百塚古墳群と谷を対して(M23)井掘古墳があり有木川の中流域には(M25)南ヶ浦古墳群が昭和51年に産炭地域振興事業団の造成工事に伴う事前調査が福岡県教育委員会により実施された。さらに(M24)中有木古墳や、(M26)ハル古墳があり熊野神社裏手には(M27)下有木北古墳群と(M28)下有木古墳群がある。下有木第1号古墳は昭和44年に福岡県教育委員会により緊急調査され竪穴系横口式石室を有する古墳であることが判明した。

倉久川流域では古墳の存在は知られていなかったが、『宮田町誌』による分布調査で右岸に(M29)松ヶ元古墳群が確認がされた。

犬鳴川本流に戻ると、長井鶴周辺に古墳が在ったというのが現在では確認することができず左岸では本城の(M31)浦宮古墳群、(M32)亀石塚古墳群があり、竜徳地区に続いている。それは(M33)谷古墳群と(M34)竜徳古墳群でありこの地帯は犬鳴川が一番狭く丘陵間が間近にみえるところでもある。

右岸では(M35)生見古墳群が孤立した状況下であり、本城地区の反対の相対する丘陵上に西方より(M36)本白古墳群、(M37)谷頭古墳群、(M38)上屋敷横穴墓群、(M39)安免横穴墓群がある。安免横穴墓群は昭和52年に土取りにより発見されたもので犬鳴川流域の横穴墓は上屋敷横穴墓が唯一のものであったが、直ぐ近くより発見され、2例目となる。遠賀川流域では数多くの横穴墓が発見されているのに対して、犬鳴川流域では横穴墓が非常に少ない地域である点は古墳時代の遠賀川中流域を知る上で注目されよう。

これらよりやや離れた磯光・久林原地区にもいくつかの古墳が存在していたらしいが現在では確認できないようである。

犬鳴川流域の周辺をみると西方には宗像郡福岡町が在り、山口川をさか上り、見坂峠を越え



て畦町を径た福間町津丸地区には長尾古墳などが在り、その周辺には多くの古墳がみられる。

北方の宗像郡宗像町には釣川流域の兩岸丘陵一帯にいくつかの古墳群がみられる。

宮田町の北方鞍手郡鞍手町の西川流域にも犬鳴川流域と同じように比較的小さな流域があるが独自の古墳文化というべきものがあるようで大小数多くの古墳が分布しており、その内いくつかの古墳群は発掘調査されている。

宮田町の東方、遠賀川流域の直方市内と、宮田町の南東方で直方市の南方に当る鞍手郡小竹町内には古墳は数少なく横穴墓が数多くみられるものである。

なお、現在の犬鳴川下流になる直方市新入地区には、犬鳴川の兩岸にそれぞれ1基の古墳が確認されているにすぎないが、右岸にある新入・亀ノ甲古墳は前方後円墳ともいうが、内部主体は横穴式石室であり、この遠賀川中流域では珍しく貴重な形象埴輪が出土している。

古墳以外の遺跡としては住居跡が九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査において山口川の右岸、先述の茶白山古墳群中の小原支群の近くに小原遺跡があり谷をへだて、対応している。弥生時代の住居跡も数基検出されているが、古墳時代の住居跡は10基で、出土遺物より6世紀後葉以降から7世紀にかけての集落である。

同じ九州縦貫自動車道の調査による柳ヶ谷遺跡は山口川の左岸で、弥生時代・歴史時代の住居跡と共に古墳時代の住居跡が2基検出されており6世紀後半の集落である。又、柳ヶ谷遺跡の直ぐ近くの都地原遺跡では東区より古墳時代の住居跡1基が検出されており時期は6世紀後半から終末にかけてのものである。

さらに山陽新幹線関係埋蔵文化財発掘調査では山口川の左岸でも犬鳴川に近い低段丘上に田尻遺跡が発見され古墳時代の住居跡と溝が検出され6世紀中頃のものである。

このように住居跡が四つの遺跡より検出されており、他の古墳時代の土器が散布している所が数ヶ所ある。

以上遠賀川の支流であり若宮町・宮田町を貫通する犬鳴川流域とその周辺の古墳と住居跡について分布状況を各河川によって既観したが、古墳が非常に多く在り、今回の汐井掛古墳群の調査により、後述の各古墳の報告通り墳丘や石室形態など判明したので、これを取りまとめてIV章にて犬鳴川流域の古墳について若干のまとめをしたい。

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

Tab.1. 若宮町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	遺構の種類	出土遺物	時期	文献
<b>縄文時代</b>						
1	鶴ヶ谷遺跡	若宮町小原字鶴ヶ谷	散布地	石鏃、石匙		89
2	若宮条里A地点	◇ 竹原		縄文式土器	後期	61
3	平遺跡	◇ 平	散布地	ブレイド		
<b>弥生時代</b>						
4	茶臼山遺跡	若宮町山口字小原	住居跡、箱式石棺墓、木棺墓	弥生式土器、石庖丁、石鏃	後期末	84・85 91
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	住居跡、貯蔵穴、溝状遺構	弥生式土器、石庖丁、石斧 砥石、鈍、刀子	中～後末	77・80 90・93
6	汐井掛A遺跡	◇ 沼口字汐井掛	住居跡		中期?	77・83
7	汐井掛B遺跡	◇ 沼口字汐井掛	木棺墓、箱式石棺墓、石蓋土壙墓	弥生式土器、鉄鏃	後期	77・83
8	都地原遺跡	◇ 沼口字都地原	住居跡	弥生式土器	後期	89
9	柳ヶ谷遺跡	◇ 水原字柳ヶ谷	住居跡	弥生式土器、石鏃、石庖丁	後期	14.69.77 81.89
10	宮永遺跡	◇ 宮永		銅鏡		69
11	辻の下遺跡	◇ 平字竹原		弥生式土器、石庖丁	後期	14
12	小金原遺跡	◇ 高野字小金原		石斧、石庖丁		89
13	先尾高遺跡	◇ 高野字先尾高	住居跡	弥生式土器	後期	89
14	湯原遺跡	◇ 脇田字湯原		弥生式土器、石器		35
15	東禅寺遺跡	◇ 脇田字湯原	住居跡	弥生式土器、石庖丁、石鏃		89
16	平田(西鞍手高校)遺跡	◇ 福丸	住居跡、貯蔵穴	弥生式土器、須恵器、土師器		14
17	金丸遺跡	◇ 金丸		銅戈		3.4.5.7.8. 10.13.15 31
<b>古墳時代</b>						
18	小原古墳群	若宮町山口字小原	約40基 内8基発掘	須恵器、土師器		14.69.77 86.90.94
19	里古墳群	◇ 山口字里	約40基 1基は前方後円墳			14
20	汐井掛古墳群	◇ 沼口字汐井掛	約60基 内30基は宮田町内	須恵器、土師器、装身具、 馬具、工具	5C後～ 7C前	14.77.86
21	水原古墳群	◇ 水原	円墳、横穴式石室			14
22	沼口古墳群	◇ 沼口	15基	須恵器		
23	別当塚古墳	◇ 竹原字塚ノ元	円墳			14.62.75
24	八幡塚古墳	◇ 竹原字塚ノ元	円墳、周濠、横穴式石室	埴輪、中世土師器		14・63

## II 大鳴川流域の古墳の分布

25	竹原古墳	若宮町平字竹原	円墳、複室の横穴式石室、装飾	須恵器、銅鏡、馬具、鉄器 装身具	6C後	16.17.71
26	竹原古墳群	◇ 平字竹原	箱式石棺	須恵器、土師器、鉄器、装身具		14
27	平古墳群	◇ 平	円墳、横穴式石室	須恵器、直刀、玉類		14・78
28	宮永古墳群	◇ 宮永	円墳、横穴式石室	須恵器、直刀、玉類		14
29	稲光古墳群	◇ 稲光字沖	4基、円墳	須恵器		14
30	剣塚古墳	◇ 高野字剣塚	前方後円墳	埴輪、太刀	5C前?	2.6.9.14 55
31	高野古墳群	◇ 高野	5基 1基は帆立貝式前方後円墳	埴輪	5C?	14
32	高野北古墳群	◇ 高野	7基、円墳、横穴式石室	須恵器	6C後	14
33	石宗古墳群	◇ 小伏字石宗	約5基、円墳、横穴式石室			
34	東禅寺南古墳群	◇ 下字庄屋村	5基			
35	庄屋村古墳群	◇ 下字庄屋村	7基			
36	庄屋村西古墳群	◇ 下字庄屋村	5基			
37	庄屋村東古墳群	◇ 下字庄屋村	4基			
38	幸神古墳	◇ 下字幸ノ神	円墳	須恵器		
39	上金生古墳群	◇ 金生字上金生	32基+ $\alpha$			14
40	向田古墳	◇ 原田字向田	円墳			
41	大浦西古墳群	◇ 原田	14基 現存12基 複室あり			14
42	大浦東古墳群	◇ 原田	3基			
43	損ヶ熊古墳群	◇ 原田損ヶ熊	5基			
44	金丸古墳群	◇ 金丸字天神山	複室の横穴式石室	直刀		14・70
45	天神山古墳	◇ 金丸字天神山	円墳、複室の横穴式石室		6C後	70
46	西の浦古墳群	◇ 金丸字天神山	2基 1基調査共に箱式石棺	鉄斧、鋤先、鉄剣、鉄鎌	5C	49
47	浦原古墳群	◇ 金丸字浦原	16基	須恵器、土師器		
48	越後古墳	◇ 金丸字越後	円墳			
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	住居跡、竪穴状遺構	土師器、須恵器、砥石、土鈴、模造鏡	6C後～ 7C	77.80.90 93
49	咲花遺跡	◇ 沼口字咲花	住居跡、土壇、掘立柱建物	土師器、須恵器	6C後	77
8	都地原遺跡	◇ 沼口字都地原	住居跡、掘立柱建物	土師器、須恵器	6C後～	77・89
9	柳ヶ谷遺跡	◇ 水原字柳ヶ谷	住居跡、掘立柱建物	土師器、須恵器、紡錘車	6C後	77.81.89

50	西日本ゴルフ場内遺跡	若宮町小伏	散布地	須恵器		
51	田尻遺跡	◇ 福丸	住居跡、掘立柱建物、溝	土師器、須恵器、青磁	6C後	72・74
52	古賀の原遺跡	◇ 金生字古賀の原	散布地	須恵器		
<b>歴 史 時 代</b>						
4	茶臼山墳墓	若宮町山口字小原	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	73・77
7	汐井掛墳墓	◇ 沼口字汐井掛	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	73.77.88
53	都地原墳墓	◇ 沼口字都地原	火葬墓	骨蔵器は須恵器、土師器	奈良	73.77.89
9	柳ヶ谷墳墓	◇ 水原字柳ヶ谷	火葬墓	骨蔵器は須恵器、刀子	奈良	73.77.89
54	水原墳墓	◇ 水原	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良、平安	19.73.77
55	宮永墳墓	◇ 宮永	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	77
56	金生墳墓	◇ 金生	火葬墓	骨蔵器は須恵器	奈良	19・73
2	若宮条里遺跡	◇ 福丸	条里			61
57	都地遺跡	◇ 沼口字都地	掘立柱建物	土師器、須恵器	奈良	77・95
5	小原遺跡	◇ 山口字小原	掘立柱建物	土師器、須恵器、磁器	平安前後	90
58	北田遺跡	◇ 沼口字北田	散布地	土師器、須恵器、磁器	中世～近代	
59	遠園遺跡	◇ 山口	館跡	土師器、須恵器、磁器	中世	69.77.79 91
60	杉園遺跡	◇ 稲光字杉園	散布地	土師器		64・76
61	上金生遺跡	◇ 上金生	散布地	白磁	中世	35
62	友池遺跡	◇ 原田字友池	散布地	白磁	中世	35
63	宮永遺跡	◇ 宮永	埋銭	銅銭	中世	
64	都地八幡経塚	◇ 沼口字都地	経塚	経筒、経巻	中世	1.12.54. 96
65	犬鳴窠跡	◇ 犬鳴	窠跡	近世陶器	近世	35
66	遠園城跡	◇ 山口	山城跡		中世	91
67	茶臼山城跡	◇ 山口字小原	山城跡		中世	77・91
68	都市原城跡	◇ 沼口	山城跡		中世	35
69	堀谷城跡	◇ 沼口	山城跡		中世	35
70	竹垣城跡	◇ 竹原	山城跡		中世	35
71	天の坊城跡	◇ 天の坊	山城跡		中世	35
72	宮永城跡	◇ 宮永	山城跡		中世	35
73	黒丸城跡	◇ 黒丸	山城跡		中世	35
74	草場城跡	◇ 乙野字草場	山城跡		中世	35
75	篠崎城跡	◇ 乙野	山城跡		中世	35
76	安河内城跡	◇ 脇田	山城跡		中世	35
77	熊ヶ城城跡	◇ 犬鳴犬鳴山頂	山城跡		中世	35
78	湯原草場城跡	◇ 湯原草場	山城跡		中世	35
79	下村城跡	◇ 下字乙藤	山城跡		中世	35
80	白旗山城跡	◇ 金生字賢鏡山	山城跡		室町	35
81	友池城跡	◇ 原田字友池	山城跡		中世	35

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

82	金丸城跡	若宮町金丸	山城跡		中世	35
83	明専寺城跡	ゝ 野中明専寺	山城跡		江戸初期	35
84	浦山城跡	ゝ 平	山城跡			35
85	稲光城跡	ゝ 稲光	山城跡			35
<b>若宮町遺跡参考地</b>						
86	塞ノ湿遺跡	若宮町原田字塞ノ湿	散布地	石剣、石鏃、須恵器		14
87	金丸遺跡	ゝ 金丸	散布地	石鏃		14
88	前川原遺跡	ゝ	散布地	弥生式土器		35
89	田圃中遺跡	ゝ	散布地	石剣		35
90	福丸(犬鳴川)遺跡	ゝ	散布地	石剣		35
91	牛谷古墳	ゝ 原田字牛谷	古墳	須恵器		14
92	友池古墳	ゝ 原田字友池	古墳	須恵器		14
93	古賀原古墳	ゝ 金生字古賀原	古墳	鏡、金環、銀環、玉		14
94	鴻ノ巣古墳	ゝ	古墳群 (15基)	須恵器		14
95	塚ノ元古墳	ゝ	古墳群 (10基)	人骨、須恵器		14
96	金生遺跡	ゝ 金生	散布地	弥生式土器		35
97	石宗遺跡	ゝ 石原	散布地	石斧		35
98	原田遺跡	ゝ 原田	散布地	石剣		35
99	善徳寺遺跡	ゝ	散布地	土師器、石斧		35
100	万福寺遺跡	ゝ	散布地	須恵器		14
101	稲光遺跡	ゝ 稲光	散布地	土師器		14
102	金生遺跡	ゝ 金生	散布地	白磁		35

## 若宮町考古学文献

- 1 伊藤常足『太宰管内誌(中)』天保年間
- 2 青柳種信『筑前統風土記拾遺』筑前国統風土記拾遺刊行会『筑前国統風土記拾遺』第3巻  
1973年(昭和48年)10月
- 3 若林勝邦「銅剣に関する考説及び其材料の増加」(『考古学雑誌』8号)1897年(明治30年)8月
- 4 高橋健自「銅銚銅剣考(1)」(『考古学雑誌』第13巻第6号)1923年(大正12年)2月
- 5 島田寅次郎他「銅銚銅剣及び其鎔範」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯)1925年(大正14年)3月
- 6 島田寅次郎「石室古墳」(『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第1輯)1925年(大正14年)3月
- 7 高橋健自「銅銚銅剣の研究」1925年(大正14年)10月
- 8 森本六爾『日本青銅器時代地名表』1929年(昭和4年)6月
- 9 福岡県社事兵事課編「先史時代原史時代の史蹟」『史蹟名勝天然記念物所在調査書』1930年

(昭和5年)5月

- 10 中山平次郎「銅鉾銅剣問題再検討」(『考古学』第5巻第7号)1934年(昭和9年)7月
- 11 鞍手郡教育会編『鞍手郡誌』1934年(昭和9年)11月
- 12 田中幸夫「筑前鞍手郡都市八幡の経筒」(『考古学雑誌』第25巻第9号)1935年(昭和10年)9月
- 13 石村一男「八幡市附近の考古学概観」(『北九州郷土史研究』第1輯)1936年(昭和11年)11月
- 14 石村一男・木村芳秋・清賀義男・児島隆人・沢井一雄・田中幸夫・名和羊一郎・松本亀次・三友国五郎共編「北九州考古学的遺跡一覧表(2)」(『北九州郷土史研究』第2輯)1937年(昭和12年)2月
- 15 児島隆人「遠賀川流域に於ける青銅器文化」(『考古学』第11巻第11号)1940年(昭和15年)11月
- 16 鏡山猛『北九州の古代遺跡』1950年(昭和31年)12月
- 17 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳」(『美術研究』194)1957年(昭和32年)
- 18 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の壁画」(『九州考古学』1)1957年(昭和32年)5月
- 19 大神邦博「筑前鞍手郡若宮町出土の藏骨器」—昭和33年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要旨—(『九州考古学』5・6)1958年(昭和37年)11月
- 20 水野清一・小林行雄編『図解考古学辞典』1959年(昭和34年)6月
- 21 小林行雄編(『世界考古学大系』3 日本Ⅲ古墳時代)1959年(昭和34年)11月
- 22 森貞次郎「福岡県鞍手郡竹原古墳」(『日本考古学年報』9昭和31年度)1960年(昭和35年)3月
- 23 森貞次郎「竹原古墳の壁画」(『九州アカデミー』1)1960年(昭和35年)5月
- 24 斉藤忠『日本古墳の研究』1961年(昭和36年)8月
- 25 日本考古学協会編『日本考古学辞典』1962年(昭和37年)12月
- 26 金関丈夫「鞍手郡若宮町竹原古墳奥室の壁画」(『九州考古学』19)1963年(昭和38年)10月
- 27 石人石馬研究会編『九州前方後円墳地名表』1963年(昭和38年)10月
- 28 原田大六『磐井の叛乱』1963年(昭和38年)12月
- 29 江上波夫・海老原喜之助・小林行雄・土方定一「知られざる日本文化の源流」(『太陽』№8)1964年(昭和39年)1月
- 30 小林行雄編『装飾古墳』1964年(昭和39年)10月
- 31 杉原荘介「青銅器」(『日本原始美術』4)1964年(昭和39年)11月
- 32 井上光貞「神話から歴史へ」(『日本の歴史』第1巻)1965年(昭和40年)2月
- 33 斉藤忠「古墳壁画」(『日本原始美術』5)1965年(昭和40年)4月
- 34 岡田章雄・豊田武・和歌森太郎編「日本のはじまり」(『日本の歴史』第1巻)1960年(昭和40年)4月
- 35 鞍手教育研究所編『鞍手郡郷土史』1965年(昭和40年)6月
- 36 児玉幸多編「縄文・弥生・古墳時代」(『図説日本文化史大系』第1巻)1965年(昭和40年)6月
- 37 野間清六「日本—縄文・弥生・古墳・民芸—」(『世界美術』第20巻)1965年(昭和40年)7月
- 38 斉藤忠『日本考古学図鑑』1965年(昭和40年)12月
- 39 江上波夫「日本美術の誕生」(『日本の美術』第1巻)1966年(昭和41年)1月
- 40 佐野大和『日本のあけぼの—考古学教室—』1967年(昭和42年)7月

- 41 森貞次郎『竹原古墳』1968年（昭和43年）3月
- 42 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」（『史淵』第100輯）1968年（昭和43年）3月
- 43 斉藤忠「日本人の祖先」（『日本歴史全集』第1巻）1968年（昭和43年）9月
- 44 箭内健次編（『北・九州』一繩文より維新まで）1968年（昭和43年）12月
- 45 斉藤忠（『日本古代遺跡の研究』総説）1968年（昭和43年）12月
- 46 鏡山猛『歴史と風土 筑紫』1969年（昭和44年）4月
- 47 増田精一・岡本太郎「古墳と神々」（『日本文化の歴史』第2巻）1969年（昭和44年）5月
- 48 森豊『日本の遺跡』1969年（昭和44年）7月
- 49 佐野一・亀井明德「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」（『九州考古学』36・37）1969年（昭和44年）7月
- 50 森貞次郎「装飾古墳の展開」（『古代の日本』3 九州）1970年（昭和45年）2月
- 51 柴田勝彦『九州考古学散歩』1970年（昭和45年）4月
- 52 松本健郎「複室墳の諸問題—熊本県菊池川流域—」（『熊本史学』第37号）1975年（昭和45年）12月
- 53 森浩一『古墳—石と土の造形』1970年（昭和45年）12月
- 54 小田富士雄「九州の経塚」（『仏教芸術』第76号）1970年（昭和45年）
- 55 浜田信他「福岡県内前方後円墳地名表」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集）1971年（昭和46年）3月
- 56 小田富士雄「古代形代馬考」（『史淵』第105・106合輯）1971年（昭和49年）8月
- 57 佐田茂・松本肇「九州複室構造横穴式石室地名表」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—III—）1972年（昭和47年）1月
- 58 亀井明德「九州装飾古墳の特色」（『ふるさと自然と歴史』第12号）1972年（昭和47年）5月
- 59 亀井正道・茂木雅博「古墳主要遺跡要覧」（『新版考古学講座』11別巻）1972年（昭和47年）7月
- 60 斉藤忠「原始美術としての絵画と文様」（『日本の美術』1）1972年（昭和47年）7月
- 61 轟久嗣郎「第6地点（若宮条里遺構）の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年（昭和48年）3月
- 62 轟久嗣郎「第6—2地点（別当塚古墳）の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年（昭和48年）3月
- 63 轟久嗣郎「第6—3地点（八幡塚古墳）の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年（昭和48年）3月
- 64 轟久嗣郎「第7地点（杉園遺跡）の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1972年（昭和47年）7月
- 65 水野祐「高句麗壁画古墳と婦化人」1972年（昭和47年）7月
- 66 奥村芳太郎編『古墳の旅』1972年（昭和47年）12月
- 67 森浩一『古墳—石と土の造形—』1973年（昭和48年）9月
- 68 斉藤忠『日本装飾古墳の研究』1973年（昭和48年）3月
- 69 福岡県教育委員会編（『鞍手のむかし』若宮町所在遺跡の調査報告会資料）1974年（昭和49年）9月

- 70 浜田信也『金丸古墳』1975年（昭和50年）3月
- 71 酒井仁夫「付 竹原古墳出土遺物」『金丸古墳』1975年（昭和50年）3月
- 72 宮崎貴夫「田尻遺跡」『昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1975年（昭和50年）7月
- 73 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」（『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓）1975年（昭和50年）3月
- 74 鶴久嗣郎・小池史哲・宮崎貴夫「田尻遺跡の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 75 鶴久嗣郎「別当塚古墳の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 76 鶴久嗣郎「杉園遺跡の調査」（『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』第1集）1976年（昭和51年）3月
- 77 福岡県教育委員会編（『くらてのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月
- 78 森貞次郎編『北部九州の古代文化』1976年（昭和51年）5月
- 79 酒井仁夫「遠園遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 80 酒井仁夫「小原遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 81 酒井仁夫「柳ヶ谷遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 82 浜田信也「金丸古墳」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 83 酒井仁夫「汐井掛遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 84 酒井仁夫「茶白山城跡・茶白山遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 85 酒井仁夫「茶白山遺跡」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 86 酒井仁夫「汐井掛古墳群」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 87 酒井仁夫「小原古墳群」（『日本考古学年報』27 1974年版）1976年（昭和51年）5月
- 88 九州歴史資料館編『奈良・平安の陶磁』1977年（昭和52年）2月
- 89 池辺元明・酒井仁夫・上野精志・松村一良「平原・柳ヶ谷・都地原遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VIII-）1977年（昭和52年）2月
- 90 酒井仁夫・児玉真一・副島邦弘・佐土原逸男・松村一良「小原遺跡・小原古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XI-）1977年（昭和52年）3月
- 91 栗原和彦・上野精志・亀井明德・森本朝子・松村一良「遠園遺跡・茶白山城跡・茶白山遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XVI-）1977（昭和52年）3月
- 92 福岡県教育委員会編『福岡県の史跡』1977年（昭和52年）3月
- 93 児玉真一「小原遺跡」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 94 児玉真一「小原古墳群」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 95 上野精志「都地遺跡」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 96 三宅敏之「経塚遺物年表」（『新版仏教考古学講座』第6巻経典・経塚）1977年（昭和52年）6月



Tab.2. 宮田町遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	遺構の種類	出土遺物	時期	文献
先土器・縄文時代						
1	汐井掛遺跡	宮田町上有木字高平	散布地	ブレイド、ナイフ形石器		27・31
弥生時代						
2	汐井掛A遺跡	宮田町上有木字高平	木棺墓、箱式石棺墓、甕棺墓	銅鏡、鉄鏃、ガラス小玉、管玉、土器	後期～古墳時代前期	27・31
3	都地原遺跡	◇ 下有木字坂元	住居跡	弥生式土器	後期?	29
4	天神の上遺跡	◇ 下有木字坂元	箱式石棺墓、土塚墓			
5	柳ヶ谷Ⅱ遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡、柱穴群		後期	
6	柳ヶ谷Ⅰ遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡	弥生式土器	中期、後期	
7	柳ヶ谷遺跡	◇ 上有木字坂元	住居跡、貯蔵穴	弥生式土器、石剣、青銅製鋤先	中期、後期	29
8	上有木遺跡	◇ 上有木		大型石庖丁		11
9	芹田遺跡	◇ 芹田字勝負尻		石戈		29
10	上大隈遺跡	◇ 上大隈字町屋敷・寺の下一帯		弥生式土器、石庖丁、石斧土錘、石鏃	中期	6.9.16.19
11	本白遺跡	◇ 本城字本白		扁平石斧		
12	薬師丸遺跡	◇ 磯光字薬師丸		弥生式土器 石庖丁、片刃石斧、石鏃、砥石(石戈)		1.2.3.4.5.7.9.10.13.17.28.30
13	磯光遺跡	◇ 磯光		石戈、石鏃、石斧		12と同じ
14	千石三の谷遺跡	◇ 千石		石庖丁原石		9.14.23.24
古墳時代						
15	汐井掛古墳群	宮田町上有木字谷底・高平	約60基 内若宮町30基	須恵器、土師器、鉄刀、鉄鏃、玉類、金環	5C後～7C	27・32
16	高平古墳群	◇ 上有木字高平前	3基 複室1基、単室2基	須恵器	6C～7C	
17	神田古墳	◇ 上有木字坂元	箱式石棺	須恵器		29
18	向の畑古墳	◇ 上有木字向の畑	箱式石棺	鉄剣		29
19	高平前古墳群	◇ 上有木字高平前	2基 複室1基、不明1基			
20	四ツ塚古墳群	◇ 上有木字向の畑	6基			29
21	百塚南古墳群	◇ 上有木字向の畑	8基 様穴式石室3+α			

22	百塚古墳群	宮田町上有木字向の畑	約60基、石棚有り	須恵器		9・29
23	井掘古墳	◇ 上有木字井掘	横穴式石室	須恵器		29
24	中有木古墳	◇ 上有木字中有木	円墳、横穴式石室			
25	南ヶ浦古墳	◇ 中有木字南ヶ浦	6基 単室、複室	須恵器、鉄鏃、装身具	6C後	
26	ハル古墳	◇ 下有木字ハル	?基	不明		
27	下有木北古墳群	◇ 下有木字辻	5基 箱式石棺5	須恵器		29
28	下有木古墳群	◇ 下有木字五郎丸	7基 竪穴系横口式石室 箱式石棺4+α	直刀、ガラス小玉、鉄鏃、刀子		29
29	松ヶ元古墳群	◇ 倉久字松ヶ元	2基			
30	春日神社裏古墳	◇ 倉久字春日神社裏	円墳			
31	浦宮古墳群	◇ 本城字徳城	2基 前方後円墳?1、円墳1			29
32	亀石塚古墳群	◇ 本城字亀石	単室1基 2基 不明1基	鉄刀?		9
33	谷古墳	◇ 竜徳字谷	約4基 複室1基 他不明	須恵器		29
34	竜徳古墳群	◇ 竜徳字辻屋敷	約5基 複室2基 単室3基	須恵器、鉄刀、銀環		29
35	生見古墳群	◇ 宮田字生見	2基	鉄刀		29
36	本白古墳群	◇ 本城字本白	2基 複室1基、 不明1基	鉄刀、玉類		9・29
37	谷頭古墳群	◇ 上大隈字谷頭	前方後円墳1、横穴式石室1	埴輪、鉄鏃、管玉		29
38	上屋敷横穴墓	◇ 上大隈字上屋敷	5基以上	須恵器	6C後	29
39	安免横穴墓	◇		須恵器、土師器、鉄鏃、銀環		
40	東町古墳	◇ 磯光字久林原	円墳、箱式石棺			
41	黄金塚古墳	◇ 鶴田字尾勝		内行花文鏡、勾玉		9・12
42	二十一ヶ墓古墳	◇ 鶴田字桃山	箱式石棺			
43	堂ノ浦古墳	◇ 磯光堂ノ浦	2基			
44	下有木遺跡	◇ 下有木		土師器、須恵器	6C後	
45	草場ノ谷遺跡	◇ 下有木草場ノ谷		須恵器		
46	桶田古墳	◇ 上有木字桶田	円墳、箱式石棺?			
47	オサダ遺跡	◇ 上大隈字長田		土師器、須恵器		
48	和田屋敷遺跡	◇ 本城字和田屋敷		土師器		
49	坂元古墳	◇ 上有木	円墳、箱式石棺	須恵器		
<b>歴 史 時 代</b>						
2	汐井掛墳墓	宮田町上有木字高平	5基 内1基若宮町	銅銭	奈良	27
51	平原遺跡	◇ 芹田字平原		須恵器、土師器	奈良	29

## II 犬鳴川流域の古墳の分布

52	宮崎窯跡	宮田町倉久字宮崎		須恵器	奈良	
53	塔ノ峯遺跡	◇ 竜徳字塔ノ峯		石帯		
54	筒井田糸里	◇ 下有木字筒井田				
55	下有木経塚	◇ 下有木			鎌倉	6.8.20 33
56	瑞石寺	◇ 宮田如来田		宋銭		
57	坂元城跡	◇ 上有木字坂元城崎			室町	
58	上有木城跡	◇ 上有木字井掘			室町	
59	長井鶴城跡	◇ 長井鶴			室町	
60	古野城跡	◇ 古野			室町	
61	岩永城跡	◇ 山崎			室町	
62	笠置山城跡	◇ 宮田字笠置山				
63	高取城跡	◇ 鶴田			室町	
64	祇園岳城跡	◇ 竜徳字城山			中世	
65	稲築城跡	◇ 竜徳字門の内			中世	
66	竜ヶ岳城跡	◇ 竜徳字竜ヶ岳			室町	
67	亀石五輪塔	◇ 本城字亀石				
68	瑞石寺五輪塔	◇ 宮田如来田				
69	千石窯跡	◇ 千石		近世陶器	江戸	
<b>宮田町遺跡参考地</b>						
70	宮田中学校遺跡	宮田町太蔵	甕棺？ 支石墓？	甕棺		
71	鶴田遺跡	◇ 鶴田		石斧		
72	竜徳遺跡	◇ 竜徳		弥生式土器石斧、石庖丁、石鎌		
73	長井鶴古墳群	◇ 長井鶴	古墳群	土師器、須恵器		9
74	碓古墳群	◇ 長井鶴碓口	古墳群	須恵器		9
75	京野古墳群	◇ 長井鶴京野	古墳群	須恵器		9
76	本白遺跡	◇ 上大隈本白	散布地	石斧		9
77	磯光古墳群	◇ 磯光	古墳5基	須恵器		9
78	磯光古墳	◇ 磯光	古墳	内行花文鏡		9
79	鶴田遺跡	◇ 鶴田	散布地	石斧		9
80	久林原古墳群	◇ 久林原	古墳群			9
81	天照宮石枕遺跡	◇ 磯光天照宮		枕付石棺身底板？		正和元年 銘あり
82	所田古墳群	◇ 所田	古墳			9
83	辻屋敷古墳	◇ 辻屋敷	古墳群	土師器、直刀、玉、太刀、金環、銀環、馬具		9
84	新川遺跡	◇ 長井鶴新川	包含地	土師器		9
85	上大隈遺跡	◇ 上大隈	包含地	土師器		

86	桶田遺跡	宮田町下有木字桶田		土師器		9
87	上大隈遺跡	〃 上大隈		青磁		

## 宮田町考古学文献

- 1 小川敬養「豊前小倉近傍ノ石剣」(『東京人類学会雑誌』第98)1894年(明治27年)5月
- 2 高橋健自「銅銚銅劍考(2)」(『考古学雑誌』第13巻第6号)1923年(大正12年)2月
- 3 高橋健自『銅銚銅劍の研究』1925年(大正14年)10月
- 4 梅原末治・島田貞彦「日本発見磨製石鏃及石劍聚成表」(『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第10冊)1927年(昭和2年)3月
- 5 森本六爾『日本青銅器時代地名表』1929年(昭和4年)6月
- 6 福岡県社事兵 事課「先史時代原史時代の史蹟」『史蹟名勝天然記念物所在調査書』1930年(昭和5年)5月
- 7 後藤守一「上古時代に於ける上越地方(1)」(『考古学雑誌』第20巻第9号)1930年(昭和5年)9月
- 8 橋詰武生「筑前に於ける経塚及び経筒に就て—最近四王寺山上発見に係る八百余年前の経塚と写経一」(『筑紫史談』第57集)1932年(昭和7年)12月
- 9 石村一男・木村芳秋・清賀義男・児島隆人・沢井一雄・田中幸夫・名和羊一郎・松本亀次・三友国五郎共編「北九州考古学的遺跡一覽表(2)」(『北九州郷土史研究』第2輯)1937年(昭和12年)2月
- 10 岡崎敬「遠賀川上流の有紋弥生式遺跡地」(『考古学雑誌』第29巻第2号)1939年(昭和14年)2月
- 11 島田寅次郎「石器と土器・古墳と副葬品」(『福岡県名勝史蹟天然記念物調査報告書』第13輯)1939年(昭和14年)5月
- 12 赤間太郎「遠賀川流域古墳分布の概観」(『上代文化』第17号)1939年(昭和14年)3月
- 13 児島隆人「遠賀川流域に於ける青銅器文化」(『考古学』第11巻第11号)1940年(昭和15年)11月
- 14 森貞次郎「古期弥生式文化に於ける立岩文化期の意義」(『古代文化』第13巻7号)1942年(昭和17年)7月
- 15 後藤守一「クリス形銅戈」(『古代文化』第14巻第6号)1943年(昭和18年)6月
- 16 九州考古学会編(『北九州古文化図鑑』第1輯)1950年(昭和25年)2月
- 17 田中幸夫『九州の考古学』—九州の大昔—1950年(昭和25年)3月
- 18 鞍手教育研究所編『鞍手郡郷土史』1965年(昭和40年)6月
- 19 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性—九州—」(『日本の考古学』Ⅲ・弥生時代)1966年(昭和41年)1月
- 20 小田富士雄「九州の経塚」(『仏教芸術』第76号)1970年(昭和45年)
- 21 浜田信也「福岡県内前方後円墳地名表」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集)1971年(昭和46年)3月
- 22 石山勲他(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—Ⅲ—)1972年(昭和47年)1月
- 23 中村修身「弥生時代石器製作址に関する試論—福岡県東北部の例から—」(『速見考古』第2・3号)1972年(昭和47年)9月
- 24 小田富士雄編『原遺跡』1973年(昭和48年)3月

- 25 福岡県教育委員会編『くらてのむかし』1974年（昭和49年）9月
- 26 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」（『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓）1975年（昭和50年）9月
- 27 福岡県教育委員会編（『くらてのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月
- 28 下条信行「石戈論」（『史淵』第110輯）1976年（昭和51年）3月
- 29 池辺元明・酒井仁夫・上野精志・松村一良「平原・柳ヶ原・都地原遺跡の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-Ⅶ-）1977年（昭和52年）2月
- 30 下条信行「九州における大陸系磨製石器の生成と展開—石器の組合・形式の関連性と文化圏の設定—」（『史淵』第114輯）1977年（昭和53年）3月
- 31 池辺元明「汐井掛遺跡」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 32 上野精志「汐井掛古墳」（『日本考古学年報』28 1975年版）1977年（昭和52年）4月
- 33 三宅敏之「経塚遺物年表」（『新版仏教考古学講座』第6巻 経典・経塚）1977年（昭和52年）6月

この地名表、文献は上野の『遠賀川流域遺跡地名表』第7集—宮田町—と同第8集—若宮町—を基礎に作成したものであるが、現在発掘調査中である地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査の遺跡については調査担当者である県文化課技師池辺元明氏に御教示願った。記して感謝する次第である。

（上野精志）

### III 汐井掛古墳の調査

### III 汐井掛古墳の調査

汐井掛古墳群は福岡県鞍手郡若宮町沼口と同郡宮田町上有木にまたがる古墳群である。犬鳴川の支流である山口川右岸の丘陵上及び斜面にかけて約53基の古墳がみられ、その内38基が発掘調査の対象となる。以下、各古墳を列記する。(Fig.①~④, PL.1~4)

#### 1. 第 1 号 古 墳

##### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5)

第1号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。南東から北西に流れる尾根の稜線をはずれた標高約73mの西斜面上に位置している。南東側に約5m離れて2号古墳、さらに12m離れて3号古墳が位置している。墳丘の北・西側裾部は近世の墓地により破壊され、墳頂部は寛政年間の神谷武蔵墓によって削平を受け天井石を失い陥没している。また調査前にブルドーザにより東側墳丘裾部を削平された。

##### 2) 墳 丘

###### (1) 地山整形と溝 (Fig.3・4, PL.6)

花崗岩バイラン土上に盛土が行なわれているが、前述の如く削平を受けており、詳細は不明である。築造にあたっては、まず西斜面を削るとともに周溝を掘り、墳丘を際立たせる造成が行なわれている。溝は上幅2.5m、下幅1m、深さ30cm弱であり、斜面の上方にのみ残っているようである。この整形状態とトレンチから判断すると、墳丘径約12mを測る円墳であることがわかる。天井石を復元すれば墳丘高約2.5m程度であろう。

###### (2) 墳丘盛土 (Fig.⑤, PL.7)

墳丘の形成過程は大きく2段階に分けられる。第1段階は墓壇内に腰石を据えた後、壁石の積み上げに平行して1段ずつ盛り上げている。腰石の裏込めにあたる墓壇内は特に叩きしめが強く行なわれて固くしまっている。第2段階は、天井石の被覆と墳形を整えるものである。この段階の盛土は中位以上が削平を受けている。墳丘は現存高約1.2mを測る。

##### 3) 主体部

###### (1) 石室 (Fig.⑥, PL.8~11-(1))

本墳の埋葬施設は、長さ約4.4m、幅約3.35m、深さ約1.4mの隅丸長方形の墓壇内に構築され

Ⅲ 汐井掛古墳の調査

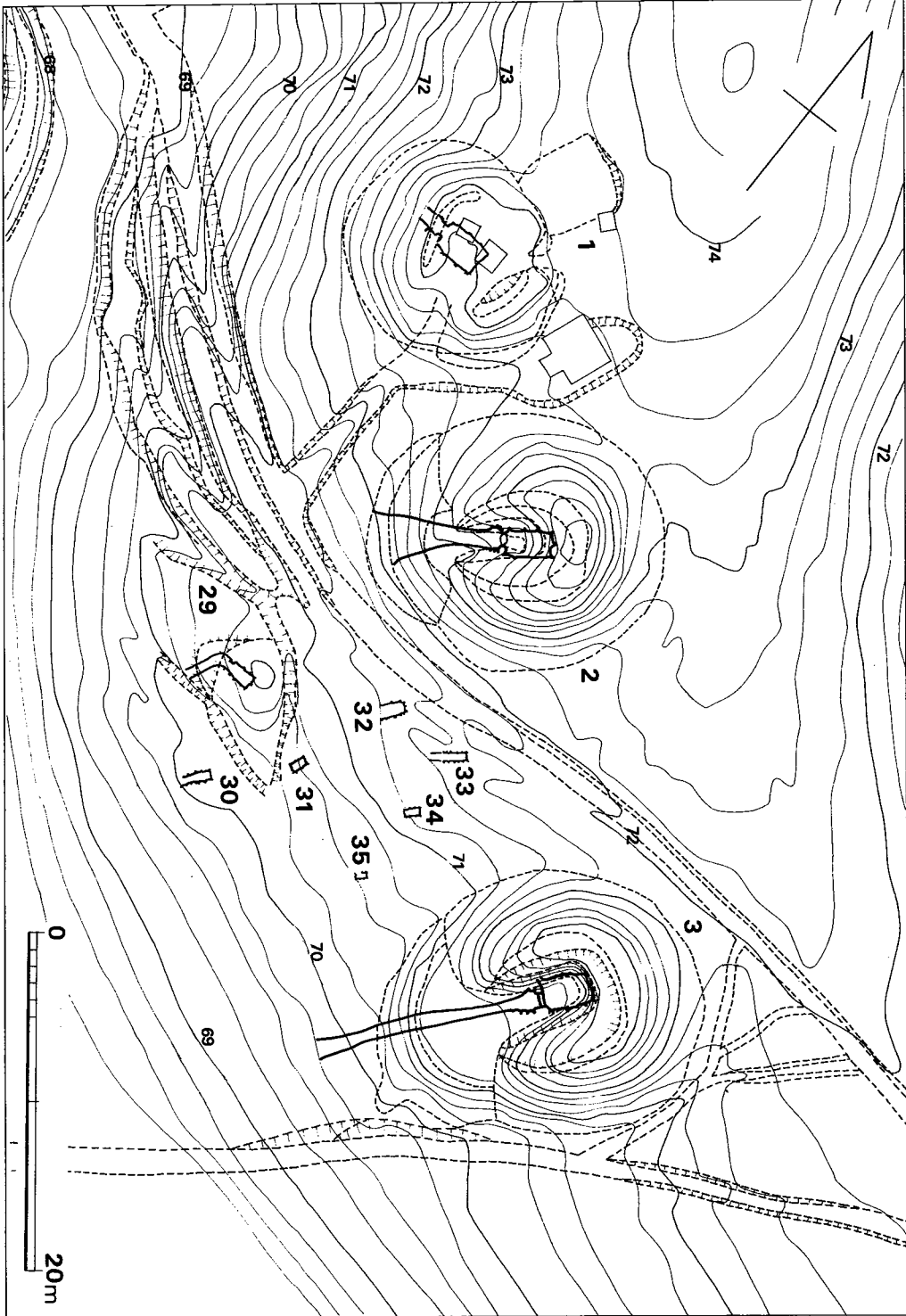


Fig. 2 汐井掛第1号・第2号・第3号古墳周辺地形図 (縮尺1/400)



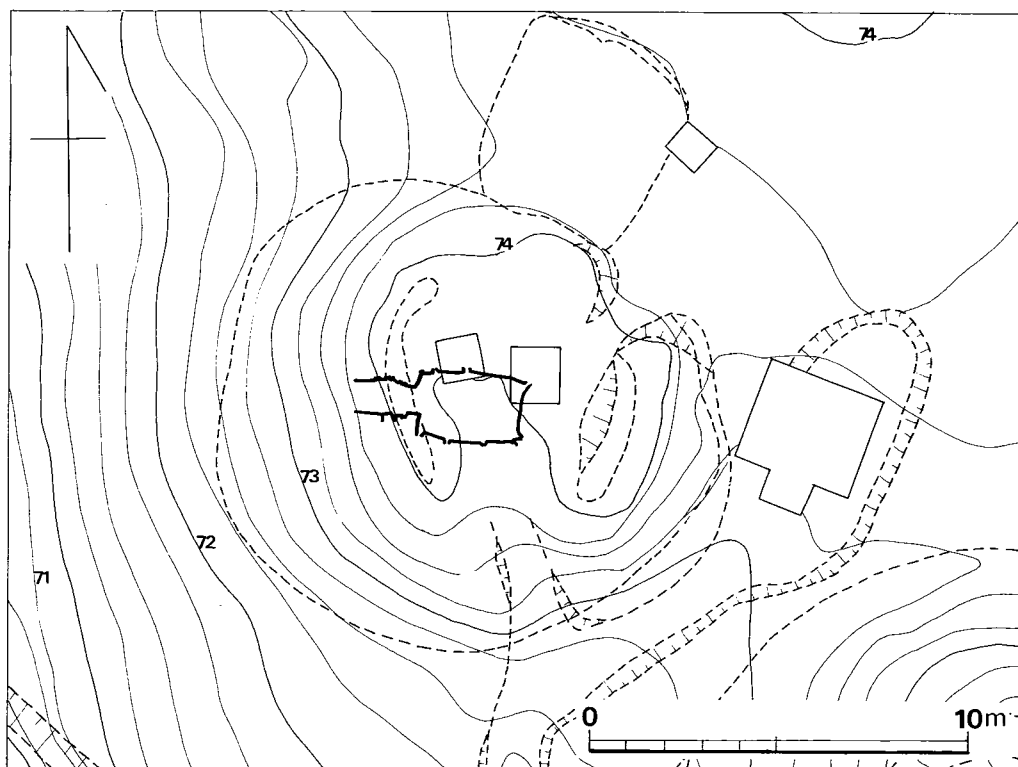


Fig. 3 汐井掛第1号古墳地形図（縮尺1/200）

ている。主軸をN84度Wにとり、西側に向って開口する単室の横穴式石室である。石室はすでに天井石を失っており、墓道は羨道との境から、ブルドーザにより削平された石室の平面は、やや胴張り長方形の玄室に短い羨道をつけたもので、石室の全長は、左壁で3.7m、右壁で3.65mを測る。

玄室の長さは、左側壁で2.8m、右側壁で2.65m、主軸線で2.8mを測る。幅は奥壁側で1.55m、玄門側で1.55m、中心で1.85mを測り、やや胴張り長方形を呈する。側壁の構築法は各壁とも共通している。基部は、坵底をわずかに掘り下げて、奥壁腰石には大きな板石を1枚、やや内傾気味に立てて据え、側壁腰石は、左側壁4枚、右側壁3枚のほぼ同じ大きさの石材をわずかに内傾させ立てて据えている。

## Ⅲ 汐井掛古墳の調査

二段目以上は、細長い不定形の石材を用い、横積みして次第にせり出す構築法をとっている。奥壁と側壁の隅角部の構築は、一部に両壁にまたがって石材を置く部分が見られる。両側壁は8段の積み石が残存する。床面からの高さは1.55mを測る。天井石はすでにはないが、さらに数段横積みした上に天井石を載せたものと考えられ、床面からの高さは2m程度であったと思われる。

玄門部は両袖で、袖幅は左袖が0.4m、右袖が0.5m、玄門幅は0.6mを測る。

床面には、20から30cm内外の扁平な石材がみられ、全面に敷石が施されたものと思われるが原位置をとどめているものは少なく詳細は不明である。床面から遺物は発見されなかった。

羨道部は天井部及び右壁上部が破壊されているが、左壁の保存は良い。羨道長は左壁で0.55m、右壁で0.6mを測る。幅は榎石の部分で0.65m、墓道側で0.93mを測り、口が「ハ」の字に

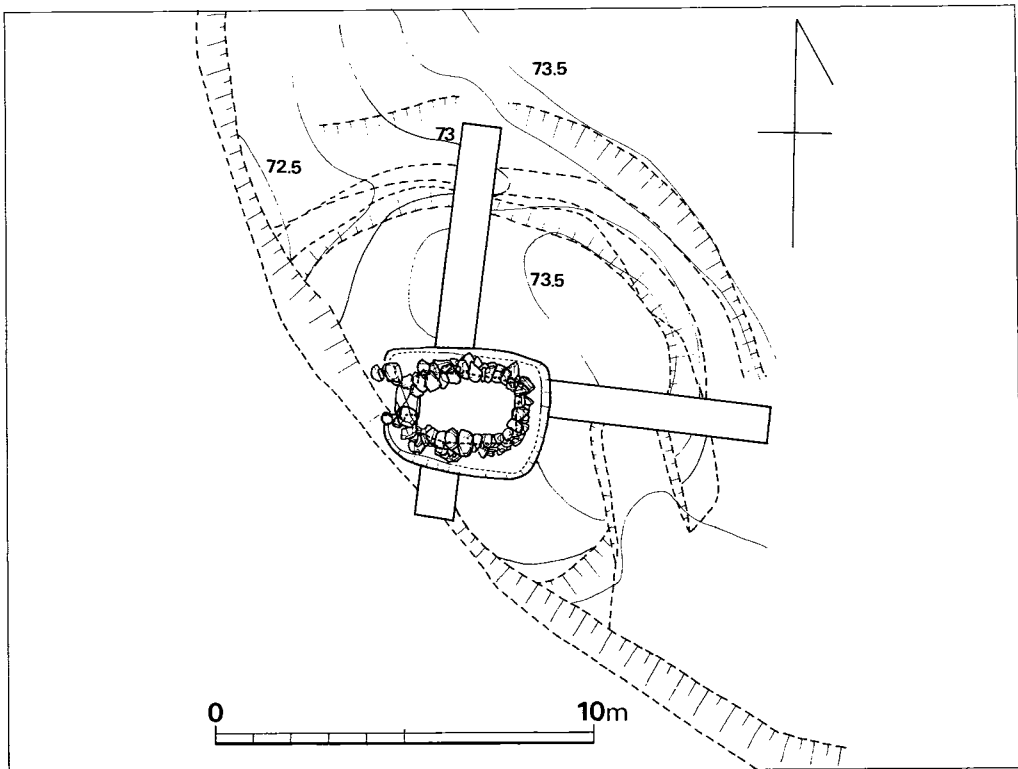


Fig. 4 汐井掛第1号古墳地山整形面測量図（縮尺1/200）

## 1. 第1号古墳

開く羨道である。

墓道及び閉塞状態は削平のため詳細は不明である。

## (2) 石室掘り方 (Fig. ⑥)

墳丘基盤の中央部に墓塚があり、隅丸長方形であり、西方に墓道が続いている。石室掘り方は長さ約4.4m、幅約3.35m、深さ奥壁で約1.4m、羨門方で0.8mである。石室の腰石外端と掘り方壁との間は約30cmである。

墓道は西方壁の中心部に付属しているが、墳丘裾部の方が調査前に破壊されているため詳細は不明である。

(池辺元明)

## 4) 遺物

## (1) 出土状況 (PL. 11-②)

石室内は既に攪乱されており、出土遺物はなく、墓道、墳丘内や周溝より須恵器、土師器が出土している。

墓道にFig. 5-16の須恵器坏蓋があり、墳丘内より多くの須恵器が発見される。墳丘は発掘前に2度にわたりブルドーザにより削平されて墓道やその左・右墳丘を破壊された。その際PL. 11-②のように墳丘内に須恵器が発見されたが、ほとんどはブルドーザにより原位置を保つことなく破壊された状態で出土した。それは墓道の左・右側の墳丘裾部近くの墳丘内でも比較的地山整形面に近い位置に在ったようである。おそらく後述の第2号古墳にみられる墓道の左・右側墳丘内出土の土器群と同じ状況であったと推定されるが、詳細は不明である。

周溝の覆土中より若干の須恵器・土師器が出土する。

(上野精志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 5~7, PL. 12~14)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	15個体以上
	坏蓋	7個体
	坏身	2個体
	埴身	1個体
	高坏蓋	1個体
	有蓋高坏	1個体
	壺	2個体
	甕	3個体
	土師器	2個体以上

壺 1 個体

高坏 1 個体

**須恵器 (Fig. 5, PL. 12・13・14-(1))**

坏蓋 (1～4, 7～9) 8 個体出土しており, I～Ⅲ類に分けられる。

I 類 (1) 墳丘裾より出土。体部, 天井部の境に段を有し, 外方に直線的に張る。口径13.8 cm, 器高4.3cmである。口縁内側は凹状をなし, 天井部1/3を入念なへら削りを行って, 他の類に比べると丁寧な調整を行っている。色調は灰黄色を呈し焼成は不良で胎土は小砂粒子を含んでいる。ロクロ回転は左方向である。

II a 類 (7, 8) 天井部, 体部の境の段は鈍く内湾ぎみに直立し, 口縁端部近くで外反する。7は1/3を欠損する。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。8は口径13.8cm, 器高4.3cmである。口縁部内側の段は鋭い。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転はともに右方向である。出土地は不明である。以下, これを省略する。

II b 類 (2, 4) 天井部, 体部の境はますます鋭くなる。4は口径14.3cm, 器高4.4cmである。天井部は粗いへら削りが行われている。調整は粗雑である。色調は灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。2は2/3を欠損する。口径は14.6cm(推), 器高4.4cmである。体部との境は沈線に変る。口縁内面は鈍い段をなし肥厚する。色調は茶褐色を呈しており, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は双方とも右回転である。

II c 類 (3) 口径11.0cm, 器高3.6cmである。天井部と体部の境は無くなる。天井部は広範囲なへら削りを行っている。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

Ⅲ類 (10) 口径12.8cm, 器高4.0cmである。天井部は平坦で手持ちのへら削りが行われて, 体部にわずかな凹凸が見られる。色調は黒灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

坏身 (5, 6) 5は墳丘内, 6は1号古墳, 墳丘内より出土。5は口径13.1cm, 器高4.5cm立上り高1.3cmである。立上りはそりぎみに内傾し, 受部は水平にのびる。底部のへら削りは荒く, 調整は粗雑である。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。6は口径13.2cm, 器高4.7cm, 立上り高1.2cmである。受部は凹状をなし, 立上りは内傾し端部は尖る。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

高坏蓋 (10) 口径14.6cm, 器高5.7cmである。つまみは凹状をなして丸味を帯びている。口縁内部は段をなし, 肥厚する。天井部外面はへら削り, 内面にはタタキ痕が残る。色調は黄灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

高坏 (11) 有蓋であるけど, 立上りを欠損する。器高(現)17.2cm, 外径19cm, 脚裾径12.6 cmである。立上りは内傾して途中で直立するものと思われる。底部はへら削りの後カキ目調整

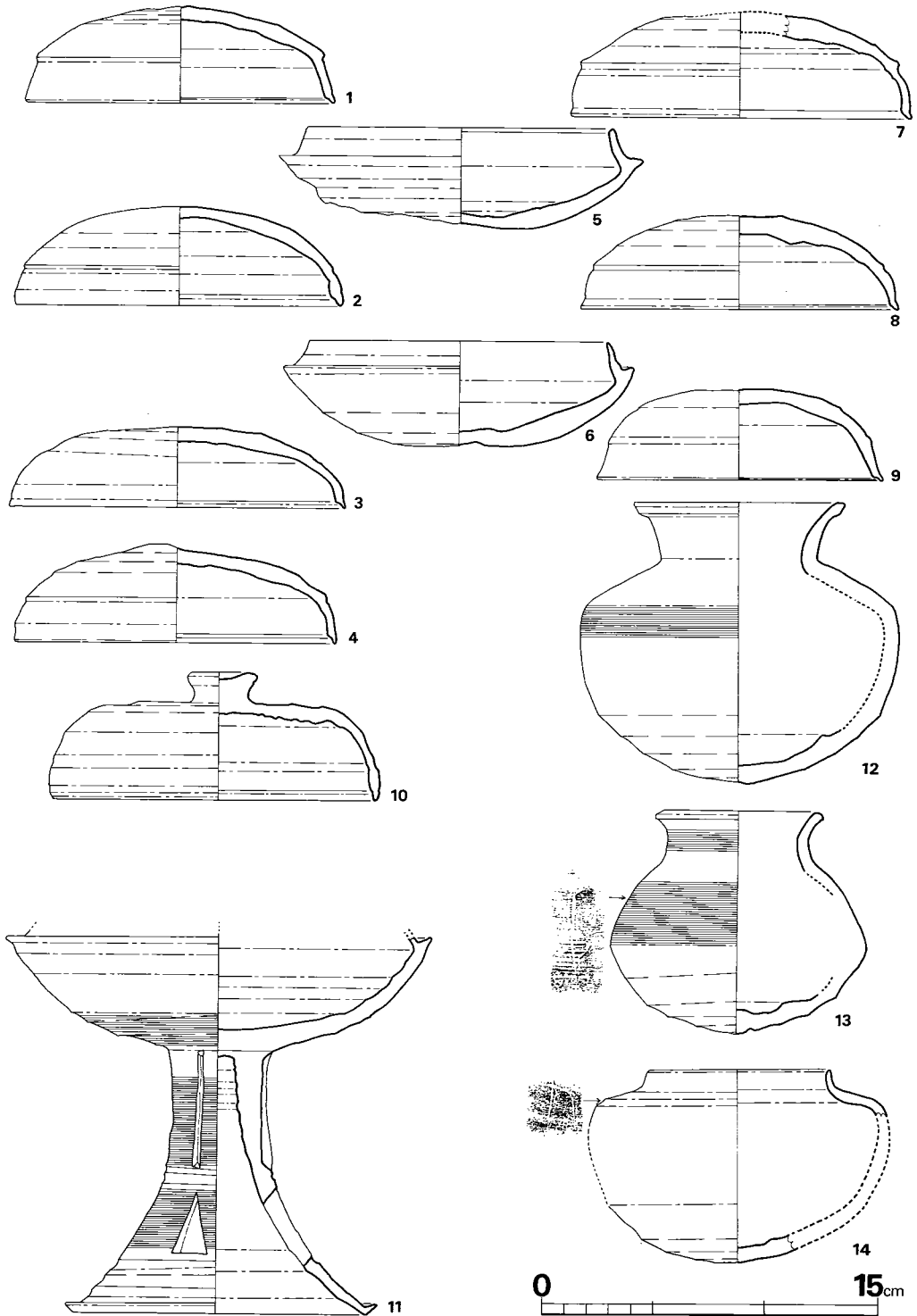


Fig. 5 汐井掛第1号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

を行っている。脚部は中央に2条の沈線が入り、上に長方形の切り込み、下方に三角形の透かしを三方向に配する。脚部はカキ目調整と横ナデにより仕上げている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

埴 (14) 口径8.2cm, 器高8.6cm(推)であり、胴部を欠損する。肩部は肩が張り、へラ記号を有し、底部は粗いへラ削りのため、尖りぎみである。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を若干含む。

壺 (12, 13) 12は広口壺である。口径9.4cm, 器高12.5cmである。胴部上半は肩が張りカキ目調整がなされ、下半は、粗いへラ削りにより底部は尖りぎみである。13は口径8.2cm, 器高8.6cm, 胴部最大幅11.2cmである。胴部最大幅は下方に有る。下半は粗いへラ削り、上半はカキ目調整を行い、胴部中央にへラ記号を有する。ロクロ回転方向は双方とも右方向である。

甕 (15, 16, 17) 大きさ、口頸部の形態によりII類に分類できる。

I類 (16, 15) 胴部に対して口頸部が短く外反が著しい。15は口頸22cm, 器高48cm, 口頸高5.5cm, 胴部最大幅41.4cmである。口縁部下端に鋭い沈線が入る。外面は平行叩き目の上にカ

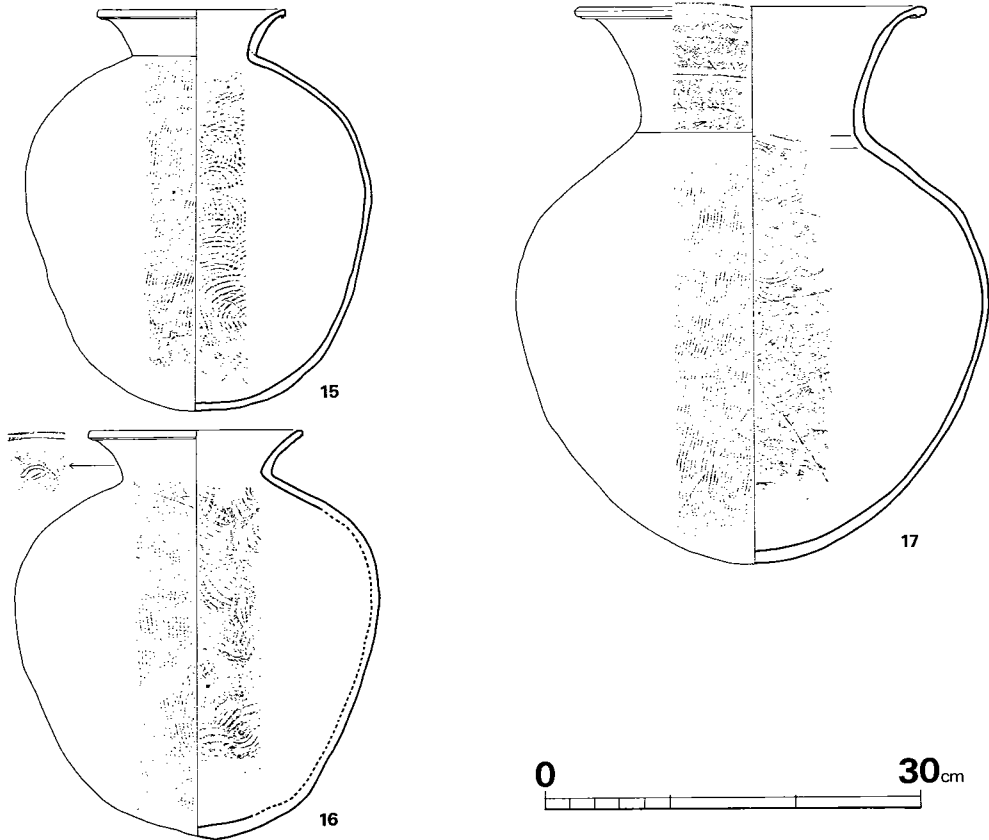


Fig. 6 汐井掛第1号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6)

## 1. 第1号古墳

キ目調整を行って、内面は同心円文状叩きが入っている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良で、胎土は砂粒子を混入する。16は口径25cm、器高48.7cm、口頸高5.8cm、胴部最大幅43.5cmである。胴部は肩が張っており、外面は平行叩き目、内面は同心円文状の叩きが入っている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良、胎土は砂粒子を含む。

Ⅱ類(17) 大形甕で有り、口頸部が高くなる。口頸40.9cm、器高65.5cm、口頸部15.0cm、胴部最大幅56.4cmである。頸部はゆるやかに外反し、中央に2条の沈線が入り、上下に楕円波状文を施している。胴部は肩が落ち、外面に平行叩きがなされるが下方はその上にカキ目調整を行っている。内面は同心円文状の叩きが入っている。色調は灰色を呈し、焼成は良で、胎土は砂粒子を含む。

## 土師器 (Fig.7, PL.14-(2))

碗(1) 口径13.4cm、器高6.1cmである。体部中央に沈線をめぐらせ、底部は丸い。器面剥落は著しく調整は不明である。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は良好。胎土は小砂粒子を含む。

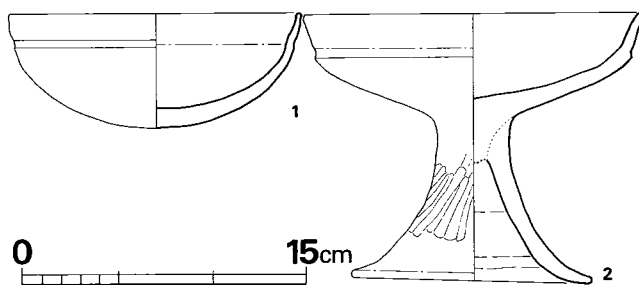


Fig. 7 汐井掛第1号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)

## 高坏(2) 坏部2/3を欠損

する。口径17.8cm(推)、器高14.2cm、脚裾径12.4cmである。脚部は目の細い、縦位のへら削りが行われ、内面は横位のへら削りが行われている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)

## 5) まとめ

当古墳は第2号・第3号古墳と汐井掛の丘陵の南西斜面の頂部近くにあつて、立地よりみてこれらは一つの群として把握されC群とする。

墳丘は江戸時代の神谷武蔵墓に削平され原形を保たず、さらに天井石や側壁の上半はない。又、発掘調査前に墳丘を削り取られる不祥事があり、その際墓道右側墳丘内より土器が出土。

墳丘の大きさは径約12m、高さ約3mの円墳で、斜傾面の高い位置、上方に地山整形による半円形の溝をめぐらし、同時に墳丘基盤面を造り出し、墳丘裾部を形成している。半円形の溝状の掘り込みは墳丘裾部を造り出すと同時に高斜面からの排水の役目もしていたと思われる。斜面の低い下方では周溝を掘ることなく、墳丘裾部を整形している。墓塚の石室掘り方は墳丘基盤面の中央部に穿ち斜面下方に墓道を付けている。

墳丘盛土は遺存状況がよくないので詳細は不明であるが大きく2段階に分けられる。掘り方

内の側壁石に平行に行なわれる裏込めは固く締っている。その後天井石を覆うべき厚い層がみられる。

石室は長方形プランの単室横穴式石室であり、羨道、墓道は削平されていて失なわれている。奥壁の鏡石は一枚石であり、側壁の石積みは乱石積みであるがよこに目が通る。

遺物は玄室より検出されず、墓道の埋土中や墓道に近い左右の墳丘盛土内、さらに周溝内より須恵器や土師器が出土している。特に墳丘盛土内ではPL.11-(2)のように左側（Ⅰ区）では原位置で検出されたが、右側（Ⅳ区）ではブルドーザによって破壊された時に出土したもので原位置を保っていないのがおしまれる。しかし、両側の墳丘盛土内に須恵器の埋置が確認された。

須恵器と坏蓋・身をⅠ～Ⅲ類に分けたが、時期はⅢ-B期<sup>(註1)</sup>に比定される。Ⅰ類としたものは形態的に見ると他の類に比すと最も古い要素を持っているが、シャープさに欠け又、成形、調整等を見ると他の類に比べて丁寧であることからしてⅢ-A期との過渡期に位置するものと考られる。Ⅱ類以降は天井部と体部の境が沈線状に変わって行きやがて不明瞭になっており、成形調整等に粗雑さが目立ってくる。なお坏身はⅡ類に属する。

出土遺物によって若干の時期差が認められるが、墳丘盛土内の古墳築造時と墓道や、周溝内出土の遺物はほぼ6世紀後半のものと思われ、一時的に集中している。

(上野精志)

註1 須恵器の型式編年については以下の報告書を参照した。

小田富士雄・柳田康雄・真野和夫『野添・大浦窯跡群』（福岡県文化財調査報告書第43集）

1970年（昭和45年）3月

小田富士雄編（『塚ノ谷窯跡群』—八女古窯跡群調査報告Ⅰ—）1969年（昭和44年）3月

以下同じである。



## 2. 第2号古墳

## 1) 立地 (Fig. 2, PL. 5)

第2号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。汐井掛丘陵が南西に延びているその南西緩斜面にあり、丘陵頂部よりやや下位の丘陵斜面上にある円墳である。第1号古墳と第3号古墳に並列しており、両古墳に挟まれた状況で第1号古墳とは墳丘裾を接しようかというほど接近している。立地、羨道の向きなどからみて、第1号古墳、第3号古墳と小支群を形成するものと考えられる。汐井掛古墳群中でも平面的に見ると中心的な位置に在るものである。

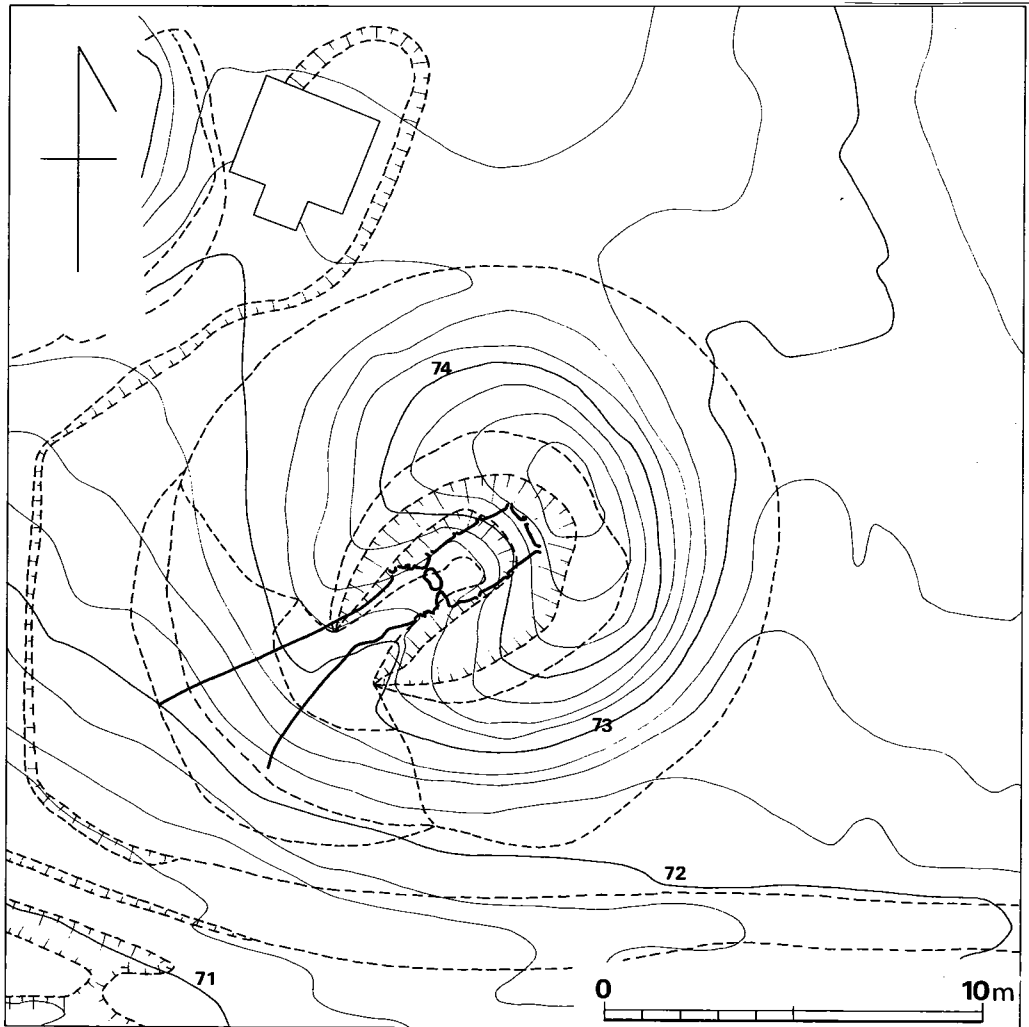


Fig. 8 汐井掛第2号古墳地形図 (縮尺1/200)

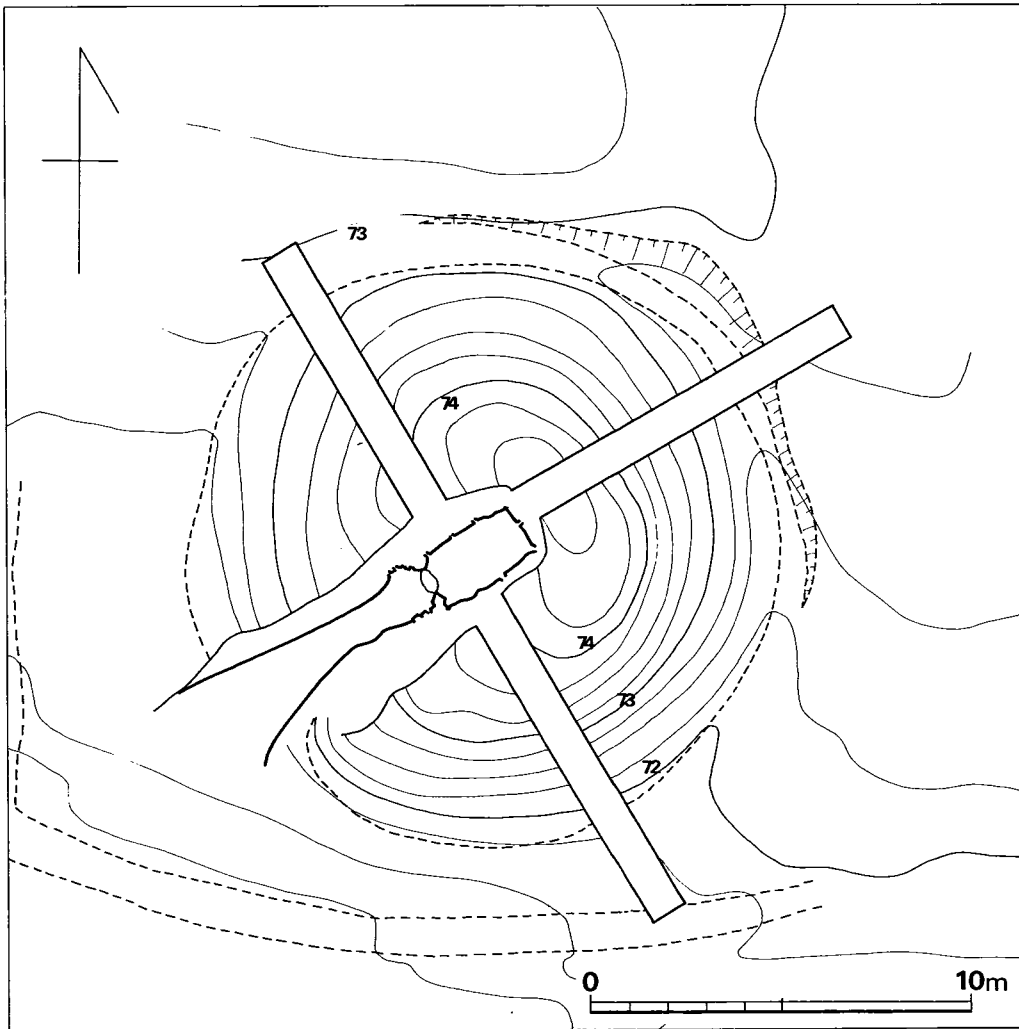


Fig. 9 汐井掛第2号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)

古墳の現状は、すでに盗掘をうけており、中心部と南西方の墳丘が掘られていて、その排土が南西方面に扇形状に広がっている。その状況からして、南西に開口する横穴式石室と想定される。

## 2) 墳丘

### (1) 地山整形と溝 (Fig. 8~10, PL. 16)

円墳であり、墳丘は中心部が盗掘のため陥没しているが、比較的残りの良い方である。発掘前の墳丘径は15.5m、高さ約1.50mである。

墳丘を構築する前にかかなりの地山整形を行って盛土の基盤となる土台を造り出している。そ

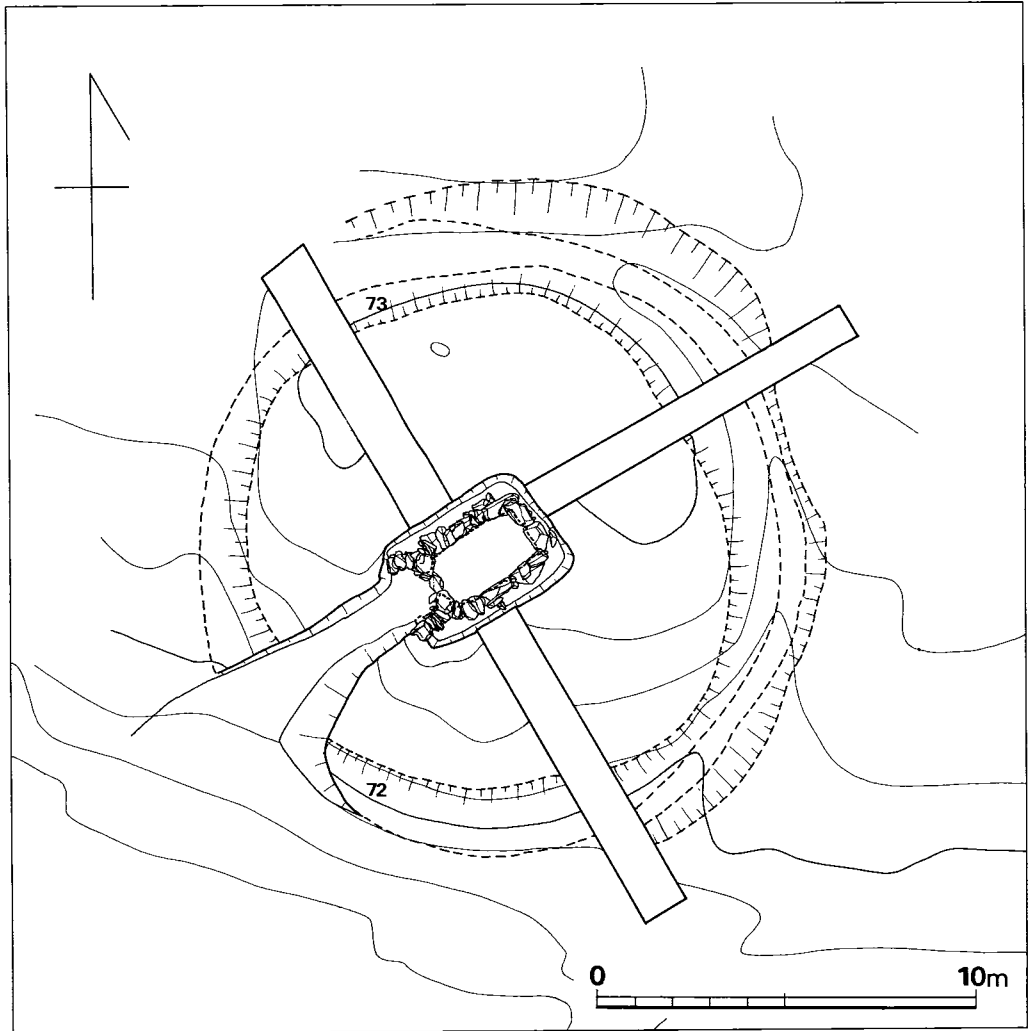


Fig. 10 汐井掛第2号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

これは先ず旧表土を全面にわたって剥ぎ、石室を構築する墓壇及びその羨道を定める。さらに墓壇のほぼ中心より径7.50mで墳丘裾部を造り出す。

古墳が丘陵斜面の緩斜面に在り、石室はその中心部に墓壇を掘り構築する。石室の奥壁方が斜面の上方高所部に、玄門、墓道を斜面の下方低所部に定めている。墓壇の石室掘り方床面はほぼ平坦になるよう掘られていて、上面もほぼ水平になるように斜面上方の奥壁側の地山を掘り下げ、さらに墳丘裾を造り出すために半円形の溝を掘り、墳丘の基盤としている。丘陵斜面の低位置になる斜面下方の南側になるにつれて、地山整形の溝は末広がりとなり消滅している。南側の墳丘裾は溝を造ることなく基盤を造り出し、盛土をしているようである。

地山整形により造り出された溝は、全体の2分の1程度に存在し、墳丘内側は墳丘裾を形成

している。溝は広いところで上幅 3 m, 下幅 1.5 m, 深さ約 30 cm で断面は U 形状を呈している。地山整形により造り出された基盤の上径は 13 m, 下径の墳丘裾部径は 15.5 m である。

## (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑦, PL. 17・18)

旧表土をはぎ、地山整形の溝を造り出し、墳丘の基盤を定め、その上に盛土をしている。

墓壇内の裏込め土と石室の天井石を覆う盛土の状態は石材が盗掘を受けている為にその時に破壊されていて不明であり、若干、玄室の腰石裏込め土が知られた程度である。

墳丘盛土については Fig. ⑦ の通りであり丁寧に盛り上げている。左側方の第 1 トレンチと奥壁方の第 2 トレンチをみると、墳丘の 3 分の 2 までは細かく版築してその後全体を覆うように盛土をしている。第 3 トレンチの方も同様であったものと思われる。墳丘盛土の状況より、墳丘高さを復元すると基盤より約 2 m となる。

なお、墳丘の南側裾と北東側の裾部にそれぞれ 2, 3 個の 30 cm 大の石がみられ、墳丘盛土の土留め石とした可能性がある。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ⑧, PL. 19~21-(1))

すでに天井石は無く、腰石のみの部分もあるが、内部主体は横穴式石室の単室で南西方向に開口し、石室主軸は S 60 度 W である。墓道が丘陵斜面の下方部の低位置方についている。

玄室の平面形は主軸方向に縦長の長方形を呈し、長さは主軸で 2.62 m, 左側壁側で 2.44 m, 右側壁側で 2.80 m と、やや右側が長い。幅は奥壁で 1.38 m, 中央の石室横断面で 1.60 m, 玄室入口部で 1.46 m で中央部が若干ふくらんでいる胴張り形である。

奥壁は二枚の腰石で左側が大きく、左側は小さくて、その上の奥壁石と二段で右側の右と同じくらいの高さとなっている。右側の石は全長 1.00 m, 玄室床面より 80 cm の高さであり、床面より下の掘り方に 20 cm 埋っている。厚さは 40 cm である。二つの石を合せて下部の最大幅約 1.35 m, 床面で幅 1.36 m, 上部幅約 1.14 m である。左側の石と右側の石とに若干のすき間があり、とくに下端部は三角形状にあいている。これらのすき間にはきっちりと入る石を選んで詰め込んでいる。左側の腰石上端は平坦で、その上に 2 段目の奥壁石を横長に積んでいる。

側壁は左右とも腰石は三石で、主に長方形の石材を横長に用いている。左側壁部の中間石と奥壁方の腰石の上半が尖っていてかなりの間石を詰めこんでいて、最大高所と同じ高さに整えて二段目の側石を積んでいて、それは長方形の柱状の石であり、小口方を玄室内に向けて側石としていて、小口積みである。右側壁部は三石とも長方形のものを横長に用いていて、奥壁方と中間石との間に若干の隙間があり、それは間石でふさいでいる。二段目の側壁は左側と同じような石であり、積み方である。二段目の石が現存しているのは左側壁側の一つの石だけである。

奥壁、両側壁の腰石下端部には腰石の安定を図るため掘り方に大小の礫状の石を用いて詰め込んでいて根石としている。又、裏込め石と思われるものも二・三ある。

床面は重ね敷きの状態であり掘り方床面の上に5～10cmの土を敷きその上に径5cm弱の円礫を一面に敷いてさらにその上に10cm×10cm内外の長方形の石を敷いて敷石としている。若干敷石が存在しないところがあるがこれは後の攪乱のためと思われる。床面高さはほぼ水平である。なお、玄室外の羨道部の中央付近に若干の敷石がみられるがこれは玄室内の敷石と考えた方がよいと思われ、敷石は玄室内のみと推定する。

玄門の袖石は左側は方形で1.2m弱、高さ1.20m近い大きな石を立てて用いているが、四隅の1つの隅を榊石の方に向けて置いているために玄室内の左側玄門方の隅角は直角になっていない。右側は五角形の石で1.00m×0.80m、高さ1.40m弱であり、こちらは玄室内との隅角が直角になるよう置かれている。両方とも下端部には安定を図るために根石を詰め込んでいる。

榊石は楕円形で長さ32cm、幅60cmで床面よりの高さは10cm程で断面は三角形状を呈している。両袖下の間に整然と置かれていて玄室と羨道と区別している。

羨道は左側が「ハ」の字状に墓道方が開き、右側は最下位段の石側はほぼ石室主軸と平行であるが、上面は若干「ハ」の字状に開いている。長さは榊石の墓道方端より70cmである。左側壁の腰石は二つであり特別に大きな石は用いず二段目、三段目は同じ大きさの石でありこれらはみな小口積みの乱石積みである。三段目まで遺存しており床面よりの高さは1m程である。右側壁も左側と同じような状況であり小口積みの乱石積みであり6段まで遺存していて高さは1.25cmである。

墓道は墳丘裾部の外まで続いて裾部では大きく開いている。長さは8mで幅は羨道近くで上幅1.7m、下幅約1m、深さ0.7mであり墳丘裾部の下幅は2mと広がっている。玄室床面からはほぼ水平に墳丘裾部まで続いているが、その先は若干傾斜していて底くなっている。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑧, PL. 21)

墳丘の中心部にあり石室に合った長方形プランであり墓道に続いている。羨道部までが長方形であり長さ4.50m、幅3.10m、深さは奥壁方で1.20m、墓道方で1.20mであり若干の傾斜をもつ。各々の腰石の下には安定を期するために掘り込みがあり、さらに各々の腰石下には若干の土を置いてその上に腰石を安定させている。腰石の外表面と掘り方壁面とは10cmから40cmの間隔があり比較的丁寧に裏込めをしているようである。

玄室内面の掘り方については断面図を作成するところしか調査していないが、左側壁下は玄室方に40cm、奥壁、右側壁方は10cm弱の掘り方が続いている。なお、玄室内側には根石、込め石は見られない。

#### 4) 遺物

**(1) 出土状況** (Fig. ⑨, PL. 22~25)

石室内は攪乱をうけており出土遺物はない。しかし、墓道の左側肩部より土師器、墓道の左右両側の墳丘中及び墳丘基盤面の地山直上より出土する。

墓道左側の墳丘中よりは墓道中心部から1.4m離れた墳丘基盤の地山より40cmの盛土中に須恵器の甕と提瓶が、右側の墳丘中よりは墓道中心部から2.2m離れた基盤の地山上より須恵器とその上30cmの盛土中に須恵器、土師器と須恵器内より鉄環が出土する。

右側墳丘基盤上にはFig. ⑨のように須恵器埴の身と蓋が合計4個出土している。墳丘盛土中よりは須恵器の大甕、坏、提瓶、土師器、手づくね土器であり、大甕の口縁部は破られていて器内に大きさ75cm×20.2cm、厚さ18.3cmの石が入っておりさらにその下の甕底部内面上に須恵器が発見される。

(上野精志)

**(2) 出土遺物** (Fig. 11~15, PL. 26~28)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	19個体以上
	坏蓋	2個体
	坏身	1個体
	埴身	1個体
	埴蓋	3個体
	埴身	4個体
	甕	1個体
	提瓶	3個体
	台付壺	1個体
	台付直頸壺	1個体
	甕	2個体
	土師器	2個体以上
	高坏	2個体
	手づくね	1個体
(2) 装身具	鉄環	2個

**須恵器** (Fig. 11~13, PL. 26~28-(1))

坏蓋(2・3) 2は墳丘内より出土し3は右側墳丘内である。2は口径14.8cm、器高4.3cmである。天井部との境に沈線をめぐらし、内湾ぎみに口縁部に続く。口縁部内面には沈線が入る。3は口径14.0cm、器高3.9cmであり、2より体部から口縁部にかけて開く。天井部はへら削りを行い、他は横ナデ調整を行っている。色調は茶灰白色を呈し、焼成は不良である。胎土

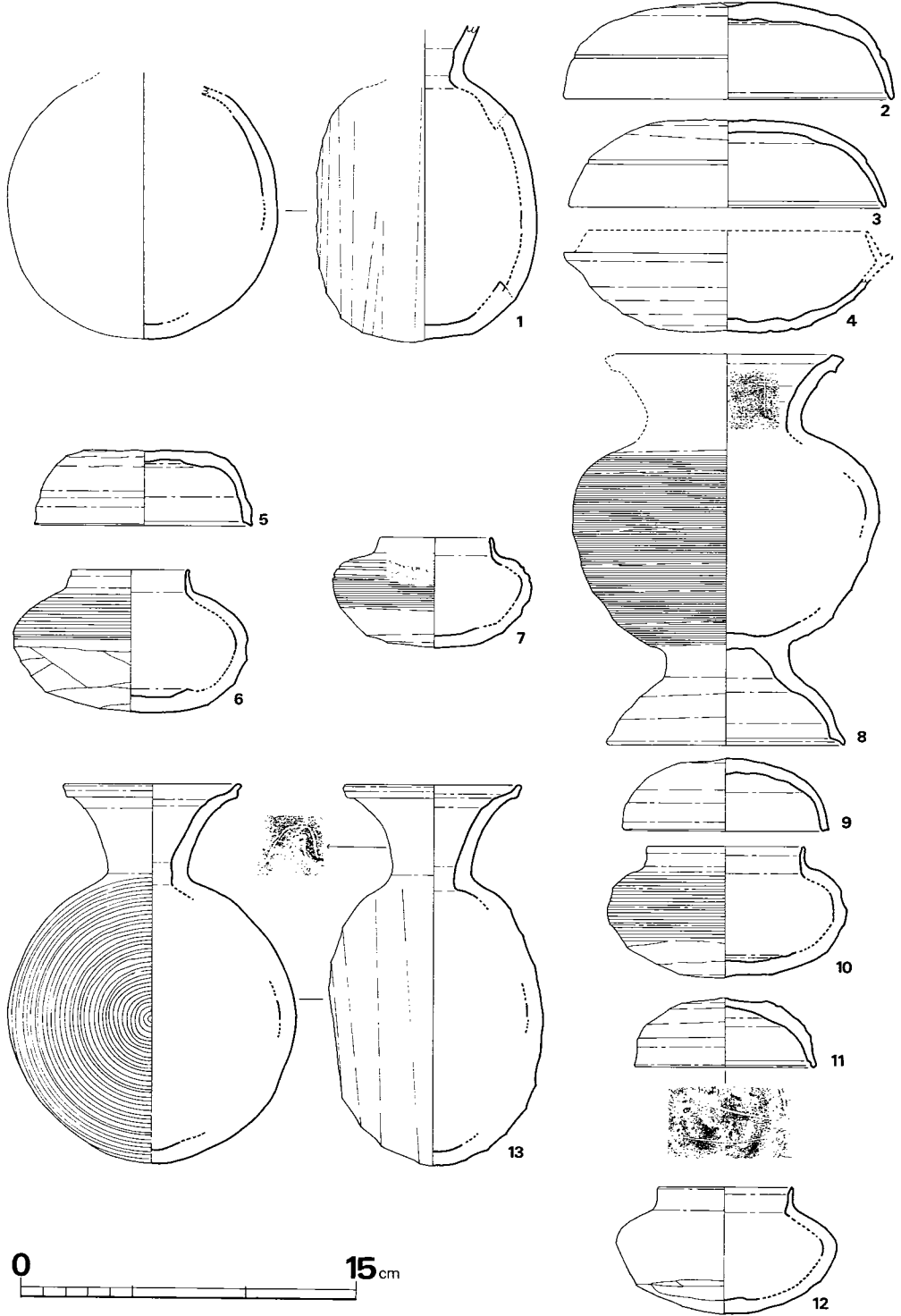


Fig. 11 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

は小砂粒子を含む。

坏身（4）Ⅳ区出土で、立上り、受部を欠損する。底部は平坦であり、へら削りを行っている。色調は茶灰白色を呈し、焼成は不良である。坏蓋3とセットの可能性ある。坏・蓋ともにロクロの回転は右方向である。

碗身（14）旧地表上から出土。口径9.0cm、器高4.1cmである。体部に数本の沈線がめぐり、底部はへら削り、他は横ナデ調整を行っており、底部内面はナデにより仕上げている。色調は黒褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

埴蓋（5, 9, 11）9, 11は墓道右旧地表土から出土し、5は右側墳丘内である。5は口径9.6cm、器高9.2cmである。平坦な天井部は手持ちによるへら削りと横ナデにより仕上げられている。体部と口縁部の境に凹凸があり、口縁部内側はわずかに段を有する。色調は自然釉がかかり黄灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。9は口径9.2cm、器高3.4cmである。丸い天井部は手持ちによるへら削りと、横ナデにより調整され、口唇部内側は凹状をなす。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。11は口径8.0cm、器高3.1cmである。天井部は粗い手持ちのへら削りにより凹凸しており、体部との境に段というよりも稜をなす。口縁内側には深い沈線が入る。色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含み、内面にへら記号を有し、坏身12とセットの可能性ある。

埴身（6, 7, 10, 12）大きさによりⅠ・Ⅱ類に分類できる。

Ⅰ類（6, 10, 12）器高5.6～6.3cmである。6は墳丘内より出土。口径5.2cm、胴部最大幅10.4cmである。10は旧地表上から出土。口径7.0cm、胴部最大幅10.7cmである。12は旧地表上から出土。口径6.0cm、胴部最大幅9.8cmである。調整はともに胴部下半を手持ちによるへら削りを行い、上半はカキ目調整を行っている。色調は6は灰色、10は茶褐色、12は灰青色を呈している。焼成はともに良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

Ⅱ類（7）墳丘内の大甕中より出土。口径4.9cm、高5.0cm、胴部最大幅8.6cmである。調整はⅠ類と同様に手持ちのへら削り、カキ目調整で仕上げているが、肩部に沈線で刺突文が交互に施されている。色調は灰白色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

甕（15）墳丘上より出土。口径11.6cm、器高15.5cm、口頸高9.7cmである。頸部は長くラップ状に開き櫛描波状文を施しており、内面にシボリ痕が見られる。胴部は上方に沈線が入りその上に刺突文を施している。胴部下半は広範囲なへら削りを行っている。色調は灰色を呈しており、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロ回転方向は右方向である。

提瓶（1, 13, 16）大きさによりⅠ・Ⅱ類に分けられる。

Ⅰ類（1, 13）1は墳丘内より出土。13も墳丘内よりである。1は口縁部を欠損する。現高14cm、胴部最大幅12cmである。最大幅はほぼ中央にあり円形を呈する。背面は平坦というよりもいくらか肥厚しており、左方向のへら削りを行っている。前面は丸く、横ナデ調整を行っ



ている。色調は灰色を呈しており、焼成は良である。胎土は小破粒子を含む。

13は口径7.9cm, 器高16.8cm, 胴部最大幅12.9cmである。頸部は外反し, 口頸部は段を有し, 端部は丸い。胴部は, 最大幅の中心に持ち, 円形を呈する。背面は平坦であり, ヘラ削りを行っており, 前面は丸く, カキ目調整がなされている。頸部にヘラ記号を有する。色調は黄灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

II類 (16) 墳丘内より出土, 口頸部を1/2欠損する。口径(推)6.2cm, 器高13.3cm, 胴部最大9.9cmと小形品である。胴部の最大幅は, 中心より下方にある。背面は平坦で右方向のヘラ削りの後カキ目調整を行っており, 前面はいびつに尖っていて, カキ目調整を行っている。背面部にヘラ記号を有する。色調は淡灰青色, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

台付壺 (8) IV区墳丘盛土出土で, 口頸部1/2を欠損する。口径10.4cm, 器高17.4cm, 胴部最大幅13.7cm, 脚裾径10.8cmである。口頸部は外反し, 内面にはヘラ記号を有する。内外面とも横ナデ調整を行う。胴部の最大幅は中央より上にあり肩が張り, カキ目調整を行うが, 胴部下半はその前にヘラ削りを行っている。台部は直立し途中から内湾ぎみに開き, 裾内面に段を有する。調整は横ナデを行っている。色調は黄灰色を呈しており, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

台付直頸壺 (17) 墓道東墳丘内より出土。台部を欠損する。口径9.2cm, 器高17.2cm, 口頸高7.2cm, 胴部最大幅13.8cmである。頸部は2条の沈線をめぐらし, 軽く外反し口縁部は直立す

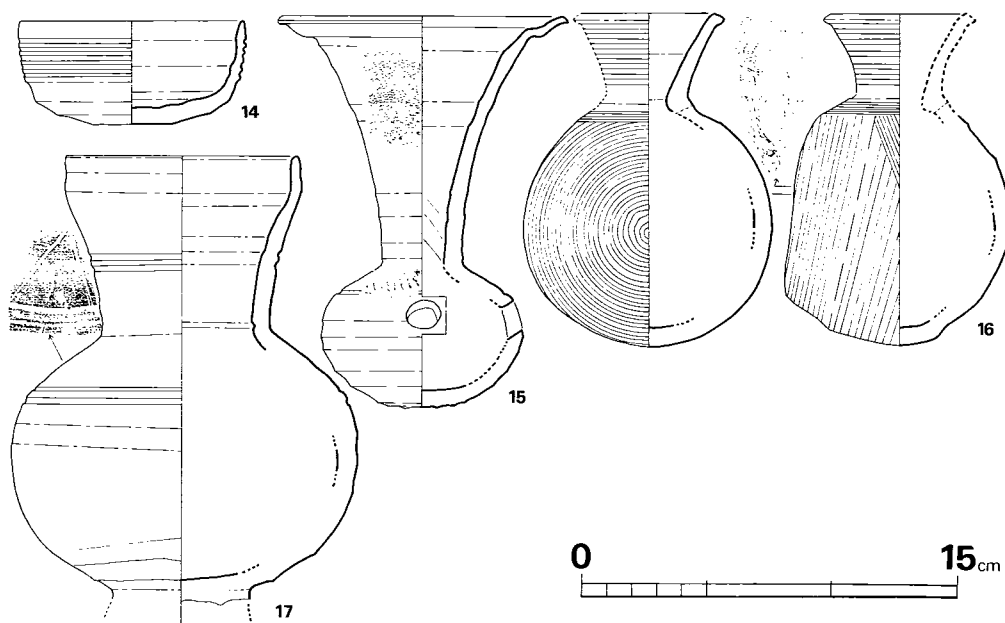


Fig. 12 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(2) (縮尺1/3)

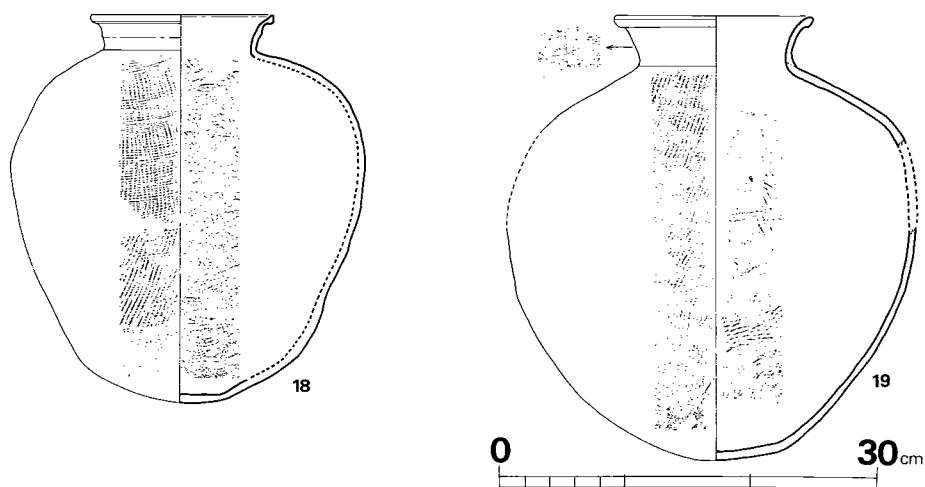


Fig. 13 汐井掛第2号古墳墳丘出土須恵器実測図(3) (縮尺1/6)

る。胴部は肩部に2条の沈線が入り、その上にへら記号を有する。台部は欠損するが、割れ口から3方向に長方形の透かしが入ることがみられる。底部は手持ちによるへら削りとハケ目調整により丁寧仕上げられる。他は横ナデ調整である。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

甕 (18, 19) 18は墓道西側墳丘内より出土。口径21.5cm, 器高46.4cm, 口頸高4.3cm, 胴部最大幅42.1cmである。頸部は短く立ち、口縁端部下端に1条の沈線が入る。胴部最大幅は上方にあり、胴長の形態である。外面には平行叩きが、内面には同心円文状叩きが入る。色調は灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。19は東側墳丘内出土で、口径23.4cm, 器高52.7cm, 口頸高6.0cm, 胴部最大幅48.7cm(推)である。頸部は外反し口頸部は丸く肥厚している。胴部は肩が落ち卵形を呈する。外面は平行叩きが、内面には同心円文状の叩きが入る。色調は灰黄白色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。頸部にへら記号を有する。

#### 土師器 (Fig. 14, PL. 28-(2))

高坏 (1, 2) いずれも坏部を欠損して全容を知り得ない。1は脚裾径17.5cmを測り、器肉の厚い土器である。外面は縦位のへら削り、裾近くはハケ目調整が行われており、内面は横位のへら削りが行われている。色調は黄褐色を呈しているが彩色の痕跡が見られる。焼成は良好であり、胎土は小砂粒子を含む。2は脚高5.5cmを測り、外面は縦位のへら削り、内面は横位

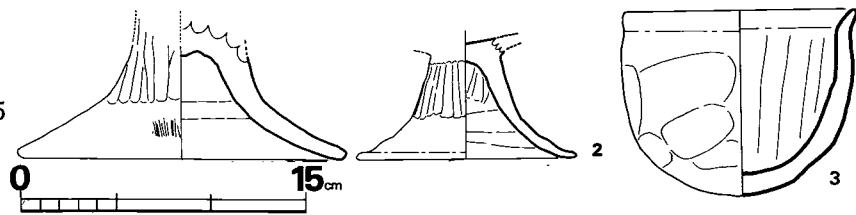


Fig. 14 汐井掛第2号古墳墳丘出土土師器実測図 (縮尺1/4・1/2 (3))

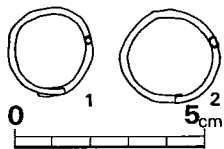
## 2. 第2号古墳

のへら削りを行っている。色調は赤褐色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

## 手づくね (Fig. 14, PL. 28-(2))

壺(3) IV区土器墳丘内より出土。口径6.2cm, 器高4.9cmである。外面は指オサエ, 内面は指ナデ調整を行っている。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)



鉄環 (Fig. 15, PL. 28-(3)) 1は螺線の上になっており、突き合せがなく二重になる部分が多い。径は2.4×2.2cmで、断面は扁円形を呈する。2は二重になる部分が多く短かくて、1より大きく径は2.7×2.5cmで正円形に近く、断面は扁円形である。これらはもとに鉄の地金で

あり渡箔はみられない。通常金環や銀環の装身具のように環に突き合せがなく二重になっているのであるいは装身具でないかもしれないが、一応鉄環とする。

これらは共にIV区の地山上土器群の中で、須恵器埴身の内に納めてあったものである。

## 5) まとめ

調査の結果、本古墳は直径15.5mであり、墳丘の高さは約2mである。墳丘は地山整形し墳丘裾部を造り出すと同時に半円形の溝状の掘り込みを行なう。溝状の掘り込みは排水の用途も兼ねていたものであろう。

墳丘を完成するまでにこの第2号古墳では他の古墳と若干違う行程をへている。それはFig. ⑨に見られるように墓道の左右2m近くのところに土器類を埋置することである。

右側(IV)では基盤面に須恵器埴を蓋、身2セットがあり、直上に須恵・土師器をみる。左側(I区)にもやはり須恵器がみられる。先の土器群より羨道寄りの墳丘盛土内にも須恵器台付長頸壺と土師器高坏がみられる。以上のことより古墳の前面、墓道の左右墳丘基盤面上と盛土内に3回にわたり土器類の埋置が認められる。なお、墳丘表面や墳丘裾部には何もみられないようである。これらの遺物は古墳造営にあたり、地山整形後、盛土前の儀礼や古墳墳丘盛土を行なう行程時の祭祀が行なわれたものと思われる。

石室は長方形プランの単室横穴式石室であり、両袖石は大きく安定している。羨道部が「ハ」の字状に開き短い典型的なものである。墓道は墳丘裾外までみられる。

本古墳の時期は石室内より遺物の出土はなく墳丘内より出土した須恵器坏蓋・身などを見ると蓋は天井部と体部との境に凹線を巡らし、口縁部の端部内面に段が付く。これらよりしてIII-B期に属し、他の須恵器類も同型式とされる。このことより当古墳は6世紀後半に築造されたことが知られる。

(上野精志)

## 3. 第 3 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5)

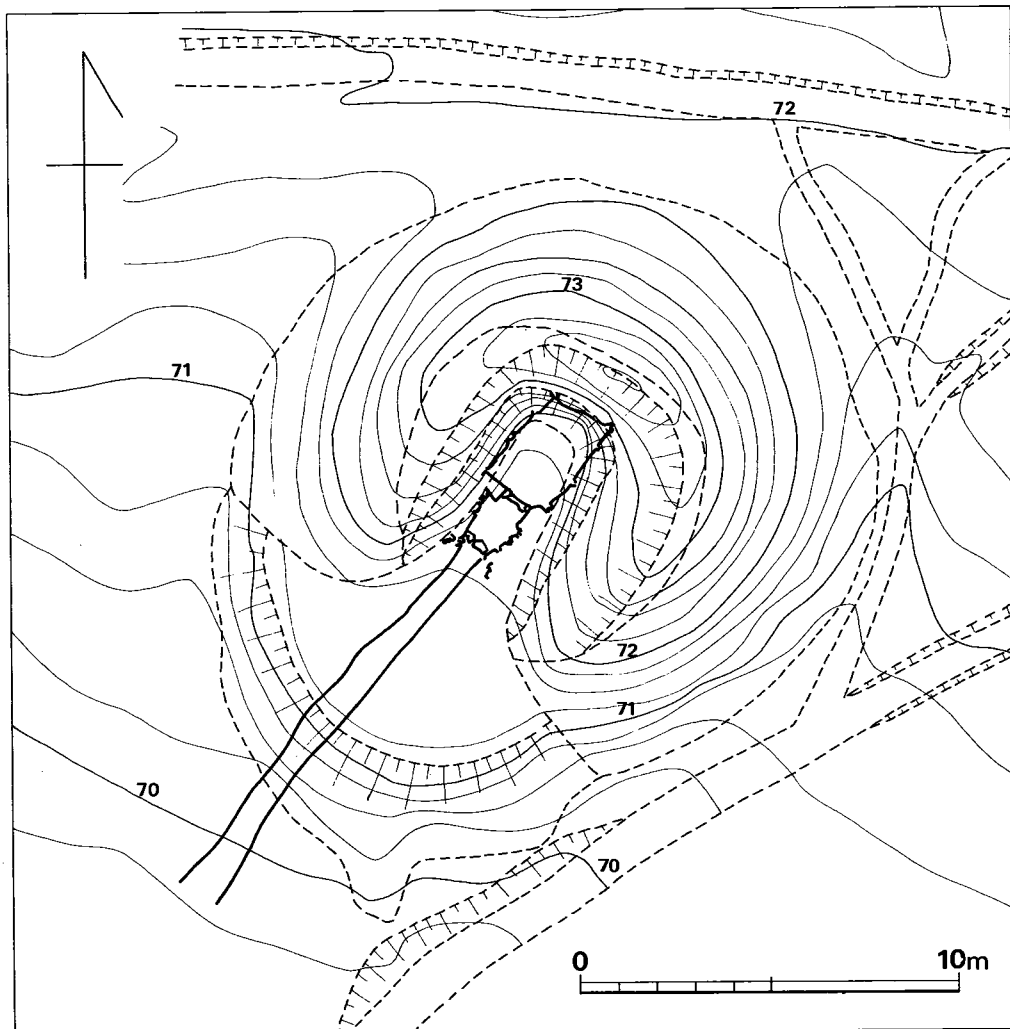


Fig. 16 汐井掛第3号古墳地形図 (縮尺1/200)

第3号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在り、第2号古墳から南東側約15m離れて位置し、第1、第2号古墳と同様に尾根の稜線からはずれた南西の斜面上に立地しており、大きな墳丘をもつ円墳である。伐採後の表面観察では、斜面に直角に直行する方向が長い楕円形を呈している。墳頂部は石室上部が破壊されているため大きく陥没している。また東・南側裾部は、林道のため一部削平されている。

## 2) 墳丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 16~18, PL. 29・30)

古墳は丘陵の標高70~72m間の緩斜面上に稜線に直行する方向で石室を構築している。古墳構築のための造成は丘陵斜面をほぼ一周する溝の掘削と、溝の内側の墳丘基底面の整地が行なわれている。溝は幅約2.5m、深さ約0.4mほどで北東から南西に向ってゆるやかな傾斜をもって削り出されている。基底面は地山までは達しておらず、旧地表をわずかにテラス状に削り出す程度である。

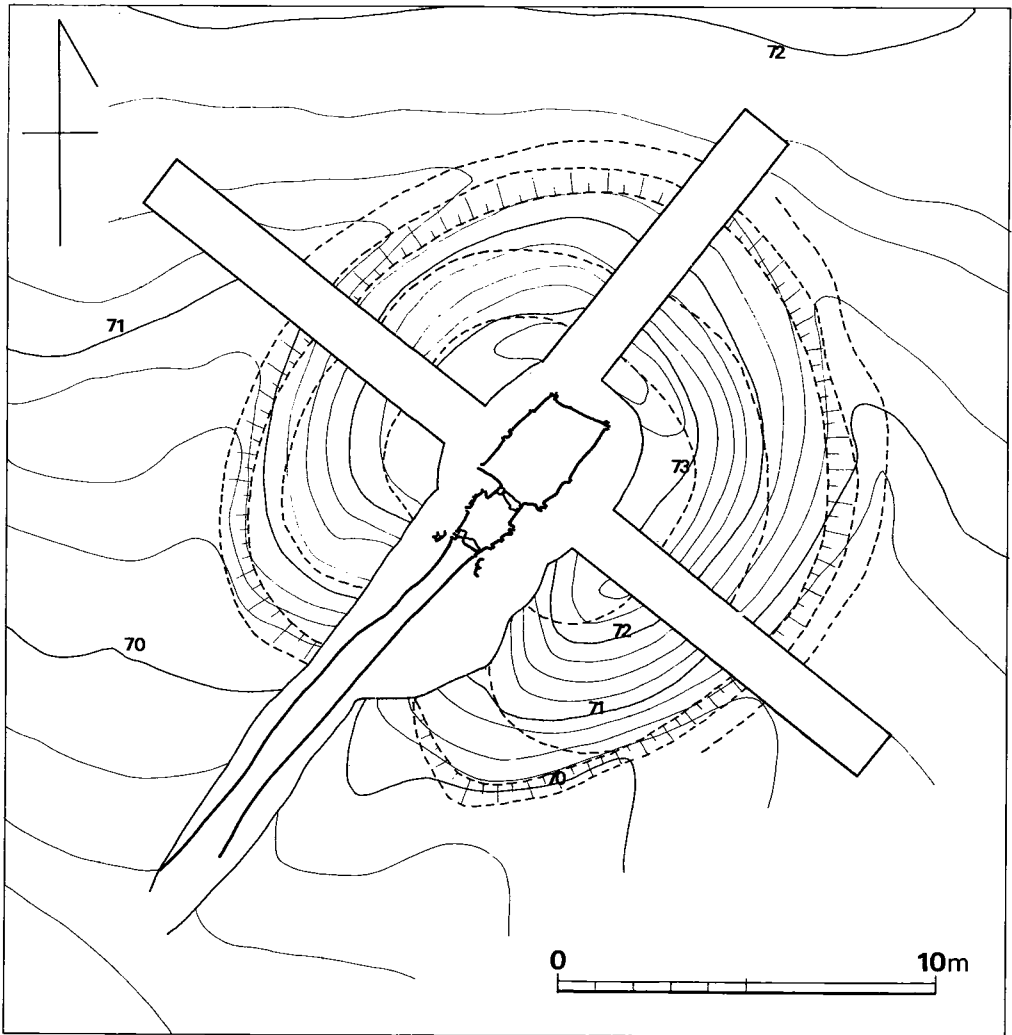


Fig. 17 汐井掛第3号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

## (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑩, PL. 30-(2)・31)

墳丘の形成過程は大きく3段階に分けることができる。第1段階は掘り方の裏込めで、掘り方を掘った土(花崗岩バイラン土)をそのまま使用し非常にかたく叩かれ締りがよい。第2段階は石室掘り方の上から側壁の上部まで達する盛土で、壁石に傾斜させるようにして複雑な層をなしている。第3段階は石室の固定後墳丘を整える盛土で層序は第2段階の盛土よりもゆるやかに盛られ墳丘を厚くおおう、この段階の墳頂部の盛土は石室上部の石材を抜かれる際石室内に多量に流れ込んでいる。

墳丘の現存高は基底面より約2m、石室床面から約3.8mを測る。墳丘の裾線はIトレンチで中軸線から6.6m、IIIトレンチで6.4mを測り径約13mのほぼ円形を呈している。

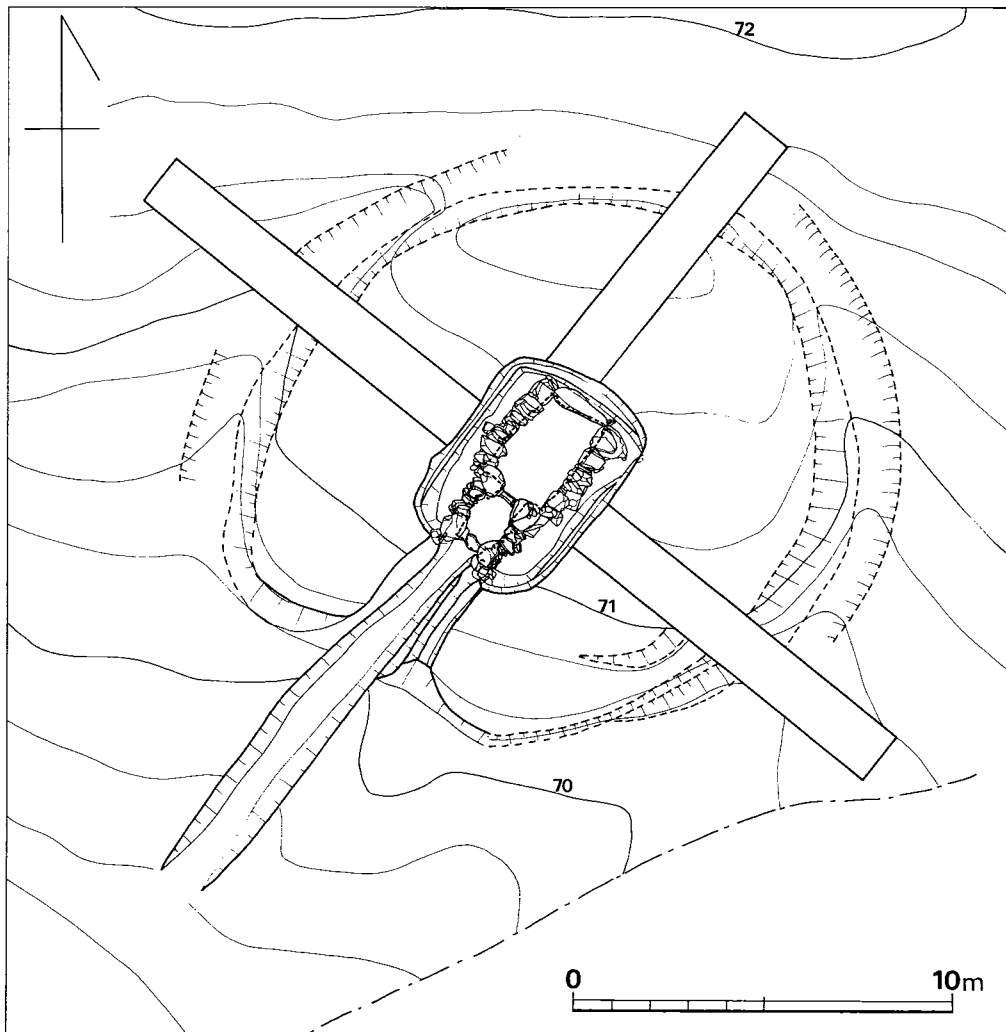


Fig. 18 汐井掛第3号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ⑩, PL. 32・33)

本墳の埋葬施設は、長さ約5.9m、幅約4.3m、深さ1.75mの隅丸長方形の墓壇内に構築されている。主軸をS40度Wにとり南側に向って開口する複室の横穴式石室である。石室はすでに4段目から上の積み石を完全に破壊されており上部の構築法等は不明である。素掘りの墓道は断面U字形を呈し長さ11mを測る長いものである。石室の平面形は、玄室、前室ともに雑な造りでやや胴張りの長方形を呈し短い羨道をつけたものである。石室の全長は、左壁で4.8m、右壁で5.2mを測る。

玄室の長さは左側壁で2.65m、右側壁で2.75m、中軸線で2.8mを測る。幅は奥壁側で1.65m、玄門側で1.85m、中心で1.95mを測り、やや胴張りの不整長方形を呈している。基盤は、坵底を10~20cm程度掘り下げて腰石を据えている。奥壁には大きな石1枚、両側壁には3枚の石材をわずかに内傾させて据えている。左側腰石基礎部では、腰石と腰石の間に20~30cm大の石で根じめを行なっている。二段目以上は、角ばったほぼ同形の石材を用い横積して次第にせり出す構築法をとっているが、腰石が不定形で大きさも不揃なためにすき間には礫を多く用いて面と高さの調整を行なっている。両側壁は3段の積み石が残存するのみである。床面からの高さは約90cmを測る。現状では天井石まで高さの復元は不可能であるが墳丘から考えて2.5m程ではなかろうか。

玄門部は両袖で、柱状の石材を立てて使用している。袖幅は左袖が75cm、右袖が40cm、玄門幅は70cmを測る。

床面は2~5cm程のはり床をした後、敷石が施され、左玄門側隅で原位置をとどめる。

前室の長さは左側壁で1.15m、右側壁で1.3m、中軸線1.28mを測る。幅は玄門側で0.77m、前門側で0.9m、中心で1.15mを測り、胴張りの不整長方形を呈する。腰石、積み石とも玄室の構築法と同様であるが、石材はひとまわり小さく積み方も雑である。両側壁ともに4枚の積み石が残存し、床面からの高さは約70cmを測る。床面は全面に10cm内外の礫を用いて敷石を施こしている。玄室、前室、羨道はそれぞれ柵石によって区切られている。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑪, PL. 33)

墳丘基盤の中央部に墓壇があり、隅丸長方形を呈している。傾斜面の低所部方向の壁中央部に墓道が付く、石室掘り方は長さ約5.4m、幅約4.3m、深さ奥壁方で1.75m、墓道方で1.50mである部分的に二段掘りのような状態であり、特に玄室の奥壁は鏡石と掘り方の壁が接している。

墓道は墳丘裾部よりはるかに長く続いていて11mまで確認できる。幅は上幅1.5m、下幅0.7m、深さ0.40mである。

(池辺元明)

## 4) 遺物

## (1) 出土状況 (PL. 33)

玄室の攪乱土中より耳環1個と鉄鏃の茎1本が出土する。墓道の床面上より須恵器甕、墳丘上よりPL. 33-2の様に墓道近くの左側墳丘直上に須恵器、土師器が出土する。その他、墳丘裾部でも若干の須恵器が出土している。

(上野精志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 19~21, PL. 34・35)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |         |      |       |
|---------|------|-------|
| (1) 土器  | 須恵器  | 7個体以上 |
|         | 坏蓋   | 1個体   |
|         | 坏身   | 2個体   |
|         | 埴身   | 1個体   |
|         | 甕    | 1個体   |
|         | 提瓶   | 1個体   |
|         | 甕口頸部 | 1個体   |
|         | 土師器  | 9個体以上 |
|         | 高坏   | 9個体   |
| (2) 装身具 | 耳環   | 2個    |
| (3) 武具  | 鉄鏃   | 1個    |

## 須恵器 (Fig. 19, PL. 34)

坏蓋(1) 墳丘内より出土。2/3を欠損する。口径13.0cm(推),器高2.5cmである。天井部は平坦であり、体部から口縁部にかけて外方に開き、口唇部は凹状をなす。埴蓋の可能性もある。天井部はへら削り、他は横ナデを行っている。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

坏身(2, 3) 立上りの形態により細分できる。

I a類(3) 口径11.4cm,器高4.4cm,立上り高1.4cmである。立上りは内傾する。底部はへら削りを行って、他は横ナデ及びビナデ調整を行っている。内面にへら記号を有している。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

I b類(2) 東側墳丘裾から出土。2/3を欠損する。口径11.4cm(推),器高4.4(推),立上り高は1.4cmである。立上りは直立する。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含んでいる。



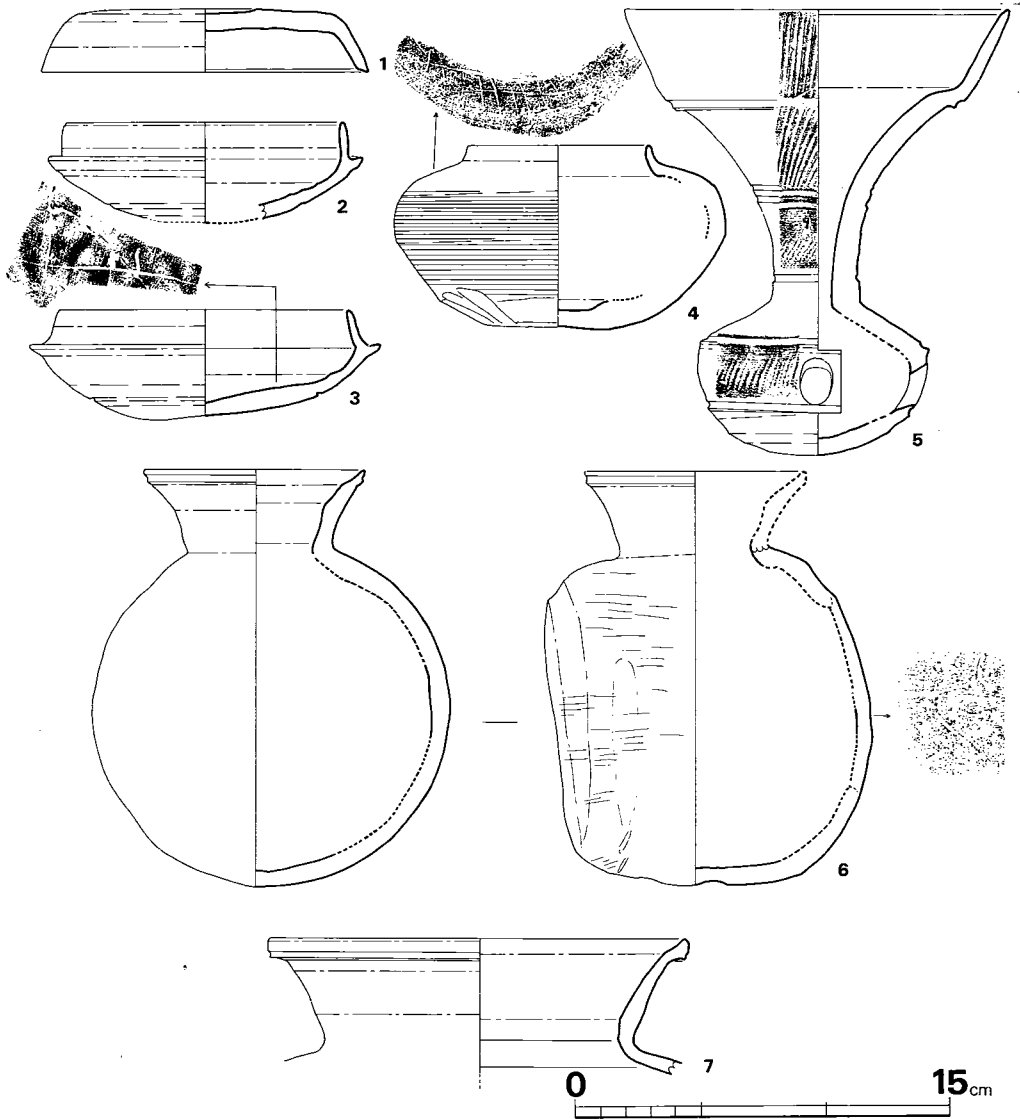


Fig. 19 汐井掛第3号古墳出土須恵器実測図（縮尺1/3）

罎身（4） 墳丘内出土である。口径7.3cm，器高7.3cm，胴部最大径は12.8cmである。口縁部は内湾し，端部近くで立つ，胴部の最大幅はほぼ中央にあり，カキ目調整がなされており，底部は平坦で厚く，どっしりしており，手持ちのへら削りが施されている。色調は，黒灰色を呈し，焼成は良好で堅緻である。胎土は，砂粒子を含んでいる。肩にへら記号を有する。

甗（5） 墓道床面より出土。口径17.7cm，器高14.4cm，口頸高11.5cmである。頸部中央に2条の沈線が入り，上にへら描平行文，下に刺突文を施している。口縁部との境には段を有し

## III 汐井掛古墳の調査

沈線が入り、口縁部にはへら描平行文が施されている。胴部は円孔を囲むように刺突文を施し上下に沈線が入り、胴部下半は入念なへら削りが行なわれている。調整は極めて丁寧である。色調は黒灰色を呈し、焼成も極めて良好で堅緻である。胎土も精選され、小砂粒子を含んでいる。ロクロの回転は右方向である。

提瓶(6) 口径8.8cm, 器高16.5cm, 胴部最大幅14.2cmである。口頸部を2/3欠損する。胴部の最大幅はほぼ中央に有り円形を呈する。背面は板状工具によるタタキにより平坦であり、側面は指圧痕が残っており、指で調整した後に横ナデ調整で仕上げている。他は横ナデ調整により仕上げている。色調は灰色を呈しており、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。胴部にへら記号を有する。

甕(7) 口頸部のみ残存する。口径16.4cm, 口頸高4.4cmである。頸部は直線的に開いている。内外面とも横ナデ調整である。色調は黄灰白色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

## 土師器 (Fig. 20, PL. 35-(1))

高坏(1~9) 大形と小形によりI・II類に分けられ、形態等によりさらに細分される。

I a類(1, 2) とともに脚部のみを残存し全容を知り得ない。器面剝落が著しく調整は不明であるが2は内面にシボリ痕がみられる。色調は1が赤褐色, 2が黄褐色を呈して、焼成は

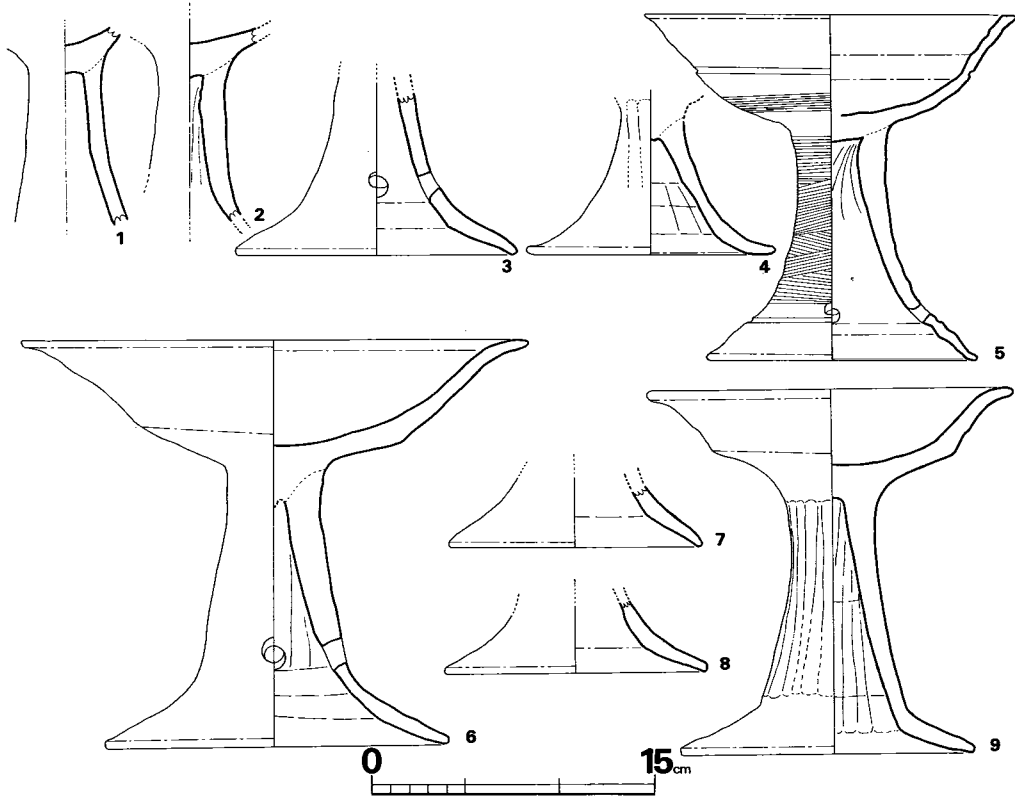


Fig. 20 汐井掛第3号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)

## 3. 第3号古墳

ともに良である。胎土は砂粒子を多めに含む。

I b類(4, 7, 8) ともに脚部のみを残し, 脚裾径13.1~13.8cmである。器面剥落のため調整は不鮮明であるが4の外面に縦位のへら削りが行われ, 内面はともに横位のへら削りが行われている。色調は4が黄褐色を呈し他は赤褐色を呈している。焼成は良であり, 胎土は小砂粒子を含む。

I c類(3) IV区裾より出土。脚裾径15.0cmを測り, 下方向に円形の透しが三方向に入り, 内面に横位のへら削りが行われている。色調は赤褐色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

II a類(6) I区墳丘内より出土。2/3を欠損し, 口径26.9cm(推), 器高21.6cm, 脚部径18.4cmである。坏底・体部の境は鈍く屈曲し, 口縁部は外反して, 脚部は下方に円形の透しを三方向に入れる。調整は器面剥落のため調整は不鮮明であるが, 脚部外面は縦位のへら削り, 内面は横位のへら削りが見られる。色調は茶褐色を呈し, 焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

II b類(9) IV区墳丘内より出土。口径19.4cm, 器高19.3cm, 脚裾径14.3cmである。坏部は底, 体部の境で強く屈曲し, 口縁部は外反し, 調整は器面剥落が著しく不明である。脚部は内外面とも縦位のへら削りが行われている。色調は茶褐色を呈し, 焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

II c類(5) 旧地表面から出土。口径9.7cm, 器高18.4cm, 脚裾径14.6cmである。底部は丸く体部に沈線をめぐらしており, 口縁端部は平坦である。底部はへら削りの後カキ目調整を行い, 他は横ナデ調整を行っている。脚部は下方に円形の透かしが三方向に入り, その下に沈線がめぐる。脚部外面はカキ目及び横ナデ調整を行い内面はシボリ痕が見られる。成形, 調整等を見ると明らかに須恵器の技法を使っていることが注目される。色調は赤褐色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

(渡辺健二)

**耳環** (Fig. 21, PL. 35-(2)) 1は金環で金箔の残りは悪く, 径は2.0cmの正円形であり, 断面径は0.3cmを測る。2も金環で部分的にしか金箔が残っていない。径は2.0cmの正円形で1と対になる。

**鉄鎌** (Fig. 21, PL. 35-(2)) 基部のみで鋒の部分は検出されない。現存長は6.6cmで, 断面は6×4mmの長方形である。

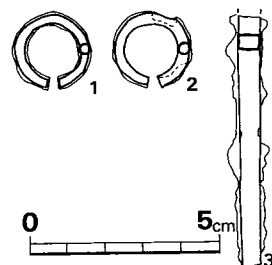


Fig. 21 汐井掛第3号古墳出土耳環・鉄鎌実測図(縮尺1/2)

## 5) まとめ

現在の行政区分では第1号・第2号古墳は鞍手郡宮田町, この第3号古墳は同郡若宮町であるが, 三基は一つのグループを成してい

思われる。

墳丘の大きさは径約13mの円墳であり、墳高は墳頂部が盗掘のため陥没していて詳細は不明であるが、三本のトレンチ調査より復元すると約2.5mとなる。

墳丘及び石室の構築過程は、旧地表と削平し、丘陵斜面をほぼ一周する溝の掘削と墳丘基盤面の整地から行なわれ墳丘裾部を造り出す。

墳丘盛土は三段階に分けられ締りがよく複雑に版築している。第三段階の最後に墳丘全体を覆い、その後墓道左側の墳丘表面に須恵器甕と土師器高坏が簡単な穴を掘って安定するよう置かれている。

石室は側壁の下半しか現存しないが複室の横穴式石室であり玄室は長方形、前室は胴張りの不整長方形を呈する。奥壁は1板石で側壁は乱石積みである。両袖石は二石であり現存する石材の上に楣石が架構される。

墓道が墳丘裾よりはるか長く検出されていて「ハカ道」の存在がうかがわれる。

出土遺物をみると石室床面よりの出土遺物はなく金環が二個検出されるも攪乱土中である。前述の墳丘直上以外に墓道床面や墳丘裾部より須恵器の出土をみるが原位置を保っているかどうかは判明しない。

須恵器の坏などをみるとⅢ-B期でも新しい方と考えられる。よって6世紀後半でも新しい時期に築造、使用されたものと思われる。

第1号から当古墳の第3号までの三基は丘陵斜面に一直線に並んでおり墓道をほぼ同一方向の斜面下方に向けていて、さらに築造時期も6世紀後半であり若干の時代差はあるとしてもこれらの三基は汐井掛古墳群中の小群として把握できよう。これらをC群とする。

内部主体の石室は第1号・第2号古墳が単室の横穴式石室であり、第3号古墳は複室の横穴式石室である点は注目され、この第3号古墳の複室構造は汐井掛古墳群中においては最初の出現であり最も古いようである。

(上野精志)

## 4. 第 4 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 22, PL. 36~39-(1))

第 4 号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在り、汐井掛の丘陵が南東に延びた北西方の丘陵斜面に第 4 号から第10号古墳まで 7 基の古墳が並んである内の最南端に位置している円墳である。

第 1 号古墳とは丘陵頂部を中心とした北と南の対称地にあり、丘陵頂部よりやや下位の傾斜面上にあって北東方の直ぐ横には第 5 号古墳が接するようにある。

古墳の現状は墳丘の中心部が楕円形に陥没しており盗掘を受けていることが知れ、ボーリングを行うと大きな石に当ることにより石室の存在が伺われ、さらに東方の下方底所部斜面が若干くぼんでおり墓道と思われることより東方の斜面下方の底部に開口する横穴式石室と思われる。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 23~25, PL. 40・41)

円墳である墳丘の中心部が大きく陥落しており墳丘盛土も周りの表土面よりあまり高くないことより遺存の悪い方である。発掘前の状況では斜面上方の高所部に 3 分の 2 ほど円径の周溝状の溝がみられ古墳の規模を表わし、墳丘裾を示していることが見られる。墳丘径は 13m、高さは 1 m 弱である。

表土を剥ぎ、埋土を除去して墳丘現存の状態をみると、斜面の等高線とほぼ直角に石室掘り方をつくり出している関係で、斜面上方の高所部には墳丘裾部を示す溝状のものを掘って地山を削っている。これは排水をも考え合せたような状態でありほぼ石室の奥壁側の延長線上を中心に右左両側の斜面下方に向けて延びているような状態になっていて半円形状にまでみられ端部は末広がりになり消滅する。地山整形により造り出された馬蹄形の溝は上幅 5 m、下幅 0.5 m 弱、深さ 0.40 m 程度であり断面は U 形を呈している。墳丘の基盤は上径で 10.5 m、墳丘裾部径は 12 m である。

#### (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑫, PL. 42・43)

旧表土を剥ぎ古墳築造範囲を定め地山整形し、中央部に石室掘り方を造り石室を構築、盛土を行う。盛土は傾斜面上方の高所部は 40cm 弱しか遺存していないが当時よりあまり高くなく、下方の低所を高く盛って出来るだけ高低差を修正しようとしたらしく低所部は高く盛り上げていたようである。

石室の掘り方内は腰石外端までは比較的残りが良く Fig. ⑫の通りであり、掘り方が深いためかこまかく裏込めをしている。

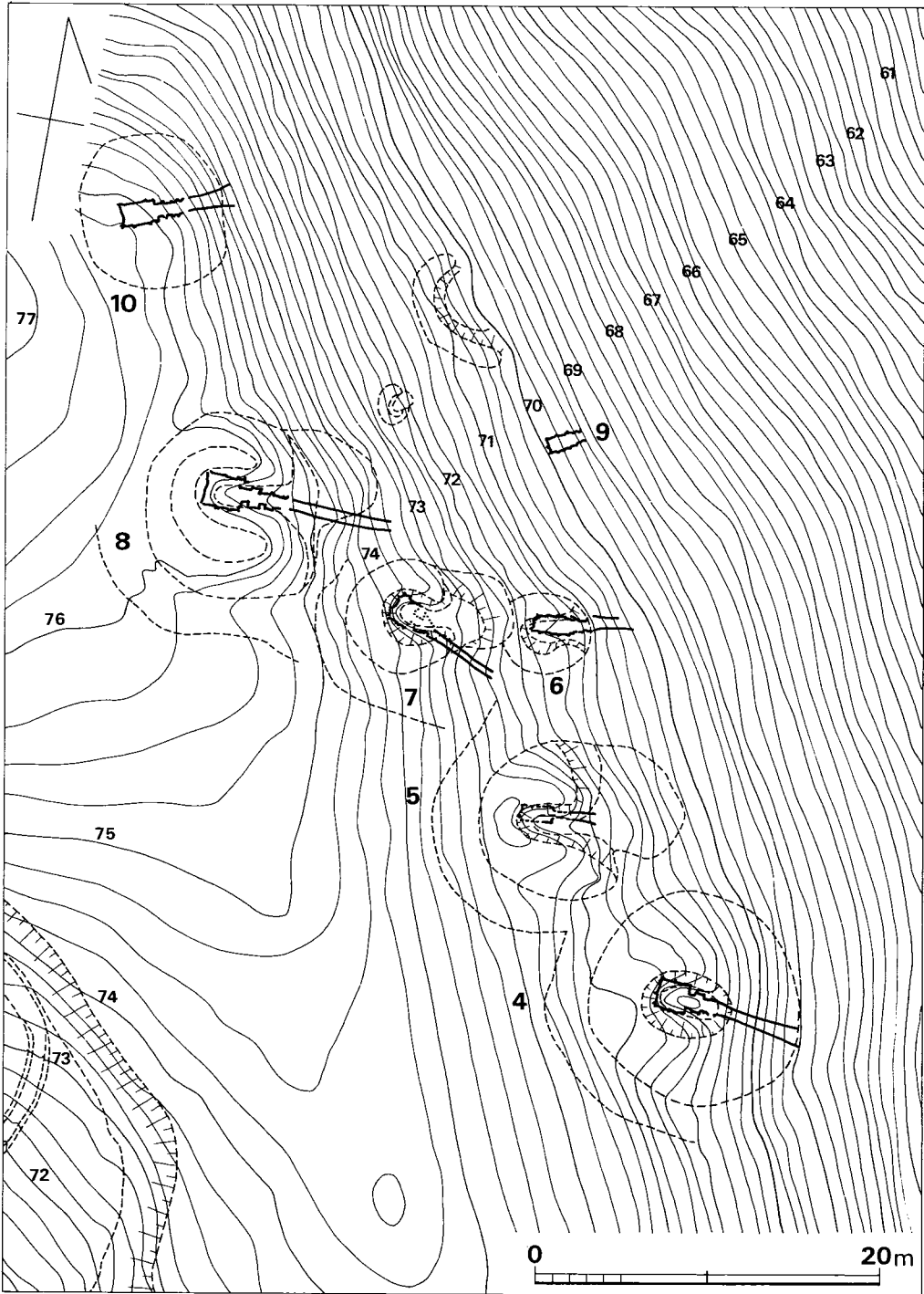


Fig. 22 汐井掛第4号・第5号・第6号・第7号・第8号・第9号・第10号古墳周辺地形図（縮尺1/400）

3) 主体部  
(1) 石室 (Fig. 13, PL. 43-(2)・44)

主体部は両袖式の複式構造の横穴式石室である。東傾する傾斜面に対して、ほぼ直角に構築されて、石室主軸はS88度Eであり入口はほぼ東方向を向いている。石室の遺存は悪く腰石のみのところが多いが、前室はその内でも比較的良く、閉塞石はそのまま残っているようである。

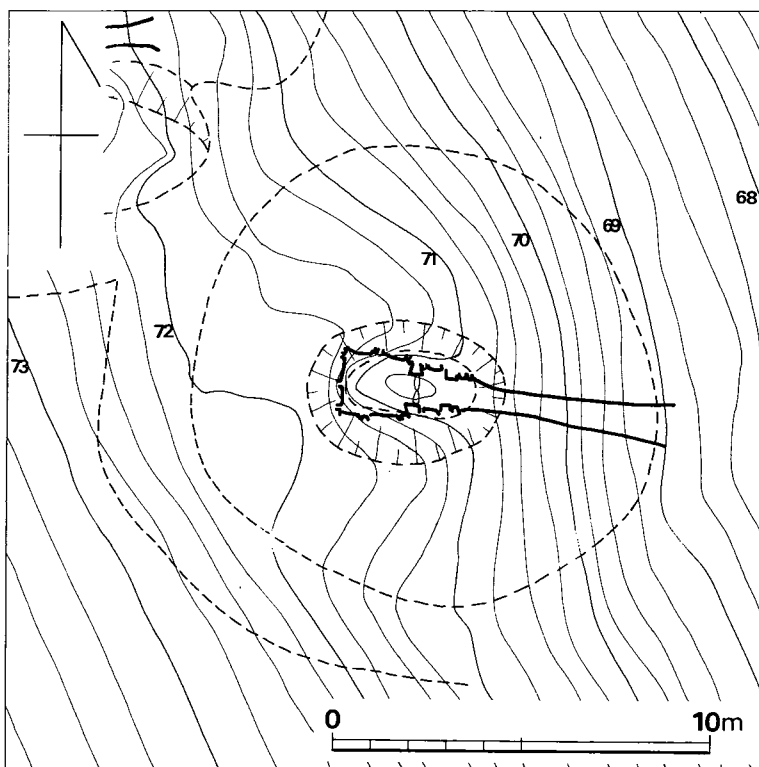


Fig. 23 汐井掛第4号古墳地形図 (縮尺1/200)

玄室の平面形は石室

主軸方向に若干長い、ほぼ正方形で主軸中央で長さ1.76m、左側壁側1.74m、右側壁側1.70mであり、幅は奥壁1.60m、石室中央部1.68m、袖石側1.60mを測る。

奥壁は腰石しか残っていないが2個の石材を立てており右側が大きくて高く上方が尖り、左側は小さくて低く、下方が尖る、高い方で床面より70cmであり低い方は60cmである。

玄室の床面は掘り方床面の数cm程土を敷きその上に5cm×10cm大の長方形の石を敷きつめる奥壁下と左側壁の奥壁寄り下には15cm×30cm大の石がいくつかみられるがこの石は腰石の玄室内掘り方の根石であり、敷石はこの石の上に敷いてあったものと思われる。掘り方床面が水平であり床面の敷石上面も水平になるよう配慮されている。

左側壁は奥壁方より大きな石を2つ横積みして、袖石との間が空いているので小さな石2段を小口積みして前記腰石と高低差を整えている。これらの石材で袖石との隅角を構成しているのであるが側壁と袖石との隅角が直角になるようには構築されておらず側壁と袖石の最短距離を閉ぐように45度に置かれている。

右側壁も左側壁と同じように構築され、奥壁より2つ目の石までは大きな石を横積みして、袖石との間には小さな石を四段まで小口積みして高低を整えている。平面形も同じで直角

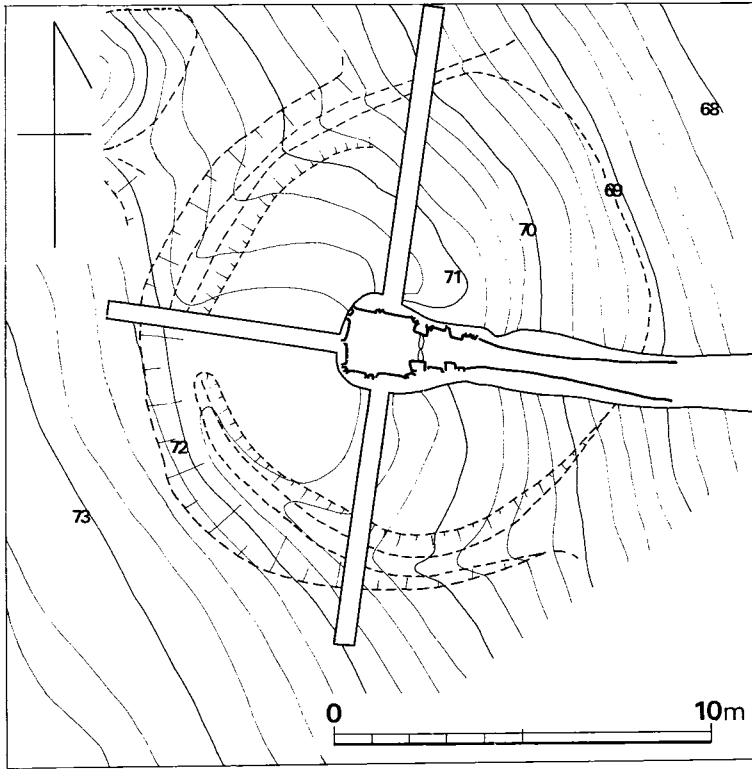


Fig. 24 汐井掛第4号古墳墳丘測量図（縮尺1/200）

壁で直角より鋭角に曲がり20cmで側壁に達する。床面よりの高さは45cmである。腰石の上石は二段目との間石が残るだけである。袖石間の床面長さは玄室より20cmで柵石になり、柵石は12cmでありさらに前室まで10cmあり全長は42cmを測る。

柵石は両袖石の間で前室よりにあり、二つの石を直線的に細長く並べている。長さは12cm、両袖石間の幅石は二つの石両方で68cmであり、玄室の方幅は74cm、前室方の幅66cmである。

前室の平面形は主軸方向が短い長方形で、長さは主軸中央で50cm、左側壁方50cm、右側壁方50cmで、幅はどこもほぼ1mである。左右の側壁の腰石は一つの石でよこに立てて、その上には長さ40cm×幅20cm、厚さ15cm弱の長方形の石を小口積みしている。玄室の側壁と同じ高さしか遺存してなく、三段目までしか残っていない。床面には玄室と同様の敷石がある。

前室の袖石は玄室の袖石とほぼ同じ形状、大ききであり主軸方向の長さは40cmである。この袖石の間に閉塞石があり、遺存がよい。

羨道は短かく30cm程で幅は前室方で80cm、墓道方で70cmであり小口積みの乱石積みで、右側壁方は掘り方の地山上に一部のっついて、貼石状となる。

墓道は下降してより一度狭まって、その先は墳丘裾を越えてさらに数mまで認められ、幅は広がっていて1mを測り、確認できる全長は10.5mである。

にはなっていない。これら両側壁の腰石の床面よりの高さは40cmから60cmであり厚さは40cm弱である。

玄門の袖石は両方とも玄室腰石とほぼ同じ大ききで、左側袖石は側壁より35cmほど出て前室方へ44cm、そして直角に前室側壁へ15cmと続いて四角い石であり床面よりの高さは50cmである。腰石より上は二段目の石が一つだけ残る。右側袖石は側壁より22cm出て前室方へ42cm、そして前室側



閉塞石は前室の袖石間にあり敷石はなく、羨道両側壁石よりやや小さな長方形の石を主軸に平行に小口積みして、下位の方は二～三列に積み上の方は一例にすき間なく塞いでいる。

墓道の調査を閉塞石が良く遺存していたため土層断面帯を残して発掘調査を実施した。

#### (2) 石室掘り方

(Fig. ⑬, PL. 46)

墳丘の基盤中心部に石室掘り方があり傾斜面上方の高所部に石室

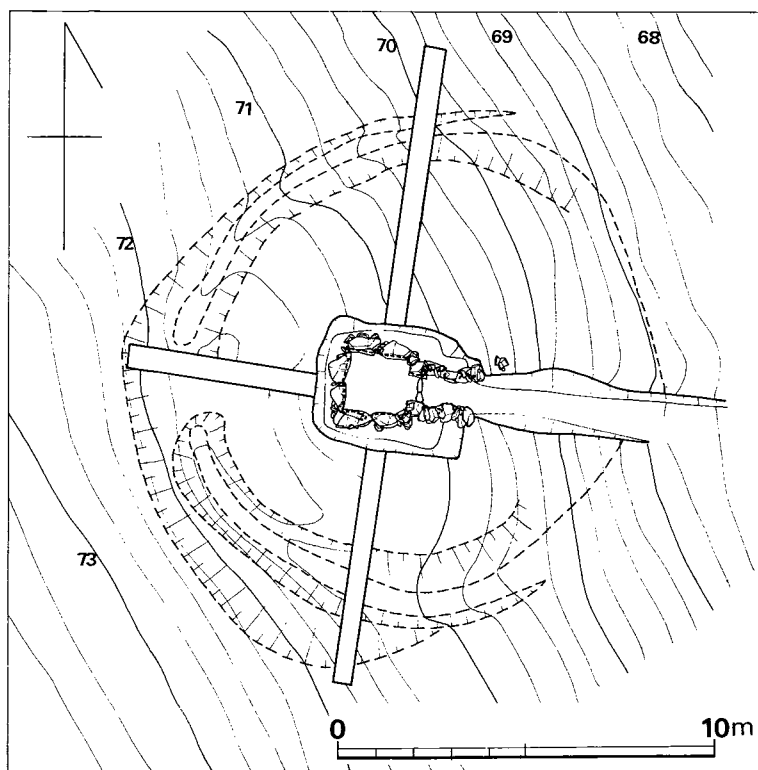


Fig. 25 汐井掛第4号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

の奥壁側、下方の低所部に墓道があるため掘り方上面はかなりの高低差があるが、床面は平坦に掘られている。長方形で長さ4m、幅3.30mであり、深さは奥壁方で1.80m、墓道方で80cmである。

腰石を据えるため一つ一つの腰石下に安定を期するための掘り込みがあり、玄室の腰石は約15cm程埋められていて、その周りの玄室内側や掘り方壁側などたくさんの根石を置いている。裏込め石はほとんどみられない。根石の多いのは石材の形状のためであり、腰石に平の面のある方が玄室を向っていて他は尖っている面で、不安定になっているからと思われる。

墓道は地表より平均的に掘り下げられているために水平でなく、羨門方より墓道の方に向けて表土の傾斜面と同じような傾斜で下降しており、深さは約60cmである。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況 (Fig. ⑬, PL. 45)

玄室内では耳環と刀子が埋土中より出土する。前室の両側壁下に土器があり左側壁下には土師器が、右側壁下には玄室寄りに須恵器の提瓶、羨道寄りに高坏の完形品が出土する。この二つの須恵器は現地で盗難にあい行方不明である。

墓道埋土より須恵器，土師器，さらに墓道の左側と右側の墳丘内より須恵器，土師器が出土する。右墳丘内では石室掘り方の接点近くの地山直上面にPL. 44-(1)のように須恵器甕が据え置かれている。

なお，玄室の左側壁方の裏込め土中に（Fig.12の15層）須恵器の提瓶が発見される。これは底部を下にして埋置してある状態で出土している。

（上野精志）

**(2) 出土遺物** (Fig. 26~29, PL. 47~49)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	12個体以上
	坏蓋	4個体
	坏身	2個体
	無蓋高坏	2個体
	高坏脚部	1個体
	甕	1個体
	提瓶	1個体
	平瓶	1個体
	壺	1個体
	甕	1個体
	土師器	10個体以上
	高坏	9個体
	台付埴	1個体
(2) 装身具	耳環	1個
(3) 工具	刀子	1個

**須恵器** (Fig. 26・27, PL. 47・48)

坏蓋（1，3，5，6） 形態的にⅡ類に分けられる。

I a類（1） 墓道埋土中より出土。口径12.0cm，器高4.0cmである。体部から口縁部にかけて内湾し，端部は丸くおさめている。天井部はへら削りを行っている。色調は茶灰色を呈しており，焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

I b類（3） 表土中より出土。口径11.4cm器高4.1cmと小形になる。天井部はへら削りで軽く面取りする程度であり粗雑である。色調は黒灰色を呈し，焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。天井部から口縁部にかけてへら記号を有する。

Ⅱ類（5，6） かえりをもつ蓋になるものである。

Ⅱ a類（5） 表土中より出土。口径10.0cm(推)，器高2.1cmである。天井部はI b同様にへ

ラ削りは粗く、口縁部との境に幅広く凹部がめぐる。色調は黒灰色を呈し、焼成は良である。

II b類(6) 表土中より出土。口径9.6cm, 器高2.0cmである。天井部は平坦であり、ヘラ削りで弱く調整している。色調は黄灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。5, 6の天井部にI bにみられるヘラ記号を有する。

坏身(2, 4)

I a類(2) 墓道埋土中より出土。口径10.4cm, 器高3.8(推), 立上り高0.8cmである。立上りは内傾し、底部はヘラ削りを行っている。色調は茶灰色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。蓋とともにロクロの回転は右方向である。

I b類(4) 前方表土中より出土。口径10.4cm(推), 器高3.9cm, 立上り高は1.2cmである。立上りは直立ぎみになる。底部の調整は蓋3と共通し粗雑である, 又, 同一のヘラ記号を有する。色調は黒灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

無蓋高坏(7, 8) 7は表土中より出土。坏部2/3を欠損する。口径10.6cm, 器高9.7cm, 脚裾径8.2cmである。坏部上半はカキ目調整, 下半はヘラ削りの後カキ目調整を行っている。脚部にはラセン状に沈線が入り, 裾部は単純に仕上げている。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。8は脚部のみを残存し, 裾径7.4cmである。カキ目, 横ナデ調

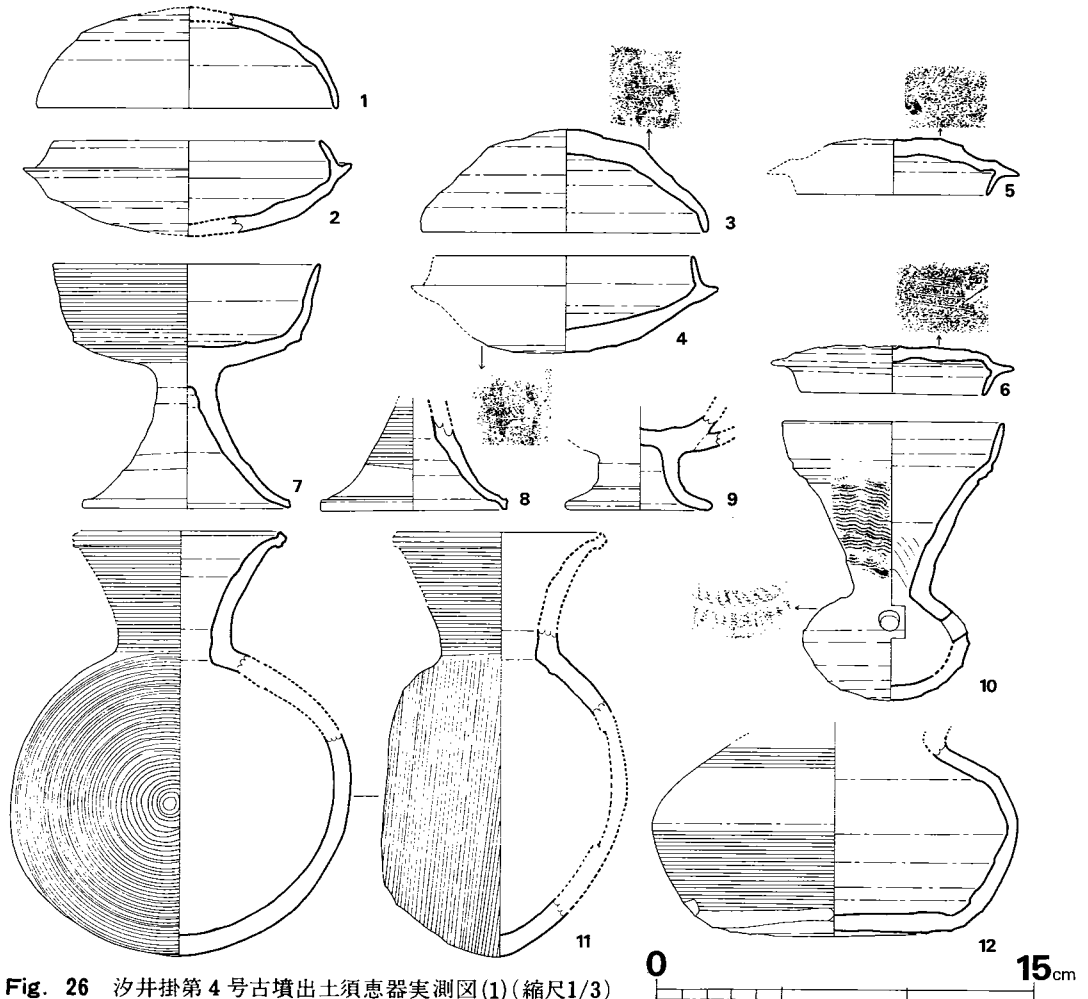


Fig. 26 汐井掛第4号古墳出土土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)

整で仕上げられている。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

脚部(9) 表土中より出土。脚部のみを残存する。脚高2.2cm,脚裾径7.4cmである。割れ口から見ると壺形を呈するものが乗り横にツバが付く形態と思われる。横ナデ調整で仕上げている。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

甕(10) 墓道左前墳丘より出土。口径8.8cm,器高10.1cm,口頸高6.7cmである。頸部シボりのため凹凸をなし、櫛描波状文を施している。口縁部との境は段をなし二条の沈線が入る。胴肩部に二段にわたる刺突文が施されており、下半は広範囲にわたるへう削りを行っている。色調は黄灰色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

提瓶(11) 表土中より出土。1/3を欠損する。口径8.4cm(推),器高16.8cm,胴部最大幅13.5cmである。頸部は外反し、カキ目調整がなされている。胴部は歪な形を呈し、カキ目調整及びへう削りにより仕上げられている。色調は黒灰色を呈しており、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

平瓶(12) 墳丘内より出土。口頸部を欠損して、現高7.4cmである。底部は平坦で有り、胴部上半はカキ目、横ナデ調整で仕上げ、下半は手持ちによるへう削りで仕上げている。色調は茶褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

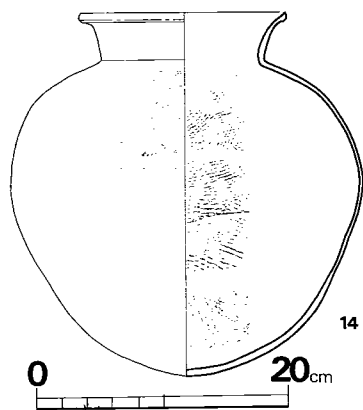


Fig. 27 汐井掛第4号古墳出土  
須恵器実測図(2)  
(縮尺1/6)

壺(13) 墓道より出土。1/2を欠損して、口径10.0cm(推),器高19.5cm(推),胴部最大幅18.4cmである。短い頸部は外反し、口縁部は肥厚する。底部を欠損するが、平底に近いものと思われる。色調は黒灰色を呈するが、上半は自然釉がかかっている。焼成は良で、胎土は砂粒子を多量に含む。

甕(14) 口径24.6cm,器高43.5cm,口頸高5.7cm,胴部最大幅42.0cmである。頸部は直線的に開き、口縁部下端は沈線が入り、端部は尖りぎみであり、胴部は若干肩が張る。焼成不良のため外面の器面剥落が著しく調整は不鮮明であるが、平行叩きの上をカキ目調整を行っており、表面はきめの細かい工具による平行叩きを行っている。

色調は灰黄白色を呈し、胎土は砂粒子を含む。

#### 土師器 (Fig. 28, PL. 49-(1))

高坏(2~10)~形態によりI・II類に分けられる。

I類(2~8) 2~4以外は完形品である。口径13.4cm~14.0cm,器高8.3cm~9.5cmである。すべて墓道盛土中より出土。坏底・体部の境界は屈曲し、体部は大きく外反する。脚部は低く裾

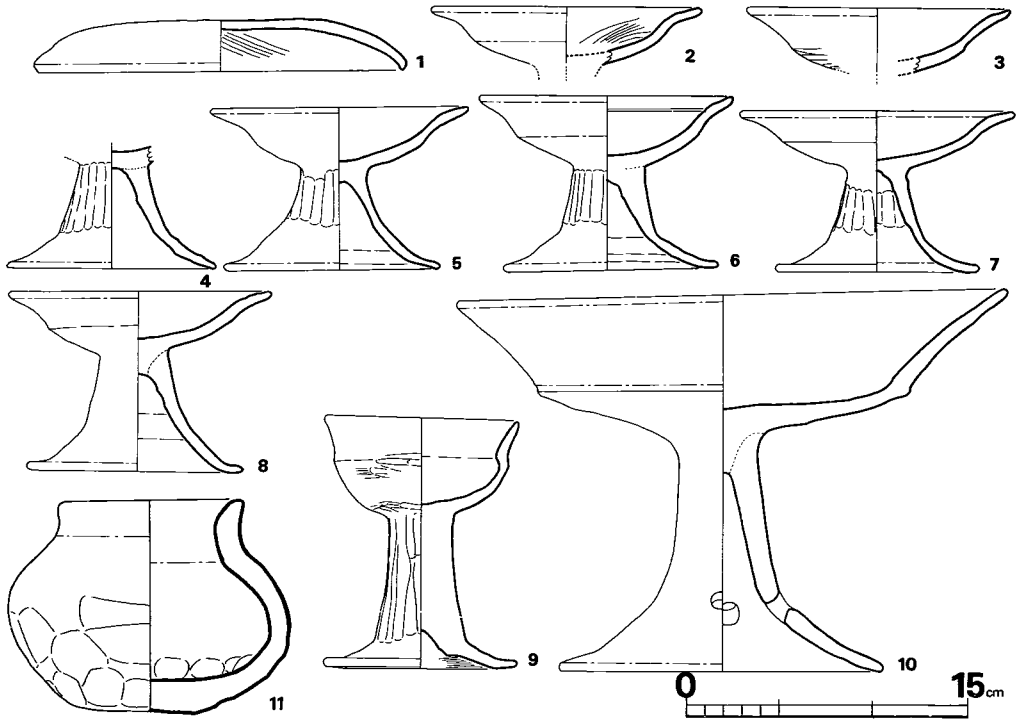


Fig. 28 汐井掛第4号古墳出土土師器実測図（縮尺1/2(11)・1/4）

は大きく開き、端部は丸くおさめる。器面の剝落は著しく不鮮明であるが、坏部内面に放射状の暗文が見られるものがある。脚外面は縦位のへら削り、内面は横位のへら削りを行っているが7の内面は縦位のへら削りを行っている。色調は赤褐色系を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

Ⅱ類(10) 墳丘内より出土。1/2を欠損する。口径29.1cm(推)、器高20.1cmと大形品である。坏底、体部の境界は強く屈曲して段をなし、体部は大きく外反する。脚部は3方向に円形の透かしを有し、裾は大きく開く。坏部の割にはデリケートな脚部である。内外面とも器面剝落が著しく調整は不明であるが脚部に縦位のへら削りの痕跡がみられる。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。

台付埴(9) 墳丘内より出土。口径10.2cm、器高13.3cmである。器面剝落により調整は不鮮明であるが、埴部外面及び口縁内面はへら研磨、脚部は縦位のへら削りを行っており、脚裾部内面にはハケ目が施されている。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

坏蓋(1) 前室左床面。口径19.2cm、器高2.7cmである。器面剝落が著しいため調整は不鮮明であるが、外面にへら研磨、内面に放射状暗文の痕跡が見られる。色調は赤褐色、焼成は不

良である。胎土は砂粒子を含む。

**手づくね** (Fig. 28, PL. 49-(1))

壺(11) I区墳丘内より出土。口径4.8cm, 器高5.7cmである。器面剥落が著しく調整は不鮮明であるけど、胴部下半は指オサエ調整を行っている。色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

(渡辺健二)

**耳環** (Fig. 29, PL. 49-(2)) 地金だけであり残りは悪い。径2.2×2.0cmで正円形に近く、断面形は0.25cmを測る。

**刀子** (Fig. 29, PL. 49-(2)) 刃部と茎端のほとんどを欠損するが、縁金具の部分が残っている。両関であり断面は鋒部が丸味を帯びる。残存長3.7cmである。

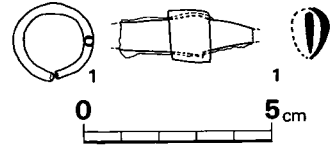


Fig. 29 汐井掛第4号古墳出土耳環・刀子実測図  
(縮尺1/2)

(5) まとめ

第4号から第10号古墳の7基はC群とは丘陵頂部を境にして反対側の斜面にある。

当古墳は7基中の最も南端にあり、傾斜面でも低い下方に位置している。調査の結果、径12.0mの円墳で墳丘中央部は盗掘を受けていて石室の腰石上半は失なわれている。

地山整形や石室掘り方、墳丘盛土の状況は前述のC群の古墳と同じである。ただ、特筆すべきは石室掘り方内埋土中より須恵器平瓶が検出できた。それは左側壁の中央部の二段目外端と掘り方周壁間であり、底部を水平にして正立している。

石室は複室の横穴式石室であり玄室の平面は正方形に近く、前室は主軸に対してよこ長の長方形である。閉塞状況が判明し、羨道部は短かく墓道は墳丘裾部を越えて長く続いている。

出土遺物は玄室内より耳環と刀子が発見されるが床面ではなく攪乱埋土中である。しかし、前室の両側壁下には原位置を保って右側に須恵器高坏と提瓶、左側より土師器の出土状況よりして坏蓋としたもの計3個体が出土する。これは最終埋葬時の状況をそのまま伝えるものであろう。墓道より須恵器を土層断面の発掘調査の折検出したが、土器では時期差がない。しかし土層断面の観察よりして2回以上の追葬が認められるようでありFig. ⑫の32層と28層は墓道の床面になった可能性が強い。

その他、墳丘内より須恵器、土師器が出土していて特にFig. 27-14の須恵器はPL. 44-(1)のように墓道の右側羨道端の石材より僅か離れた墳丘基盤面に据えられた状態で出土している。また墓道の左側盛土中より土師器高坏のみが6個出土している。

墳丘内出土と墓道内出土の須恵器坏を比べると若干の時期差があるようであるがVI期の範疇にとりまとめられよう。当古墳の築造年代は6世紀末から7世紀前半であり、その後数回の埋葬が行なわれたと思われる。

(上野精志)

## 5. 第 5 号 古 墳

### 1 立 地 (Fig. 22, PL. 36~38)

第 5 号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在り、第 4 号古墳の北西方で第 7 号古墳の南東方にあり両古墳に挟まれた円墳である。第 4 号古墳と同じ丘陵斜面で古墳の現状は墳丘の中心部より傾斜面下方がえぐり取られていてその排土が傾斜面下方の低所部に投げられており盗掘を受けたことが知られる。第 4 号古墳と同じく傾斜面上方の高所部に半月形状の溝があり東方に開口する横穴式石室と思われた。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 16~18, PL. 50・51-(1))

円墳の中心部より低斜面の下方にかけて盗掘を受けており遺存は悪い。調査前の径 9.0m、高さ 1.50m 弱である。

表土を剥ぐと墳丘の現存状況は非常に悪いが地山整形は整然となされている。石室の奥壁方

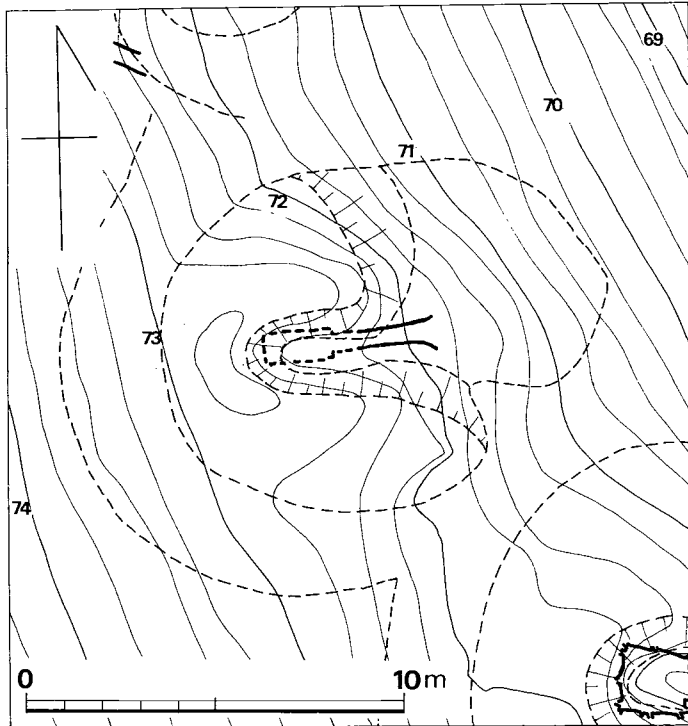


Fig. 30 汐井掛第 5 号古墳地形図 (縮尺 1/200)

より 2.5m 傾斜面上方の高所部を基点として左右に半月形状の溝を掘り墳丘裾を造り出し、溝は全体の 3 分の 2 程度周り末広がりとなり消滅する。

墳丘基盤は表土の傾斜度にそつて表土がはがれ地山整形の溝がないところの墳丘裾は基盤外を深く削り取つて墳丘裾を造り出している。石室掘り方の床面は水平であり墓道は表土の傾斜度にそつて下降する。

#### (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑭, 51-(2)・52)

地山整形の際に傾斜面上方は馬蹄形状の溝及び下方は墳丘裾の造り出しと、盛土を

する前にすでに地山整形による基盤は墳丘状をなしている。その基盤上に盛土をするが、第4号古墳とやや違って馬蹄形上の溝の下端部まで、地山整形による基盤の墳丘裾を覆って盛土をしている。石室掘り方内の版築状況は石室の石材がほとんど抜き取られているため、詳細は不明である。基盤上は10cmから15cmの互層となっている。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 15, P. L. 53)

墳丘中心部に石室掘り方が

あり、その中に横穴式石室の右側壁の腰石と思われるものが一石だけ残っている。掘り方の調査により腰石の掘り方、根石、床面と思われる中央付近に床面の敷石が検出されたので、単室の横穴式石室であることが判明する。

丘陵傾斜面上方の高所部に奥壁、下方の低所部に入口を向け、主軸はN85度Eに開口している。玄室の奥壁腰石は掘り込みよりすると、二つの石であろう。

左側壁は奥壁方の腰石が一つ遺存しており大きさは長さ70cm、床面からの高さ26cm、厚さは36cm弱で横積している。この腰石の墓道方の手前に掘り込みと根石と思われる石群が二つあり、遺存している腰石と同じくらいの大きさの腰石の存在をうかがわせる。さらに羨道方に掘り込みが二つあるが奥壁より三番目の掘り込み内には根石らしきものはなく、四番目の最も墓道寄りには三つの根石があり結局左側壁は四個の石材が在った事がうかがわれる。

右側壁には五つの掘り込みがありその内三つに根石があり、奥壁より一つ目と二つ目の掘り込みの根石は残りが良いようである。

以上腰石の掘り込みより推定して単室であるが、袖石及び羨道については分り難いが、しいて想定するならば腰石の掘り方のみからすれば後述の第6号古墳、第8号古墳の石室と同じような石室形態でなく隅丸長方形の掘り方の東側壁中央部に墓道が付属することにより、4号古墳や第7号古墳のような玄室と羨道・墓道が明確に分別される両袖式の横穴式石室と思われる。

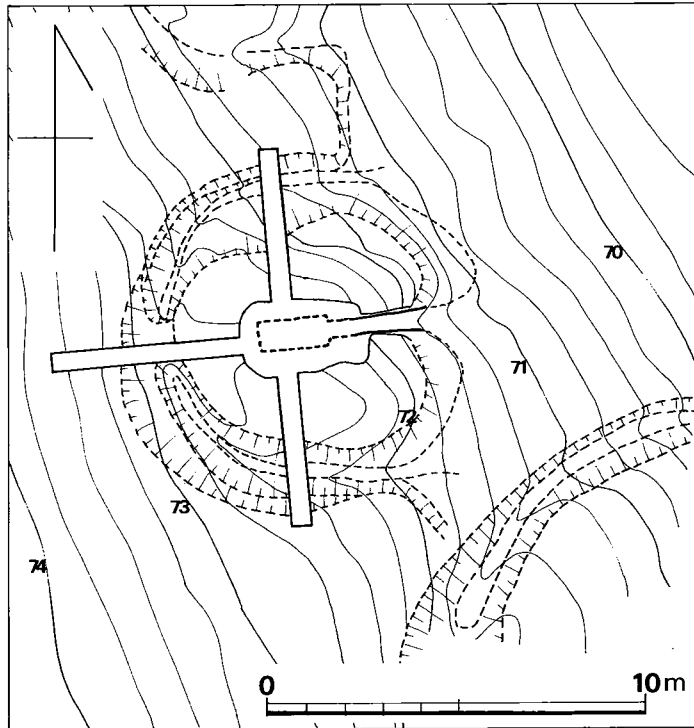


Fig. 31 汐井掛第5号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)



## 5. 第5号古墳

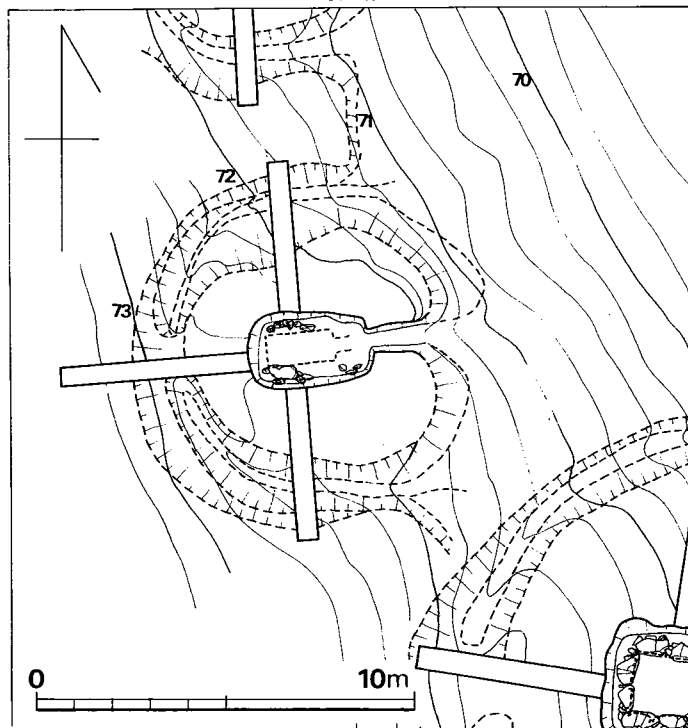


Fig. 32 汐井掛第5号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

石室の長さ約2.60m, 玄室の幅0.90mである。

石室床面は石室掘り方の床面に直接敷石を敷いていて6cm×12cm, 厚さ4cm程度のものであり, 石室全面にみられたものと思われる。

墓道は両墳丘裾まで続いていて長さ3m, 上幅70cm, 下幅50cm, 深さ35cmであり, 第4号古墳の墓道のように墳丘裾を越えてまで墓道の掘り込みは検出されない。

(2) 石室掘り方 (Fig. ⑮, PL. 54-(2))

墳丘中央部にあり隅丸長方形で長さ3.24m, 幅2.0mを測

る。東側に墓道が付く。傾斜面に掘られているため奥壁方が1m深く, 石室床面は水平で墓道は下降し, 墳丘裾部で深さはなくなる。

石室内腰石の掘り方は比較的浅く若干の置土とその上に根石を置いて腰石をのせている。掘り方壁と腰石との外端との間隔が狭いが裏込め石を使用している。

## 4) 遺物

## (1) 出土状況 (Fig. ⑮, PL. 54-(1))

石室の掘り方床面上より耳環が2個出土していて, 1個は玄室内の左側壁近くに, 他の1個は羨道の右側と思われるところより出土する。

他に墳丘内, 周溝及び墓道の下方傾斜面に須恵器, 土師器が出土する。墓道下方の遺物出土状況は所謂「前庭部」の在り方ではなく石室の攪乱により前方に投げ出されたとする方が妥当と思われる。鉄斧は墳丘の表土下であり, 墓道の直ぐ左方である。

(上野精志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 33~37, PL. 55~57)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- (1) 土器 須恵器 12個体以上

坏蓋	2 個体
坏身	3 個体
無蓋高坏	2 個体
甌	1 個体
平瓶	1 個体
短頸壺	1 個体
壺	1 個体
甕	1 個体
土師器	3 個体以上
高坏	3 個体
手づくね	1 個体
(2) 装身具	耳環 2 個
(3) 工具	刀子 1 個
	鉄斧 1 個

#### 須恵器 (Fig. 33・34, PL. 55・56)

##### 坏蓋 (1, 2)

I a 類 (1) 墳丘内より出土。口径11.4cm, 器高3.6cmである。天井部は平坦で体部から口縁部の方に開く。天井部から体部にかけてへら削りを行っている。色調は黄灰色を呈し、焼成は不良である。胎土はやや多めに砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。内面に不明瞭であるがへら記号を有する。

II b 類 (2) 墓道より出土。口径11.0cm, 器高3.3cmである。天井部と体部の境は無く、口縁部で屈曲し、天井部はへら削りを行っている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

##### 坏身 (3, 4, 5)

1 a 類 (3, 4) 底部は丸底でへら削りによる調整を行っている。3は墳丘内より出土。口径9.0cm, 器高4.0cm, 立上り高0.8cmである。立上りは直線的に内傾し受部は凹状をなし、底部は粗いへら削りを行い調整は粗雑である。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。4は口径9.6cm, 器高は3.6cm, 立上り高0.8cmである。立上りは直立ぎみで受部は水平に近い。色調は黄灰色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を多量に含む。3の内面にへら記号がみられる。ロクロの回転は右方向である。

I b 類 (5) 底部は平坦で未調整である。墓道下より出土。口径9.9cm (推), 器高3.5cm, 立上り高1.0cmである。受部は凹状をなし薄い。色調は灰黄色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

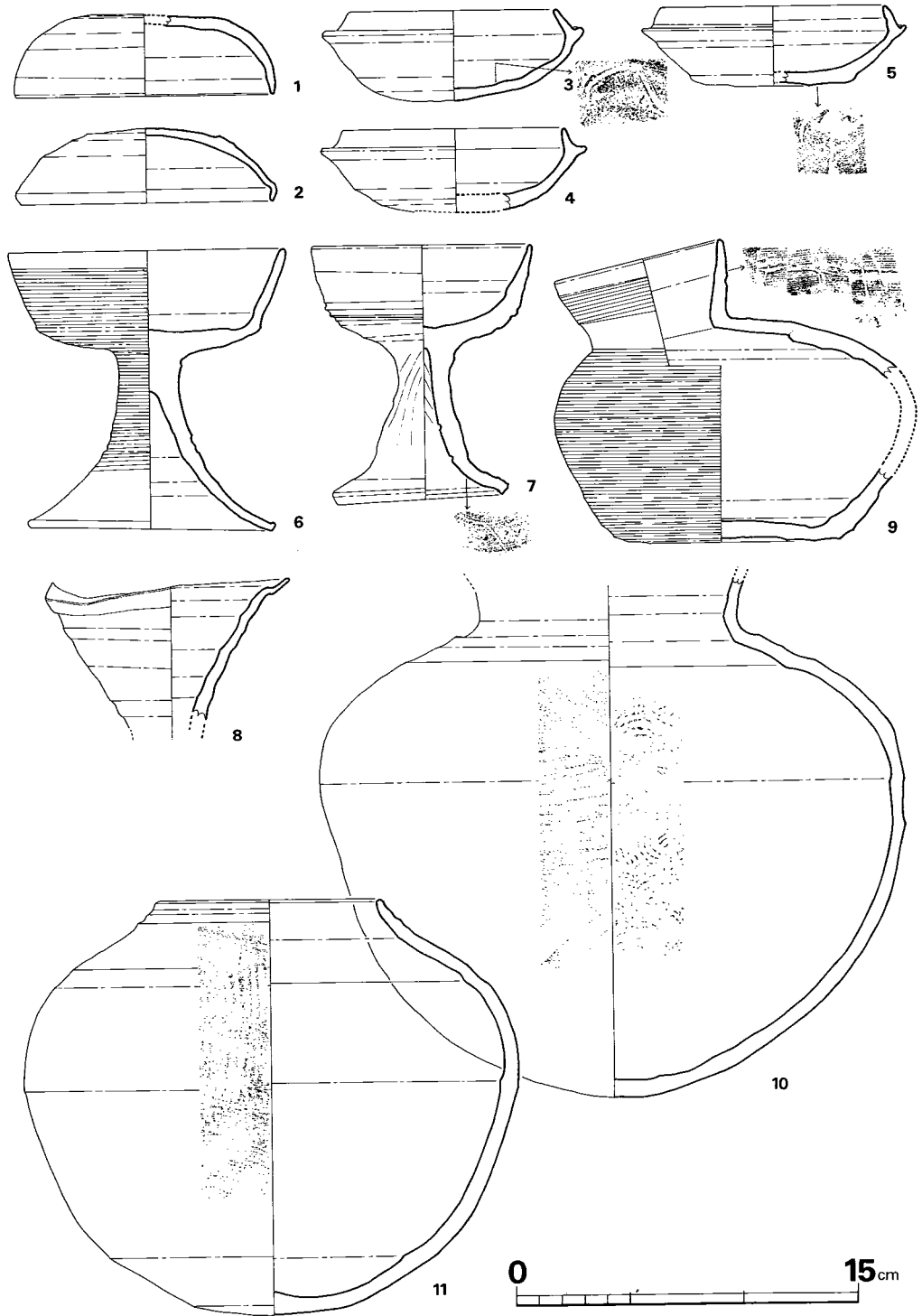


Fig. 33 汐井掛第 5 号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺 1/3)

無蓋高坏（6，7） 大きさによりⅠ・Ⅱ類に分類出来る。

Ⅰ類（6） 墳丘内より出土。口径12.2cm，器高12.4cm，脚裾径10.6cmである。体部と底部の境は鋭い段が入る。底部はへら削りの後カキ目調整がなされている。脚部はカキ目及び横ナデ調整により仕上げられている。色調は灰褐色を呈し，焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

Ⅱ類（7） 周溝内より出土。口径9.6cm，器高11.3cm，脚裾径7.6cmである。底部と体部の境には2条の鋭い沈線が入る。底部はへら削りを行っている。脚部内外面にはシボリ痕がみられ，裾部は折り曲げて端部は尖る。調整はⅠ類と比べると粗雑である。色調は灰色を呈し，焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。脚裾部内面にへら記号を有する。

甕（8） 墳丘内より出土。口頸部のみを残存。口径12.0cmである。頸部はラッパ状に開き段を有して口縁部に続く。調整は内外面とも横ナデ調整。色調は紫茶褐色を呈し，焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

平瓶（9） 墳丘内より出土。胴部を一部欠損する。口径7.5cm，器高13.3cm(推)，である。口頸部は胴部に比して大きく内湾する。口頸部はカキ目と横ナデ調整に仕上げられている。底部は平坦である。胴部にカキ目調整が行われているが，下半はその前にへら削りを行っている。口頸部に2種類のへら記号を有している。色調は灰色を呈し，焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

短頸壺（11） ½を欠損する。口径9.6cm(推)，器高18.3cm，胴部最大幅21.6cmである。胴部最大幅は中央より若干上にあり，口縁部へそりぎみに内傾する。口縁部はいくらか凹凸をもち端部近くで立ち端部は丸い。外面は胴部上半をカキ目，下半は格子状の叩きを行っており，口縁部は横ナデ調整である。内面は胴部上半を横ナデ，下半は同心円文状の叩きを行っているが，ナデによりほとんど消されている。色調は灰黒色を呈し，焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

壺（10） I区墳丘内より出土。口頸部を欠損するが外反するものと思われる。現高22.7cm，胴部最大幅25.8cmである。胴部はやや肩が張り卵形を呈する。外面は胴部上半をカキ目，胴部下半は平行叩きの上をカキ目調整を行っている。内面胴部上半を横ナデ，下半は同心円文状の叩きを行っている。色調は灰色を呈しており，焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

甕（12） ½を欠損する。口径25.0cm(推)，器高37.0cm(推)，口頸高5.1cm，胴部最大幅45.0cm(推)である。頸部は短く外反し，口縁部は肥厚する。胴部は最大幅をほぼ中央に置き円形を呈する。外面上半は平行叩きが入り，

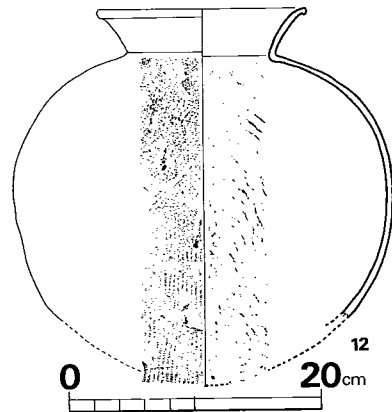


Fig. 34 汐井掛第5号古墳出土  
須恵器実測図(2) (縮尺1/6)

下半にカキ目調整が入る。内面は同心円文状の叩きが入る。色調は灰黒色を呈するが、肩部に自然釉がかかっている。焼成は良で、胎土は砂粒子を含む。

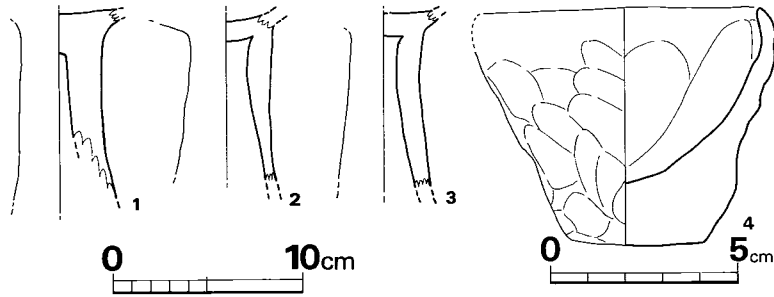


Fig. 35 汐井掛第5号古墳出土土師器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ )

**土師器** (Fig. 35, PL. 57-(1))

高坏(1~3) いずれも脚部片のみ残存で全容を知り得ない。器面の剝落は著しく調整は不鮮明であるが、内面にシボリ痕が見られる。色調はともに黄褐色を呈し、焼成は良である。

胎土は砂粒子を多量に含む。

**手づくね** (Fig. 35, PL. 57-(1))

西側表土より出土。口径7.4cm~6.3cmである。外面は指オサエ調整、内面は指ナテ調整を行っている。色調は茶褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土は砂粒子を多量に含む。

(渡辺健二)

**耳環** (Fig. 36, PL. 57-(2)) 1は金環で残りは悪い。

径2.3×2.2cmの正円形に近く、断面径は0.5cmと小型のわりには厚い。2も金環であり残りは悪く、金箔が部分的に残るにすぎない。1よりもやや大きく径2.3cmの正円形で突き合せの部分が狭まい。同一の古墳

2個出土であるが以上のように形状がやや異なる。

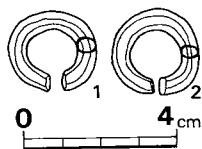


Fig. 36 汐井掛第5号古墳出土耳環実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

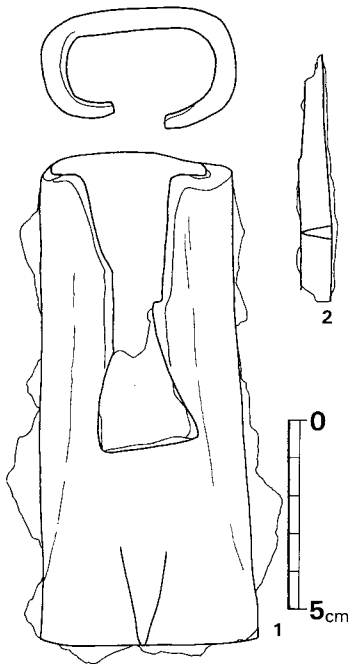


Fig. 37 汐井掛第5号古墳出土鉄器実測図(縮尺 $\frac{1}{2}$ )

**刀子** (Fig. 37, PL. 57-(3)) 非常に残りが悪く、錆が強く出ている。刃部であり、残存長6.5cm、幅0.9cmで、断面は二等辺三角形を呈す。

**鉄斧** (Fig 37, PL. 57-(3)) 完形品であるが錆がひどい。全長13cm, 幅刃部で5.7cm, 柄部で5.0cmを測る。袋部は長さ7.5cmで断面は楕円形であり, 厚さ0.5cmを測る。刃部がやや円頭で両刃である。

#### 5) まとめ

当古墳はやや小型の円墳で径約9mで、墳丘高は頂部を失っており土層断面より推定すると約2mであろう。

古墳の築造過程は第4号古墳と同様でありこの古墳は石室が小さいために径や高さも小さくそのため墳丘盛土は少ない。既に地山整形によって溝の掘り込みと石室掘り方を造り出し掘り方が深いため盛土が少なくすむようになっているようである。

石室の状態は汐井掛古墳中でも遺存が一番悪く僅かに側壁の腰石一石を見るだけである。しかし腰石下にみられる石室掘り方床面よりの掘り込みにより石室プランなどは復元できる。それによると石室は単室の横穴式石室で長方形プランである。小型であるが、袖石は明瞭に側壁と隅角をつくるようである。各腰石下に根石の多いのが目立つ。

遺物は玄室内より耳環2個が検出されるが敷石がはがされており共に原位置を保っていないと推定される。他に墳丘盛土内、周溝及び墓道の下方斜面に須恵器類が出土する。墓道前面の遺物の在り方は盗掘によるかき出しのようである。墳丘盛土内出土の状況は破片の状態で見え置かれているものとは考えられなかった。

これらの特徴からみてⅣ期の6世紀後半に築造され、数回の追葬があったようである。

(上野精志)

## 6. 第 6 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig.22, PL.36~38)

第 6 号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。第 5 号古墳の北方ではほぼ並んでいて、第 7 号古墳の東方で下方に位置している円墳である。第 4 号古墳から 5 号・7 号・8 号・9 号古墳と一直線状に並んでいるが、この第 6 号古墳と後述の第 9 号古墳は一段低い傾斜面上にある。第 5 号古墳の真北 4 m であるが標高は若干低い。

古墳の現状は墳丘がわずかに認められる程度で、墳丘中央部が大きく陥没しており盗掘を受けていることが知られる。その排土が東方の古墳より低斜面方に投げ出されている。高斜面の西方は直ぐ西に在る第 7 号古墳の盗掘時の排土が墳丘の一部に達している。古墳中心より南西方の傾斜面には墳丘裾と明らかに区別されるよう地山整形の溝がみられる。

## 2) 墳 丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 38~40, PL.

## 58-(1))

墳丘盛土の残りが悪いが、墳丘が小さいわりには整然と地山整形を行ない墳丘を造り出している、斜面の高所部には半月形状の溝を造り墳丘裾部を形成する。低所部の斜面下方は旧地表を削平して墳丘裾を造り出して円形にしている。とくに北側が南側に比べて低い関係で大きく削平して裾部と既に高い墳丘の一部とも云える程に墳丘基盤面を形成している。径約 5.60 m である。

墳丘基盤面は第 5 号古墳などと同じように旧地表面を削平して基盤面上面を平らにし、円卓

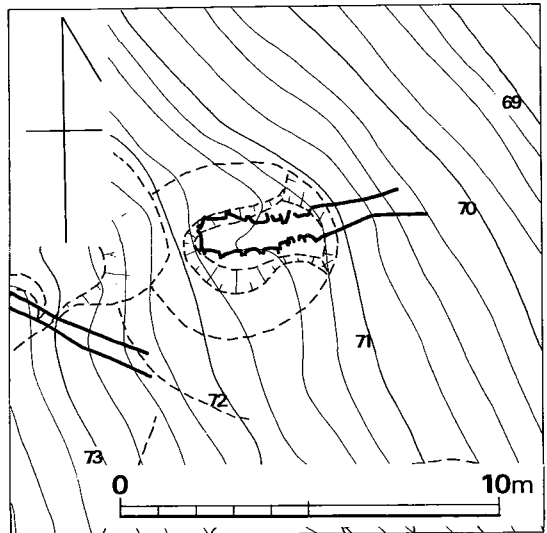


Fig. 38 汐井掛第 6 号古墳地形図 (縮尺 1/200)

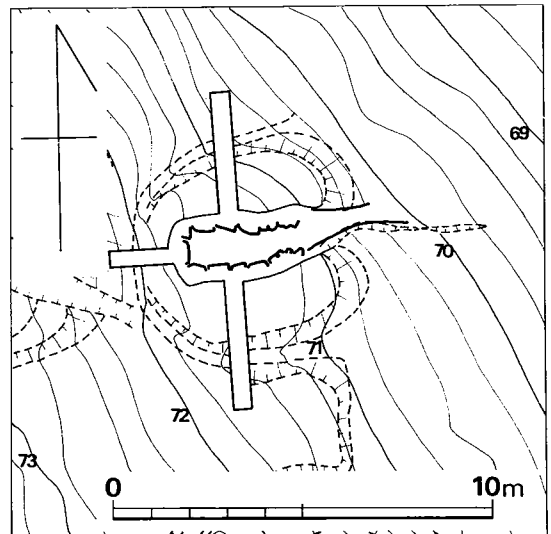


Fig. 39 汐井掛第 6 号古墳墳丘測量図 (縮尺 1/200)

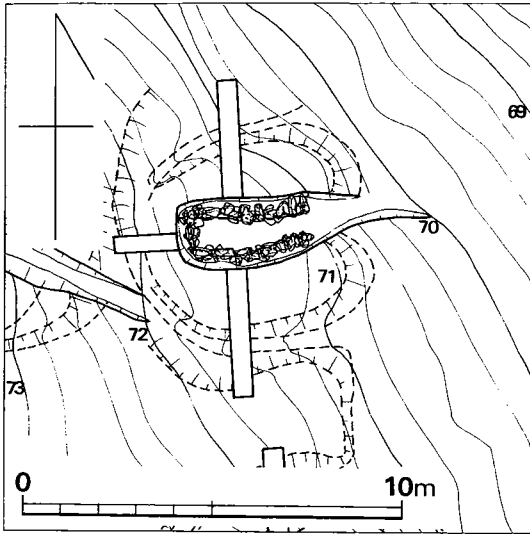


Fig. 40 汐井掛第6号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200) 方に寄るように東方向に開口する単室の横穴式石室で、石室主軸はN87度Eである。すでに天井石はなく、腰石のみを残すような残りの悪いものであり、石室はやや歪んでいて袖石は明瞭ではなく不整長方形ともいえる平面形を呈している。

玄室は閉塞石や敷石の状況よりして長さは主軸方向で2.24m、左側壁側(南方)で2.10m、右側壁側(北方)で2.10mであり、右側は直線的でなく、奥壁より両側壁をみると側壁の中央部よりやや右側の北方に曲っている。幅は奥壁下で80cm、中央附近の石室横断面で90cm、袖石の玄室入口部で60cmである。石室の中央部が広いのは本来的に羽子板状のプランを呈するものの右側壁の腰石が直線的に並んでいないためである。

奥壁は二枚の腰石で左側が大きく、右側が小さくて二段目の石は残っていない。左側の石は幅60cm、全高42cmで床面よりの高さは20cm程であり、厚さは20cmで横積みしている。右側の石は正方形状であり40cm大で、厚さ20cmである。

側壁は部分的に二段目の石まで残っているが腰石のみの部分がほとんどである。左・右側とも、四石からなり主に長方形の横長に用いており、右側では尖った石があるがそれらの石の間には詰石をしている。残存している二段目の石材をみると腰石よりは小さな40cm×20cm厚さ15cm弱のものを小口積みして高さを整えている。

床面は石室の中央部に敷石が認められないが本来は全面に敷石がされていたものと思われる。敷石は大小の石をとり混ぜて一部二重敷きしていて、これらは石室掘り方の床面に直接敷き始められていて、敷石上面の床面は水平に保たれている。

袖石と明確にされるものはないようであり、一応閉塞石が残っていたために床面の長さを決め玄室の大きさを求めた。その結果、左側壁の腰石は奥壁より四番目までの石で、五番目の横

状になっており、その中央部に石室掘り方があってさらに墓道が東方に下降している。

### (2) 墳丘盛土 (Fig. 16. PL. 59)

地山整形による造り出しの基盤上に一層だけ墳丘盛土がみられる。斜面高所部の石室奥壁方には盛土が確認されず表土を剥ぐと直接地山が出てくる状態である。本来あまり高くまで盛土はされてないものであろう。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 17, PL. 60・61)

内部主体は西より東に下る斜面のやや南



積みではなく立て積みしてある石を袖石と考え、右側壁も五番目の石をもって玄室と区別する。左側壁袖石は幅20cm、高さ40cmの長方形の石を立てている。右側壁側は玄室の二段目と同じような大きさの石を小口積みしたものが三段目まで残っている。両石間の幅は60cm長さ35cmであるが石室主軸に対して平行関係になく羨道に向って石室全体が曲っているが、この袖石の墓道方が大きく右方にずれている。

羨道は玄室主軸線とほぼ平行関係にあるが、玄室主軸より右側（北方）に20cm程ずれている。長さ60cm、幅50cmであり左側壁石は羨道入口に幅30cm、高さ70cmの長方形の石が立てられ袖石との間は小さな石材を乱石積みの状態で詰めている。右側壁石は一枚石である。

墓道は羨道よりさらに右側（北方）に曲って付属していて墓道の左側（南方）は地山の標高が高いために切り込んで整形しており、右側（北方）は標高が低いために整形が途中で終わっている。長さ3mまで検出でき、幅は狭いところで50cmであり、深さはさほどなくゆるやかに下降していて、墳丘裾部を越えて長く続いている。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑩, PL. 62-1)

墳丘の中心部にあり全体的にみると長方形プランで奥壁側は隅丸の直角になっているが、袖石が明確にないため掘り方も直線的に墓道に続いている。石室と同じように墓道側に曲っており特に左側は大きく曲っている。石室の掘り方幅80cm、深さ奥壁方で90cm、羨道入口部で40cmであり、墓道方になるにつれて幅は狭まる。床面は水平であり、腰石下には若干の掘り込みをして石室の内外方には根石を据えて腰石を安定させている。とくに奥壁下と右側壁下は丁寧にしているが、これは腰石自体が尖り気味の石材のためと思われる。さらに腰石の外側と掘り方の間には裏込め石を用いて、比較的雑に土を入れて石室を築いている。

### 4) 遺物

#### (1) 出土状況 (Fig. ⑪, PL. 62-2)

玄室の奥壁と左側壁近くに耳環1個 (Fig. 44-1) と、墓道の床面上より耳環1個 (Fig. 44-2) が出土していて、他に墳丘内と溝より須恵器、土師器が出土している。これらの土器類はいずれも原位置を保つことなく攪乱された状態で出土している。

(上野精志)

#### (2) 出土遺物 (Fig. 41~44, PL. 63)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	4個体以上
	坏身	3個体
	甕	1個体
	土師器	5個体以上

埴	1 個体
高坏	4 個体

(2) 装身具 耳環 2 個

**須恵器** (Fig. 41・42, PL. 63-(1))

坏蓋 (1~3) 立上りの形態からII類に細分出来る。

I a類 (2, 3) 2は周溝内から出土し, 3は墓道外から出土。立上りは内傾し, 内面は内傾斜面との間は緩やかであり, 受部は水平もしくは若干凹状をなす。2は口径9.6cm, 器高4.1cm, 立上り高0.9cmであり, 3は破片であり, 立上り高は1.2cmである。色調は, 2は灰黒色, 3は淡灰色を呈し, 焼成はともに良で, 胎土もともに砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。2の内面にへら記号を有する。

I b類 (1) 周溝内から出土。底部を欠損する。立上りと内傾斜面は急で, 立上りは内傾し, 受部は若干上方を向いて短い。口径11cm, 器高4.4cm(推), 立上り高1.0cmである。底部は手持ちのへら削りを行っている。色調は灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。内面にへら記号を有する。

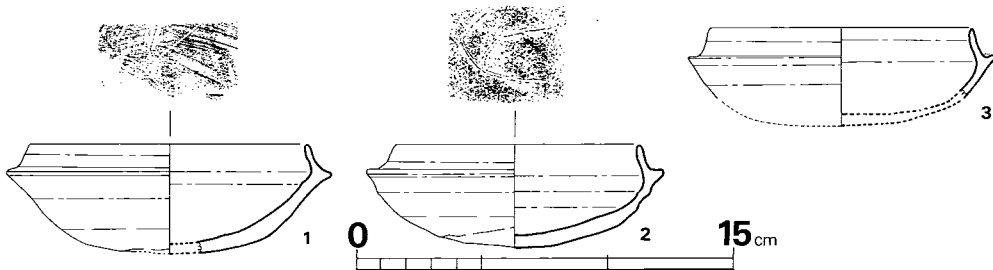


Fig. 41 汐井掛第6号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

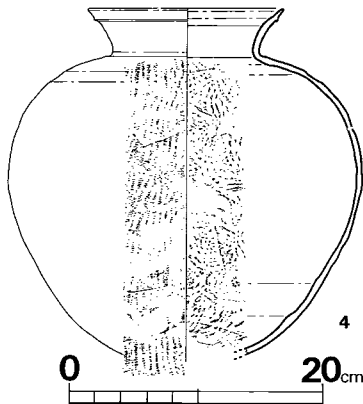


Fig. 42 汐井掛第6号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6)

甕 (4) 墓道内より出土。½を欠損する。口径23.0cm (推), 器高41.3cm(現), 口頸高5.8cm, 胴部最大幅42cm(推)である。頸部は外反して口縁下端は肥厚し, 胴部は肩が張る。外面は平行叩き, 内面には同心円文の叩きが入る。色調は茶褐色を呈し, 焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

**土師器** (Fig. 43, PL. 63-(2))

埴 (1) 墳丘内より出土。口径11.2cm, 器高7.8cmである。底部は若干尖りへら削りが行われており, 口縁部内面はへら研磨, 底部内面はハケ目状のナデが行われている。色調は茶褐色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を

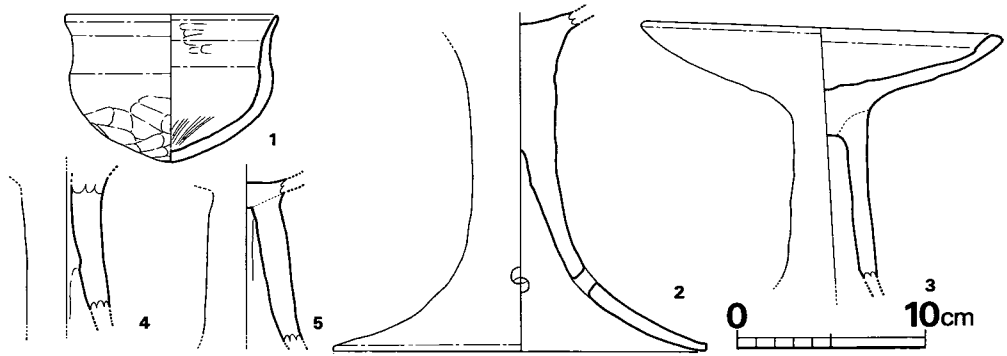


Fig. 43 汐井掛第6号古墳出土土師器実測図（縮尺1/4）

含む。

高坏（2～5） 完形品はなく全容は知り得ないが、形態によりⅠ～Ⅲ類に分けられる。

Ⅰ類（4，5） 脚部のみ残存する。ともに器面剝落が著しく調整は不明であるが、内面にシボリ痕が見られる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

Ⅱ類（2） 脚部のみ残存し、脚高17.0cmを測る。脚下部に円形の透しが3方向に入り、裾部にかけて広がり、端部は丸く仕上っている。器面剝落が著しく調整は不明である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

Ⅲ類（3） 脚裾部を欠損し、口径19.2cmを測る。坏部は丕というよりも皿の形態を呈している。調整は器面剝落のため不明である。色調は黄褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

（渡辺健二）

耳環（Fig. 44, P.L. 63-(3)） 1は残りが悪く、金箔が内側だけは残っており、外側は全くみられない。径2.0×1.8cmでやや楕円形に見える。断面は、楕円形を呈している。2は全く残りが悪く銅胎だけである。おそらく1と対になるものであろう。

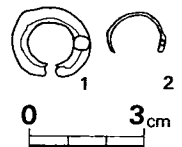


Fig. 44 汐井掛第6号古墳出土耳環実測図（縮尺1/2）

## 5) まとめ

当古墳は第7号古墳の東側、斜面下方に構築された径約5.60mの小さな円墳であり、小規模で石室掘りが方深く盛土はあまり見られない。

石室は単室の横穴式石室であり、両袖石は明確に側壁と隅角を造らず、石室の幅と墓道の幅は同じくらいであり閉塞部によって玄室と羨道が区別されるものである。玄室は不整長方形プランで玄室と羨道は一直線ではなく羨道は大きく曲る。

出土遺物は玄室内より耳環1個と墓道より耳環1個が出土していて玄室内のものは原位置であろう。他に若干の土器が墳丘内、周溝より出土していて、これらの特徴はⅣ期であり6世紀末期から7世紀初頭にかけて築造されたと思われる。

（上野精志）

## 7. 第 7 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 36~38)

第7号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。標高75~72mにかけての丘陵東斜面に立地する。第6号古墳の西で第8号古墳の南東に相接している。墳丘の中央には盗掘孔があり、東側にその排土が堆積して第6号古墳墳丘上まで覆っていた。

### 2) 墳 丘

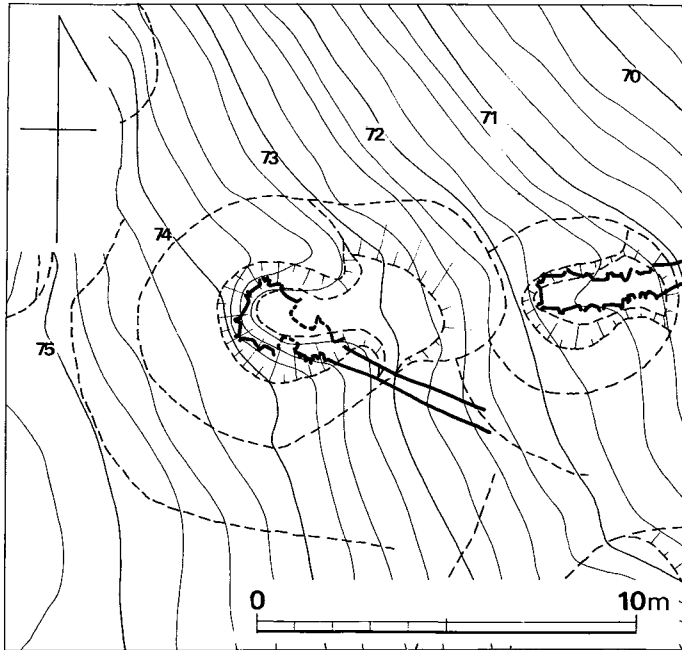
#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 45~47, PL. 64)

高位標高の奥壁側墳丘裾から北側にかけて幅1m前後の溝をめぐらしている。この溝との間に長さ1.5mにわたって陸橋を残し、西南から南に向う別の溝が墳丘裾をめぐり、東側方向に開いている。標高下位墳丘前面部の裾には溝はなく、平面半円形に段部を切り出している。

以上の地山整形を行った中央部には旧地表をそのまま残し、中央に掘り方を穿がっている。

#### (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑱, PL. 65・66)

盛土の残存状態は極めて悪く、奥壁側から北東側壁で旧地表上に最高15cmの厚さを残すのみで、普通10cm内外である。盛土は茶褐色を呈し、赤色土を混在する。掘り方内の石材裏込め用



Fi g. 45 汐井掛第7号古墳地形図 (縮尺1/200)

には、下部に礫混りの赤褐色粘質土を、その上には黄褐色と赤褐色の粘質土を用いている。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ⑲, PL. 67~69-(1))

単室の横穴式石室であり、S65度Eの方向に開口している。

玄室は腰石を残すのみであり、左右玄門は失われ、根石を残すのみである。根石から推定するに玄室の計測値は左側長1.2m、右側長1.2m、奥

壁幅1.66m,前幅1.4mで横長台形のプランをなしている。

石材はいずれも小振りで、奥壁腰石は3枚の用材よりなり、中央は横長、左右は縦長に用いている。左右側壁は各2枚の用材よりなり、組み方は粗雑で各石の形状もまちまちである。

玄室の床面には10cm前後と5cm前後の角礫を用いて敷石した痕跡があり、中央部と玄門間に旧状を留めている。これら敷石の上面は掘り方床より8~10cmの高さで整えられている。標高74.1mである。

玄門は前述したように盗掘により取り去られていたが、根石の位置より推定するに左右間に50cmの距離をもっていたと推定される。またこの間にあったと思われる榎石も欠失していた。

羨道は短く左側長70cmで、地山を削り出した段状部上に20~30cm大の小さな用材で築かれており、左側壁にその痕跡を見ることができる。段状部中央の床面幅は45cmで、墓道床面幅と略同一である。

羨道部外端より、中央で若干のせばまりを見せながらもほぼ直線的な墓道が4.7mに

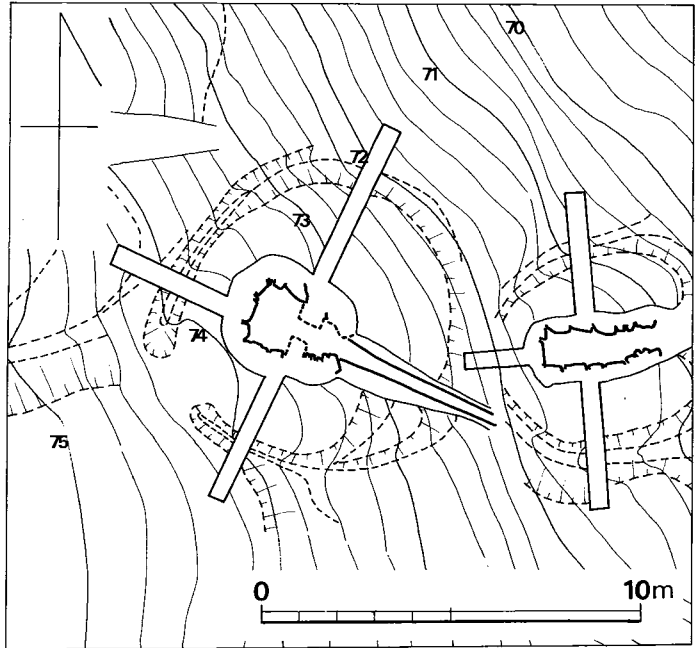


Fig. 46 汐井掛第7号古墳墳丘測量図 (1/200)

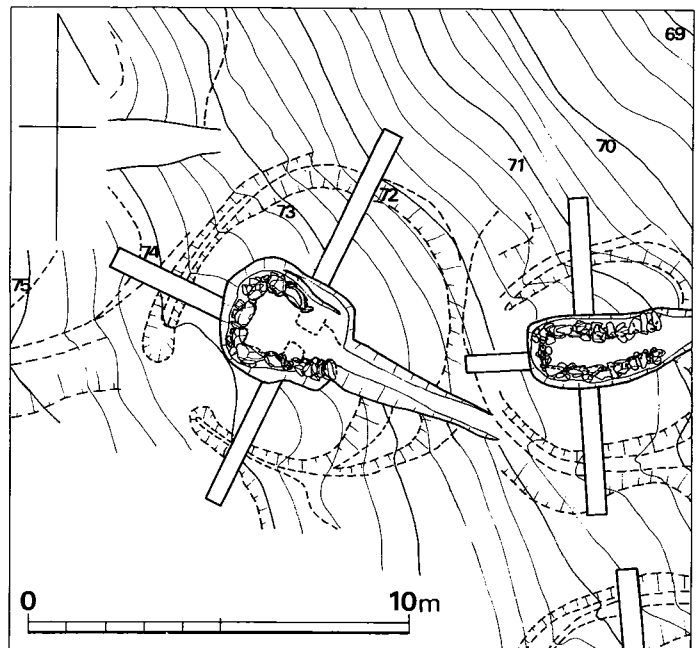


Fig. 47 汐井掛第7号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

わたって延びている。墓道床面は羨道部床面より一段下った後、1/10勾配という緩い傾斜で下っている。

閉塞石は羨道部外端間に築かれており、10～20cmの石を長軸、石室主軸と同一にして床面上より積まれている。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑱, PL. 69-(2))

掘り方のプランは奥壁側が弧状を呈しており、両側壁を囲って羨道端で幅を狭め、墓道へと続いている。上端で中央長3.45m、奥幅2.95m、中央幅3.05m、前幅2.5mである。床は平坦で、前述したように羨道側壁部を築く位置に段状部を削り出している。奥壁側で旧地表面からの掘り込みの深さは1.3mであり、西南の最深部では1.68mを測る。

### 4) 遺物

#### (1) 出土状況

玄室内よりの遺物の出土は皆無であり、墓道の覆土中より須恵器提瓶と土師器の高坏完形品が出土する。その他墓道の直ぐ左側（北方）の墳丘盛土中より須恵器が出土している。又、褐釉陶器の水注と思われるものも墳丘内より出土する。

(酒井仁夫)

#### (2) 出土遺物 (Fig. 48～50, PL. 70)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	5個体以上
	坏蓋	1個体
	高台付埴	1個体
	提瓶	1個体
	甕口頸部	2個体
	土師器	2個体以上
	埴身	1個体
	高坏	1個体
	褐釉陶器	1個体
	水注	1個体

#### 須恵器 (Fig. 48, PL. 70-(1))

坏蓋(1) 口縁部片を残すのみであり、全体の形容を知り得ない。かえりは断面三角形を呈する。色調は暗灰色を呈し、焼成は良である。胎土は小粒子を含む。

高台付埴(2) 高台部片を残すのみであり、坏蓋同様全体の形容を知り得ない。高台は低く退化済みである。色調は黄褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

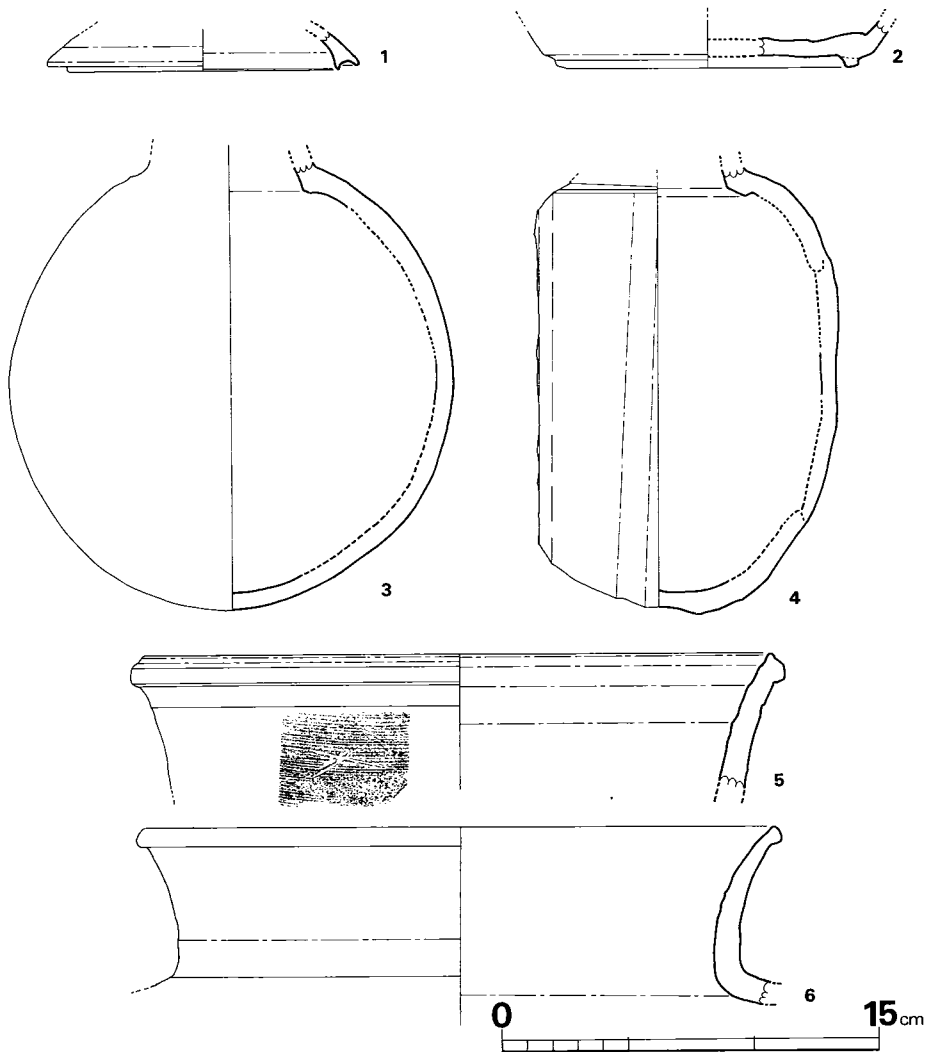


Fig. 48 汐井掛第7号古墳出土須恵器実測図（縮尺1/3）

提瓶(4) 口頸部を欠損する。現高17.6cm, 胴部最大幅17.6cmである。背面は平坦であり、へら削りを行っている。前面はカキ目, 他は横ナデ調整で仕上げている。色調は黒灰色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

甕(5, 6) とともに口頸部片のみ残存する。5は口径24.6cm(推)であり, 頸部は直立ぎみになるものと思われる。口縁部は突帯をめぐらしている。外面はカキ目調整, 内面は横ナデ調整で仕上げている。頸部に2個以上のへら記号を有する。6は口径25.0cm(推), 口頸高6.0cmである。口頸部は外反する。色調はともに黒褐色を呈するが6の内面は自然釉により器肌が見えない。焼成は良であり。胎土は砂粒子を含む。

#### 土師器 (Fig. 49, PL. 70-(2))

碗(1) 口径11.0cm, 器高4.3cmである。丸い底部はへら削りが行われているが他は器面剥落が著しく調整は不明である。色調は赤褐色を呈し, 焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

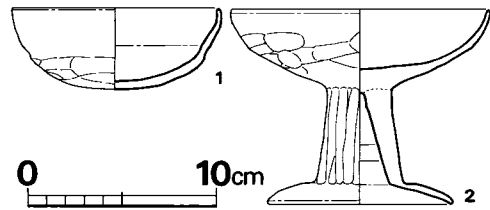


Fig. 49 汐井掛第7号古墳出土土師器  
測図(縮尺1/4)

高坏(2) 墓道より出土。口径13.6cm, 器高10.3cmである。坏部はへら削りと横ナデ, 脚部外面は縦位のへら削りと内面は横位のへら削りを行っている。色調は赤褐色を呈しているが, 赤が強く彩色を施したものと思われる。焼成は良, 胎土は小砂粒子を含む。

#### 褐釉陶器 (Fig. 50, PL. 70-(2))

水注(3) 底部及び注口部を欠損する。口径11.4cm, 口頸高7.2cm, 胴部最大幅16.9cmである。胴部上半に注口が付くと思われる割れ口が見られ, 壺としては頸部が長すぎること等からして水注とみなす。口縁内側にハケ目痕が見られる。色調は黄緑色を呈しているが肩部に釉がかかっており, 焼成は良好である。

(渡辺健二)

#### 5) まとめ

本古墳は径8m弱の小円墳で高さは1.5m弱で, 単室の横穴式石室で玄室は横長台形である。石室内より出土遺物はないが, 墓道中や盛土中より若干あり7世紀の後半のものとする。

(上野精志)

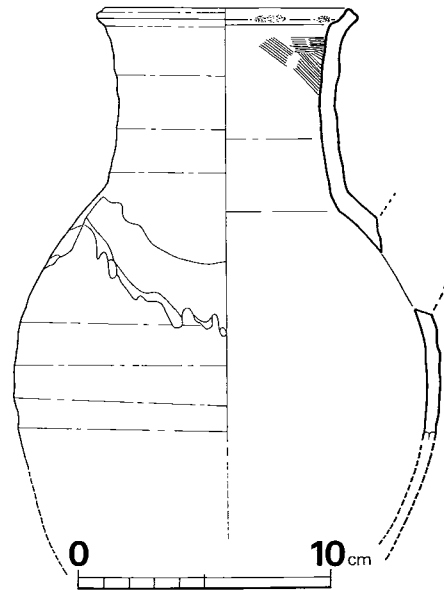


Fig. 50 汐井掛第7号古墳出土陶器  
実測図(縮尺1/3)



## 8. 第 8 号 古 墳

## 1) 立 地 ・ 墳 丘 (Fig. 2, PL. 36~38)

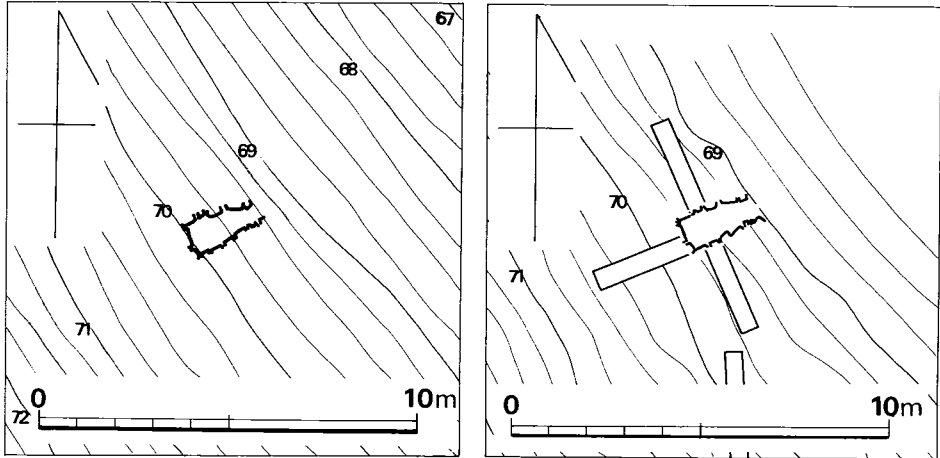


Fig. 51 汐井掛第 8 号古墳地形図 (縮尺1/200) Fig. 52 汐井掛第 8 号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

第 8 号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。標高70~69mにかけての丘陵の東側斜面に立地し、斜面はかなりの傾斜面を有している。この古墳の南側10mほどに第 6 号古墳があり、西上方 8 m のところに第 9 号古墳が位置している。北側には古墳は存在しない。この東斜面に位置する 7 基の中では最も東寄りの下方に構築されたものである。

調査前は盛り土や、周溝等の痕跡もなく自然の傾斜面をもっていたが、表土を剥ぎ地山を検出した段階で石室を確認する。盛り土や天井石はなく以前に破壊を受けたのであろう。調査の結果、周溝も地山整形も認められず、2段の石積みをもった石室の一部が遺存している。円墳と考えられるが、墳丘や周溝の規模はまったくわからない。

## 2) 主体部

## (1) 石室 (Fig. ⑳, PL. 71-(2)~73-(1))

単室の横穴式石室であり、東方に開口する。石室の主軸はN67度Eである。すでに天井石はなく、腰石とその上に一段ほど積んだ石を残している。玄室の平面形は不整長方形を呈し前方部がやや歪んでいて袖石は不明瞭で袖石と羨道が一緒になったような形状を呈している。

玄室の計測値は、床面の敷石と両側壁の石から推定して、長さは主軸方向で1.8m、奥壁の幅0.8m、玄門部で0.5mほどである。

奥壁は一枚の腰石を使用してその上に2段積みの持ち送りがみられる。東側壁の腰石は5枚、北側壁の腰石は3枚で、両側壁の腰石に石が一段残っている。北側壁の奥から4番目の腰石が

消失しているけれど、その位置に根石が3個現存しており、ここに一枚の腰石があったと思われる。

石材は奥壁の腰石以外はあまり大きくなく不揃いである。

床面には敷石が遺存しており、ほぼ旧状を保っていると考えられる。扁平なやや太めの礫を使用し、地山面に平らに敷き詰めている。柵石は欠失している。

袖石は先述したように明瞭でなく、袖石と羨道を同時にしたようにして両側壁の石が遺存している。閉塞の石は認められなかった。羨道は不明瞭であるが完存したとしても現状の側壁の石と墓壇から考えて約30cm程のびるであろう。

根石は全体の腰石下に認められたが、大きい石材を用いている奥壁や、奥壁に一番近い両側壁の石にたくさんの根石を使用しており、5～6個を一枚の腰石に使っている。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 20, PL. 73・74)

掘り方の平面形は隅丸長方形状であるが、各壁がやや胴張りを呈し、羨道部で幅を狭めて墓道へと続いている。墓壇上端での中央長さ2.8m、奥壁の幅1.5m、中央幅1.74m、前幅0.8mほどである。奥壁の高さは床面地山より0.8m、中央部で0.4mで羨道部で一緒になる。墓壇の断面はU字形を呈し、地山面は平らで腰石を安定させるための掘り込みはない。根石を腰石のまわりに配置することで固定させている。

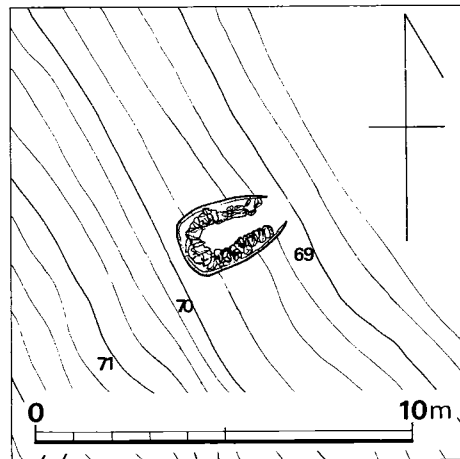


Fig. 53 汐井掛第8号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

## 3) 遺物

### (1) 出土状況 (Fig. 20)

石室内より金環1個とガラス丸玉1個が出土する。金環は奥壁と左側壁との隅近くよりの敷石上より出土し、ガラス丸玉は、敷石と敷石の間及び石室掘り方床面と敷石間の埋土中よりで出土位置は不明である。

墓道付近より須恵器・土師器細片が攪乱された状態で出土する。

(中牟田賢治)

### (2) 出土遺物 (Fig. 54・55, PL. 74-(2))

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |        |     |       |
|--------|-----|-------|
| (1) 土器 | 須恵器 | 3個体以上 |
|        | 坏身  | 1個体   |
|        | 高坏  | 1個体   |

甕	1個体
土師器	1個体以上
甕	破片数点
(2) 装身具 耳環	1個
丸玉	1個

## 須恵器 (Fig. 54)

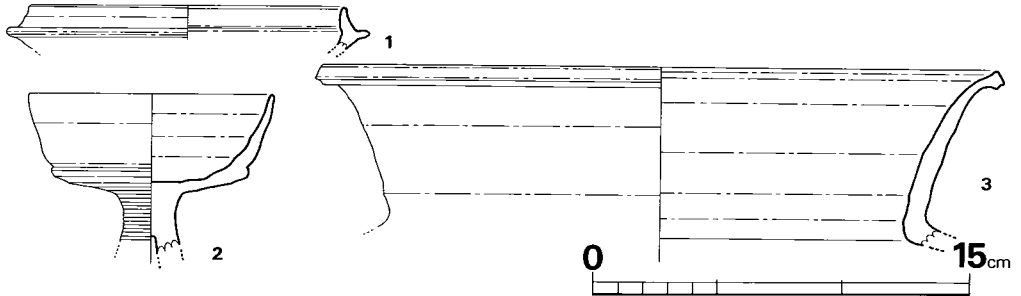


Fig. 54 汐井掛第8号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

坏身(1) 墓道より出土。口縁部のみ残存する。立上り高1.0cmであり、先端部は尖っている。色調は黄褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

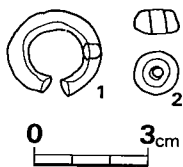
無蓋高坏(2) 墓道より出土。脚部を欠損する。口径9.6cmである。坏部下半から脚部にかけてカキ目調整が行われている。色調は灰黄白色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

甕(3) 墓道より出土。口頸部 $\frac{1}{2}$ を残存する。口径26.6cm(推),口頸高6.0cmである。頸部は直線的に開き口縁部は突帯をめぐらせ、下端は凹状をなす。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

## 土師器

甕片 小破片のため図示できないのが甕の破片のようである。

(渡辺健二)



耳環 (Fig. 55, PL. 74-(2)) 金環であり残りは悪く、金箔が内側だけしか残っていない。径 $2.5 \times 2.2$ cmであり突き合せ部の外側が大きく開く。断面径0.4cmを測る。

丸玉 (Fig. 55, PL. 74-(2)) ガラス製で、径1.2cm、厚さ0.6cmで

Fig. 55 汐井掛第8号古墳出土耳環・丸玉実測図 (縮尺1/2)

孔径は0.4cmを測る。

## 5) まとめ

当古墳は第4号から第10号古墳のE群7基中最も傾斜面の低い位置にあり、斜面は急傾斜で

ある。斜面に直交して石室が構築されている。

墳丘盛土や地山整形の跡などは見られなく全く削平されている。円墳と思われるが形状や墳丘の大きさなど不明である。しかし他のE群中の墳丘を考慮して推定すると小さな円墳で径約6～7m、高さ1m弱の小規模なものと思われ、石室掘り方が深く石室が小さいため墳丘盛土はほとんどない目立たない古墳と思われる。

石室は単室で小型の横穴式石室である。玄室は不整長方形であり、袖石が側壁と明確に隅角をつくることなく玄室と羨道の区別がつきにくく一体となっているような感を与える。しかし完全な無袖の横穴式石室ではなくあくまでも両袖型の範疇に入るものである。

奥壁の鏡石は一枚で2段目より持ち送りが見られ小さな石室ということが伺える。この種の石室は玄室と羨道の接点に特徴がある。玄室の幅と羨道入口の幅が違い石室の方が大きいのもこの種の石室の共通した特徴である。墓道は短く付く。

出土遺物は玄室内より原位置を保って耳環1個のみを出土する。他に墓道付近より土器が発見される。これらは攪乱された状況であり玄室内の盗掘によるかき出しか墓道に在ったものかの判明はつかない。

須恵器の坏身、高坏はⅣ期の特徴を有し、6世紀末から7世紀初頭に比定される。

(上野精志)

## 9. 第9号古墳

## 1) 立地 (Fig. 2, PL. 36~38)

第9号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。南東から北西に流れる尾根の稜線をわずかにはずれた標高約76mの東斜面上に位置している。東斜面上には、第4号・5号・6号・7号・8号・9号・10号の古墳と7基で構成される一群が存在する。その中で本墳は第10号古墳と並び一番高い所に位置している。本墳は斜面上に構築されたため大規模な地山整形が行なわれ、墓壇も大きく掘り込まれており墳丘はそれほど高くはない。石室上部は石材の抜き取りにより大きく破壊され、墳頂部は大きく陥没している円墳である。

## 2) 墳丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 56~58, PL. 75~77)

古墳は丘陵の標高74~76mの間の斜面上に尾根の稜線に斜行する方向、つまり尾根線上の一番高い所に存在する第11号古墳の方向に主軸をとって構築されている。古墳の構築のための整形は大規模に行われ、丘陵斜面を馬蹄形に巡る溝の掘削と、溝の内側の墳丘基底面の整地が行

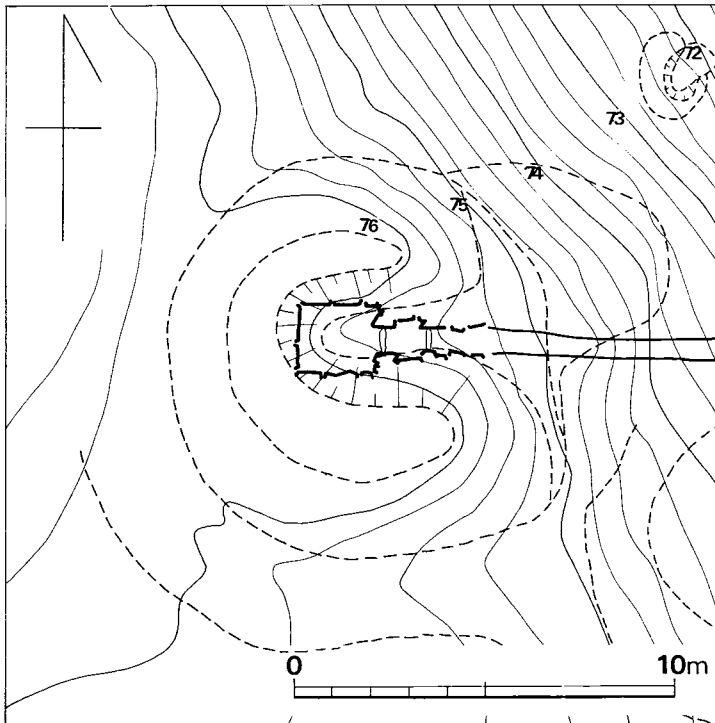


Fig. 56 汐井掛第9号古墳地形図 (縮尺1/200)

われている。溝は幅約2.5m、深さ約0.3mほどで、西側から東側に向ってゆるやかな傾斜で削り出されている。基底面は地山までは達しておらず旧地表面をテラス状に削り出している。さらに基底面から長さ約5.7m、幅約4.4m、深さ約2.0mの隅丸長方形の墓壇を掘り込んでいる。

## (2) 墳丘盛土 (Fig.

②, PL. 76・78)

墳丘の形成過程は大きく2段階に分れる。第1段階は基底面の上部まで

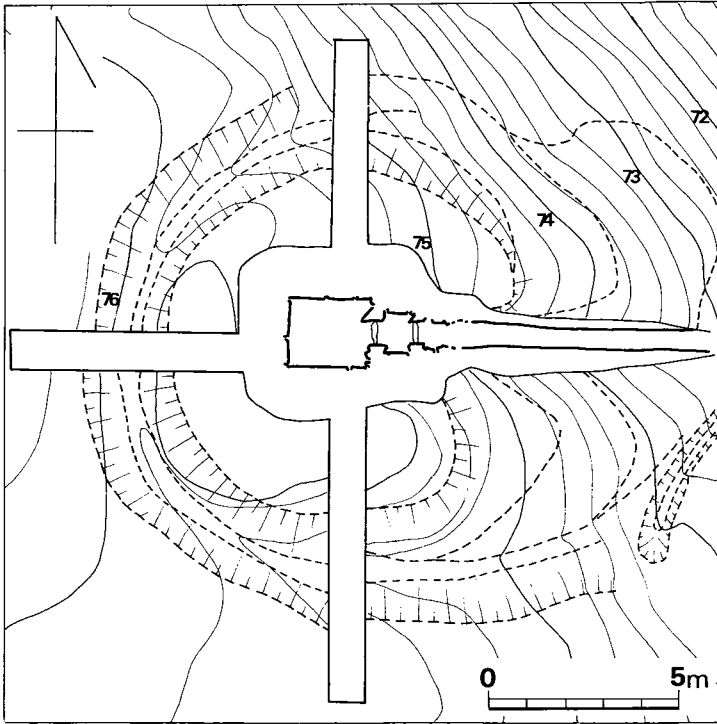


Fig. 57 汐井掛第9号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)

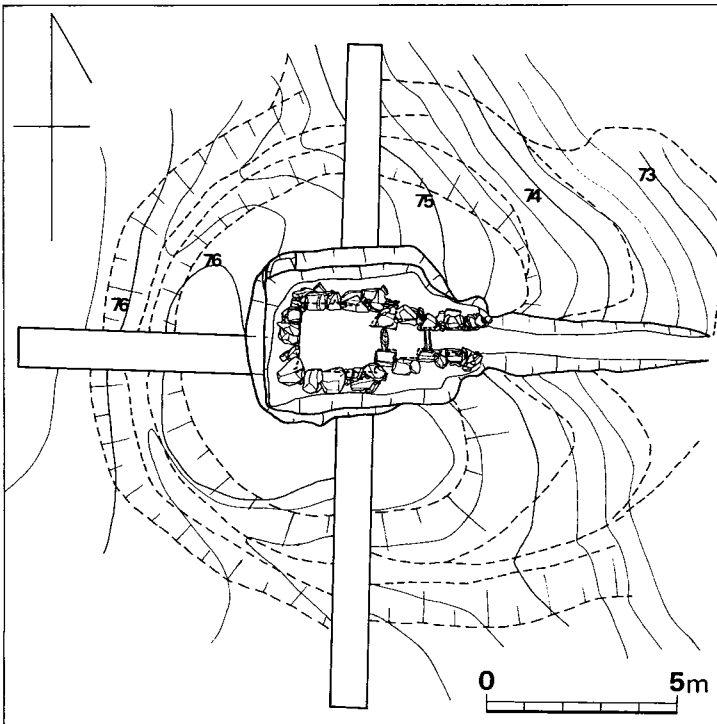


Fig. 58 汐井掛第9号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

の盛土で、墓壇を掘り出した土をそのまま埋めて壁体の裏込めにあてている。この段階の土層はかたく叩かれ、しまりがよい。石室の高さは上部の破壊のため詳細は不明であるが、墓道の深さから判断して、石室の構築と並行して行われた盛土は第1段階で終了したと考えてよいだろう。

第2段階の盛土は、墳丘を整えるもので、基底面からの高さはわずかに45cmを測る程度である。この段階の盛土は、基底面と溝を削り出した土で行われている。墳丘の現在高は、石室床面から約2.5mを測る。墳丘の裾線はAトレンチで中軸線から約5.3m、Cトレンチまで4.8mで、径約10m、高さ約1mを測る。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ②, PL. 76~79)

本墳の埋葬施設は、主軸をS88度Eにとり、東側の谷に向かって開口する複室の横穴式石室である。

石室はすでに3段目から上の積み石が完全に破壊されており、上部の構築法は不明である。したがって本墳の調査は、石室構築の基礎工事に主体をおいて実施する。石室の平面形は玄室、前室ともに丁寧な造りで、長方形を呈し、短い羨道部が付随する。素掘りの墓道は、長さ6.5mを測り、墳丘裾より外側まで延びている。石室の全長は左壁で4.65m、右壁で4.75mを測る。

玄室の長さは、左側壁で2.03m、右側壁で2.1m、中軸線で2.2mを測る。幅は奥壁側で1.8m、玄門側で1.8m、中心で1.75mを測る。わずかに胴が窄まる長方形を呈している。基部は、深い墓壇底を水平に整形した後に腰石が据えられている。腰石は、奥壁に2枚、両側壁には3枚の同じ大きさの石材をわずかに内傾させ立てて据えている。また各腰石と腰石の継目、間には20~30cm大の根締石が壇底をやや掘り窪めて腰石が水平に安定する様に留意して配置されている。二段目は角ばったほぼ同形の石材を用いて横積みされている。二段目以上の積み石は破壊されているため構築法は不明である。壁体の現存高は床面から約1mを測る。

玄門部は両袖式で、柱状の石材を立てて据え30cm大の石で根締を行いしっかりと固定されている。袖幅は左袖が55cm、右袖が60cm、玄門幅は65cmを測る。

床面は根締石がかくれる程度に約10cm埋めて整形され、この上全面に10cm内外の礫石を用いて敷石を施している。玄室床面からは、腐蝕した人骨・金環・鉄製品・ガラス製丸玉等が出土する。

前室の長さは、左側壁で1m、右側壁で95cm、中軸線で95cmを測る。幅は玄門側で70cm、前門側で65cm、中心で1.05cmを測る。腰石、根締ともに玄室の構築法と同様である。積み石は、右側壁で2段目が残るのみである。床面からの残高は70cmを測る。床面は10cmほど埋めて整形した後全面に10cm内外の礫で敷石を施し水平を保っている。前室床面からは鉄製品が出土する。

前門部は柱状の石材を立てて据えている。左袖幅25cm、右幅25cm、前門幅55cmを測る。

玄室・前室・羨道部はそれぞれ栴石によって区切られている。

羨道部両壁の中央に、細長い柱状の立石が据えられている。この立石は床面からの高さ85~95cmを測り、玄門、前門の袖石よりも高い。これは前室の天井部と羨道天井部の高さをあわせるためか、あるいはこの両側に積まれた5段の石組を支えるためか、されたものであるのか天井部を残していないため詳細は不明である。羨道部は長さ1.2m、幅は前門側で0.55m、墓道側で0.7cmを測り「ハ」の字に開く。

(池辺元明)

## (2) 石室掘り方 (Fig. ②③, PL. 79)

墳丘基盤面の中央部に隅丸長方形の墓壇がある。丘陵斜面の下方の東壁中央部に墓道があり斜面低所部の下方にゆるやかに下降している。墓壇は長さ約5.7m、幅約4.4mで深さは奥壁方で約2m、羨門方で1.10mである。

墓壇の床面は水平であり各腰石の下にはそれにあつた凹地状を掘り腰石を安定せしめていて、

これには玄室内側と、さらに腰石と掘り方壁面の両方に根石を用いているものもある。

玄室の両袖石は特に掘り方が深くどっしりと据えられている。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況 (Fig. 59, PL. 80)

玄室、前室床面より汐井掛古墳群中では一番多く遺物が出土している。玄室内より金環9個、ガラス製丸玉39個、鉄鎌9本以上、馬具が出土しており、これらは左側壁寄りに集中している群と、右側壁と右袖石の隅近くの二群が見られる。人骨も遺存しており、これは奥壁方と玄室の前面入口方とに検出される。

前室よりは右側壁近くに鉄鎌が検出される。

(上野精志)

##### (2) 出土遺物 (Fig. 60~65, PL. 81~85)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	37個体以上
	坏蓋	13個体
	坏身	14個体
	碗身	1個体
	埴蓋	2個体
	埴身	2個体
	無蓋高坏	1個体
	台付甕	1個体
	平瓶	2個体
	土師器	4個体以上
	高坏	4個体
(2) 装身具	耳環	9個
	丸玉	31個
(3) 武器	鉄鎌	5個
(4) 馬具	留金具	1個

##### 須恵器 (Fig. 60~62, PL. 81)

坏蓋(11~22) 口径と器高、形態により次のI~V類に大別され、さらに細分類される。

I類(11) 古式のなごりを残しているものである。墓道黄褐色土内より出土。口径11.9cm、器高3.9cmである。体部、天井部の境、及び口縁内面における段は不明瞭であり、天井部はヘラ削りを行っている。色調は黄灰色を呈しており、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。



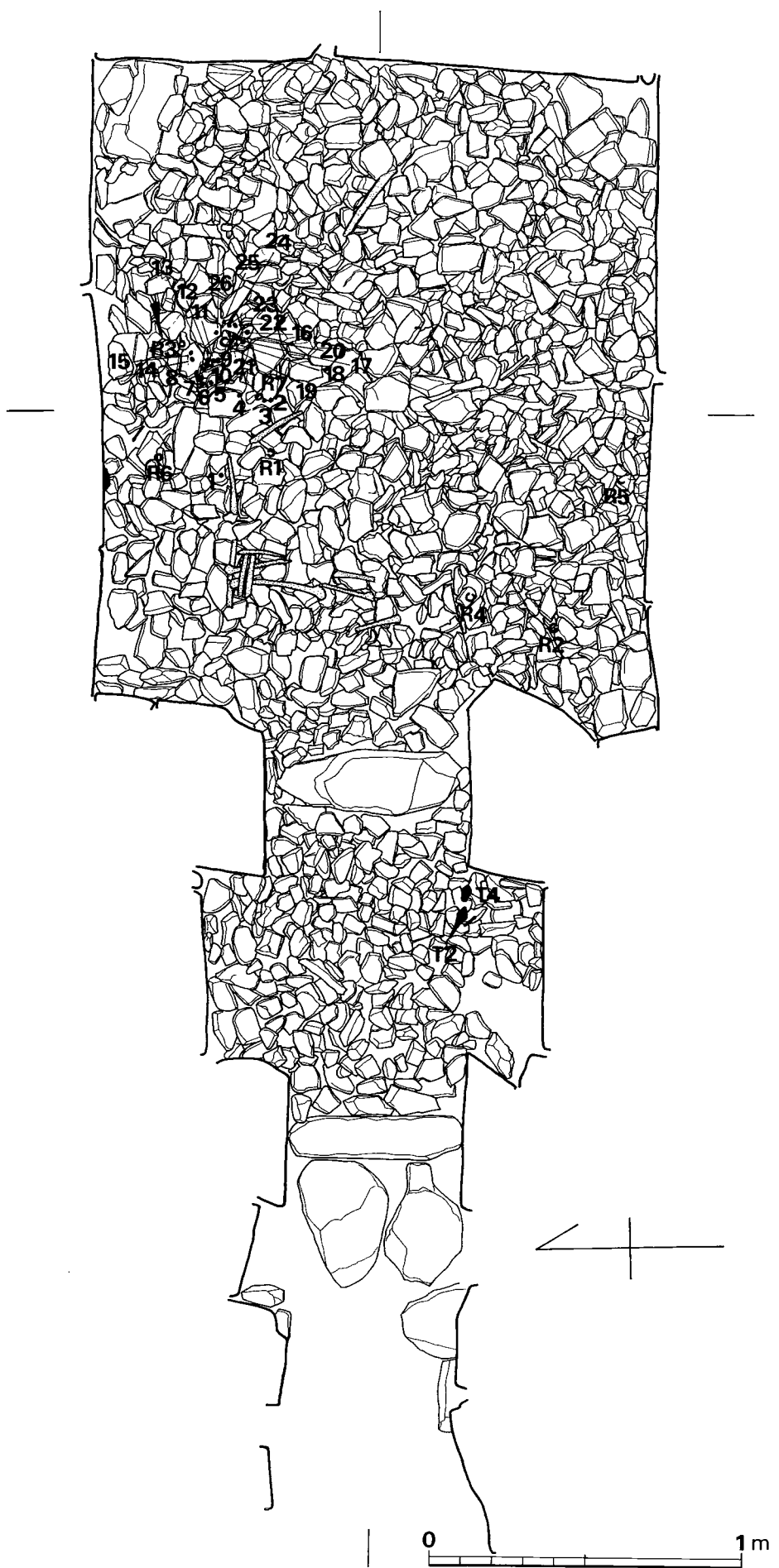


Fig. 59 汝井掛第9号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺1/20)

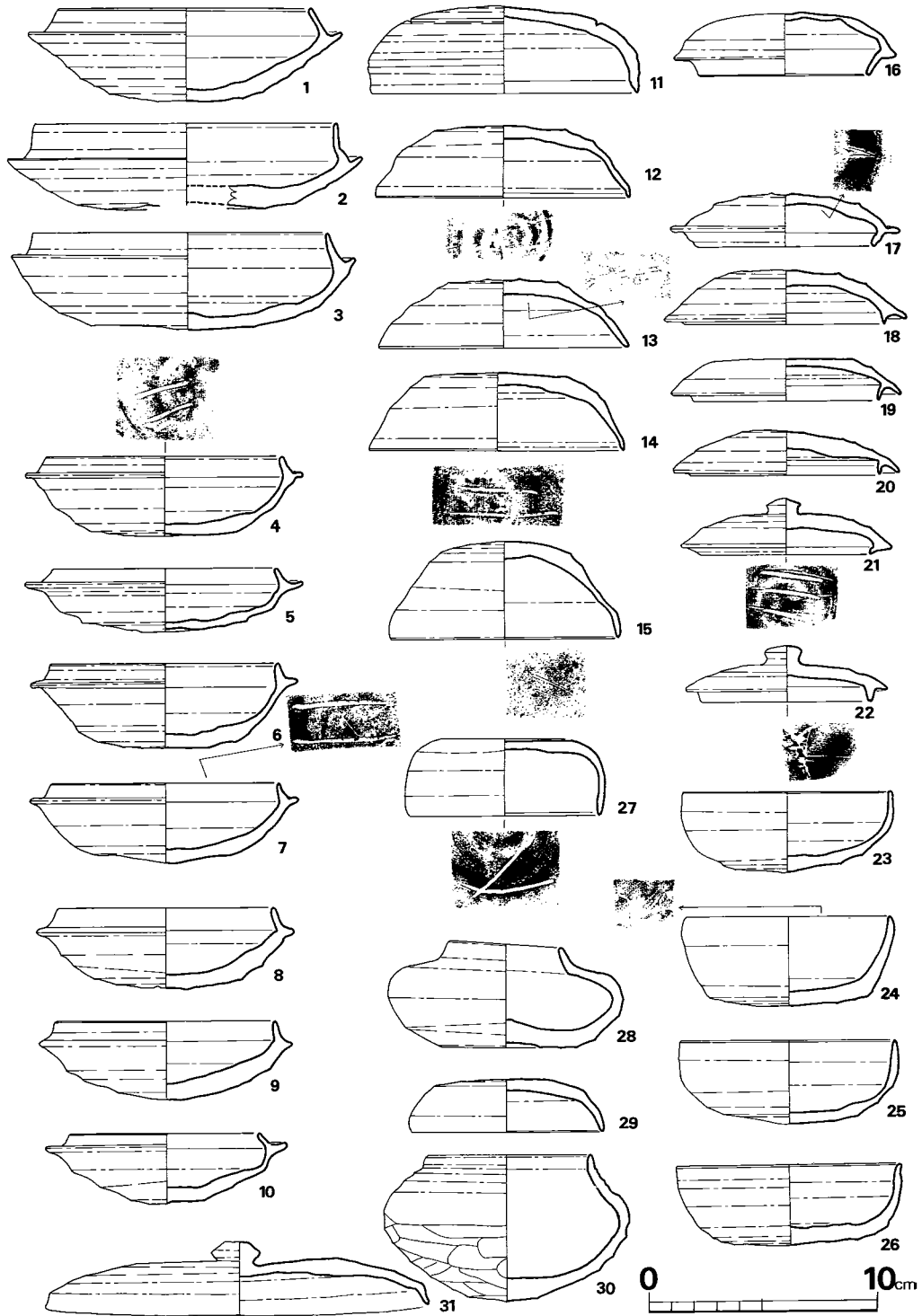


Fig. 60 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

ロクロの回転は右方向である。

II類 (12~15) 古式の特徴が取れたものである。

II a類 (12~14) 13, 14は墓道黄褐色土内より出土。口径11.0~11.2cm, 器高3.0~3.2cmである。天井部はヘラ削りが行われ、体部から口縁部にかけて開き端部は尖りぎみである。ともに内面に同一のヘラ記号を有する。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

II b類 (15) 玄室内攪乱土中より出土。口径10.0cm, 器高4.3cmである。天井部は狭い範囲にヘラ削りを行っており、調整はa類に比べると粗雑である。色調は黒灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。内面にa類と同じヘラ記号を有するが、入れ方等から見ると同一に付したものではないと思われる。

III類 かえりを持つ蓋になる。

III a類 (16, 17) 身の可能性のある土器である。ともに墓道黒色土内から出土。16は口径9.8cm, 器高2.8cmである。17は口径10.2cm, 器高2.4cmである。ともに天井部をヘラ削りに仕上げているが、16は手持ちによるもので丁寧に仕上げている。17は回転ヘラ削りにより雑に仕上げているため、若干凹凸をなす。立上りはともに高く内傾する。16は茶褐色を呈し、焼成は不良である。17は紫青色を呈し、焼成は良である。胎土はともに砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。

III b類 (18~20) 墓道黒色土内から出土。かえりは短く直立ぎみになり、端部は鋭角ぎみである。口径10.5cm内外, 器高2.0cmである。天井部はヘラ削りを行っているが、19は手持ちによるものである。18は黒灰色, 19は暗灰色, 20は灰黒色を呈する。焼成はともに良である。胎土もともに砂粒子を多量に含む。

IV類 (21, 22) つまみの付く蓋になり、かえりは退化ぎみである。ともに墓道黄褐色土内より出土。21は口径9.4cm, 器高2.5cmであり、かえりは内傾する。22は口径9.8cm, 器高2.5cmであり、かえりは直立する。ともに天井部はヘラ削りを行っている。21は灰黄色を呈し、22は黄灰白色を呈し、焼成はともに不良であるが、22のほうがより悪い。胎土は小砂粒子を含む。ともに内面にヘラ記号を有する。

V類 (31) 墓道より出土。口縁部かえりは消失し、高台付塊とセットになるものである。口径16.9cm, 器高3.3cmである。天井部は手持ちによるヘラ削りを行っている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好で胎土は砂粒子を含む。

坏身 (1~10, 23~26) 蓋の分類と平行してI~IV類に分けられる。

I a類 (2, 3) 2は墓道より出土。ろを欠損する。立上り高は1.8cmと高く内傾して途中から立つ。3は口径12.9cm, 器高4.3cm, 立上り高1.1cmである。底部は広範囲なヘラ削りを行っているが、粗雑な調整である。ともに灰色を呈し、焼成は良である。胎土は2は小砂粒子

を含み、3は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

I b類(1) 墳丘内より出土。口径11.2cm, 器高4.1cm, 立上り高1.2cmである。立上りは内傾し底部は丸く、a類よりも丁寧なへら削りを行っている。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

II類 立上りは内傾し、口径、器高ともに小形になる。

II a類(4, 6, 7) 4, 6は墓道黒色土内、7は墓道より出土。口径10cm, 器高3.5~3.8cm, 立上り高0.7cmである。受部端外面は凹状をなす。底部はへら削りを行っている。内面には蓋II a類にみられる一連のへら記号を有する。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

II b類(8, 9) 口径9.4~9.8cm, 器高3.5cm立上り高1.0cm弱である。立上りは短く直立きみで、受部も短い。底部のへら削りはa類よりも広範囲である。9は手持ちによるへら削りを行っている。8は暗茶褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。9は暗紫青色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

II c類(5, 10) 蓋の可能性のあるものである。5は墓道黒色土内、6は黄褐色土内より出土。口径7.5~8.2cmであり、器高2.8~3.1cm, 立上り高0.6cmと小形になる。立上りは直線的に内傾し、受部は他の類に比べると長い。底部は荒いへら削りにより凹凸をなしている。ともに灰青色系を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。以上II類のロクロの回転は右方向である。

III類(23, 25, 26) かえりを持たない塊形の形態になる。23は墓道黒色土、25, 26は墓道内より出土。23, 25は体部から口縁部にかけて内湾ぎみに直立するが、26は口縁端部近くで外反する。23は灰褐色、25は暗褐色、26は灰黒色を呈し、焼成はともに良である。胎土もともに砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。

IV類(24) 墓道黄褐色土内より出土。口径9.1cm, 器高4.6cmである。底部は平坦である。色調は灰白色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。蓋IV類22と同一のへら記号が内面に見られる。

蓋(27) 口径4.4cm, 器高3.4cmである。天井部は手持ちのへら削りを行って平坦である。内面にへら記号を有する。色調は淡赤褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

壙身(32) 口径10.0cm, 器高5.5cmである。底部から体部にかけて広範囲なへら削りが見られる。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

埴蓋(29) 墓道より出土。口径4.4cm, 器高2.3cmである。天井部はへら削りを行っている。色調は暗灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。

埴身(28, 30) 28は墓道黒色土内、30は黄褐色土内より出土。28は口径5.0cm, 器高4.6cm, 胴

部最大幅10.4cmである。底部は凹状をなし器肉が厚い。底部はへら削りを行っている。胴部は肩が張り扁平な形をなす。色調は黄灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。30は口径7.2cm、器高6.4cm、胴部最大幅10.8cmである。胴部下半は手持ちのへら削りが行なわれ底部は若干尖がりぎみである。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

無蓋高坏(33) 墓道より出土。口径9.8cm、器高8.1cm、脚裾径7.2cmである。坏底部と体部の境に沈線が入り、口縁部にかけて直線的に開く、脚部はラッパ状に開き裾は単純に仕上げている。脚中央にラセン状の沈線が回る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。坏底部のロクロの回転は右方向である。

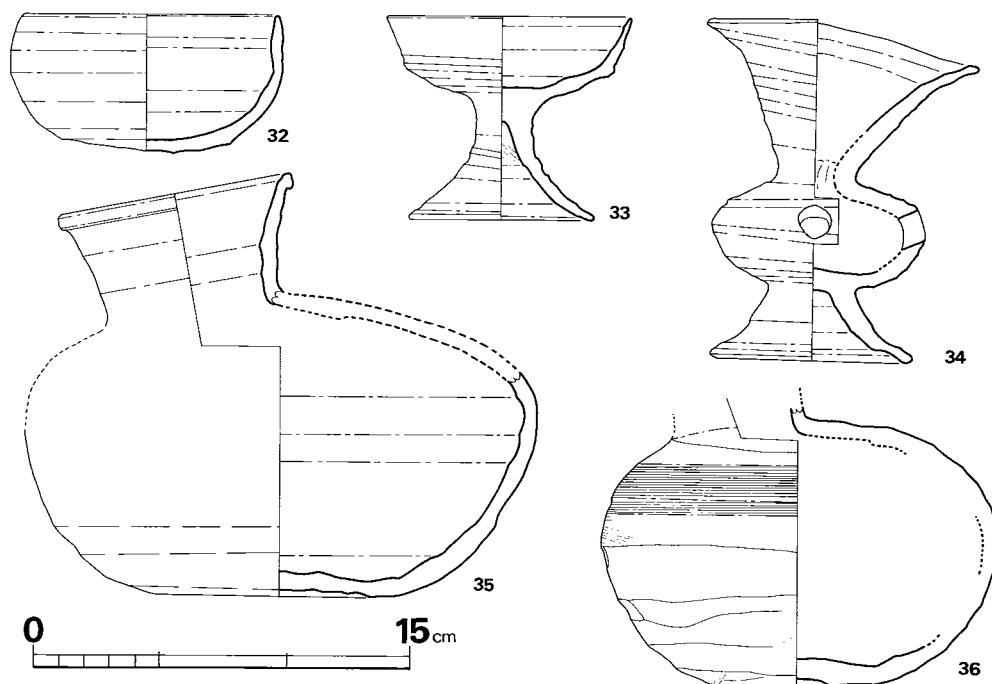


Fig. 61 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(2)(縮尺1/3)

台付甕(34) 口径11.0cm、器高13.6cm、台部高3.1cm、裾径7.6cmである。頸部はゆがんでいるがラッパ状に開いて屈曲して口縁部に続く。胴部は扁平な球形を呈する。底部はへら削りを行っている。色調は暗灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。

平瓶(35・36) 35は墓道黒色土内より出土。脚部上半を欠損している。口径9.4cm、器高16.8cm(推)である。胴部下半は手持ちによる粗いへら削りを行っており、他は横ナデ調整である。色調は灰黒色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。36は墓道から出土、

口頸部を欠損する。現高11.0cmである。胴部上半はカキ目調整を行っており、下半は広範囲に手持ちのへら削りを行っている。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

**甕 (37)** 墳丘裾及び、玄室内攪乱土中より出土。底部を欠損する。口径25.1cm、器高52.1cm(推)、口頸高5.2cm、胴部最大幅45.5cmである。口頸部は短く著しく外反し、口縁部外面は肥厚して、下端には鋭い沈線が入る。胴部は肩が落ち卵形を呈する。外面は平行叩きの上をカキ目調整を行っている。内面は同心円文状の叩きが入っている。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

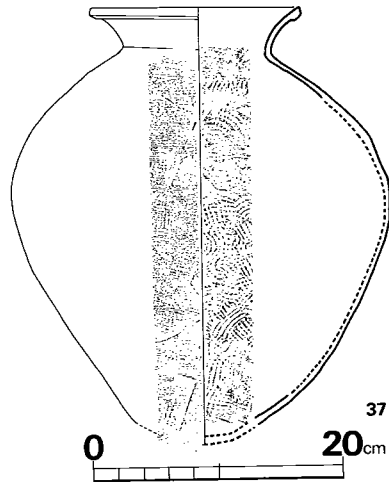


Fig. 62 汐井掛第9号古墳出土須恵器実測図(3) (縮尺1/6)

**土師器 (Fig. 83, PL. 85-(1))**

**高坏脚部 (1, 2, 3, 4)** 4個体とも坏底部から脚部にかけての残存で、全容を知り得ない。しかも器面剥落が著しく調整は不鮮明である。外面は縦位のへら削り、内面はシボりとへら削り(4)がある。色調は赤褐色を呈すが他は黄褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は2は小砂粒子を含むが他は砂粒子を多量に含む。

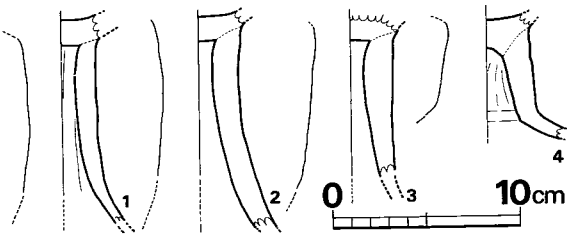


Fig. 63 汐井掛第9号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)

(渡辺健二)

**耳環 (Fig. 14, PL. 85-(2))** 小さいもの4個と大きなもの5個の計9個で、いずれも残りは良い方である。小形の1・3・6・7は径ほぼ2cmで正円形、断面形は約0.4cmである。大形の2・4・5・8・9は径ほぼ3cmの正円形、断面径ほぼ0.7cmであり、いずれも突き合せは狭ましく対面している。

**丸玉 (Fig. 64, PL. 85-(3))** ガラス製で風化がひどく31個ある。断面が扁平なものと、円形なものがあり、円形は13・14・15と数は少ない。径1cm前後、厚さはより扁平なもので0.2cm、大きいもので1cm程であり、孔径は0.2cmから広いもので0.5cmぐらいである。

**鉄鎌 (Fig. 65, PL. 85-(4))** 5本あって2類に分けられる。1・4・5は、円頭斧箭式で、2は錆がひどく形状は察しえない。3は三角形の尖根式である。1は完存品で全長11cmであり、最大幅2.6cm、茎の断面は方形である。5は先端部を欠くが円頭斧箭式とした。

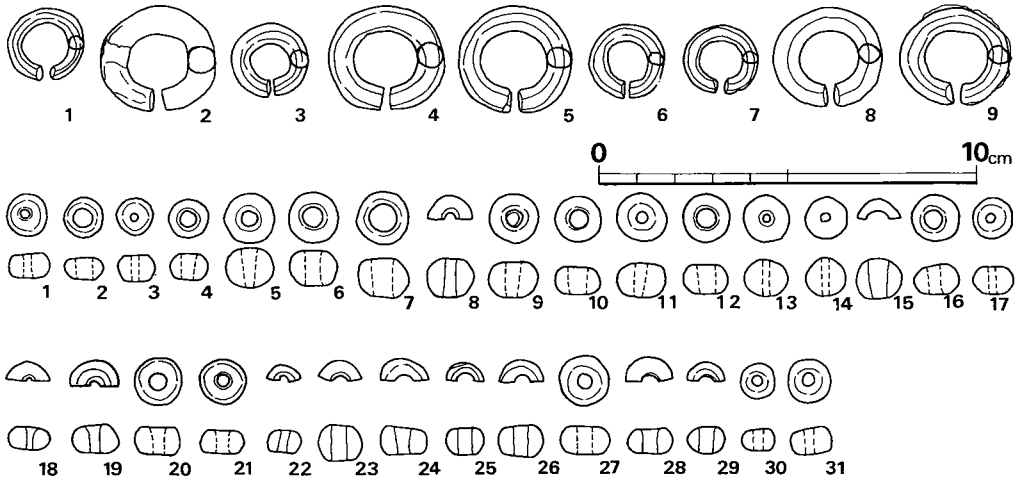


Fig. 64 汐井掛第 9 号古墳出土耳環・丸玉実測図 (縮尺1/2)

**留金具** (Fig. 65-7, PL. 85-(4)) 馬具の尾錠であろう。完形品であり帯を通す部分は方形で受けの部分が尖っている。刺金は先端がやや太く尖り断面は方形に近い。取り付け部は錆で不明である。基部は直線である。

なお、鉄器のうち 6 は錆がひどく形状が判明しなく不明品としなければならない。

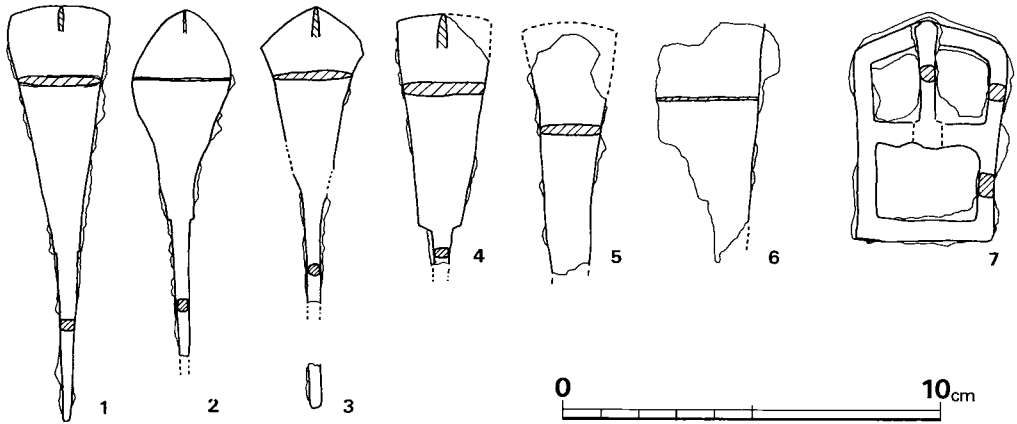


Fig. 65 汐井掛第 9 号古墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

5) まとめ

汐井掛古墳のE群中では屋根の稜線より若干低い位置にあり北方の第10号古墳と並列してある。地山整形による溝の造り出しや墳丘基盤の整形は大規模に行われていて墳丘の大きさは径

約10cm、高さは盗掘されていて天井石などはないが推定すると約2.0mと思われる。石室掘り方は2cmもあり深い。

石室は複室の横穴式石室で斜面下方に開口するが、丘陵傾斜面とは直交してなく南方に寄っている。玄室の平面は長方形であるが、やや正方形に近く長さが幅に対して短い。奥壁の鏡石は2枚である。玄門部は柱状の石材で明確に隅角を示し、前室の平面も正方形に近い石室主軸に対して横に長い長方形である。前門部の袖石は柱状の石材を立てる。羨道部は「ハ」の字に開く。

出土遺物は玄室・前室より多くの玉類、鉄器が検出でき一部埋葬された人骨も遺存している。葬法を推定すると人骨は一部集骨されたようであり、耳環が9個出土したが原位置を保っているものは少ないと思われるが、かなりの追葬を認めざるを得ない。奥壁側は頭部を南方の左側に、玄門側にも差し違いに埋葬されたと思われる。

土器は玄室攪乱土中と墓道内より多くの須恵器が出土している。墳丘盛土内や墳丘裾部にはほとんど見られず墳丘表面直下に若干のものをみただけである。墓道は時間的制約の関係で詳細に調査できなかったが、出土遺物を見ると追葬の様子が伺われ、玄室内の埋葬状況と一致する。

出土須恵器の時期は坏蓋、身をI～V類に分けたが、I類をⅢ-B期、II類をⅣ期、III類をⅣ～Ⅴ期、IV類をⅤ期に比定し、さらに高台付塚とセットになる蓋V類をⅦ期に比定する。II類以降になると土器に規格性がみられ、しかもII a類においては蓋と身に同一のへら記号を有していることが注目されるが、反面胎土に粗さが目立ち、成形、調整等が簡略化する傾向になる。III類は蓋が身の逆転する時期にあたり、IV類になると蓋にツマミが付き、身はIII類のものに比べると器肉が厚くなる。塚身、台付塚、冢身、蓋も器形の小型化、胎土の粗さ、成形、調整の簡略化等から見てⅣ期に比定されると思われる。

当古墳は汐井掛古墳群中でも追葬の状況を玄室内の残存遺体や遺物、墓道の出土須恵器などにより明らかにすることができた数少ない古墳であり、墳丘内より出土遺物がないため築造の時期はわからないが初葬はⅢ-B期の6世紀後半からで、その後追葬が数回行われ、8世紀初めまで使用されていたと考えられる。

(上野精志)



## 10. 第10号古墳

## 1) 立地

(Fig. 22, PL. 36~38)

第10号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。南方が第4号・5号・6号・7号・8号・9号古墳と丘陵斜面に並んでいるその北方で、この一群では最北端に位置するものである。汐井掛の丘陵で一番高所の第11号古墳の直ぐ東側の斜面であり標高76~74mのところにある。遺存が悪い。

発掘前の見かけの規模は東西径9m・南北径8.5mの長円形で、東側からの高さ50m内外で、表土より若干高いとみられるものである。

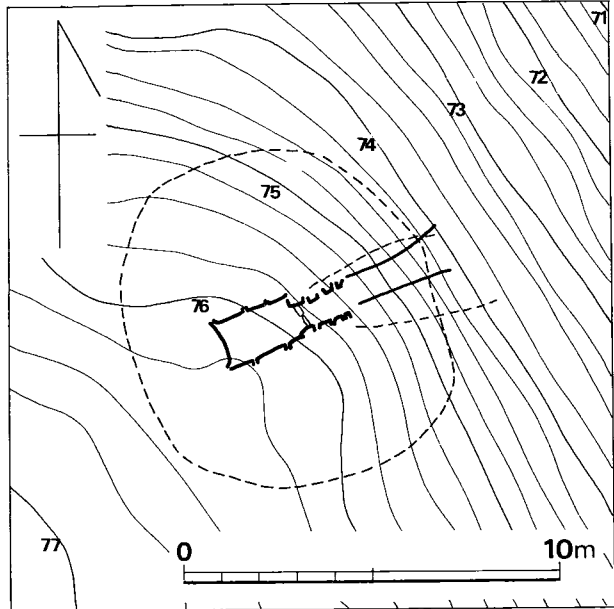


Fig. 66 汐井掛第10号古墳地形図 (縮尺1/200)

## 2) 墳丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 66~68, PL. 86~88)

発掘前には明瞭に地山整形や溝などは見られなかったが、表土層を剥ぐとやはり第1号~第9号古墳と同じように丘陵斜面上方にだけ地山整形による溝が検出された。上幅1m弱であり半月状に巡る。溝を造り出していない下方の墓道寄りには墳丘基盤造り出しだけである。

## (2) 墳丘盛土 (Fig. 24, PL. 88)

石室は地山深く穿たれた墓坑内に構築されており、地形整形による墳

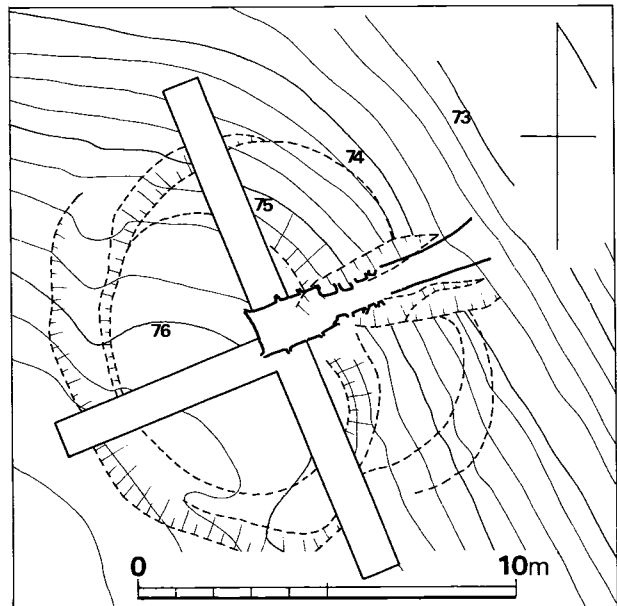


Fig. 67 汐井掛第10号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

丘を造り出している関係上より墳丘盛土は最小限上部を覆う程度であり PL. 88 のようである。石室掘り方の埋土は丁寧に版築している。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 25, PL. 87・88)

本古墳の内部主体は、主軸を N67 度 E にして、略東位に開口する単室の横穴式石室である。玄室の平面プランは不整長方形を呈し、長さは 2.1 m、幅は奥壁部で 1.20 m、横口付近で 1.05 m である。

周壁は基部に奥壁と左側壁には比較的大きめな石を腰石としているが、右側壁は前者に比して小さな石を使用し、横口付近の腰石にいたっては貧弱である。腰石の上に 5～7 段目の石積みで天井石となる。その構築手法は必ずしも精良とはいえない。持ち送りは、奥壁では、1.4 m で 0.55 m の傾で送られている。左側壁は腰石から 4 段目まではほぼ垂直であるが 5 段目から 65 cm で 80 cm とほぼ 45 度に近い角で持ち送られている。右側壁にいたっては横口付近の腰石の弱点によって、その重さに耐えきれず、袖石を追いやる形で、力を分散しているが、その影響において柵石が中央部で「く」の字状に空き上かっている。この結果、右側壁はこわれる一歩手前であった。

石室床面には、敷石がみられ横口付近で卵大角礫を中心にしたものであるが、多少ぐらいから奥壁にいたっては人頭大の礫を使用して床を水平化している。

天井までの高さは約 150 cm 前後であったと思われる。横口寄りの天井石は、楣石を兼っており、高さ 70 cm を測る。

横口部では、幅 0.54 m あり床面には厚さ 20 cm の仕切石を置いている。

羨道部及び墓道の長さ 3.00 m 先端部に近づくにつれて低くなっていく。掘り方の範囲だけについて側壁に石積みされ 1.30 m あり、これを羨道部と考え、他を墓道と考えられる。

石室の大きさは墓壇すなわち掘り方の大きさに規定されるわけで、隅丸方形のプランで、袖石を置く横口部の位置を非常に意識している。

羨道部には玄室入口の仕切石から 80 cm 外側に仕切石がありこの間の床面には人頭大の石が敷かれており中央部で幅 55 cm をはかる。この羨道部の仕切石は墓壇の掘り方の線に一致する。こ

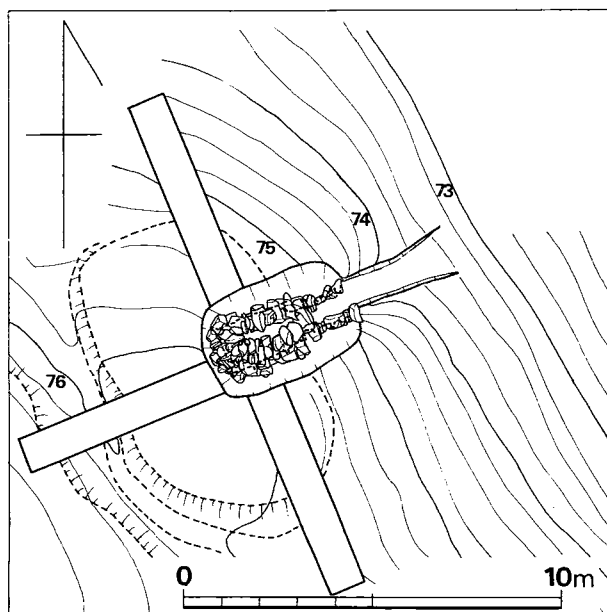


Fig. 68 汐井掛第10号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

の仕切り石によってほぼ石室内部が規定されるのである。奥壁から3.10，羨道部の仕切り石から墓道は3.15mでほぼ墓道と羨道及び玄室は同等の値を表わす。

閉塞石は羨道部と墓道の境界に4段をもつてつくられているが閉塞状態は良好である。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 25, PL. 89-1)

墳丘基盤の中央部よりやや斜面下方に下った位置に墓坑がある。隅丸長方形であり長さ4.10m，幅2.80m，深さは奥壁方で1.70m，羨門方で1mである。床面は水平でなく玄門部が若干凹む。壁は奥壁方が斜めに下るのではなく中程が折り込んでいて玄室奥壁の腰石は外端が接するようになる。両側壁方は石室の側壁石と掘り方の壁面とはかなりの隔りがあり裏込めがみられる。石室の腰石を据えるために各腰石下には大きな凹地をつくり固定している。この際の根石はあまりみられない。又，裏込め石もあまり使用されていないようである。

## 4) 遺物

### (1) 出土状況 (Fig. 25)

遺物の出土状態は鉄刀が奥壁床面上にあり左側壁に壁側に坏蓋と右側壁に沿って土師器，埴と須恵器の坏とが出土している。

(副島邦弘)

### (2) 出土遺物 (Fig. 69~71, PL. 89-2)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	2個体以上
	甗	1個体
	壺	1個体
	土師器	2個体以上
	埴	1個体
	埴	1個体
(2) 武具	鉄刀	1個

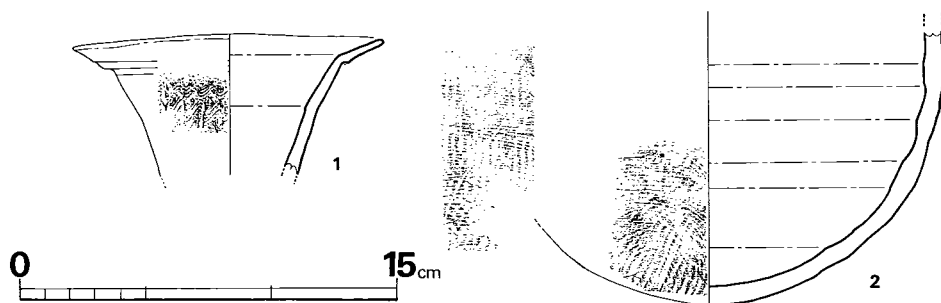


Fig. 69 汐井掛第10号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

**須恵器** (Fig. 69, PL. 89-(2))

甗 (1) 口頸部のみ残存。口径12.3cmである。頸部に楕円波状文を施す。色調は黒灰色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

壺 (2) 墓道より出土。底部のみを残存。外面は平行叩きを行いカキ目調整で仕上げている。内面には同心円文状の叩きが見られるがナデにより消されている。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。外面にヘラ記号を有する。

**土師器** (Fig. 70, PL. 89-(2))

碗 (2) 墓道より出土。口径12.9cm, 器高5.2cmである。底部は器面剝落のため調整不明である

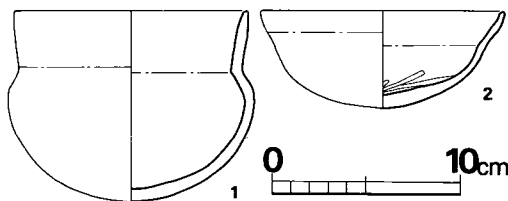


Fig. 70 汐井掛第10号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)

が、口縁部はナデにより仕上げられており、内面には放射状暗文が見られる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

埴 (1) 口径12.4cm(推), 器高10.1cmである。器面剝落が著しく調整は不明であるが口縁部にヘラ磨きの痕跡を残す。色調は赤褐色を呈し焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

(渡辺健二)

**鉄刀** (Fig. 71, PL. 89-(2)) 両端を欠損しており残存長26.5cmである。両関式で刃部の断面は二等辺三角形を呈し、背は広い。茎部は目釘孔があって目釘がよく残り、縁金具も比較的残りがよい。

## 5) まとめ

第4号から当古墳の第10号まで7基のE群では最も北方に在り、第9号古墳とは1基が離れて在る。汐井掛古墳中では天井石の一部が遺存する唯一の例であり、墳丘径は9mで墳高は地表より僅か1m程である。これは石室掘り方が深く、天井石まで掘り方内に架構されているためである。

遺物は石室内より鉄刀と若干の土器類が出土している。他に玉類の装身具等はみられない。時期的にはE群の古墳と同時期であろうと考えられるが、この一群では最も北方に一つだけ離れてあり、他の古墳との隣接関係や、出土遺物及び石室構造等よりして、E群の古墳の内では古く位置付けられる。6世紀後半でもやや古い時期の年代が与えられよう。(上野精志)

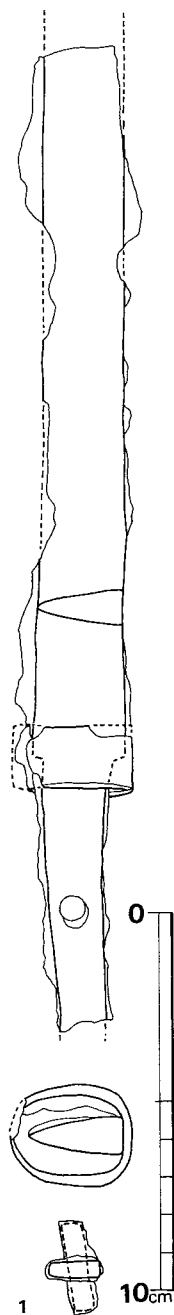


Fig. 71 汐井掛第10号古墳出土鉄刀実測図 (縮尺1/2)

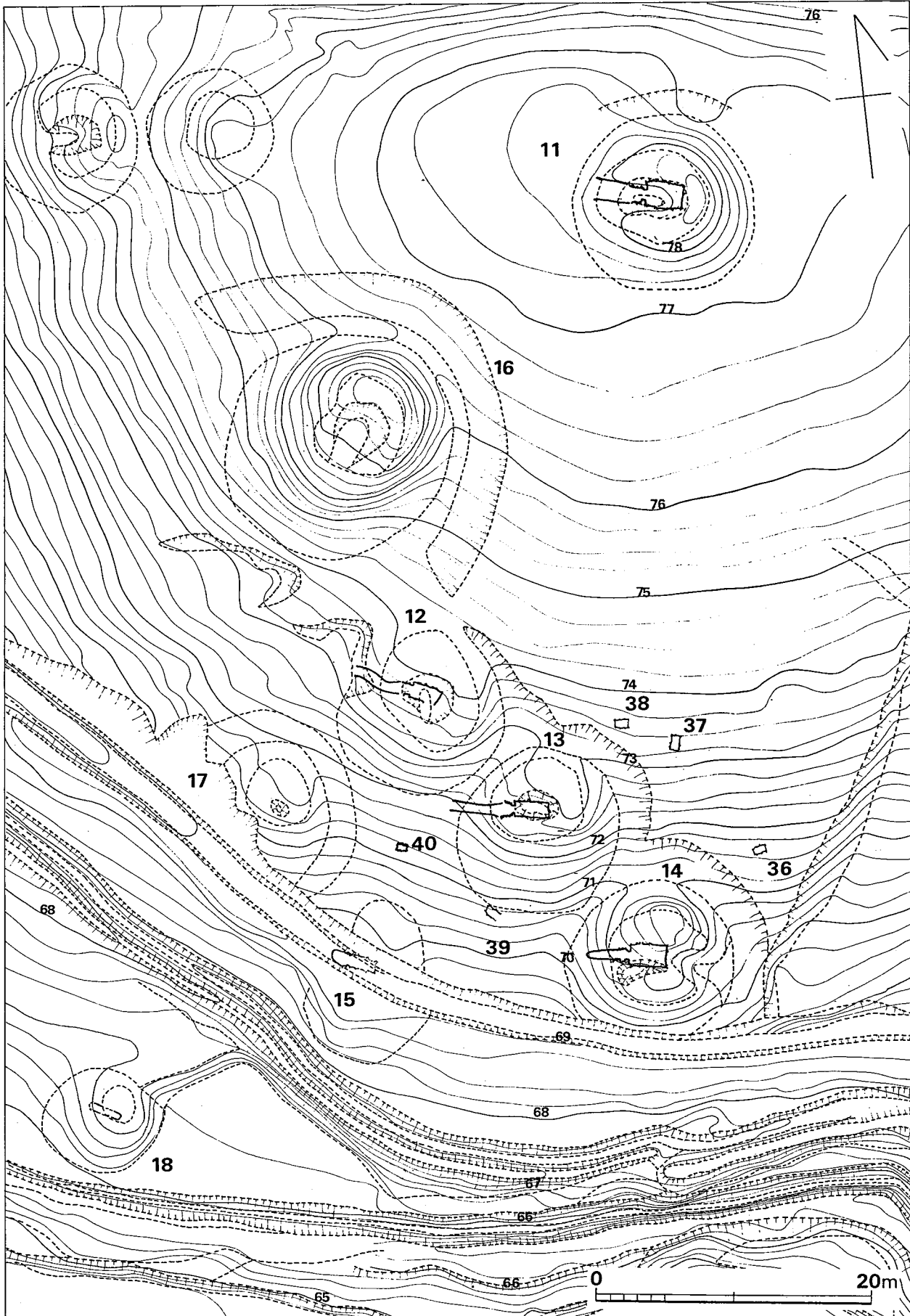


Fig. 72 汝井掛第11号・第12号・第13号・第14号・第15号・第16号・第17号・第18号・第36号・第37号・第38号・第39号・第40号古墳周辺地形図（縮尺1/400）

## 11. 第 11 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 90・91)

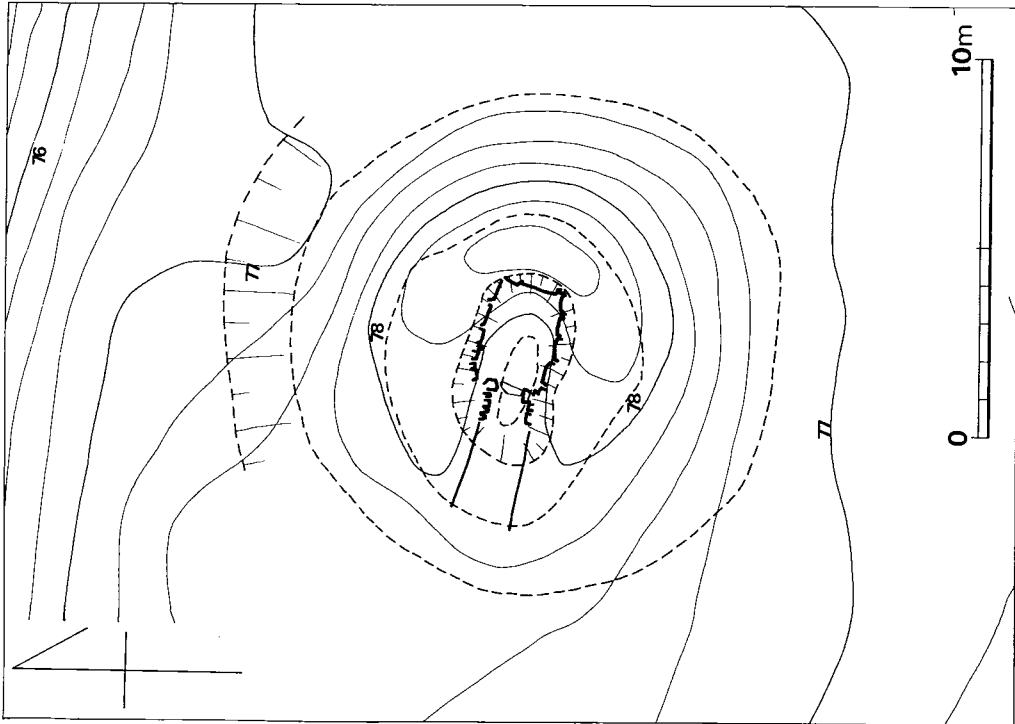


Fig. 73 汐井掛第11号古墳地形図 (縮尺1/200)

第11号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。汐井掛の丘陵の最頂部に位置し、距離的には第4号から第10号古墳の北東斜面に位置するE群に最も近いが、頂部にあることや、開口部は西向きでE群とは違い西側尾根に下がる第12号から第17号古墳のB群に含まれるものであろう。

現状は墳丘がある程度残り、その最頂部は標高78.5mを示す。西側羨道部側より玄室にかけて、盗掘等による凹孔がみられ、天井石・側壁上部が抜き取られている。周溝の溝状部が北側にみられ、また、裾北端にも盗掘によるかと考えられる窪地がみられる。

## 2) 墳 丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 73~75. PL. 92・93)

尾根頂部の狭い平坦面に、墳丘下へののみ旧表土層を残して造営しているところから、墳丘周縁を主として地山整形地業を行っていると考えられる。即ち、Fig. ⑳にみられる如く、厚さ20~25cmの比較的厚い旧表土層は、石室中心から四方へ傾斜しており、その旧表を縁辺近くで斜め

に削除し、その端部は裾部より若干内側で止まる。旧表土とともに、地山（ローム層）の観察を行うと、やはり石室中心部がほぼ原地形の頂部であったことがわかり、古墳造営に際して意識して厳密に占地を行ったことが明瞭である。地山整形は、西半分で周溝を削り出しており、東側半部即ち奥壁側裾部においては、調査の限りにおいては周溝状の削り出しはみられない。墳丘盛土後の裾部と、地山整形の裾部とはほぼ一致しており、東西径11m、南北径11.5mを測る円形をなす。

(2) 墳丘盛土 (Fig. 26, PL. 93)

現存表土を剥いだ状態がFig. 26である。これによると現存頂部から裾下部まで1.4mを測る。盛土は、中心部即ち玄室の構築に従って、より密に版築状に既して黄褐色系と暗褐色系の土を交互に積み固めている。中心から離れるに従って、玄室寄りと異なり、大まかに盛土を行う。盛土後の墳丘径等の規模は前述の如くである。ただ玄室積石の残存状況を見ると、天井石存在等から推定すると、現状より若干高い墳丘高であったと見做すことができよう。

3) 主体部

(1) 石室 (Fig. 27, PL. 94~96-(1))

本墳主体は単室両袖式横穴式石室で、主軸をN72度Eにとり、大略西側の尾根線方向に開口

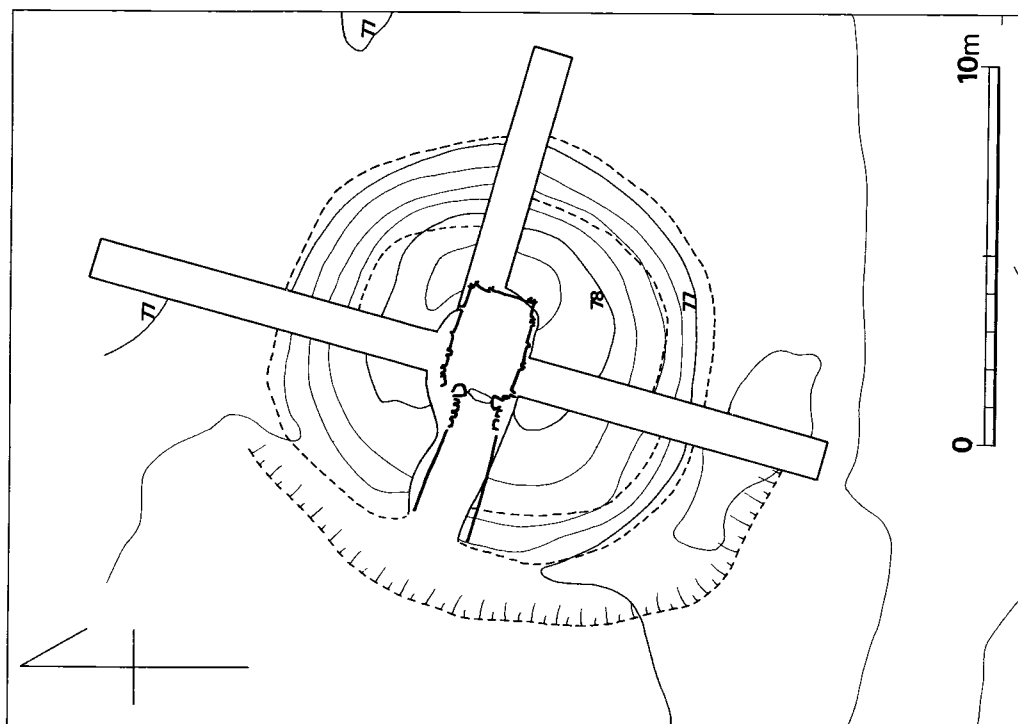


Fig. 74 汐井掛第11号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

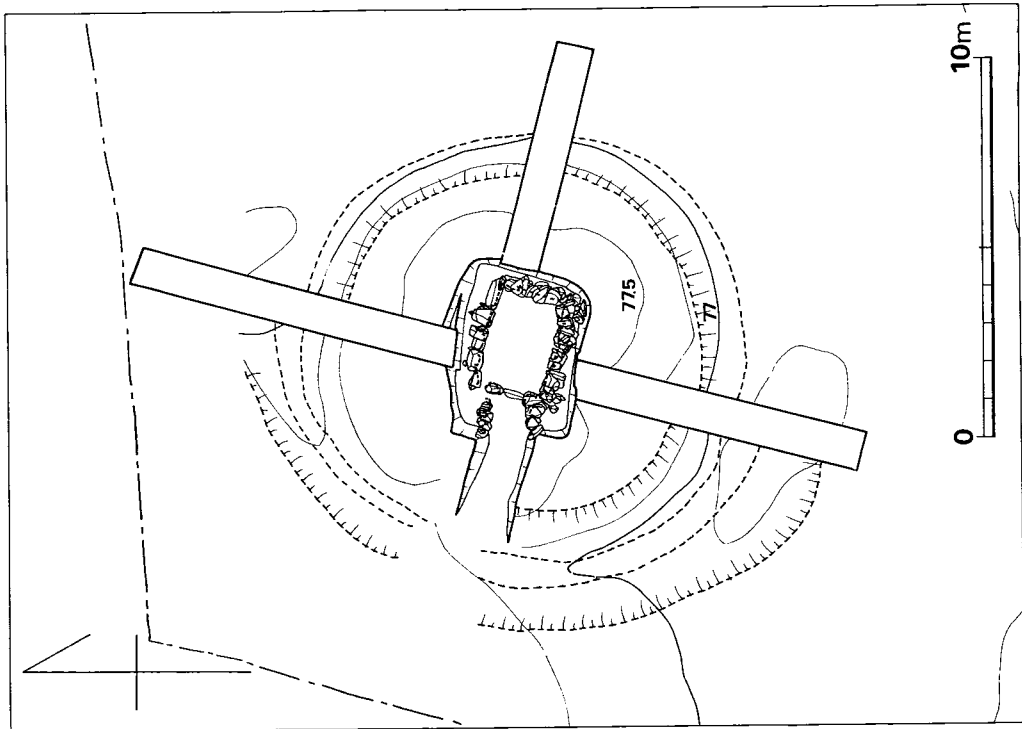


Fig. 75 汐井掛第11号古墳地山整形面測量図（縮尺1/200）

する。玄室床面プランは、幾らか胴張りの長方形をなす。

玄室各部の計画値は、長さ左壁壁2.60m、右側壁2.55m、仕切石端までで2.65m。幅は奥壁1.65m、中央部1.93m、前壁1.65mであり、腰石の現在高は1.3mを測る。腰石は、奥壁側で大小2個、左右側壁で各5個を据え、玄門袖石には縦位に高く各1個を用いる。右側では横位に低く腰石を据えるが、左壁では袖石寄りの2個が縦位に用いて様相が異なり、為に右壁では腰石上面がほぼ揃っているのに対し、左壁では2段目で高い方の腰石にならすように積む。

玄室内面の右壁と奥壁との境となる隅角部は明確に線状にのぼる。石積は重箱積みを基本としながらも大方で間隙に適應する大きさの石を、乱積状に積む部分も見られる。1段目以上では石材の小口を内面にむけて揃えており、小礫等を間隙に充満する。石材は殆んどを花崗岩が占め、青色軟質水成岩がそれを補う。

床面は奥壁寄りを除いて敷石が残る。15~20cm角程の板状に近い石を腰石際より敷きつめ、間に小礫を填める。

羨道部は短く、左壁で1.25m、右壁で0.8m、幅0.95mを測り、左右の積石は掘り方際で止まる。羨道部に該当する積石の下部は、玄室の如く地山にそのために掘り込みをするという腰石状の据え方の類ではなく、墓底から更に埋土をした上に石をのせるというような単に形式的に入口部を指定するというような感じを与え、1・3号等を含む支群や、4~10号の支群・19



## 11. 第11号古墳

～23号の支群のそれと全く異なる。12～15号の一群に最も近いものである。

墓道は羨道とほぼ同幅で直線的に2m強伸びて、地山を若干下げてつくられる。注意すべきは、墓道西端から玄門の梱石部まで墓道床面が高低差35cmほど傾斜しており、通有の後期群集墳横穴式石室のそれと異なる。墓道入口前面の地山等高線を観察すると、南へ即ち右側へ「墓道」が曲がって、17号古墳寄りの方向へ想定されようかとも考えられる。

閉塞は、良好な残存状況ではないが、板状石を袖石外に立て、その右に2個の塊石を充填する。注目すべきは、その板状石の玄門側に赤色顔料の塗布がみられることである。当墳玄室においては、側壁その他には朱等の塗布は全くみられず、また板状石の形状等により、当墳南側に群集する箱式石棺墓の蓋石をもって転用したものと考えたい。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 27, PL. 96-(1))

石室は地山を掘り込んだ墓壇内に構築されており、右・左壁長さがやや違い、右辺で4.7m左辺4.1m、幅3.3m前後の左右前面の墓道方が揃わない長方形プランの掘り方墓壇である。深さは奥壁で1m、玄門方で0.5mであり床面は水平でなく奥壁が深く、玄門方が浅い。

墓道も傾斜しており、墓道入口方が高く、玄門方が深い。このことは掘り方全体をみると墓道入口方より奥壁下にかけて傾斜していることである。

石室掘り方内の床面をみると、玄室腰石下は各腰石を安定させるために大・小の掘り込みがあり、とくに玄室内の方には多くの根石が用いられている。

掘り方の壁は奥壁側と右側はほぼ直になっているが、左側はかなりの傾斜をもって立ち上っていて腰石外端と壁の間も広い。

## 4) 遺物

## (1) 出土状況

石室内は既に盗掘されており遺物は何も発見されない。しかし、墳丘内より多量の須恵器高坏が出土する。

墓道の覆土中より須恵器高坏の蓋や脚部、さらに墓道左側方の墳丘裾部よりまとめて須恵器高坏が出土しており、右側壁西方の墳丘表土下近くに須恵器埴や、土師器の高坏があり、石室奥壁側の東方墳丘より土師器の高坏脚など墳丘中に多くの遺物が出土している。又南西方の地山整形による周溝状の削り出し部より須恵器坏身が出土しているがこれは墳丘裾部に在ったものかも知れない。

(中間研志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 76～79, PL. 96-(1)～99)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- (1) 土器 須恵器 20個体以上

Ⅲ 汐井掛古墳の調査

坏蓋	2 個体
坏身	2 個体
埴身	1 個体
高坏蓋	6 個体
有蓋高坏	8 個体
提瓶	1 個体
土師器	5 個体以上
高坏	3 個体
(2) 工具 たがね	1 個
鍬先	1 個

須恵器 (Fig. 76・77, PL. 96-(2)・97~99-(1))

坏蓋 (1, 4) I・II類にわけられる。

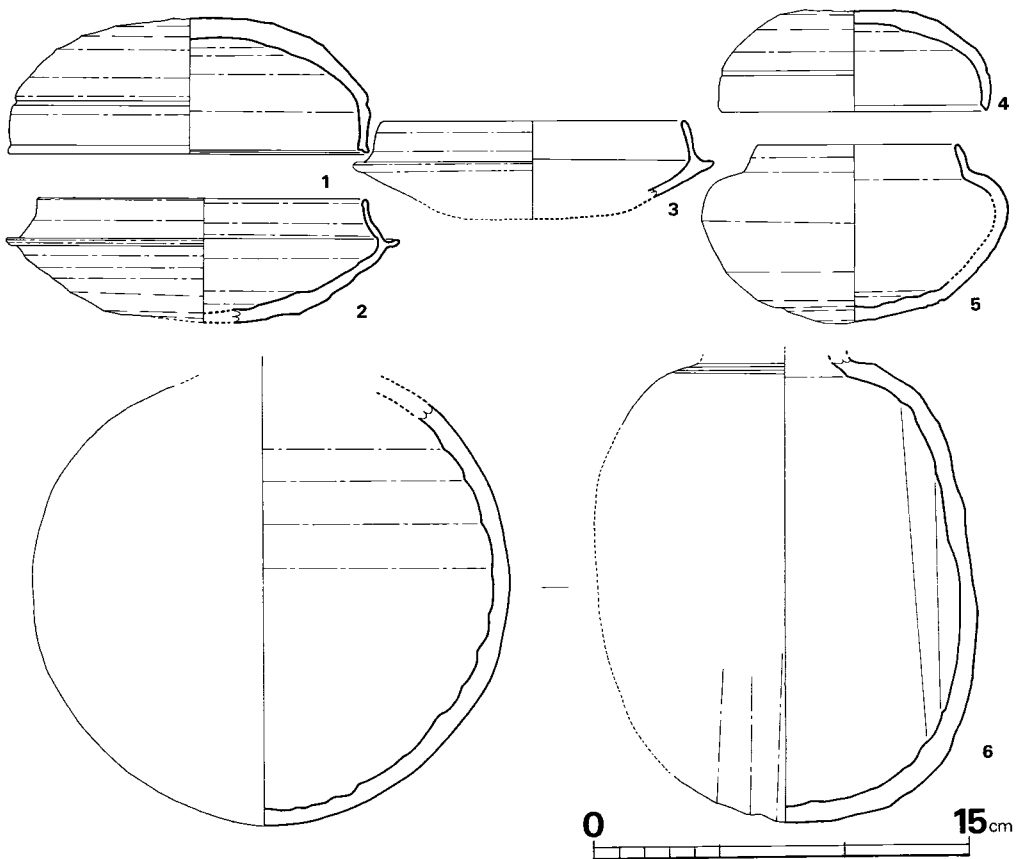


Fig. 76 汐井掛第11号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

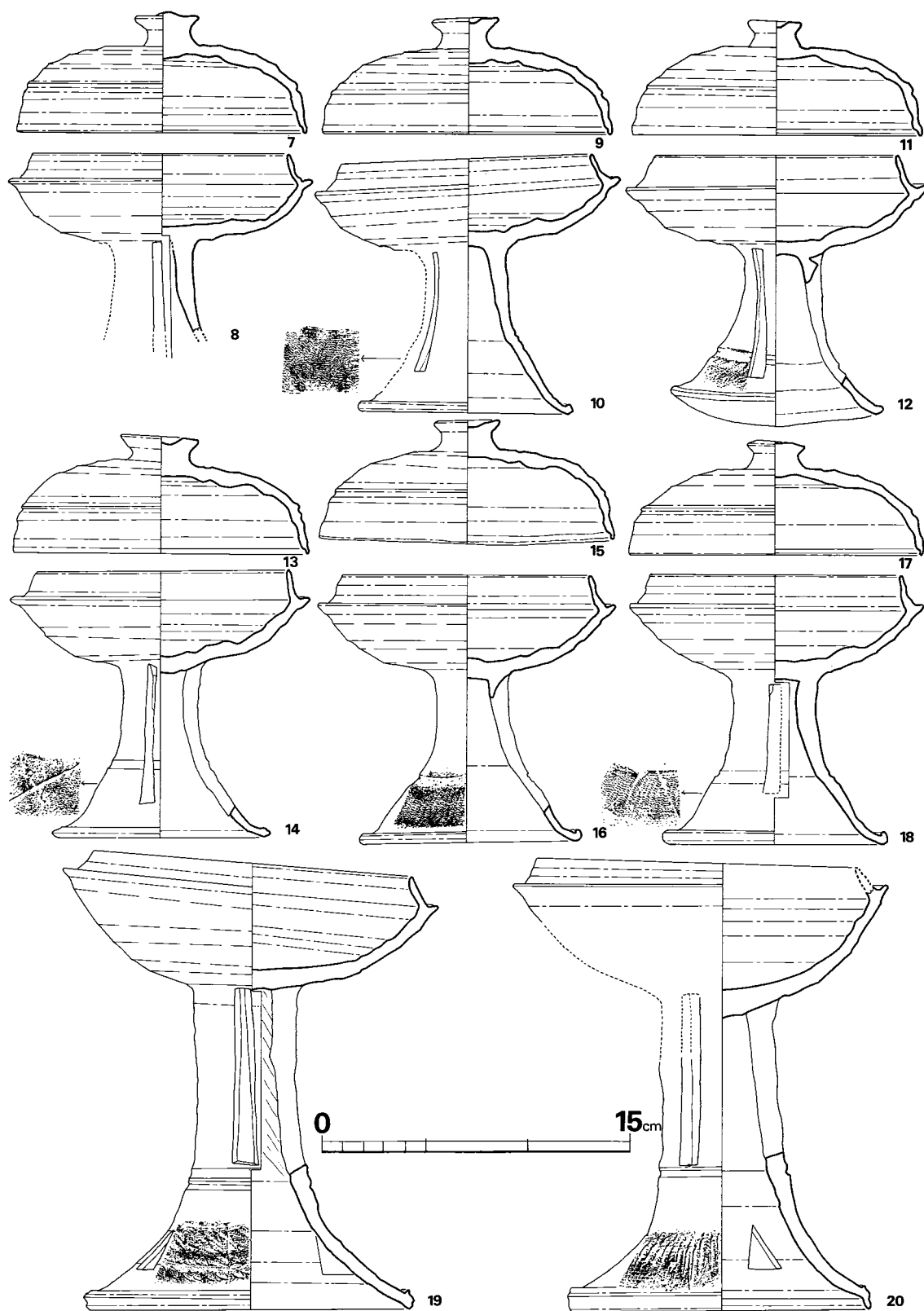


Fig. 77 汐井掛第11号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/3)

I類(1) 南東墳丘裾より出土。口径13.0cm, 器高4.7cmである。体部, 天井部の境は, 段というよりも沈線状に近い。口縁部は内湾ぎみに直立し, 端部近くで外反する。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

II類(4) 北西墳丘裾より出土。口径10.6cm, 器高4cmである。天井部, 体部の境は沈線が入る。色調は灰色を呈し, 焼成は良で, 胎土は砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は右方向である。

#### 坏身(2, 3)

I a類(2) 周溝内から出土。口径13.0cm, 器高4.9cmで有り, 立上りは1.7cmである。受部は薄く短い。立上りは内傾して途中で直立する。色調は灰黄色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

I b類(3) 北西墳丘裾より出土。%を欠損する。口径12.0cm(推), 有り, 立上り高は1.6cmである。色調は淡灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

高坏蓋(7, 9, 11, 13, 15, 17) 6個体とも同じ形態で7のつまみが若干違う。

北西墳丘裾及び墓道から出土。口径は14.2cm~14.4cm, 器高は6cm弱, 立上り高は1.5cm前後である。つまみの形態は凹状をなすが, 7は凸状を呈する。体部と天井部の境は鈍く, 沈線状になるものもある。色調は黒褐色をなすが, 7のみ灰黒色を呈している。焼成は良好, 胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

有蓋高坏(8, 10, 12, 14, 16, 18, 19, 20) 形態的にI・II類に大別出来る。

I類(8, 10, 12, 14, 16, 18) 北西墳丘裾及び, 墓道から出土。高坏蓋とセットになるものである。8は脚部を欠損している。口径は12cm前後, 器高は13cm前後, 立上り高は1.5cm弱で, 脚裾径は11cm弱である。坏部は坏身I a類と形態的に同一の様である。坏底部はヘラ削りを行っている。脚部は欠損している所もあるけど三方向に長方形透しを有する形態と思われる。脚部は中央に段, 及び沈線を有し, 広がり脚裾に続き, 櫛描状文が施されている。脚裾部は折るかえすもの(10, 16, 18)と, そのまま端部に至るもの(12, 14)がある。調整はナデにより仕上げられている。色調は黒褐色系統を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を混入する。ロクロの回転は右方向である。

II類(19, 20) 19は北西墳丘上, 20は南西墳丘上より出土。大形品であり, 脚部は長い。坏部はかなり広範囲にヘラ削りを行っている。脚部は筒形を呈し, 下方に2条の沈線を設け, 広がり脚部へ続く。沈線の上方に長方形, 下方に三角形の透かしとが三方向に千鳥に入り, 又下方には櫛描波状文を施している。脚裾は突帯をめぐらしている。色調は灰色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。19は口径15.6cm, 器高22.4cm, 脚高15.8cm, 脚裾径15.8cmである。20は口径15.7cm, 器高22.4cm, 脚高15.5cm, 脚裾径14.6cmである。

卍身(5) 墳丘裾より出土。口径8.0cm, 器高7.1cm, 胴部最大幅12.2cmである。胴部上半

は横ナデ、下半はへら削り他は横ナデにより仕上げられている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

提瓶(6) 北西墳丘裾より出土。口頸部を欠損する。現高は18.4cm, 胴部最大幅18.9cmである。背面は肥

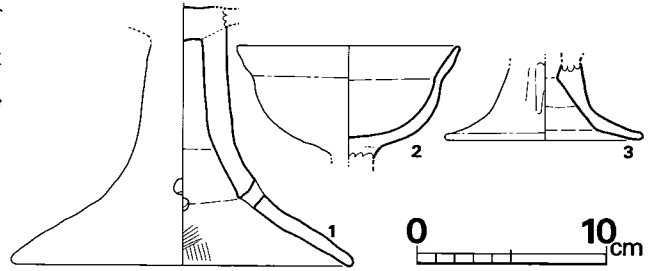


Fig. 78 汐井掛古墳第11号古墳出土土師器実測図(縮尺1/4)

厚している。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

**土師器** (Fig. 78, PL. 99-(1))

高環(1, 3) いずれも坏部を欠損して全容は不明である。1は脚高18.2cmであり, 3方向に円形の透かしが入る。外面は器面剝落が著しく調整は不明であり, 内面は横位のへら削りとハケ目調整を行っている。色調は赤褐色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。3は墳丘内より出土し, 小形品である。外面は縦位のへら削り, 内面は横位のへら削りを行っている。色調は赤褐色を呈しているが, 赤が強く彩色を呈している可能性がある。焼成は良, 胎土は小砂粒子を含む。

台付埴(2) 西側墳丘内より出土。脚部を欠損し, 口径11.8cmを測る。器面剝落が著しく調整は不明であるが, 口縁部内面にへら研磨の痕跡を残す。色調は赤褐色を呈し, 焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)

**たがね** (Fig. 79, PL. 99-(2)) 完形品であるが錆がひどい。全長24.0cm, 幅2.6cmで中央部がやや太い。長さに対して幅が小さいようである。

**鋏先** (Fig. 79, PL. 99-(2)) 鉄製で長さ6.6cm, 幅は刃部で8.3cm, 柄部で7.8cmであり, 全体的に正方形に近い形状で刃部の挿入部は直に曲り端部でしめつけていて, 厚さ0.35cm

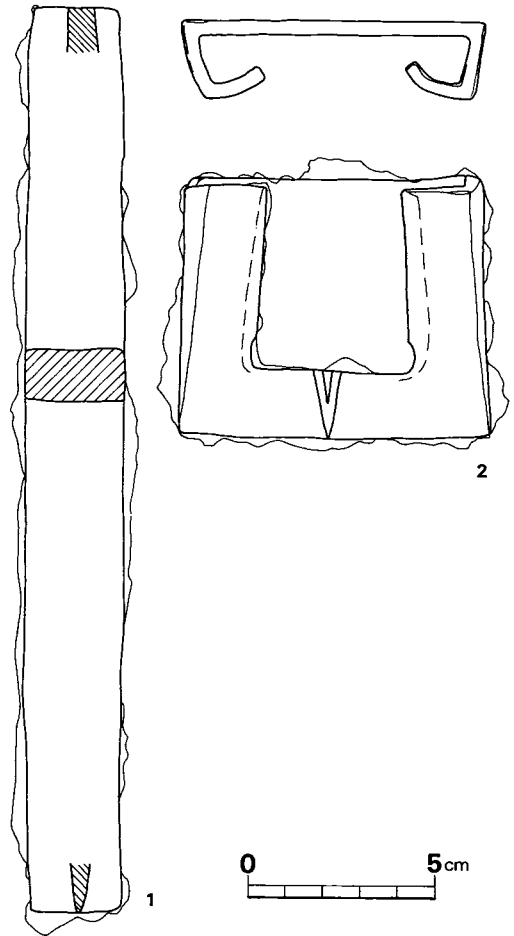


Fig. 79 汐井掛第11号古墳出土鉄器実測図(縮尺1/2)

である。

#### 5) まとめ

この古墳は汐井掛の丘陵の頂部に位置しており最も高所であって、他に丘陵稜線に立地しているものは一つもなく本古墳の位置は注目される。第11号より第17号までをB群とする。

墳丘の大きさは径11.5mで高さは約2.0m前後と推定される。旧表土面の最頂部に石室掘り方を掘り込んでいて墳丘基盤面には旧表土層が若干残り、周辺は大きく地山整形作業を行い周溝や墳丘裾部を造り出す。掘り方はあまり深くなく1mである。床面は墓道より奥壁に向けて下降している。

石室は単室の横穴式石室でやや胴張りの長方形プランであり、両袖型である。羨道部は短く形式的であり墓道は地山を若干掘り下げ玄室に向かって傾斜する。

主体部の構築における各所の指摘の如く、この古墳より南方に在る第12号から第17号古墳の一群(B群)に最も近い傾向をみせ、C群やE群の古墳とは違った様相を示す。ただ墓道の傾斜の在り方等において竖穴系横口式石室の傾向の中で、より影響が少ないものとみることができよう。このことは即ち、当古墳の占地とも併考して他群に対しては優越性を感じるにしても、B群の一群からするとやや一線を画さねばならない要素が存在するように考えられる。

出土遺物は石室より何一つ発見されず、墳丘盛土中や墓道左側(I区)の墳丘裾部より、特に裾部より多量の須恵器高坏が発見される。汐井掛古墳群中では高坏の多量出土は異常である。鉄器類ではたがねと鍬先が出土する。

須恵器はⅢ-A期でやや新しいものであるが6世紀の中葉頃の時期とされよう。

(上野精志)

## 12. 第 12 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 90・91)

第12号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。尾根最頂部の第11号古墳の南側斜面に、西へ開口する12~16号の支群が在る。調査分においてはそのうちでは最高位に位置する円墳である。斜面に位置するため、墳頂がかなり削平されたと推定されるもの下方からの見かけ上の墳丘現状はかなり高く、2m程である。石室部分が上から盗掘されており、全体に凹孔がみられる。墓道前面にも広く落ち込みをみせる部分があり、原因は不明だが、後世の削除と考えられる。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 80~82, PL. 100)

斜面に占地するため、主に上位の北半部において地山整形等の地業を行っている。即ち北トレンチにおいては、旧地表が玄室中心より3.6mで削られ、再び周溝を削り出している。南半裾部は、旧地表土層を削り裾線を確定している程度である。よって周溝は北半において馬蹄形状の溝となる。径12m程である。

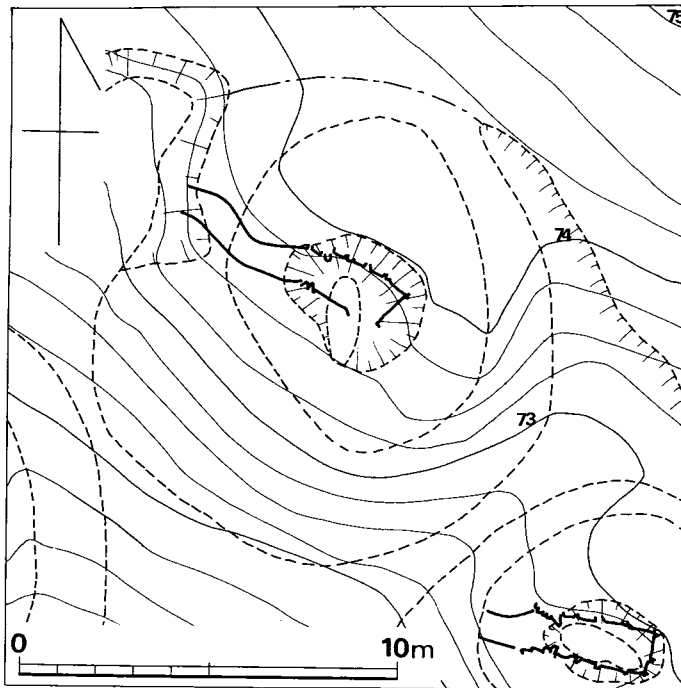


Fig. 80 汐井掛第12号古墳地形図(縮尺1/200)

#### (2) 墳丘盛土 (Fig. 28, PL. 101)

盛土は僅か一層分残るのみで、それも玄室寄りに密になるという様相でも無いようである。

周溝の北側から墓道側にかけて、床面近くに小礫が多量にみられ、礫群中から土器等の供献品がみられた。

### 3) 主 体 部

#### (1) 石 室 (Fig. 29, PL. 101・102)

本墳主体は、単室両袖式横穴式石室で、後述する如く、竪穴系横口式石室系の

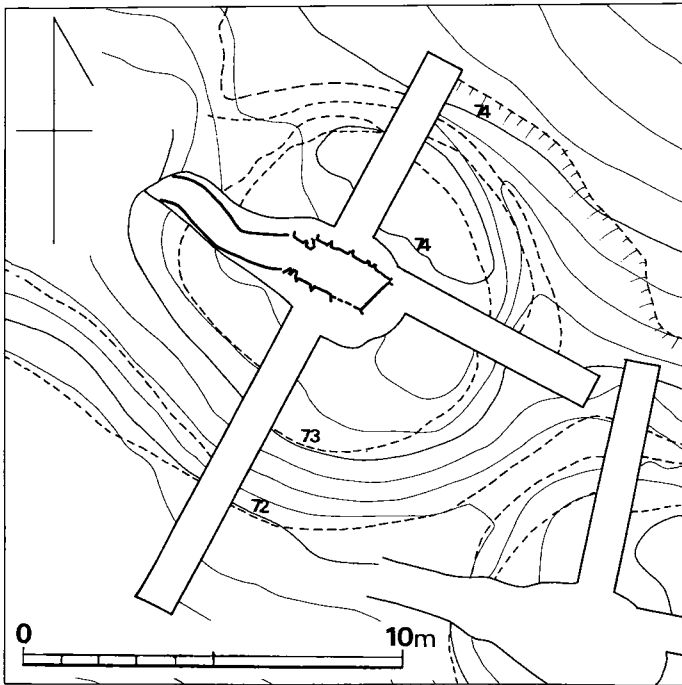


Fig. 81 汐井掛第12号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)

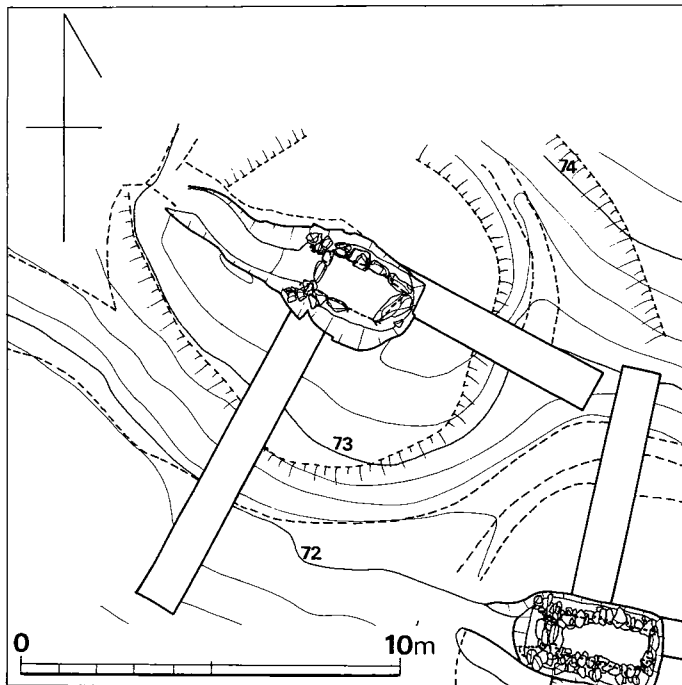


Fig. 82 汐井掛第12号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

範囲に含まれ得るものである。主軸をN59度Wにとり西北西の等高線に平行するように開口する。

玄室を設ける為に、1.6mもの深い墓壇をつくる。墓壇の下底部に腰石を据える壇を穿つ。腰石下の根石等は見られない。

玄室床面プランは、幾らか胴張りの長方形をなす。玄室各部の計測値は、長さ左側壁1.95m、右側壁1.95m、仕切石端まで1.85m、幅は奥壁1.0m(推定)、中央部1.15m、前壁1.05mで、側壁積石高さは0.7mまで残る。

腰石は、奥壁で鏡石状に1個、左壁で4個、右壁で2+2個を据えており、右壁の奥壁寄り半分は、抜き取られており、奥壁の大石も原位置から北側で動いている。以上の腰石は横位に用いるが、左右袖石は柱状に縦位に用いている。腰石以上の積石は1段目が2個残るのみであるため詳細は不明である。

玄室床面には、抜かれている奥壁寄りを除き敷石がみられ、15~20cm大のやや



扁平な礫を敷き、隙間に小礫を充満している。

石材は殆ど花崗岩を用い、敷石等に若干の水成岩転礫を用いる。

羨道部は極めて短かくし、0.6mを測り、所謂「只の字形」プランを呈する。ただ、積石は、腰石と呼び得る地山に据えられたものではなく墓壇壁面際に積み重ねただけで通常の羨道の形態をなすものではない。

墓道は長さ3.6mとわりと長く、蛇行して西へ延びる。柵石より2.0m西側まで急激に上り、その間に段状をなす部分もある。それ以西はゆるやかに下り、墓道先端を結ぶと13・14号と「枝道」を共有すると考えられる。墓道最高位と柵石上面とは0.75mの高低差がみられ、羨道の状態等をも併考して、堅穴系横口式石室の系統の中に位置付けられることは明瞭である。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. 29, PL. 102-(1))

地山整形を行なって墳丘をつくりだしたその中心部より北面にかけて石室掘り方と墓道が掘られている。隅丸長方形プランであるが、左側(南西方)はかなり隅が円い。長さは3.30m前後であり、幅は中央部で2.00mであり、深さは奥壁方で1.50m、玄門部で1.20mである。床面はほぼ水平であるが若干奥壁方が深い。

墓道は蛇行状に曲っており上幅1.30m、下幅0.90mであり、深さは石室方が深く、墓道入口方の墳丘裾部が浅い。これはかなり急激に下降しており一部階段状になっており、墓道と羨道部の接点は20cmの段がつくものである。

第11号古墳の墓道において若干の石室方へ下降する傾向がみられたが、この第12号古墳では明らかに第1号～第10号古墳の石室掘り方と異なっている点は注目される。

掘り方の壁体は右側が2段掘りの呈で、左側は壁体の中程がやや入り込んでいる。奥壁方は直に立ち上っている。これら各壁と腰石外端との間はあまり間隔がない。

敷石は掘り方床面に若干の埋土をして敷かれているようであり、各腰石の根石はあまり見られないようである。

(中間研志)

### 4) 遺物

#### (1) 出土状況 (PL. 102-(1))

石室内よりガラス丸玉1個があり、柵石の羨道部方の側壁下近くより出土する。

墳丘内よりは第1トレンチより、須恵器の高坏脚部と壺が出土している。

なお、PL101-(1)に見られるように墓道の直ぐ北側の墳丘裾部に須恵器の甕類が埋置された状態で出土するも、現地で盗難にあい図示できない。

(上野精志)

#### (2) 出土遺物 (Fig. 83・84, PL. 102-(2)・(3))

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |         |      |        |
|---------|------|--------|
| (1) 土器  | 須恵器  | 4 個体以上 |
|         | 高坏脚部 | 1 個体   |
|         | 壺    | 1 個体   |
|         | 坏蓋   | 2 個体   |
|         | 土師器  | 4 個体以上 |
|         | 高坏   | 4 個体   |
| (2) 装身具 | 丸玉   | 1 個    |

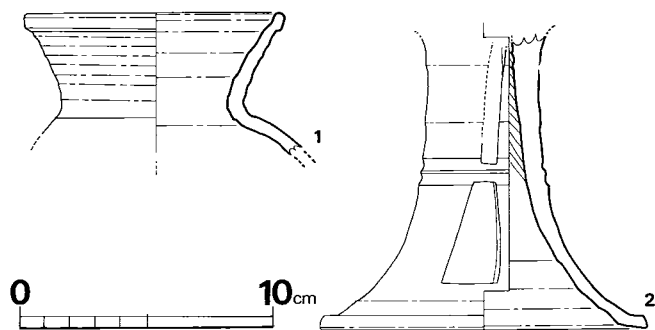


Fig. 83 汐井掛第12号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

成は良である。胎土は砂粒子を含む。

壺口頸部(1) 墳丘上より出土。口径10.4cm, 頸高4.0cmである。色調は茶褐色を呈し、焼成は良である。小砂粒子を含む。

坏蓋が2個体出土しているが小破片で図示できない。

#### 土師器

高坏が4個体出土していて、脚部3, 坏部1であるが、いずれも小破片であり図示しない。

(渡辺健二)

◎ 丸玉 (Fig. 84, PL. 102-(3)) ガラス製の紫色で扁平であり、径0.7cm, 厚さ0.5cmで、孔径0.15cmである。

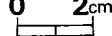


Fig. 84 汐井掛第12号古墳出土玉実測図(縮尺1/2)

#### 5) まとめ

B群の中心位置にあり丘陵斜面に対して石室がほぼ傾斜面に平行して開口する。やはり傾斜面の高所部に周溝を削り出し墳丘裾部を造り出す。径12m, 高さ約2mの円墳で単室の両袖式横穴式石室で、その構造より竪穴系横穴式石室の範疇に入る。出土遺物は石室内よりガラス丸玉1個、墳丘内より若干の須恵器があり、その特徴よりIII-B期で6世紀後半と思われる。

(上野精志)

## 13. 第 13 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 90・91)

第13号古墳は鞍手郡宮田町上有木にある。調査分の第12号古墳から第15号墳の一支群に含まれ、第12号古墳の南東、第14号古墳の北西に一列に並ぶものの真中に位置し、斜面で西側に開口する円墳である。

現状は墳丘が或る程度残り、その最頂部は標高73.2を示す。玄室部を中心に盗掘により大きく凹孔がみられ、天井石すべてと積石上部を欠損する。斜面に占地する為、南側へ盛土が流れたものと推定され、裾下端線が地山整形時の端部より2m延びる現状である。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 85~87, PL. 103)

自然に傾斜する旧地表を切り、北側では深さ約0.6mの周溝を地山に掘り下げている。周溝は斜面上半部にあたる北半から東南側まで地山を削り出している。地山整形時の端部間の墳丘径は、南北で10.7m、東西で10m前後を測る。

#### (2) 墳丘盛土 (Fig. 30, PL. 104)

墳丘頂部までは残っていないが遺存が悪い。地山整形して墳丘基盤面より約60cm程盛土が残っている。奥壁方は玄室寄りに比較的密に盛土を行ない、その上位には裾部より大雑破に墳丘頂部へかけて覆っているようである。

左側壁方の墳丘盛土は、墳丘基盤自体がかなりの傾斜を有する為斜面独特の墳丘盛土を行なっている。すなわち、側壁方にばかり盛土をしていることである。

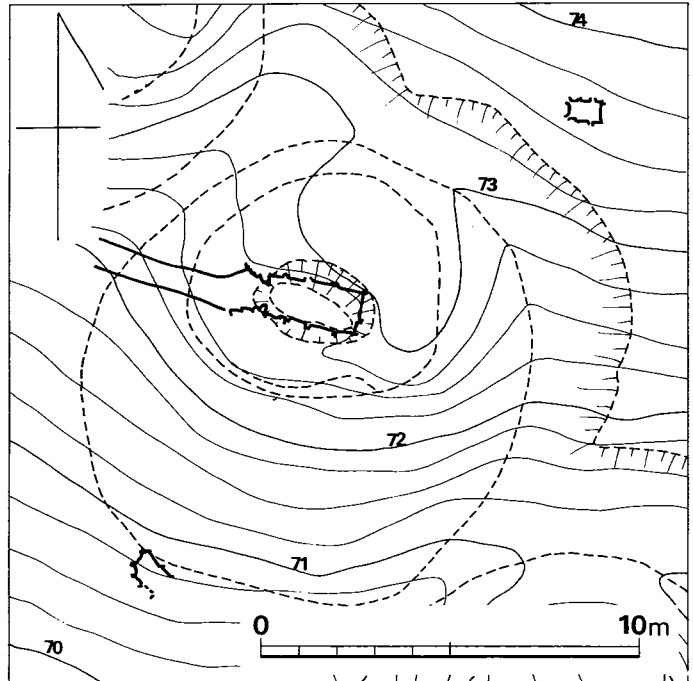


Fig. 85 汐井掛第13号古墳地形図(縮尺1/200)

右側壁方は裾部が斜面低所になるために、一度側壁方に大きく盛土をし、さらに裾部より墳頂部へと全体を覆うような盛土をしている。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 86, PL. 105~107)

本墳主体は単室両袖式横穴式石室で、後述する如く、堅穴系横口式石室の系統をひく一群に含まれ得るものである。主軸をN78度Wにとり大略西側に等高線に平行に開口する。

玄室床面プランは、やや狭な感じの長方形を呈する。玄室各部の計測値は、長さ左側壁2.35m、右側壁2.35m、仕切石端まで2.40m。幅は奥壁1.05m、中央部1.1m、前壁0.93mで、側壁積石は1.35mまで残る。腰石は奥壁で2個、左右側壁で各4個を据える。左壁袖寄りの1個と両袖石は縦長に用い、他は横位に用いる。石積は4段目まで残り、すべて縦長の石材の小口部を内面に揃えており、隙間に小礫をくさび状にかませる。上方へ行くに従って穹窿状に内傾し狭まる。

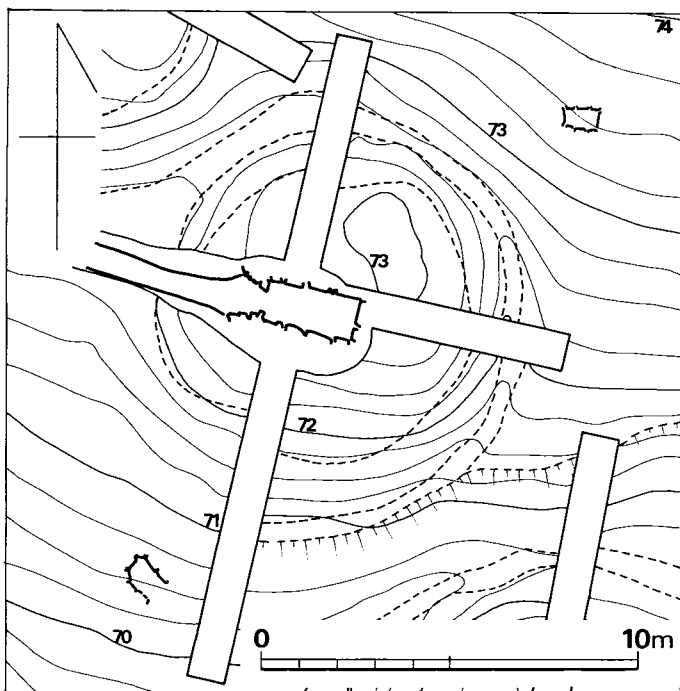


Fig. 86 汐井掛第13号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)

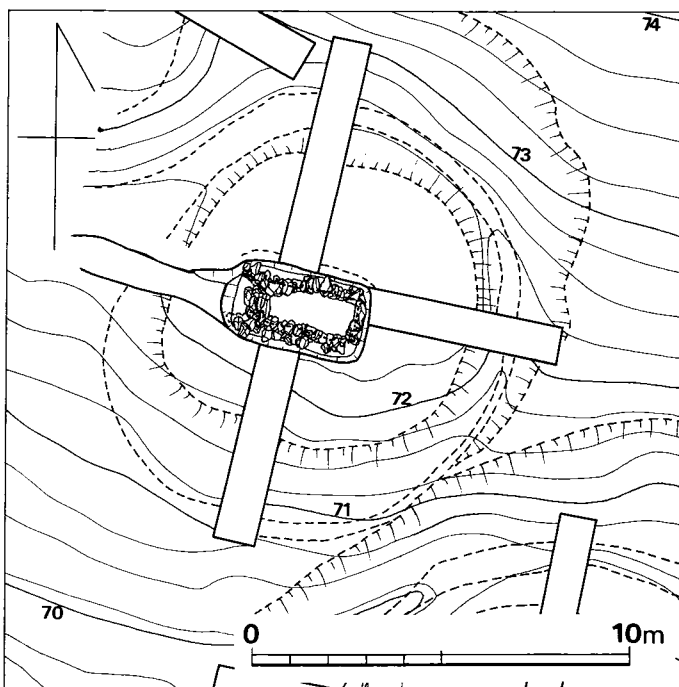


Fig. 87 汐井掛第13号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

玄室床面には、まばらではあるが敷石が残り、10～20cm大のやや扁平な礫が全面に敷かれていたものと考えられる。

羨門部から羨道部にかけては比較的良く残り、上部框石も残る。この上に更に横位の扁平な石が乗り、それらの状況から、その上面の高さが玄室天井までの高さとなろうと推定される。それを測ると、床面敷石上面よりの高さが1.22mとなり、通常大人が立って入れる状態ではなかったであろうことが推定される。

閉塞は袖石外面に扉状に板状の一枚石を立て、それと上部框石との間隙と扉石の背面に塊石4～5個を込める。

羨道部は「ハ」の字に玄門部から短かく開き、長さ0.7m、前面で幅1.05mを測る。側壁は3～4段を積み、墓壇壁際に、最下部は腰石状ではなく、いずれも地山から浮いた状態で込めている。

当初墓壇の西端は、框石外縁から少なくとも0.85mまで在ったと推定され、この墓壇の中に玄室・羨道まですっぽり入ってしまった感じである。墓道はこの墓壇上端線から長さ1.0m伸びるだけの短いものである。これも11・12・14・15号墳と同様に羨道部に向かって傾斜しており、同種である。墓道床面最上部と框石上面とは高低差0.7mを測る。墓道端部の延長を考えると、12～14号墳を結ぶ一枝道上にのり「墓道」の最小単位の支道が考えられるのである。

以上の羨道部・墓道・玄室等の形状から、竪穴系横口式石室の系統の中に位置付けられる石室であることは明確である。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 13, PL. 107—下)

石室構築のために地山整形をした墳丘基盤の中央部に長方形の墓壇となる石室掘り方がある。長さ3.7m、幅2.2mで、深さは奥壁で1.4m、玄門側で1.0mである。

床面は水平でなく奥壁側が、玄門側より約10cm程深く、面は平坦である。

掘り方の壁体は直に近く立ち上っていて、左側壁方と奥壁方は腰石の外端と接していて、右側壁はやや広がっている。各腰石下には約10cm前後の掘り込みがあり根石はみられなく若干の裏込め石がある。

墓道は石室掘り方の中央部よりやや右側（南方）に寄っており、第12号古墳の墓道と同じように墓道入口方に上降して階段状になっている。

(中間研志)

## 4) 遺物

### (1) 出土状況 (PL. 104—(2))

玄室内より鉄器が三群に分れて出土している。奥壁下よりは鉄鏃 (Fig. 90—1) 1本、左側壁の中央部壁下に鉄鏃 (2～7) 数本と鉄刀、さらに玄室の中心部より刀子 (8) と柄元金具

と思われるものがある。それぞれ敷石に接して出土している。

墳丘よりはPL. 104-(2)のように墓道近くの左側北方墳丘裾に須恵器甕 (Fig. 88-5) が地山整形した面に埋置されていて、その周辺より須恵器坏が出土する。その他第3トレンチの墳丘裾部より須恵器坏蓋があり、墳丘北東方より須恵器高坏脚片が出土している。

(2) 出土遺物 (Fig. 88~90, PL. 108)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |        |      |        |
|--------|------|--------|
| (1) 土器 | 須恵器  | 6 個体以上 |
|        | 坏蓋   | 2 個体   |
|        | 坏身   | 1 個体   |
|        | 有蓋高坏 | 2 個体   |
|        | 甕    | 1 個体   |
|        | 大甕   | 1 個体   |
|        | 土師器  | 数個体    |
|        | 埴    | 1 個体   |
| (2) 武器 | 鉄鏃   | 数個体    |
|        | 鉄刀   | 1 個体   |
| (3) 工具 | 刀子   | 1 個体   |

須恵器 (Fig. 88・89, PL. 108-(1))

坏蓋 (1, 3) I・II類に分けられる。

I類 (3) 口径13.6cm, 器高4.0cmである。天井部は平坦で、体部、天井部の境は若干張りぎみで、直線的に開き、口縁部に至る。口縁部内面は、II類より明確な段をなす。色調は灰黒色を呈し、焼成は良である。砂粒子を含む。

II類 (1) 口径14.2cm, 器高5.4cmである。天井部は丸く、天井部から体部にかけて、鈍い沈線が入り、口縁部にかけて、内湾ぎみに直立し、端部近くで外反する。口縁内面の段は鈍い。天井部はへら削り、他は横ナデ調整を行う。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒を含む。I・II類ともロクロの回転は右方向である。

坏身 (2) 墳丘より出土。口径12.0cm, 器高5.5cm, 立上りは1.7cmである。色調は灰黄色を呈し、焼成は良で、胎土は砂粒子を含む。I類の蓋と、形態的及び、胎土等からみてセットになる可能性が強い。ロクロ回転は右方向である。

有蓋高坏 (4) 脚裾部を欠損する。口径13.4cm, 立ち上りは1.1cmである。坏部内面にはタキの痕がみられる。底部はへら削りを行った後カキ目調整。脚部は、カキ目調整を行っている。脚裾は欠損しているが、沈線から、広がって裾に続くものと思われる。色調は、灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

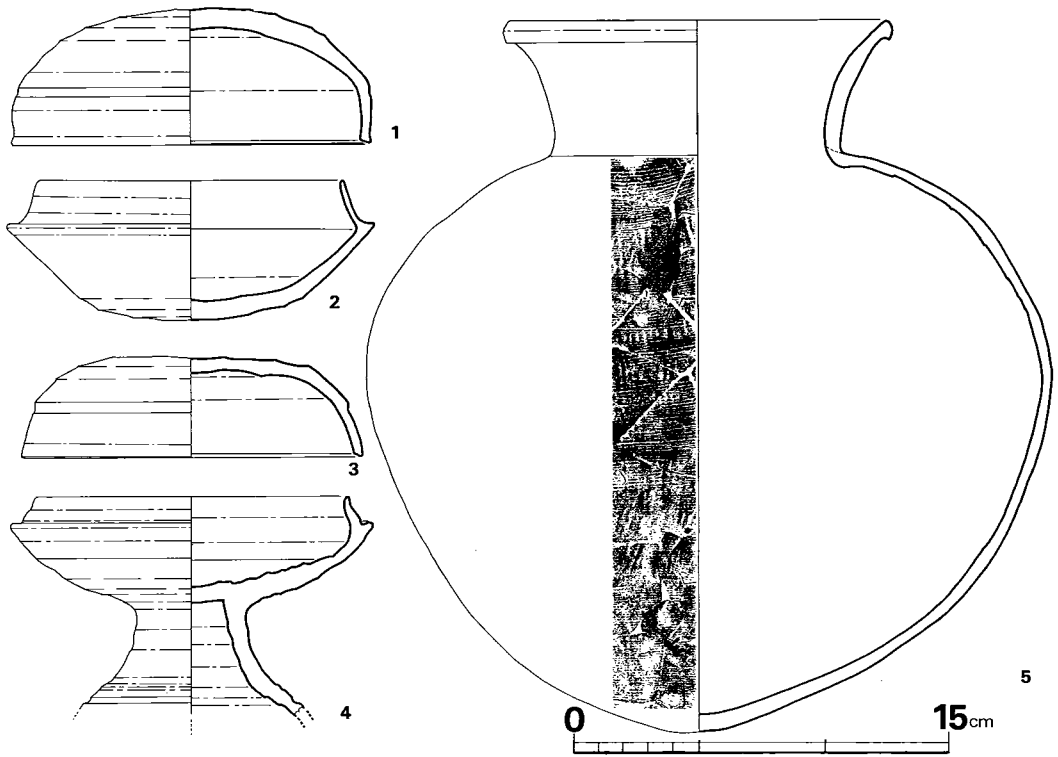


Fig. 88 汐井掛第13号古墳出土須恵器実測図(1) (縮尺1/3)

高坏脚部 図示できない小破片であるが、透しが二つみられ、やや大形の高坏脚部である。

小甕 (5) 墳丘内から出土する。口径、15.0cm、器高28.3cm、胴部最大幅27.1cm、口頸高5.5cmである。胴部は最大幅が上方にあり、卵形を呈する。胴部外面は格子状の叩きが入り、その後カキ目調整。内面は横ナデ調整で仕上げている。色調は白灰色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒を含む。

甕 (6) 墳丘裾及び一部14号墳より出土。口径22.0cm、器高45.0cm (現高)、口頸高6.0cm、胴部最大幅42.0cmである。頸部は外反し、口縁部の境に沈線が入る。胴部は卵形を呈する。外面は平行叩きが入り、内面は同心円文状の叩きが入っている。色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

土師器 塚の体部片が2個体とその他若干の破片が出土しているが小破片のため図示できない。

(渡辺健二)

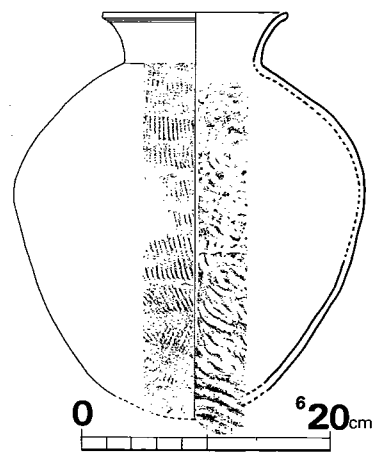


Fig. 89 汐井掛第13号古墳出土須恵器実測図(2) (縮尺1/6)

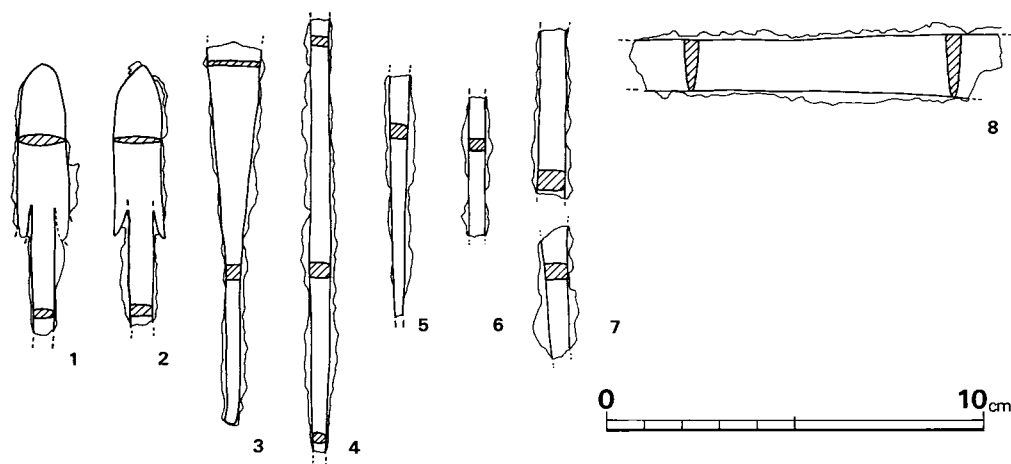


Fig. 90 汐井掛第13号古墳出土鉄器実測図（縮尺1/2）

**鉄鏃**（Fig. 90-1～7, PL. 108-(2)）約7本の出土と思われるが、完存するものは一本もない。形態より二類に分ける。1・2は腸挟柳葉式であり、3は円頭斧箭式であろう。

**刀子**（Fig. 90-8, PL. 108-(2)）刃部の破片であり、全容を知りえない。断面は二等辺三角形を呈している。

（上野精志）

### 5) まとめ

第12号と第14号古墳に挟まれた中間に在り、第12号古墳と同じように傾斜面に平行して石室は開口する。墳丘の築造も同じで斜面の高所部に周溝を掘り下げ同時に墳丘裾部を造り出す。

墳丘盛土の状況は基盤上のみに行ない斜面のため特殊な盛り方が見られる。それは高所部の北側で墳丘基盤面上の裾はほとんど盛土がされず、側壁方のみ盛土をして高さを整えており、反対側の斜面低所部では基盤面には厚くて強く受けるように大きく盛土をしていることである。このことは第12号古墳の盛土でも云えることである。石室が斜面にほぼ平行して開口するため斜面下方の低所部の盛土は崩れないよう配慮されたものと思われる。

石室は単室の両袖式横穴式石室で、玄室プランはやや長狭な長方形で、羨道部は「ハ」の字状に短かく開く、墓道は短かく、石室に向かって下降している。石室の構造、掘り方、墓道の在り方などからして竖穴系横口式石室の系統に位置づけられよう。

出土遺物は玄室内に鉄器類がみられ、鉄器は武器ばかりである。墳丘盛土内に墓道近くの左側（I区）墳丘裾部のほぼ第12号古墳と同じ位置より須恵器甕が地山を若干掘りくぼめて埋置された状態で発見される。又その周辺にも若干の須恵器甕が出土する。

これら墳丘裾部から出土した須恵器の特徴はIII-A期であり、6世紀の中葉に築造、使用されたものであろう。



## 14. 第14号古墳

## 1) 立地 (Fig. 72, PL. 90・91)

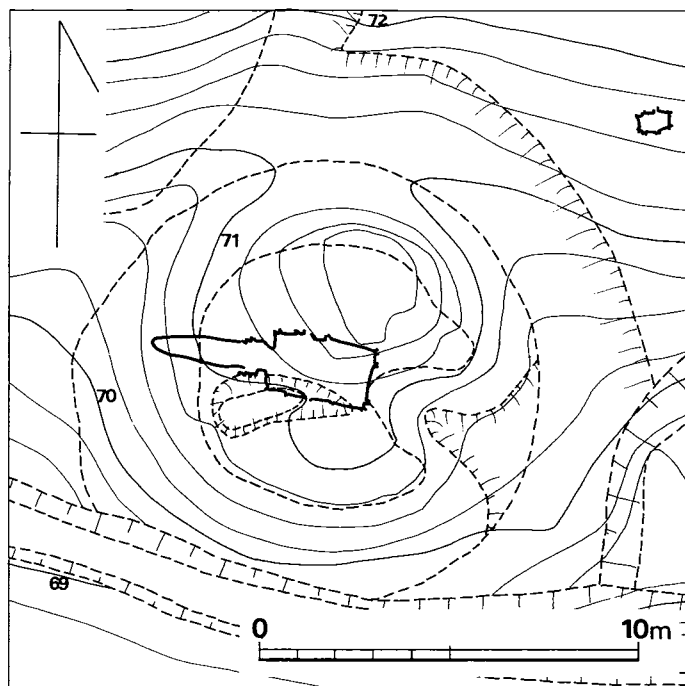


Fig. 91 汐井掛第14号古墳地形図 (縮尺1/200)

第14号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。立地からしてA群の北上方に位置し、周溝を有する円墳で、東西径13m・南北径13.5m、見かけの高さは2m前後を示す。標高70m前後の尾根線の西側斜面に位置し、石室の構築は等高線に平行につくられている。東側の裾部付近から中心に向かって盗掘をうけており、中央部付近は若干の陥没がある。

## 2) 墳丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 91~93, PL. 109)

旧地表を除去し、丘陵斜面の高い所の北側方面を、半月状に地山整形をして周溝状に掘り割って裾部をつくりだしている。幅は上端で1.8m近くある。

発掘前にこの溝を観察すると第12号古墳より第13号古墳にかけて三重連の形状を呈している切り合っているかには見えなかったが、調査では確認できなかった。

## (2) 墳丘盛土 (Fig. ③②, PL. 110-(1))

地山整形をした面の淡茶褐色粘質土の上に1.40~0.8mの墳丘盛土がみられる。中央部の墳頂は盗掘のため攪乱されていて盛土はない。又奥壁後方の盛土は大きく破壊されている。

Fig. ③②のように比較的各層は厚いが密に盛っておりその作業行程が看取できる。各土層断面を観察すると、奥壁、左・右側壁方とも若干の違いがみられるが、これはそれぞれ墳丘基盤面と各傾斜面とに関連がありこれらを充分吟味して盛土をした結果と思われる。

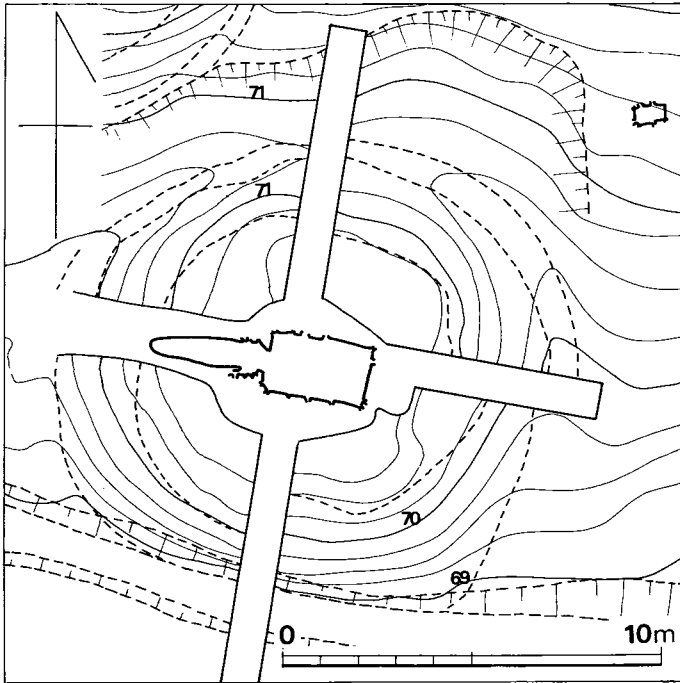


Fig. 92 汐井掛第14号古墳墳丘測量図(縮尺1/200)

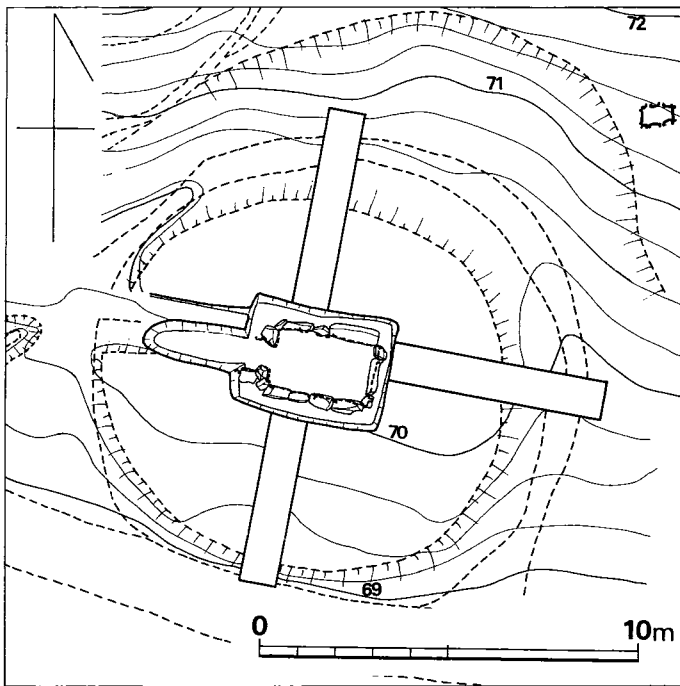


Fig. 93 汐井掛第14号古墳地山整形面測量図(縮尺1/200)

## 3) 主体部

## (1) 石室 (Fig. ③③, P. L. 110-(2)・111)

内部主体は主軸をN80度Wにとり略西に開口する単室の横穴式石室である。狭長な約2.5mの墓道を付設している。

玄室長さ2.5m, 中央部で2.6m, 幅は奥壁部で1.55m, 横口部で1.52mで, 中央部もほぼ変わらない。

基部には大形の安山岩を使用している。据えつけのための掘り込みは, 一般的に浅く, 天井部および側壁上部は破壊されており, 残高1.5mが最高である。

石積みは, 小石を各所に充填し各段が同じ高・水平位となるように払われ, 控えも十分にとっている。床石は奥壁側の半分は抜かれており, 坩底は略水平に近い。

横口部に各1石を立て, さらに各3段を平積みし, この上に楕円石を架構して前壁となしている。袖石間には仕切石を置き, 玄門の幅は上部で, 30cm, 下部で50cm, 高さは1mで狭小である。羨道部と玄室部の仕切石をもって, 玄室部が一段低く

なっている。

羨道部は長さ50cm～80cmの極めて短簡なものでこの部分の墓底は、玄室床面より高くなり、かつ玄室に比して石積みも粗雑である。

墓道は、地山に穿れた部分は現存長2.7m、幅1.2m(上端値最長)で狭長であるが羨道寄りでは50cm前後の深さで羨道先端から墓道方へ約2.6mまでだんだん浅くなっていき地山面にいたっている。

閉塞は玄門仕切石直前で行なわれ、板石2枚を主体とする閉塞石群が現存する。間層上面にあつて初葬時のものではないと思われる。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ③, PL. 111-(下))

墓坑は長方形プランを呈し、上端値で長さ4m、幅3mであり、深さは奥壁方で50cm、玄門方でも50cmであり、床面は若干奥壁方が深いが玄門方とは約10cmのレベル差があり、面は多少凹凸になっている。

掘り方周壁はいずれも略直立するもので、若干のせり出しがみられる部分もある。腰石の外端と周壁との間は広い。

各腰石下には掘り方床面よりさらに掘り込みがあり、とくに奥壁腰石は30cmと深い。根石はほとんどみられなく、裏込め石も少ないようである。

墓道は石室掘り方より舌状に出ていて墳丘内で地山に接する。墳丘裾部より少々下降しているものである。

### 4) 遺 物

#### (1) 出土状況 (Fig. ④, PL. 112～114)

石室内よりPL. 112-(1)のように須恵器、鉄鏃、鉄刀が出土し、埋葬された人骨が一部遺存している。

須恵器、鉄鏃、鉄刀は右側壁と右袖石の隅に集まって敷石上より出土する、須恵器は提瓶で、直立している。鉄鏃は約20本が一束となっている。鉄刀は刃部を石室内に向けて、ほぼ側壁に平行して置かれている。

石室外では墓道の左右各3m近くの墳丘内より大量の土器類が出土している。これらを見ると、まず、表土を剥ぐとPL. 112-(2)、PL. 113-(1)のように墓道右側のⅣ区より土器類が集中して、須恵器の提瓶(Fig. 97-50)、中甕(Fig. 98-53)や土師器埴(Fig. 99-1)が埋置された状態で出土する。

さらに墳丘盛土を除去すると、墓道の左右側Ⅰ区とⅣ区よりPL. 113-(2)のようにほぼ同じ高さの位置に土器類と石が一括して出土する。Ⅰ区ではPL. 114-(1)のように須恵器坏類が多く、他に須恵器高坏、罍、提瓶、土師器の小形坏のセットがある。須恵器坏類は重なった状況である。

墓道右側のⅣ区では、先の土器群（Ⅳ区—上層群）よりやや南方に離れた位置よりⅠ区と同じように土器群と石が出土する。こちらはⅠ区に比べて数は少なく須恵器のみであり、坏類、罎、坏、大甕がある。

その他墳丘内より前記三群に含まれない土器類も多く出土している。これらはやはりⅠ区、Ⅳ区出土のものが多い。なお、地山整形面直上よりの出土遺物はない。

又、トレンチ内より大形の丸玉を（Fig. 101）が出土する。

（副島邦弘）

**(2) 出土遺物** （Fig. 94～101, PL. 115～122）

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	55個体以上
	坏蓋	14個体以上
	坏身	16個体以上
	埴蓋	2個体
	埴身	3個体
	無蓋高坏	4個体
	罎	3個体
	提瓶	2個体
	直口壺	1個体
	台付直口壺	1個体
	小形広口壺	1個体
	短頸壺	1個体
	甕	8個体
	土師器	3個体以上
	埴	2個体
	埴	1個体
	ミニチュア土器	6個体
	坏蓋	3個体
	坏身	3個体
(2) 装身具	丸玉	1個体
(3) 武器	鉄鏃	1個以上
	鉄刀	1個
(4) 不明鉄器		1個

**須恵器** （Fig. 94～98, PL. 115～121）

坏蓋(1, 3, 8, 10, 12, 17~19, 30~35)口径と器高,形態等によりI~V類に大別される。

I類(1) 口径15.0cm, 器高4.5cmである。IV区土器群下より出土。天井部と, 体部の境は鈍い段を有し直線的に開き, 口縁内側にも鈍い段を有し, 天井部はへら削りを行っている。色調は灰黄白色を呈し, 焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は左方向である。

II類(10, 12, 30, 34) 口径14.0~14.4cm, 器高5.3cmを測る。33は周溝内, 10, 12はI区土器群, 30は墳丘内より出土。天井部と体部の境及び, 口縁内側の段は不明瞭になり, 体部から口縁部にかけて内湾ぎみに直立する。天井部はへら削りを行っている。10, 12は灰黒色系を呈しているが, 焼成は11は良, 12は良好である。30, 34は灰青色系を呈しているが, 焼成は良好, 34は不良である。胎土はもとに砂粒子を含む。ロクロの回転は30は右方向, 他は左方向である。

III類(3, 8, 31, 32, 34, 35) 口径13.2~14.0cm, 器高3.8~4.4cmである。3はIV区土器群上, 8はI区土器群, 32, 34は墳丘内より出土。天井部と体部の境はより不明瞭になり, 体部は低く直立ぎみになる。口縁部内面は沈線をなすもの(32, 35), 段をなすもの(3, 6, 8, 31, 34)がある。天井部はへら削りを行っているが, 8は手持ちによるものである。色調は31, 32, 35は灰黒色を呈し, 他は灰青色系を呈する。焼成はともに良であり, 胎土は砂粒子を多めに含む。ロクロの回転は3, 35は右方向であり, 他は左方向である。

IV類(31, 17) 口径12.2~12.2cm, 器高3.3~3.9cmと小形になる。天井部は狭い範囲をへら削りし, 体部との境, 口縁部内面に沈線が入る。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は左方向である。

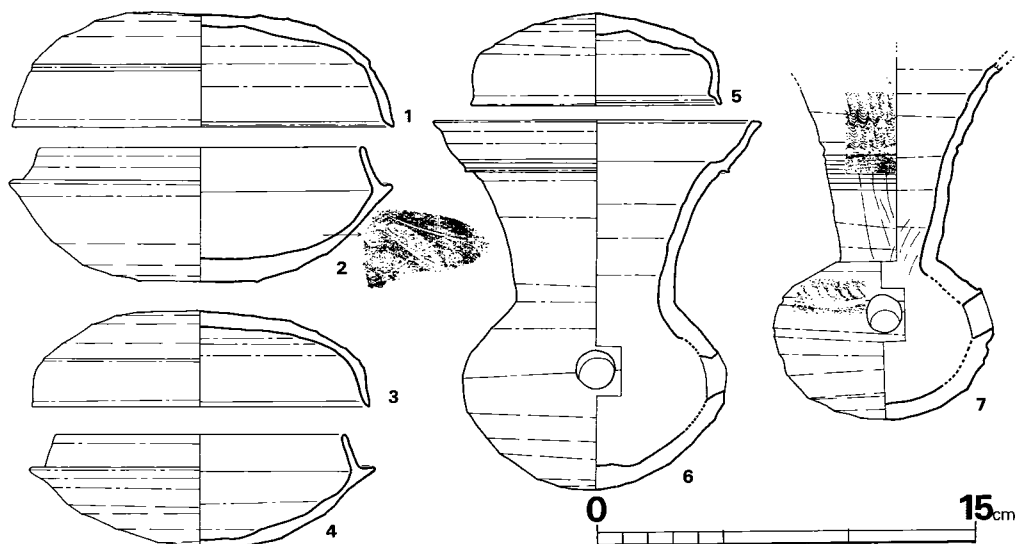


Fig. 94 汐井掛第14号古墳南側墳丘出土須恵器実測図(1)(縮尺1/3)

V類(18, 19) 口径9.6cm~10.0cm, 器高3.2~3.4cmである。天井部はへら削りで軽く仕上げている。18は体部との境に鈍い段が入るがともに体部は内湾ぎみに直立する。口縁部内面は鈍い段が入る。色調は18が灰青色, 19が灰白色を呈し, 焼成は18が良, 19が不良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は左方向である。

坏身(2, 4, 9, 11, 13~16, 22~25, 37~40) I類~V類に大別できる。

I類(11) I区土器群より出土。口径13.2cm, 器高5.6cm, 立上り高1.4cmである。立上りは内傾し端部は丸い。底部はへら削りを行っている。色調は黄灰白色を呈し, 焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は左方向である。

II類(2, 9, 13~16) 口径12.2~13.4cm, 器高4.4~5.3cm, 立上り高1.2~1.5cmである。立上りはI類より内傾し底部は丸底及び平底のものがありへら削りが行われている。9の底部は手持ちのへら削りが行われその上にタタキ痕が見られる。色調は28が灰色を呈し, 他は灰青色系を呈する。焼成は28が良好であり, 他は良であり, 胎土はともに砂粒子を含む。2, 16の内面にはへら記号を有している。ロクロの回転は16, 19が右, 他は左方向である。

III類(4, 36~39) 口径11.5~12.4cm, 器高3.7~4.5cm, 立上り高0.8~1.3cmである。4はIV区土器群, 38は墳丘内より出土。立上りは短く内傾する。底部は広範囲なへら削りを行っている。色調は4は灰黄色を呈し, 37は黒褐色。他は灰青色系を呈するが, 39の内面は紫茶褐色を呈している。焼成はみな良である。胎土は4が小砂粒子を含み, 他は砂粒子を多めに含む。ロクロの回転は右方向が多いようである。

IV類(23~25) 口径9.7~10.0cm, 器高3.6~4.0cm, 立上り高0.7~0.8cmである。立上りは短く内傾し, 25の端部はシャープになり, 底部はへら削りを行っている。色調は23, 24が灰青色, 25は黒褐色を呈し, 焼成は良である。胎土はともに砂粒子を含むが, 25は多量に含んでいる。ロクロの回転は左方向である。

V類(21, 22) 口径8.4~9.0cm, 器高3.8~3.9cm, 立上り0.8cmである。底部はへら削りにより軽く面取りしている程度で凹凸を呈する。立上りは, IV類同様にシャープである。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は左方向である。

坏蓋(5, 20) I区土器群より出土。口径10.0cm, 器高3.6cmである。天井部はへら削りを広範囲に行い丁寧に仕上げている。体部から口縁部にかけて直立して, 端部近くで外反し, 内面に段を有する。色調は灰青色を呈し, 焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。20はI区土器群より出土。口径10.2cm, 器高3.2cmである。天井部は手持ちによるへら削りで粗く仕上げているため凹凸をなしている。口縁端部はやや尖りぎみで段をなす。色調は灰黄色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

埴身(26, 43, 44) 26はI区土器群, 44は墳丘内より出土。26は口径8.2cm, 器高7.2cm, 胴部最大幅12.2cmである。口縁部は歪みのため楕円形を呈しており, 底部は手持ちによるへら

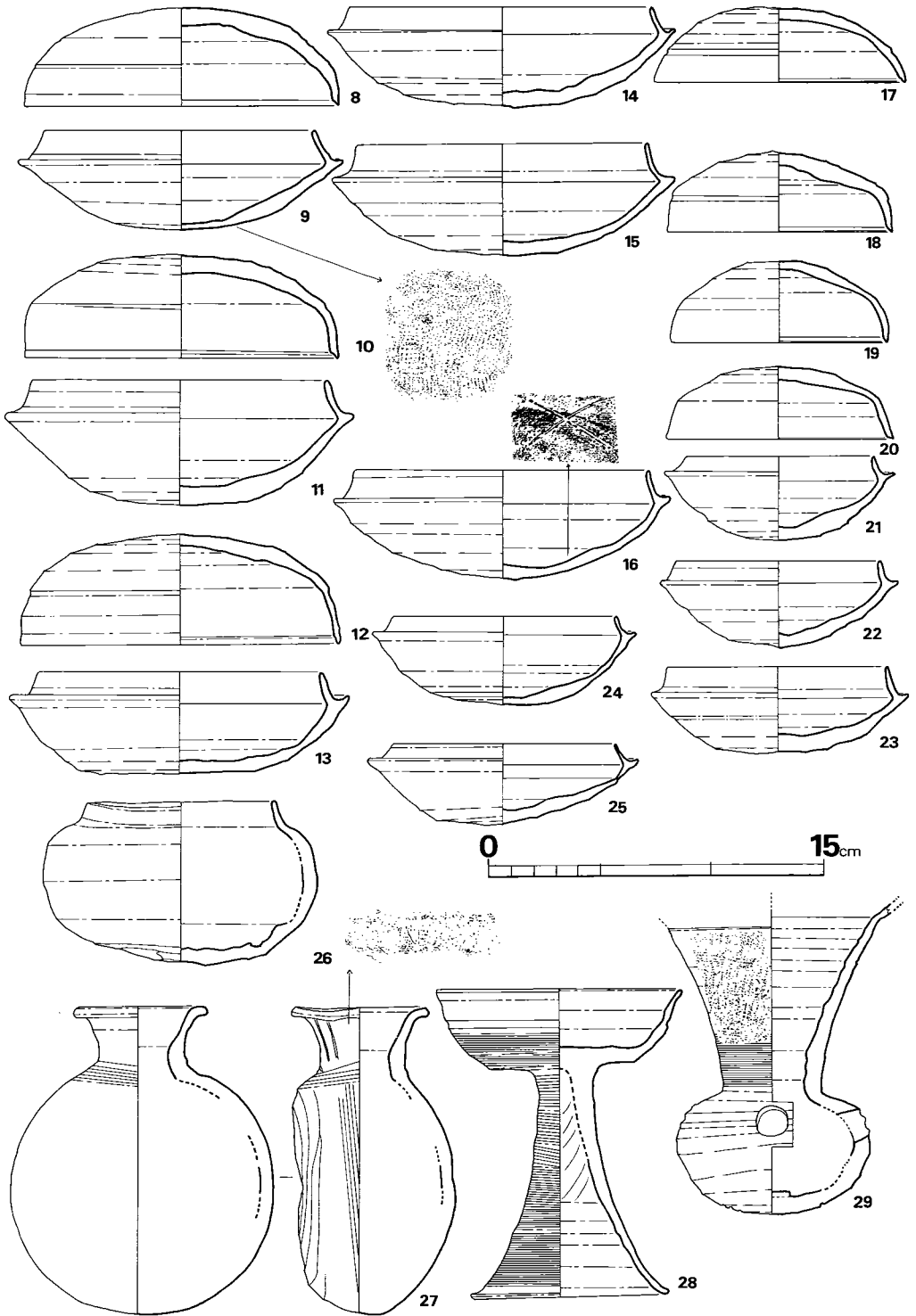


Fig. 95 汐井掛第14号古墳北側墳丘出土須恵器実測図(2) (縮尺 1/3)

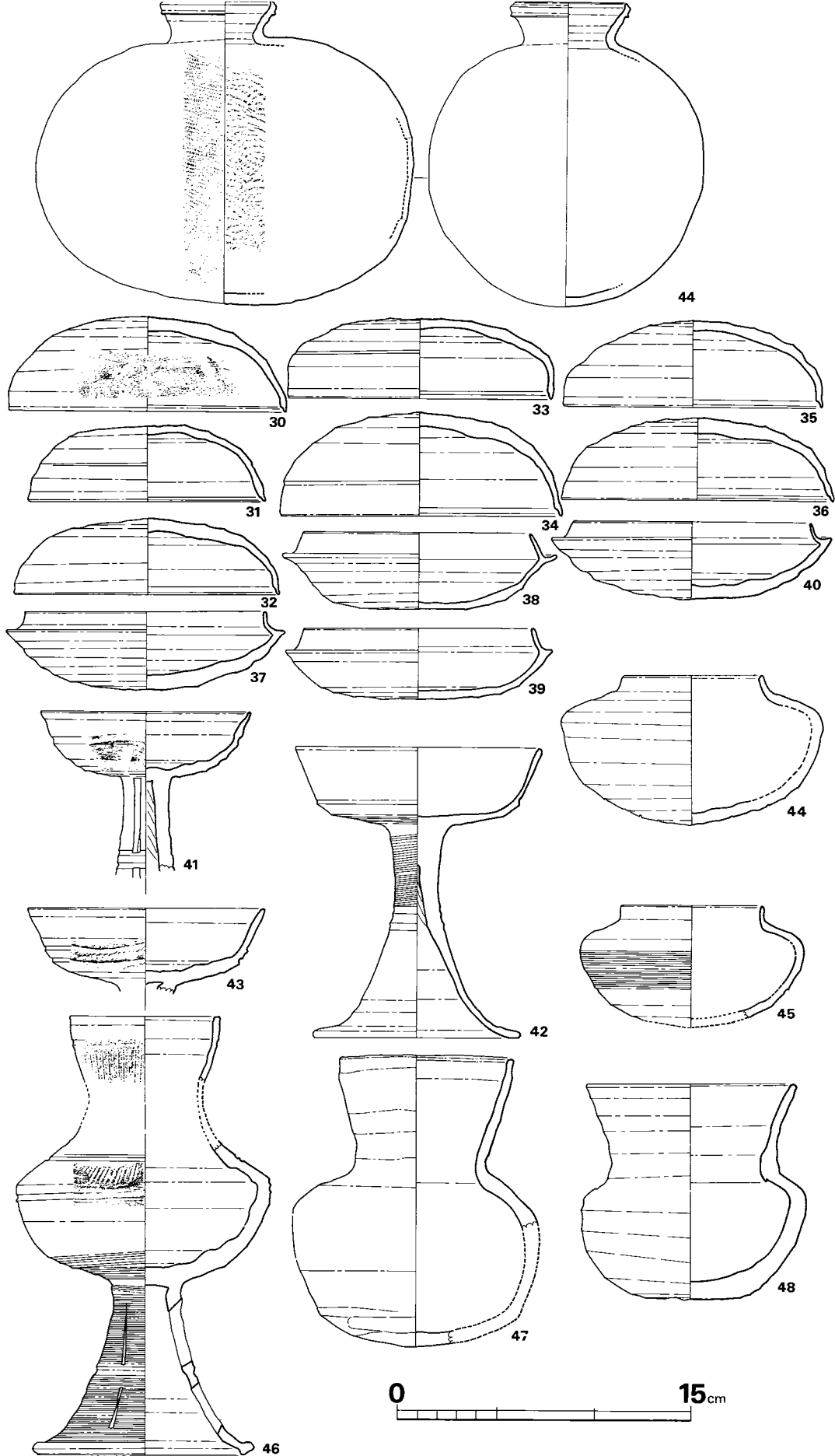


Fig. 96 汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(3) (縮尺 1/3)



削りにより粗く仕上げている。色調は灰黄色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。蓋20とセットになる可能性が強い。43は口径7.1cm, 器高7.6cm, 胴部最大幅13.4cmである。底部のへら削りは広範囲まで行われて丁寧仕上げている。色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。蓋5とセットになる可能性が強い。44は底部を欠損し、口径7.1cm, 器高7.6cm(推), 胴部最大幅13.4cmである。胴部上半は横ナデ及びカキ目調整で仕上げ、下半はへら削りを行っている。色調は茶褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

無蓋高坏 (28, 40~42) II類に分けられる。

I類 (28, 41) 28はI区土器群より出土。口径8.2cm, 器高7.2cm, 脚裾径8.8cmである。坏底部は平坦であり、体部に沈線が入り、下はへら削りとカキ目調整で仕上げ、上半は横ナデ調整で仕上げている。脚部はラップ状に裾まで広がり内面にシボリ痕が見られる。外面はカキ目調整で仕上げている。色調は灰黄色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒を含む。41は口径12.4cm, 器高14.8cm, 脚裾径10.6cmである。底部と体部の境は段を有し、底部はへら削りとカキ目調整により仕上げられている。脚部中央に数本の沈線が入り、上はカキ目調整、下は横ナデ調整で仕上げている。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

II類 (40, 42) 40は脚部下半を欠損するが、長脚二段透しとなるものである。口径10.8cmであり、坏部は体部に沈線が入り、櫛描波状文が施されている。底部はへら削り、他は横ナデ調整により仕上げている。脚部には長方形の透しが三方向に入り、内面はシボリ痕が見られる。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子をやや多めに含む。42は墳丘内より出土。脚部を欠損し、口径12cmである。底部と体部の境に間隔を置いて二条の沈線が入りその間に刺突文を施している。底部はへら削りを行っている。色調は灰黒色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

罍 (6, 7, 29) II類に大別する。

I類 (6) I区土器群より出土。口径13.2cm, 器高14.7cm, 口頸高7.3cmである。頸部と胴部の接合部は広く、口縁部との境は突帯をめぐらし、口縁部は短く外反し、端部は平坦である。胴部は下半は丁寧なへら削りにより、底部は尖る。器面には文様等による装飾はいっさい施されていない。色調は黄白色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

II類 (7, 29) とともに口縁部を欠損する。7は墳丘内、29はI区土器群より出土。頸部上半には櫛描波状文を施しており、カキ目、横ナデにより仕上げている。7の頸部はシボリのため歪つである。胴肩部に沈線が入り7はその上に刺突文を施す。胴部下半はへら削りが行われている。色調は7が淡灰色、29は灰黒色を呈し、焼成は7が不良、29は良好である。胎土は7は小砂粒子を含み、29は多量に含む。ともにロクロの回転は右方向である。

## III 汐井掛古墳の調査

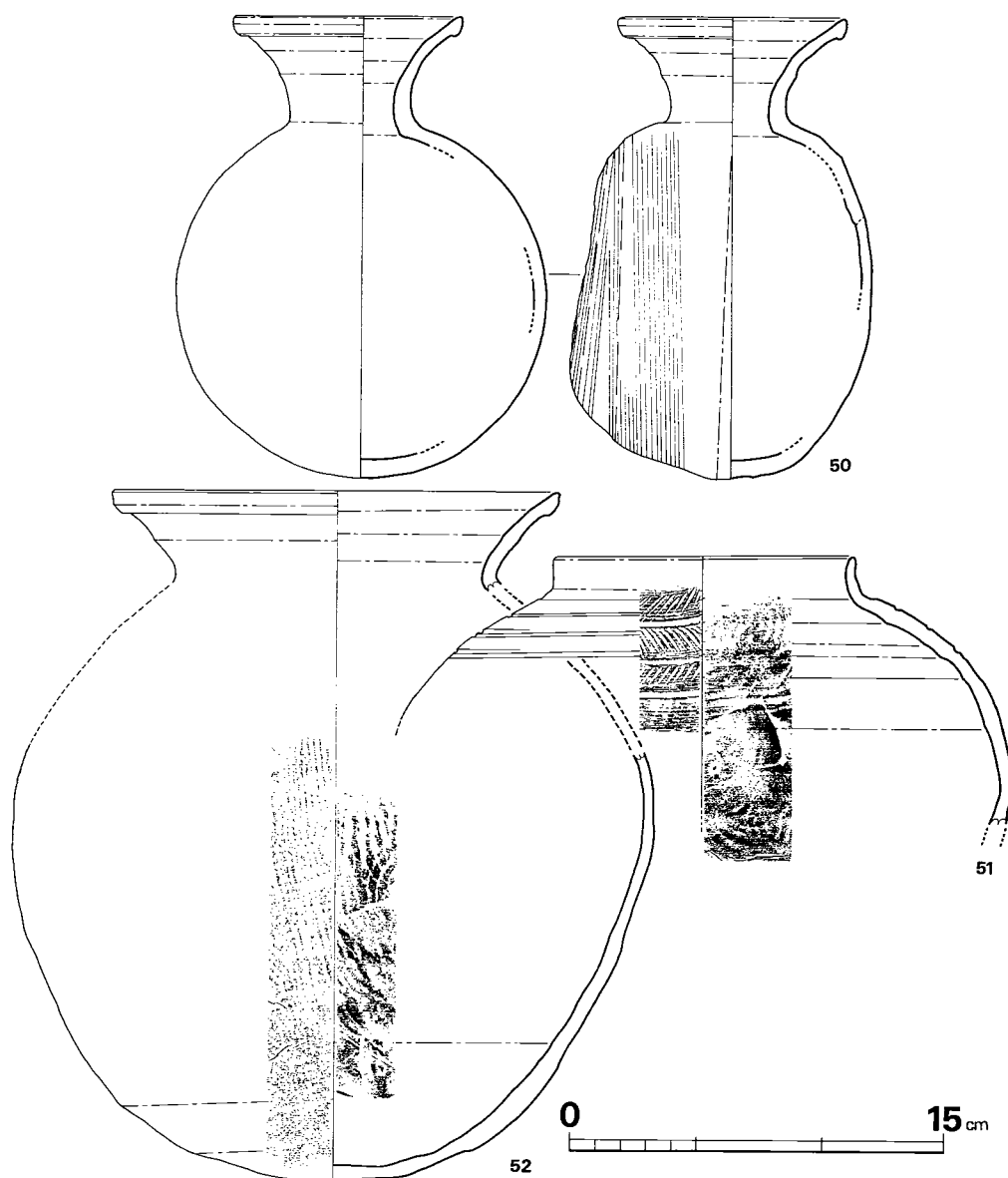


Fig. 97 汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(4) (縮尺1/3)

提瓶 (27, 50) 大きさにより I・II類に分けられる。

I類 (50) 墳丘内より出土。口径9.0cm, 器高13.8cm, 胴部最大幅11.6cmである。頸部は著しく外反し, 口縁部下端は肥厚する。背面は多少丸味を持っており, ヘラ削り, カキ目調整の順で仕上げている。他は横ナデ調整を行っている。色調は灰黄白色を呈し, 焼成は不良である。

II類 (27) 口径 6.0cm, 器高13.8cm, 胴部最大幅11.6cmである。頸部は外反して口縁部はそのまま引き延ばし丸くおさめており, 頸部にはヘラ記号がめぐっている。背面は手持ちによるヘラ削りにより凹状をなしており前面はカキ目調整が行われている。I類に比べると調整は雑である。色調は灰黒色, 背面は茶褐色を呈しており, 焼成は良である。胎土は砂粒子を多量

## 14. 第 14 号 古 墳

に含む。

直口壺 (46) 口径 8.7cm, 器高14.8cm, 胴部最大幅12.6cm(推)である。胴部の最大幅は上方にあり若干肩が張る。底部は手持ちのへら削りにより仕上げられており, 他は横ナデ調整を行っているが調整は雑である。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を多量に含む。

脚付直口壺 (46) 墳丘内より出土。頸部下半を欠損する。口径 7.8cm, 脚裾径10.5cm, 脚高 8.7cmである。頸部にへら描平行文を施して, 沈線をめぐらせ口縁部に至り, 端部は平坦である。胴肩部に刺突文が施されそれを挟むように上下に沈線が入り, 底部はへら削り, カキ目調整の順に仕上げている。脚部は中央に沈線をめぐらせ上下に細い長方形の透しが三方向に入り, カキ目及び, 横ナデ調整で仕上げている。胴部の割に脚部はデリケートである。色調は灰青色を呈し, 焼成はやや甘い。胎土は小砂粒子を含む。

小形広口壺 (46) 口径10.2cm(推), 器高11.3cm, 胴部最大幅11.4cmである。胴部の最大幅は上方にあり肩が張り, すぐに頸部へ立上る。底部は器肉が厚くずっしりしており, 広範囲なへり削りが行われる。他は横ナデ調整を行っている。色調は灰黄色を呈し, 焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

短頸壺 (52) I 区土器群より出土。胴部下半を欠損して全容を知り得ない。口径11.9cmである。胴部上方に三条の沈線が入り, その間を交互に刺突文が施されている。口縁部内外面は横ナデ調整, 胴部は外面がカキ目調整を行う。内面は同心円文状の叩きが入るが, 上半は横ナデにより消されている。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

横瓶 (44) 墳丘内より出土。口径11.7cm, 器高31.0cm, 胴部最大幅38.8cmである。頸部は短く開き口縁部は嘴状をなし, 下端はシャープな突帯をめぐらせる。胴部外面は器面に対して斜め上から短い単位の平行叩きを行い, その上は側面を軸とするカキ目調整が回る。内面は同心円文状の叩きが入る。色調は茶褐色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

甕 (52~59) 口頸部の形態, 器高により大・中・小類に分けられる。

大甕 (58, 59) 口頸部は長く, 外反度も他の類に比すと小さい。ともに大形品である。58は口径41.6cm, 器高64.5cm, 口頸高13.7cm, 胴部最大幅は56.3cmである。頸部に沈線が入り上下に楡描波状文が施されており, 胴部は最大幅をほぼ中央に置きスムーズに湾曲する。59は胴部下半を欠損する。口径34.3cm, 口頸高14.1cm, 胴部最大幅56.8cmである。頸部には二条の沈線が間隔を置いてめぐり, その間にへら描平行文, 上, 下に刺突文を施す。とも外面は平行叩き, 内面に同心円文状の叩きが入る。色調は, 58は灰青色, 59は自然釉がかかり茶灰色を呈している。焼成は, 58は良, 59は良好である。胎土は砂粒子を含む。

中甕 (53~57) IV 区土器群より出土。53は口径20.6cm, 器高42.5cm, 口頸高5.6cm, 胴部最大幅42.3cmである。頸部は短く口縁部下端に鋭い沈線が入り, 胴部外面は平行叩き, 内面は同

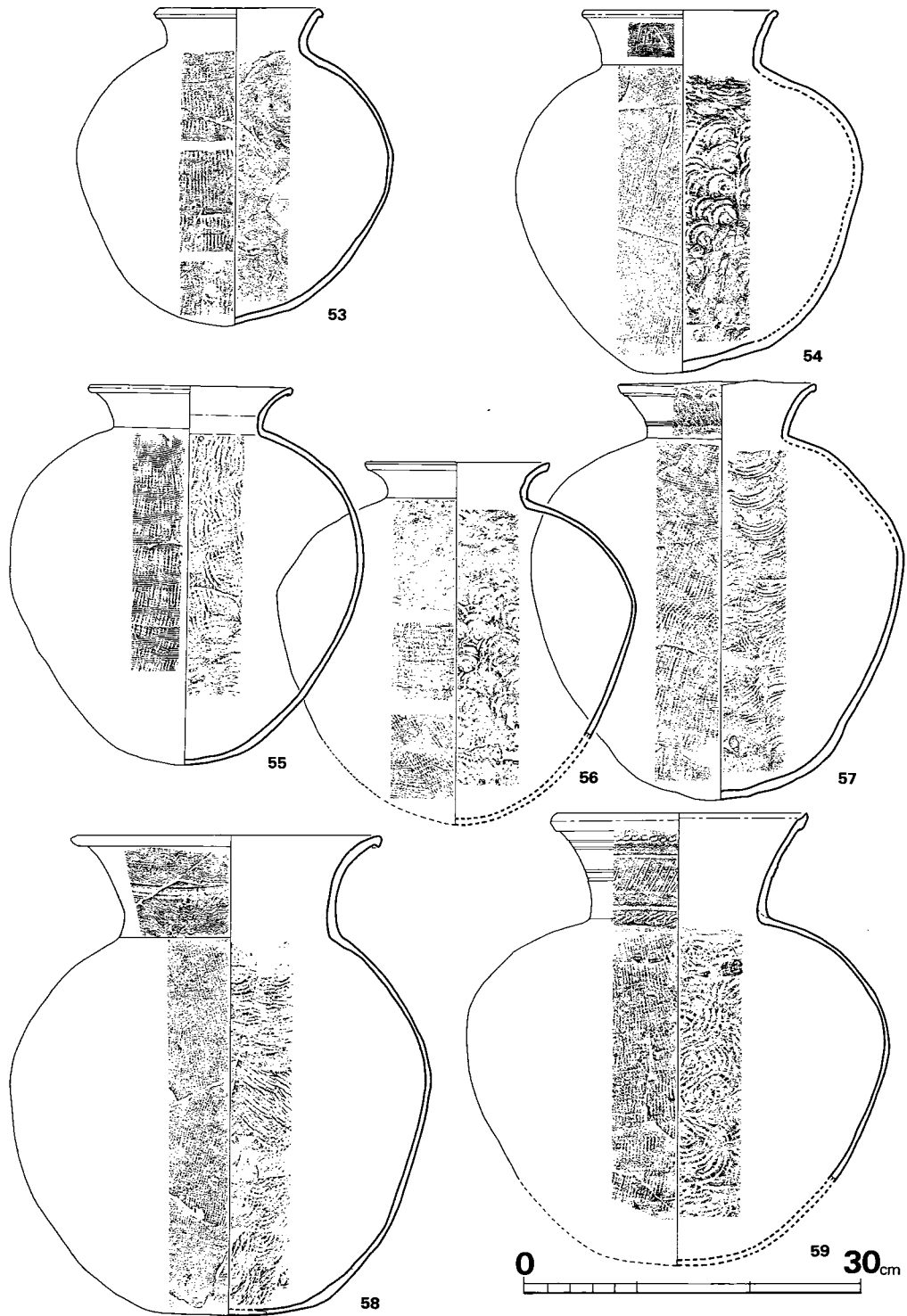


Fig. 98 汐井掛第14号古墳出土須恵器実測図(5) (縮尺 1/6)

## 14. 第14号古墳

心円文状の叩きが入る。色調は灰黄色を呈し、焼成はやや不良である。胎土は小砂粒子を含む。54は口径26.2cm、器高58.3cm、口頸高7.3cm、胴部最大幅48.5cmである。頸部は直立ぎみで、カキ目調整を行っており口縁部は丸くおさめている。頸部にヘラ記号を有する。胴部外面はきめの細かい平行叩きが入り、内面は小さな同心円文状の叩きが入る。色調は灰黒色を呈するが、肩部は自然釉がかかり黄褐色を呈している。焼成は良好で、胎土は小砂粒子を含む。55、56は胴部に比して頸部は短く、外反度が著しい。55は口径26.8cm、器高48.4cm、口頸高6.6cm、胴部最大幅46.4cmであり、56は底部を欠損し口径24.2cm、口頸高5.0cm、胴部最大幅48.4cmである。55の外面は平行叩きの上をカキ目調整を行い、内面には同心円文状の叩きが入る。56の外面は格子状の叩き、内面は54と同様に小さな同心円文状の叩きが入る。色調はともに灰黒色を呈し、肩部は自然釉がかかり黄褐色を呈する。焼成は良好で、胎土は小砂粒子を含む。57は口径27.5cm、器高56cm、口頸高7.8cm、胴部最大幅50.0cmである。頸部はラッパ状に開き沈線が入り上に櫛描波状文を施しており、口縁部下端には鋭角的沈線が入る。胴部は肩が張り、卵形を呈する。外面は格子状の叩きが入るがその上をカキ目調整しており、内面は同心円文状の叩きが入る。色調は灰青色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

小甕(51) 墳丘内より出土。胴部上半を欠損する。口径27.5cm、胴部最大幅25.5cmである。頸部は短く著しく開き口縁下端は肥厚する。胴部下半は平行叩き、内面は同心円文状の叩きが入り、底部は指頭の痕跡が見られる。色調は黄褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

## 土師器 (Fig. 99, PL. 122-(1))

埵(2, 3) 2は玄室左袖石付近より出土。口径13.4cm、器高5.7cmである。底部は平坦でヘラ削りが行われているが器面剥落が著しく不鮮明である。色調は茶褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。3は底部を欠損して、口径13.9cmを測る。2に比べると丸底である。器面剥落は著しく調整は不明である。色調は赤褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は小砂粒子を含む。

埴(1) IV区墳丘内より出土。口径11.4cm、器高10.7cmである。器面剥落のため一部不鮮明であるけど外面、口縁内面はヘラ研磨、底部内面はナデを行っている。色調は茶褐色を呈しているが、彩色の痕がみられる。焼成は良好で、胎土は小砂粒子を含む。

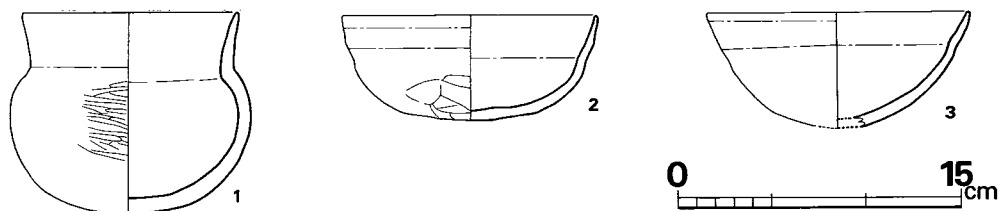


Fig. 99 汐井掛第14号古墳出土土師器実測図(1) (縮尺1/4)

## III 汐井掛古墳の調査

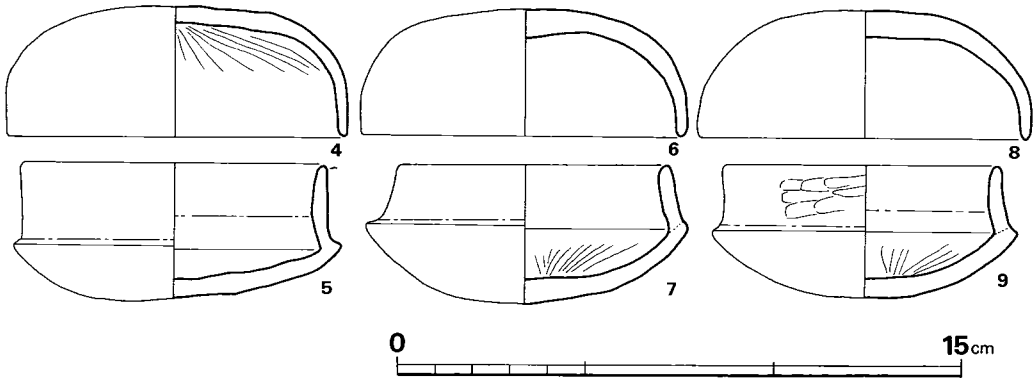


Fig. 100 汐井掛第14号古墳墳丘出土土師器実測図(2) (縮尺 1/2)

ミニチュア土器 (Fig. 100, PL. 122-(1))

坏蓋 (4, 6, 8) I区土器群より出土。口径8.6~9.8cm, 器高3.4~4.5cmである。器面剥落で調整は不鮮明であるけれど外面はへら研磨を行い, 天井部内面には放射状の暗文が入る。色調は茶褐色を呈しているが, 燻して黒味を帯びている。焼成は良であり, 胎土は小砂粒子を含む。

坏身 (5, 7, 9) I区土器群より出土。口径7.0~8.5cm, 器高3.5~3.8cm, 立上り高1.5~2.1cmである。蓋同様器面剥落のため調整は不鮮明であるが, 外面, 口縁内面はへら研磨を行い, 内面には放射状の暗文が入る。色調は茶褐色を呈しているが燻して黒味を帯びている。焼成は良であり, 胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)

丸玉 (Fig. 101, PL. 122-(2)) ガラス製の大形品で濃紺色である。径1.8cm, 厚さ1.5cmであり, 孔径0.35cmである。

鉄鏃 (Fig. 101-2~4, PL. 122-(2)) 2は十数本が錆によって一つの束となって出土する。これらには二種類あり平根式と三角形の尖根式である。尖根式の方は錆がひどく詳細は不明であるが, 茎部に皮糸巻きの痕が残る。平根式の身は両丸刃造りであり, 茎部には皮糸巻きの痕が残っている。なおFig. 101の2-1と2-2はFig. 101-2の身である。3は大形の広根式であり鏃身下部を欠失している。扁平な両丸造りである。4は茎の破片であろう。

不明鉄器 (Fig. 101-5, PL. 122-(2)) 5はU字状に曲っているが下端が欠損しているため形状は不明であり, 用途も理解できない。断面は方形である。

鉄刀 (Fig. 101-6, PL. 122-(2)) 刃部のみで錆のため刃こぼれがしている。断面は二等辺三角形を呈していて, 残存長19cmである。6はこれに付属する鑿と思われる破片であり, 長さ推定で7cm, 幅6cm, 厚みは0.2~0.45cmを測る。

(上野精志)

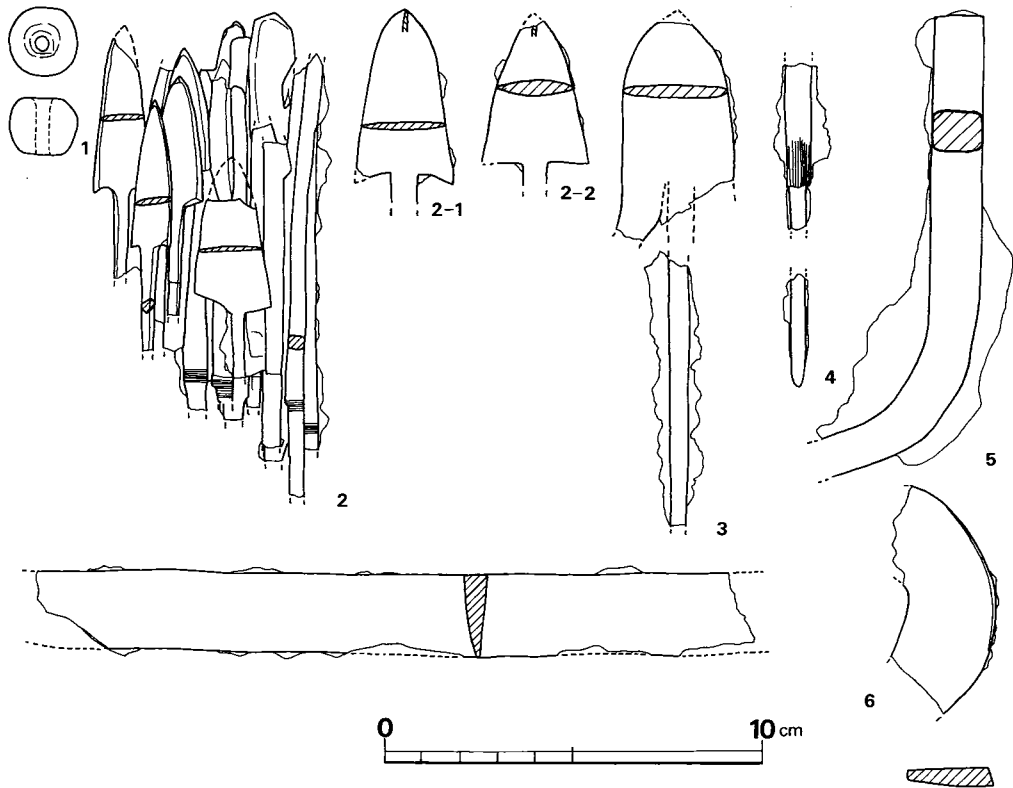


Fig. 101 汐井掛第14号古墳出土装身具・鉄器実測図（縮尺1/2）

### 5) まとめ

第12, 第13号古墳と連なるため立地は下方になるが, 墳丘の築造過程や石室の構造・墓道・石室掘り方などで, やはり竪穴系横口式石室の範疇に入る。

閉塞状況より追葬が認められるようである。

出土遺物は玄室内より鉄刀, 鉄鏃の武器類, 須恵器が出土し, 埋葬された遺体の頭骸骨等が遺存している。

墳丘盛土内では墓道の左右より多量の土器類がみられる。

出土須恵器の時期については, 坏蓋, 身をともにⅠ～Ⅴ類に分けたが, 天井部と体部及び, 口縁内側においてシャープさに欠けること等により, Ⅰ類をⅢ-A～Ⅲ-B期との過渡期にし, Ⅱ・Ⅲ類をⅢ-B期に比定し, Ⅲ類の方がより新しい要素を備える。Ⅳ・Ⅴ類はともにⅣ期に比定されるが, 法量により分けることが出来, いわゆるⅣ-A期, Ⅳ-B期に当る。また第9号古墳の同時期のものに比べると本古墳のものは古式のなごりが強いことが注目される。他の器形においても, 大半がⅢ-B期に比定出来るものと思われるが, 提瓶Ⅱ類はⅣ期に入るものではないかと思われる。

(上野精志・渡辺健二)

## 15. 第 15 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 90・91)

第15号古墳は、鞍手郡宮田町上有木と、同郡若宮町沼口を境する山林の小径下にある。このことより墳丘の面積が広い宮田町所在の古墳としておく。

12～14号古墳の枝道を共有する一連の南斜面に在り、群としては同一のグループに含まれるものである。現状として山の下方斜面に造られた山辺の道が、真下に主体部上半を削って通り、その道の北側の道の断面に墳丘が半裁されて北半盛土

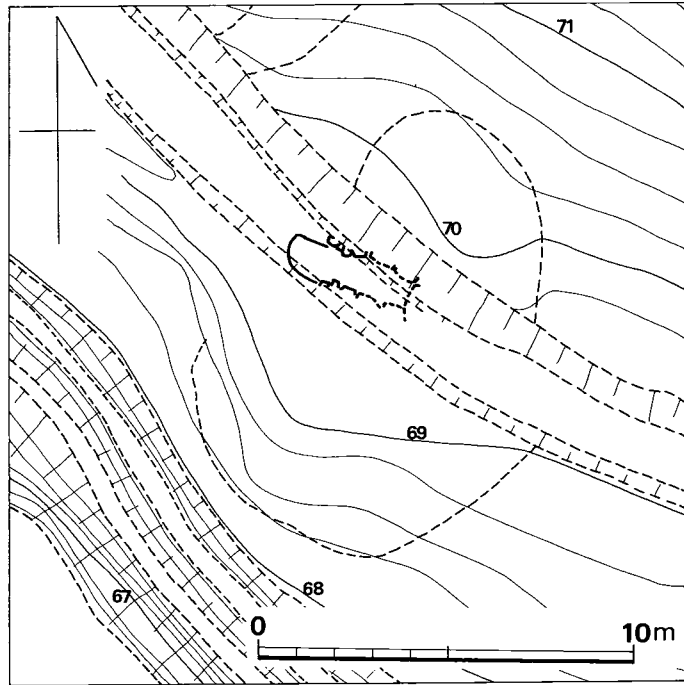


Fig. 102 汐井掛第15号古墳地形図 (縮尺 1/200)

のみ残るといふ状況であった。従って、道路部の石室部も殆んど残らないであろうという予測のもとに掘り下げたが、意外に玄室床面は深く、石材はかなり抜かれていたが、玄門部～閉塞等良好に残っていた。これは、地山を深く掘り下げるといふこの種の石室の特徴によるものであろう。

## 2) 墳 丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 102～104, PL. 123)

斜面に占地するため、主に上位の北半部において地山整形等の地業を行ない、旧地表を切って周溝を掘り南半では明確でない。周溝は北半のみにおいて馬蹄形状をなすと推定される。

## (2) 墳丘盛土 (Fig. ㉓, PL. 124)

盛土部分は、旧表土上に僅かに二層を残すのみである。即ち、それらは、周溝や主体部墓壇を掘った際の赤土の地山土をまず旧表土に盛ったものである。なお、Fig. ㉓の墳丘土層断面図は石室に係るものでなく石室の北方の墳丘断面である。



## 3) 主体部

## (1) 石室 (Fig. 36, PL. 125)

本墳主体は、単室両袖式の形態をとり、竪穴系横口式石室の範疇に入るものである。主軸をN68度Wにとり、等高線に平行するように西へ開口する。

玄室床面プランは狭い長方形を呈する。玄室各部の計測値は、長さ左側壁1.75m、右側壁1.80m、仕切石端まで1.77m。幅は奥壁0.8m、中央部0.92m、前壁0.88mで側壁積石は高さ0.85mまで残る。

腰石は、奥壁・左右側壁の奥壁寄り各2個分の推定計5個が抜かれており、両側壁玄門寄りの各1個が残るのみである。残る2腰石は横位に用いており、袖石は柱状に縦位に据えている。腰石以上の積石は二段残るのみであり、左壁部で重箱積み状の形態がみられる。

玄室床面には、10~20cm大のやや扁平な礫が敷かれ、残りは良くない。

羨道部は「ハ」の字状に極めて短かく開き、0.45mを測る。墓壇壁際に石を込め、下

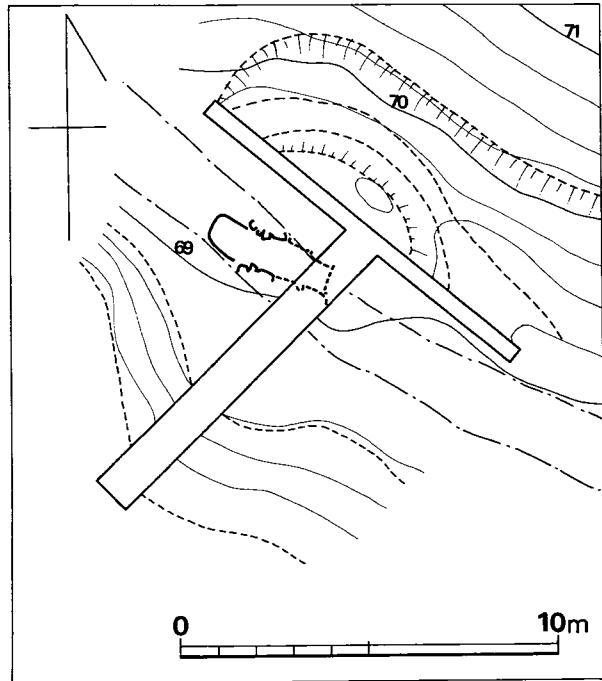


Fig. 103 汐井掛第15号古墳墳丘測量図 (縮尺1/200)

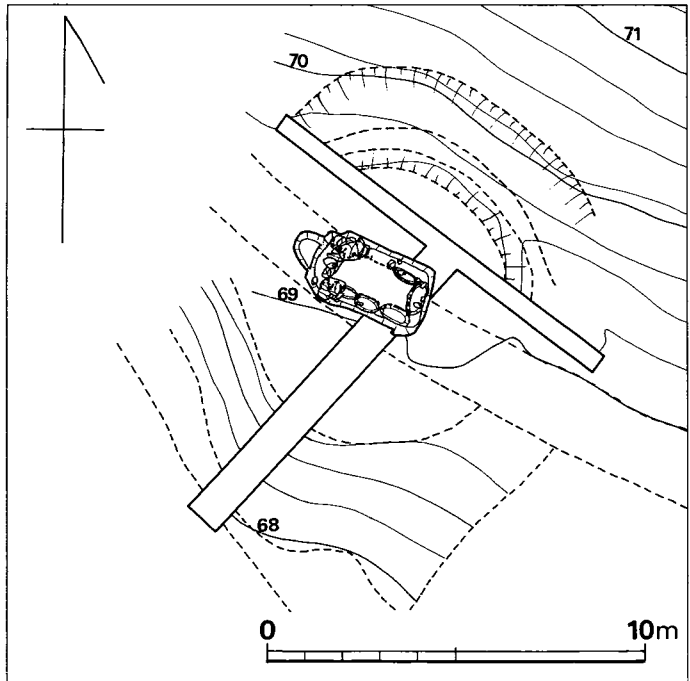


Fig. 104 汐井掛第15号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

低地山から積み上げる類ではない。

柵石上に外接して、閉塞石がみられる。長めの石を横位に置き、その上に塊石3個を込める。

墓道部は前述の如く、墓壇掘り下げ後につけた状態で短かく、主軸よりやや北へ偏向する。

柵石外端より1.05mの長さを残し、その高低差は0.5mを測る。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ③⑥, PL. 125)

石室を設けるために、地山整形を行なった旧表土面より1.3m掘り下げて長方形の墓壇をつくる。長さ3.0m弱、幅2m弱であり、深さは玄門方が約10cm浅い。

床面は奥壁方が深く玄門よりゆるやかに下降していて、ほぼ平坦である。腰石を据えるための壇を下底に穿つ。そして腰石の座りを良くするために根石を込めている。

墓道は長方形の石室掘り方に形式的につける如き感さえある。60cmの舌状の短かい墓道をつける。

### 4) 遺物

#### (1) 出土状況

石室内より遺物の出土は皆無である。

墓道内の覆土中より提瓶片があり、これは同個体となるものが周溝状の削り出し内よりも出土している。その他墳丘盛土中より須恵器の高坏脚部、甕片。土師器の高坏脚片があり、若干の弥生式土器も出土しているが、いずれも図示できない程の小破片である。

(中間研志)

#### (2) 出土遺物

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	4個体以上
	坏蓋	1個体
	高坏	1個体
	提瓶	1個体
	甕	1個体
	土師器	1個体
	高坏	1個体
	弥生式土器	数点

#### 須恵器

詳細に観察できるのは高坏脚部片で全容を知り得ないが、形態的にみて無蓋高坏になると思われる。時期はⅢ-B期に比定出来る。

(渡辺健二)

## 5) まとめ

若宮町と宮田町の町境にあり、山道となっているため墳丘は大きく削られ、石室の遺存も悪い。調査前では墳丘のみの調査と思われたが、石室掘り方とその内に石室の袖石、閉塞部が若干現存しており、石室掘り方の調査を十分に行ない石室プラン復元に努める。

第12号から第14号古墳が一直線に並んでいるのに対し、これらよりやや下方の斜面上にあり、上記三基とほぼ同じ方向に開口する石室を有し、一連の群として同一グループに含まれるものであろう。

古墳の墳丘規模や墳丘の築造方法、又石室架構や掘り方は上記三古墳とほぼ同じ手法と思われるが、石室と墓道に若干の違いがあるようである。

墳丘の築造、石室構造、石室掘り方などからして単室の横穴式石室であるが、谷を挟んで南方丘陵上にある第24号・第25号・第26号・第27号古墳に最っとも類似する。更に同一群とされる第12号から第14号古墳とは接近し、開口方向も軌を一にするなど各所にも同形態を示す。

以上のことから本墳は縦穴系横口式石室として、谷南方のA群から第12号・第13号・第15号古墳群等の群に移る際のより古い形状を残す石室と見做することができよう。

出土遺物は石室内よりは無く、墓道覆土中と墳丘盛土内より若干の須恵器が出土しているに過ぎない。小破片ばかりで図示できないが、その特徴よりしてⅢ-B期のものようである。この古墳でも追葬が行なわれたものであろう。

(上野精志)

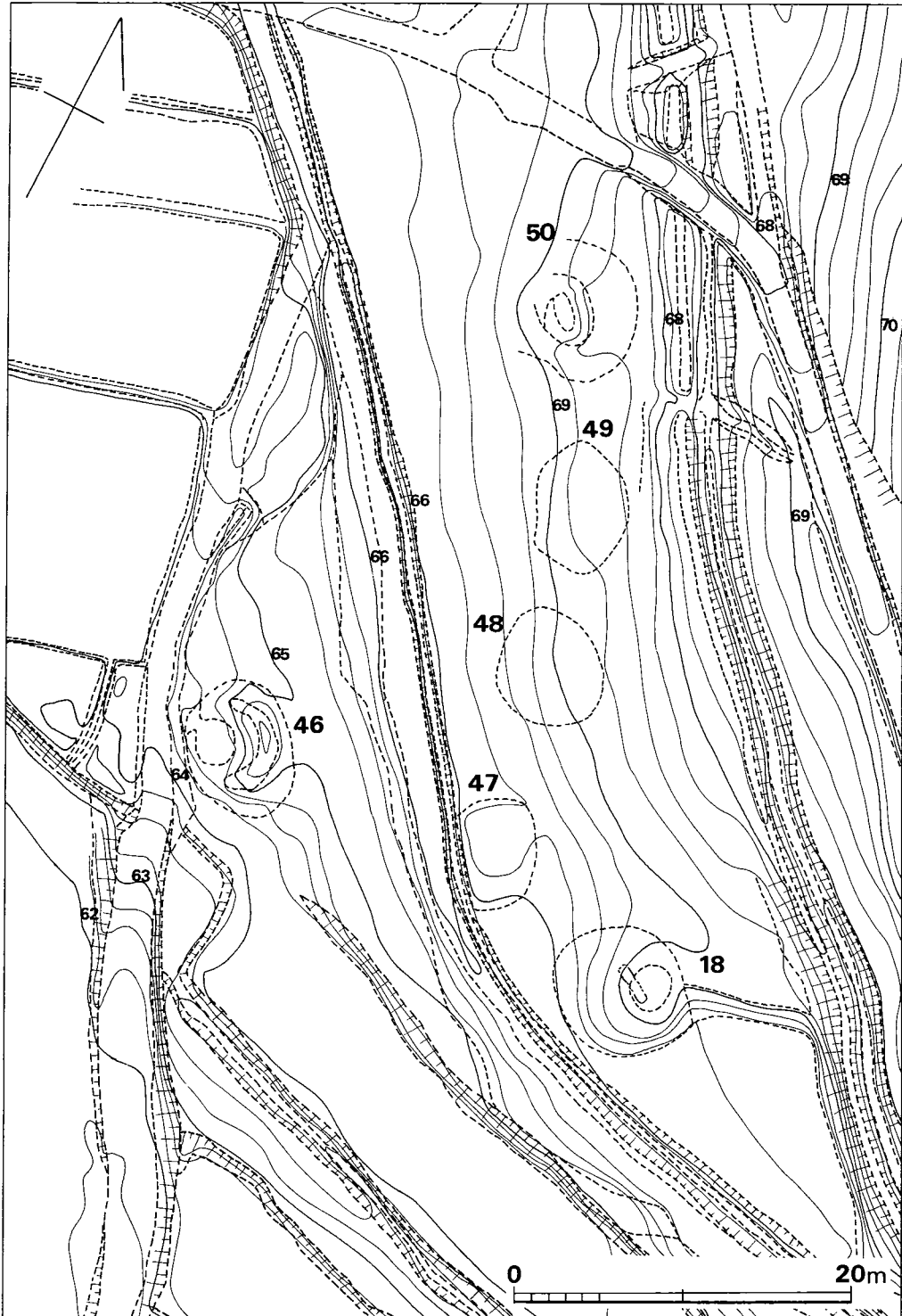


Fig. 105 汐井掛第18号・第46号・第47号・第48号・第49号・第50号古墳周辺地形測量図（縮尺1/400）

## 16. 第 18 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 105, PL. 128)

第18号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第12号から第17号古墳がある汐井掛の丘陵の北西斜面よりさらに斜面下方の低い位置に、ほぼ斜面に並列して5基の小古墳が在る。第18号古墳はこれらの最南東方にあるものであり、第15号古墳の南西方15m離れた位置である。

今回の調査では、発掘の対象となった古墳は第18号のみで、これより北西方に連なる第47号から第50号古墳は未調査である。

現状では墳丘の残り状態は良く、墳丘中央部などに凹地は見られなく、墳頂部が若干削平された程度で未盗掘と思われる。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝・墳丘盛土 (Fig. 106・㉟, PL. 127~129)

伐採段階で低くはあるが、明らかな高まりが観察された。東西径8.3m、南北径7.6m弱の円墳で、西側からのみかけの高さは約1.6mである。傾斜地に占地しているので、南北両側裾部の地山は削平され、特に北から西側にかけては上端幅

2.7mの馬蹄形の周溝が形成されている。主体構築に先行して、表土層は除去されている。

#### 3) 主体部 (Fig. ㉟, PL. 130)

不用意にトレンチを掘り下げたために、不明点はあるが、木棺直葬と思われる。

主軸を南東から北西にとり、幅45cmの南東側を頭部としたとみられ、足部は若干狭まる。全長は1.8m前後と推定される。この範囲の地山直上には茶色の粘質

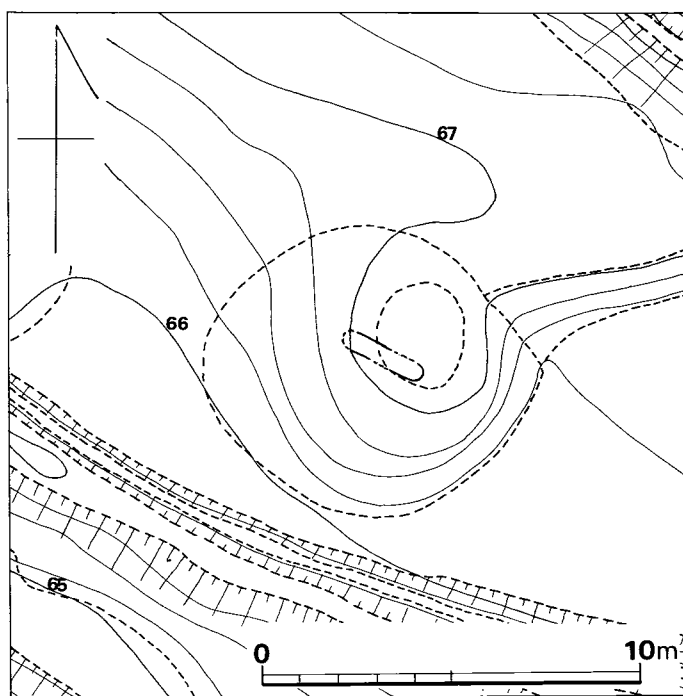


Fig. 106 汐井掛第18号古墳地形図 (縮尺 1/200)

土(5)が厚さ5～9cmにわたって敷かれており、上面は南東側が少しく高い。この周囲のうち東半を高さ10～14cmの黄茶褐色土(21)がとり巻くが、木棺を破覆するという程のものではなく、基部に置かれた程度に過ぎない。これらの粘土の間には側板が腐朽した痕跡はなく、とすれば木棺の内法はさらに狭いものとなる。

遺物は皆無である。

(石山 勲)

#### 5) まとめ

当古墳は第12号から第17号古墳の存在する丘陵斜面のさらに下方の南方斜面の5基の古墳が斜面に平行して一列に並んでいる。この内の最も東側にあるものである。

墳丘径8.0m弱、高さ約1.6m弱で地山整形による周溝の造り出しと墳丘基盤面削平がみられる。

主体部は木棺直葬であり汐井掛古墳群中では唯一の石室ではない主体部である。木棺の全長は1.8m、幅は0.45m前後である。墓壇は地山整形面に掘り方はなく直上に粘土を敷いているようである。

本古墳の特徴は古墳群中では唯一の主体部が石室ではなく木棺とすることである。出土遺物は主体部、墳丘内においても皆無であるため時期は不明であるが、墳丘の築造方法からして古墳時代のものとして間違いなからう。

なお、当古墳より北西方に並んでいる4基の古墳はいずれも表面観察では径6.7m、墳高0.5m位の小円墳である。第18号古墳と同じ主体部の木棺直葬かと思いボーリングを実施した結果石室の石材と思われるものに当たり、いずれも木棺直葬ではないようである。とすれば汐井掛古墳群約53基中当古墳の第18号のみが石室ではなく木棺とされる。

なお、第18号、第46号から第50号古墳を立地のみから便宜上汐井掛古墳H群とした。

(上野精志)

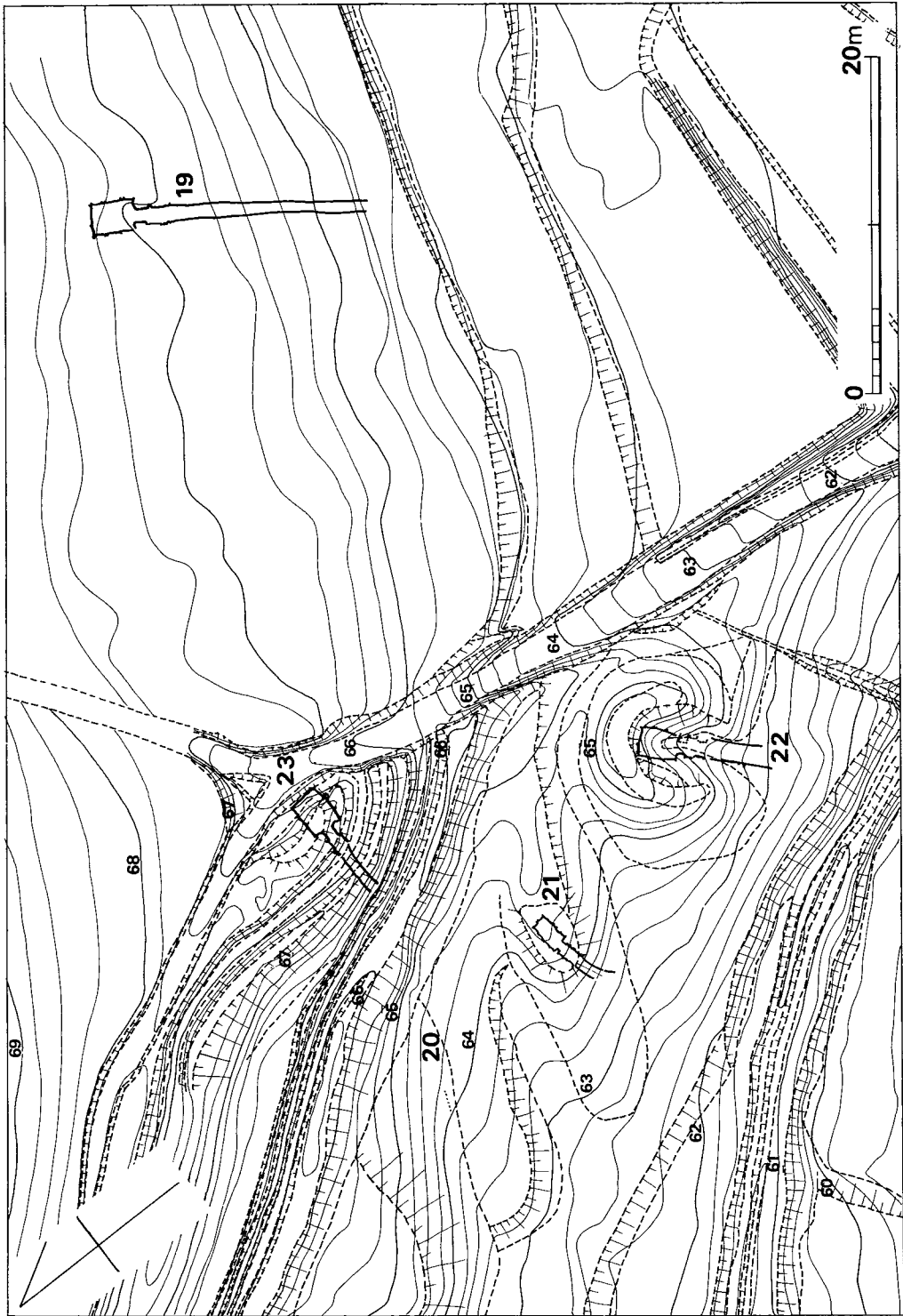


Fig. 107 汐井掛第19号・第20号・第21号・第22号・第23号古墳周辺地形図 (縮尺 1/400)

## 17. 第 19 号 古 墳

1) 立 地 (Fig. 107, PL. 131-(上))

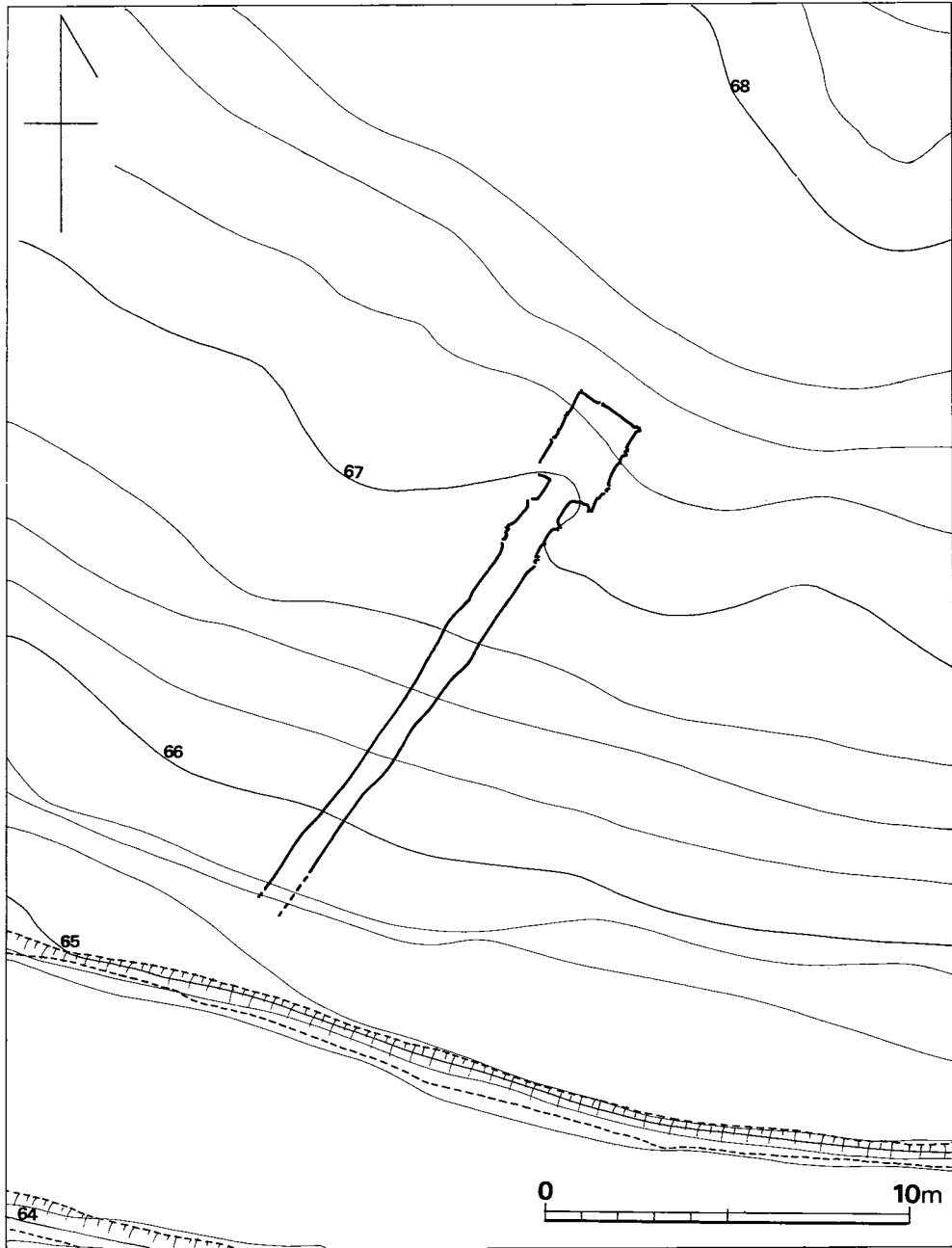


Fig. 108 汐井掛第19号古墳地形図 (縮尺 1/200)



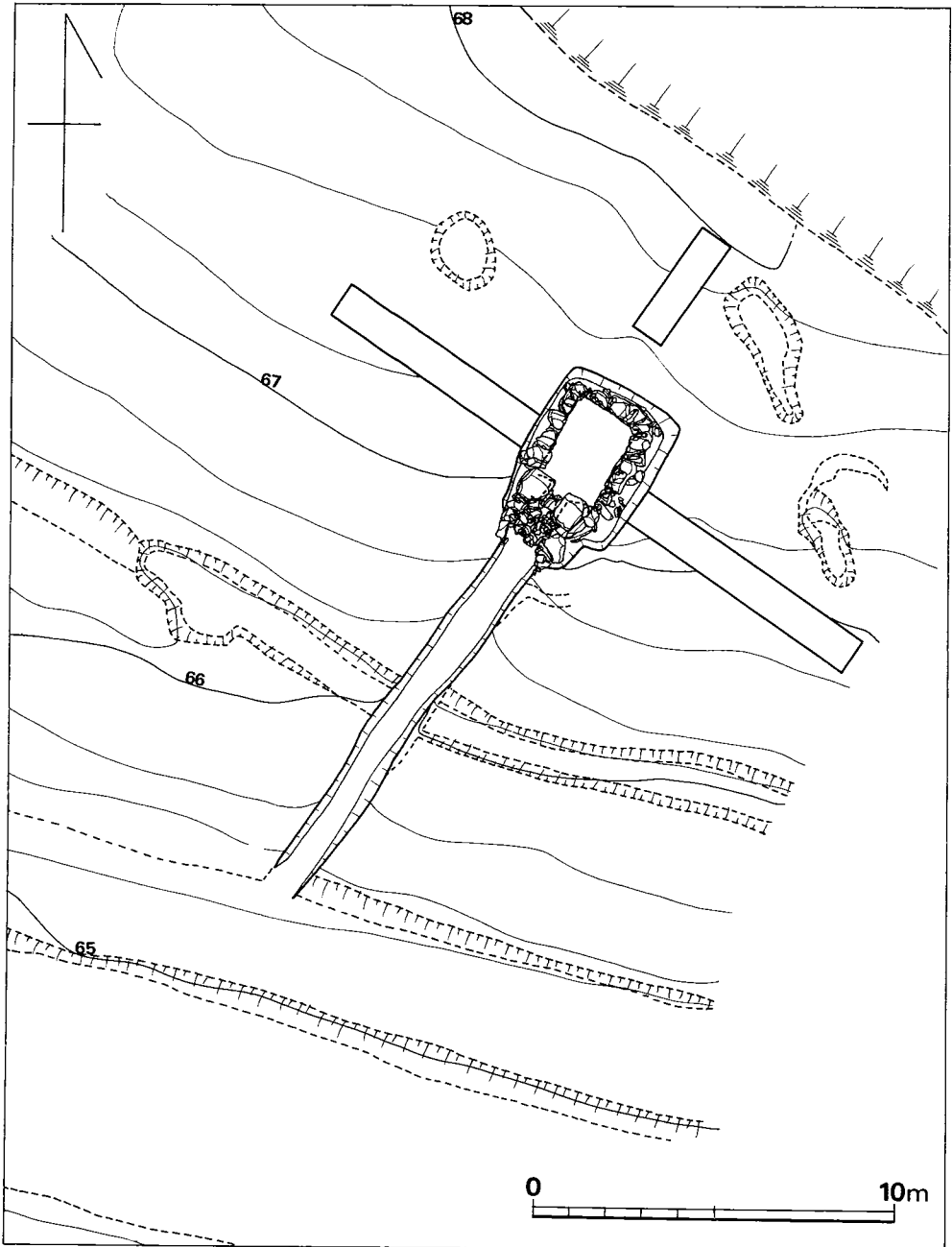


Fig. 109 汐井掛第19号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

第19号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。汐井掛古墳群では最東端にあるもので、汐井掛の丘陵が北西より南東に延び、さらに東方に続いているが、東方に変わる頂部よりの丘陵斜面の中位で、第3号古墳の南40m、第23号古墳の南東35mのところにある。一応第20号から第23号古

墳と同一のグループとみてD群に入れる。

現状は荒地の山林であり墳丘の高まりや地山整形の痕など見られず平坦地であった。ブルドーザで表土を剥ぐと箱式石棺の蓋石と思われる石が出土したので拡張してみると石室になる。

## 2) 墳丘 (Fig. 108・109, PL. 131-140)

山林に開墾されており墳丘は全くなく削平されている。地山整形面を検出すべく表土除去作業を行なうと石室の北側に半月形に溝状の凹地が三ヶ所検出できた。

しかしこれが地山整形による周溝状の掘り込みの痕かどうかの判断は出来なかった。それは三箇所と途切れており、第1号から第18号古墳の地山整形による周溝状の掘り込みはいずれも途切れは見られないものであり、墳丘裾部が明らかになっていない点などである。

以上よりして、墳丘の形状、大きさなど全く不明であり、石室掘り方も現存する地山上面は本来の地山整形面ではないと思われる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. 38, PL. 132~136)

主体部は単室の横穴式石室で、主軸はやや玄室と羨道が曲っているがS34度Wを指し、丘陵斜面の低い下方に開口していて、ほぼ斜面に直交して構築されている。

玄室は二から三段目の石を残すのみであり、天井部などの玄室上半の状況は不明である。平面形はたて長の長方形であるが、やや歪んでいて袖石の前壁に対して奥壁は左側（北西方）に寄っている。

玄室の長さは左側壁2.50m、中央の主軸中央で2.50m、右側壁2.50mと同じ長さであり、幅は奥壁下、中央部、袖石方と各1.90mを測り、壁高は残りの良いところで奥壁の1.10mである。

奥壁は二段目まで残っており腰石は二枚であり右側が大きく左側が小さい。右腰石は三角形状に先尖りであり下端は平で深く据えられている。左腰石は立石であり幅50cm、高さ70cmで見かけは50cmである。この腰石の上に長方形の二段目の石を横積みして右側の腰石高さと同じにしている、これらの石と石の間には小さな詰石を数多く用いている。

左側壁の腰石は四石で袖石寄りの四石目は、奥壁寄り三つ目の石と袖石の間に隙間があるのを塞ぐ程度の石である。三石目まではいずれも長形状の細長い石材を横積みしており、高さは同じようになる。腰石の上の二段目の石よりやや雑になり重箱積みになっている。

右側壁の腰石は三石で左側と同じようにしているが中間の石が高い。各壁とも詰石が多く用いられている点が目立つ。

各腰石の下端には玄室内面と、掘り方周壁方の西方に根石が多く見られ、とくに石と石の接点に使用されている。

床面は水平であり石室の玄門部方の半分に敷石がみられる。奥壁下にも若干みられるので本来は全面に敷石が存在していたものと思われる。

敷石は10cm大のものとともに小さな小石の川原石を用いて二重敷きであり、掘り方床面にほぼ接する。おそらく、小石を先にばらまき、その後大きな石を敷いていたものと推定される。

袖石は非常に大きく典型的な両袖型を呈している。左右袖石とも二石が残っていて左側は側壁より50cm、右側は70cm突き出ている。長さも右側が長く90cm弱で、左側は70cm弱であり、高さは共に40cmである。両方ともほぼ正方形の石を据え、さらにその上に同じような形状、大きさの石材を置いている。おそらくこの石の上に楣石が在ったものと思われる。

袖石の間70cmに楣石があり、袖石の中間に三石を直線に並べていて、主軸方の長さ20cmであり奥壁より楣石の玄室方端までは長さ2.80mである。高さは敷石より2.3cm高いだけである。

羨道部は羨道側壁の間にある楣石（第一楣石とし、前述の袖石間のものを第二とする）によって前後に分けられる。

羨道前半部は長さが第二楣石端より第一楣石端まで1mで、側壁間の幅90cmである。両側壁は羨道前半部まで二石づつであり袖石方は西側とも大きな石の横積みで、石の長さ0.9～1mであり、この石の上には袖石と同じように大きな石が重ねてある。墓道方の石は30～20cmであり、上端の石は石室掘り方に乗っている。

第一楣石は二石で左側の石が主体であり、長さ25cmで、板状に立っていて高さ30cmである。第一楣石より羨道部端まで40cmある。羨道より玄室奥壁までの全長は4.60mである。

墓道は極端に長く11.5mまで検出できた。検出した墓道の始りは開墾により崖となっているため本来はさらに長く続くと思われる。現存値で上端幅1.20m、下幅0.8m、深さ0.4mである。おそらく墳丘裾部を越えて墓道の枝道に続くものと思われる。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 38, PL. 135)

不整長方形であり羨道部の左右が若干違う。長さ5.40m、幅は奥壁方で3.50m、羨道部で2.40mと右側壁に角が付き狭くなる。深さは奥壁方で1.40m、羨門方で0.60mであり、床面はほぼ水平、平坦である。

各腰石の下には床面より掘り込みがあり、特に奥壁は深く30cmもある。周壁と各腰石との間は奥壁方は狭いが、西側壁方は広い。

なお、右壁体には掘削時のスコップ状の掘削痕が明瞭に残っていて、幅10～15cmのもので直に掘り下げている。

## 4) 遺 物

### (1) 出土状況 (Fig. 110, PL. 137)



Fig. 110 汐井掛第19号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

石室内の敷石上より装身具、鉄器等が比較的多く出土している。天井石は無く石室内に土が充満しているが、その覆土中より須恵器坏蓋破片が出土する。

石室床面の敷石上には、奥壁の中央部直下に耳環(1)1個と南東方20cm離れて丸玉1個があり、右側壁下の奥壁寄りには管玉が1個あり、さらにその1.1m玄門寄りの壁下には鉄鏃(2)1個が出土する。

床面の中央部では、やや左側壁に鉄鏃(1)があり、右側壁寄りには耳環(2)がある。

左側壁と右袖石の隅附近に鉄器が集中していて、紡錘車2個と、馬具と思われる留金具が出土する。

柩石の玄室内20cmのところよりは鉄鏃(3)が、羨道の右袖石端下に鉄鏃(4)があり、各所に散在している。原位置を保っているものは紡錘車等の一群だけであろう。

石室外では墓道覆土中より須恵器の坏身、その他若干の土師器片が出土するも原位置を保っていないものと思われる。

なお、墓道と羨門附近の覆土上層より中世の土師器小皿、坏と瓦器が出土している。

(上野精志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 111~114, PL. 138)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |         |       |       |
|---------|-------|-------|
| (1) 土器  | 須恵器   | 3個体以上 |
|         | 坏蓋    | 1個体以上 |
|         | 坏身    | 2個体以上 |
|         | 甕     | 2個体   |
|         | 土師器   | 2個体以上 |
|         | 小皿    | 1個体   |
|         | 坏     | 1個体   |
|         | 瓦器    | 1個体   |
|         | 埴     | 1個体   |
| (2) 装身具 | 耳環    | 2個    |
|         | 丸玉    | 1個    |
|         | 管玉    | 1個    |
| (3) 武器  | 鉄鏃    | 4個    |
| (4) 工具  | 鉄製紡錘車 | 2個    |
| (5) 馬具  | 留金具   | 1個    |

## 須恵器 (Fig. 111, PL. 138-(1))

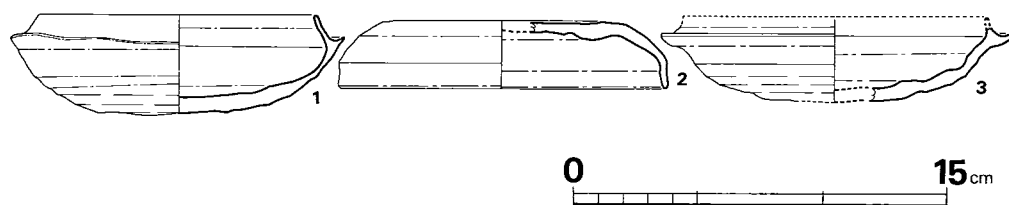


Fig. 111 汐井掛第19号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

坏蓋(2) 玄室内覆土中より出土。%を欠損する。口径13cm(推)、器高2.7cmである。色調は灰色を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を含む。

坏身(1, 3) 1は墓道覆土中より出土。口径10.8cm, 器高4.0cm, 立上り1.0cmで、立上りは内傾する。3も墓道覆土中出土。%を欠損する。立上りは欠損しているが短かく直立するものと思われる。色調は両方とも灰色系統を呈し、焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。

#### 土師器

小皿, 坏とも小破片であり、図示しないが、小皿の底部には糸切り痕がみられ、坏も口縁部より丸く下り、底部に続き、器高は低いようであり共に中世のものと思われる。

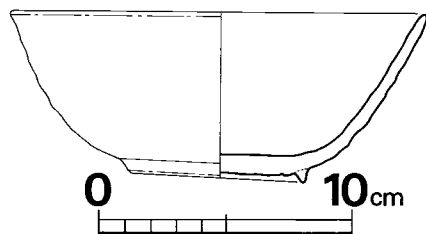


Fig. 112 汐井掛第19号古墳出土瓦器実測図 (縮尺1/3)

#### 瓦器 (Fig. 112, PL. 138-(1))

碗(2) 墓道より出土。口径16.5cm, 器高6.5cmである。調整は器面剥落が著しく不明である。色調は茶褐色を呈するが、内面は燻しており灰黒色を呈している。焼成は良で、胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)

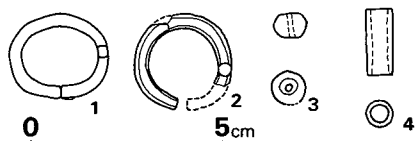


Fig. 113 汐井掛第19号古墳出土耳環・丸玉・管玉実測図 (縮尺1/2)

耳環 (Fig. 113, PL. 138-(2)) 1は奥壁下出土で、銀環と思われる。2.6×2.3cmの正円形に近く、突き合せは狭い。断面径は0.3cmを測る。2は、右側壁下より出土していて、破片となっており、突き合せの部分欠く。推定で2.6×2.3cmの正円形に近く、断面径は0.3cmで1と同じ大きさ、形状と思われる。

丸玉 (Fig. 113, PL. 138-(2)) ガラス製で黒灰色を呈す。径0.8cm, 厚さ0.6cmであり、孔径0.15cmである。

管玉 (Fig. 113-3, PL. 138-(2)) 右側壁直下出土で、長さ1.7cm, 径0.75cmで孔径は0.35cmで両方より穿孔している。材質は硬玉であろう。

鉄鏃 (Fig. 114-1~5, PL. 138-(3)) 4本の出土であり、各々異なる形態品である。1は

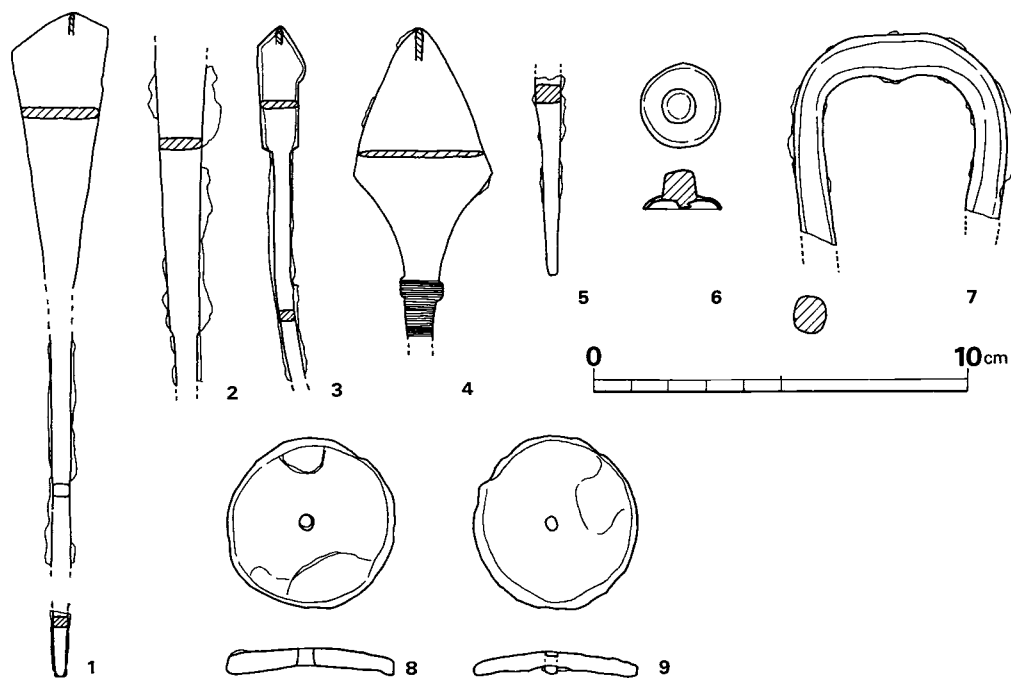


Fig. 114 汐井掛第19号古墳出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

鎌身先端部を欠損しているが円頭斧箭式と思われる。2は変形斧箭式で鎌身先端部が尖るが左右の長さが違うものである。3は尖根式であり鎌身と茎の間に棘状突起がありこれより茎にかけて樹皮や細かい糸が巻きついた痕が残る。4は尖根式で鎌身先端の左右の長さが違って長い方には袋がついている。茎は末端に行くにしたがい曲っている。5は3の茎であるかもしれない。

**鉄製紡錘車** (Fig. 114-8・9, PL. 138-(3)) ともに鉄製であり、8は錆がひどく表面はかなり錆落ちしている。台形を呈し、径は4.5cm、厚さは不均一であるが0.5cm弱で両端に比べて中央が凹面になる。孔径は0.35cmで片割りであり凸面の方が小さく、凹面が大きい。9も錆がひどく残りは悪い。径4.4cm、厚さ0.4cm弱で8と同じように中央が凹になる。中央の孔に芯が残っている。孔径は0.3cmである。

**馬具** (Fig. 114-5・6, PL. 138-(3)) 小破片で丸座のようにみえるが馬具と推定する。かすかに金箔が見られる。

## 5) まとめ

当古墳は汐井掛の古墳群中で最っとも東方に在り、一基だけ離れて存在しているのであるが一応便宜上第20号から第23号古墳と同じD群とする。

墳丘規模や盛土の状況は完全に削平されていて全く不明である。

石室は丘陵斜面にほぼ直交して開口し、長方形の横穴式石室である。石室は墓道と羨道が一直線になっているのに対して玄室奥壁が左方に大きく寄っており歪んで見える。両袖石の据え方からしてもやはり正長方形ではなく歪んでいる。墳丘や天井石、側壁の上半が失なわれているため石室の掘り方と腰石下の根石や裏込め石などに調査の重点を移して調査する。その結果各腰石下及び下端よこに多量の根石や裏込め石を使用していることが判明し、又石室掘り方周壁に掘削工具痕も検出する。

閉塞石が残っているが原状を保っているかどうかは判明出来なかったが調査の結果では玄室の両袖石間及び羨道部にかけて乱雑に長形状の石材をたて、よこに積み上げて閉塞している。

墓道が11.5mと長く検出できさらに続くようで「ハカ道」「枝道」を考えさせるものである。

出土遺物は玄室より装身具類、武器、馬具類、工具類と種類が多く出土している。装身具は耳環、丸玉、管玉であり、これらは原位置を保っていないようである。鉄製紡錘車の発見された右側壁と右袖石の隅角出土の一群は原位置を保っていると思われる。紡錘車は福岡県内では朝倉郡朝倉町の装飾古墳である狐塚古墳より完形品が出土し、新しくは平安時代になるが春日市下白水の門田土塚墓よりも完形品が出土しておりこれらを参考にし、本古墳出土の鉄製有孔円盤を紡錘車とした。

馬具の飾り金具は木棺の釘頭にも似ているが径の大きいことや金箔が張られている事などからして鞍の留金具と推定する。

土器は石室内の覆土中よりと墓道の覆土中より須恵器と土師器の破片が出土し、さらに墓道と羨門附近の覆土上層より糸切り底の土師器小皿や坏、及び瓦器が出土している。

須恵器の坏をみるとⅣ-A期であり、覆土中出土であるがこの古墳の年代を示す。なお中世の土器類とこの古墳との係りは不明である。

(上野 精志)



## 18. 第20号古墳

第21号古墳から北側に約11m離れた斜面上で、東西長く、長さ約3m、幅0.5mの範囲で礫が散在しているのを確認したが石室の一部であるかどうかは不明である。ただ石室床面の敷石と判断できそうな配列があるため一応古墳としてとりあげた。(Fig. 107・115・116, PL. 139・140)

(池辺元明)

## 19. 第21号古墳

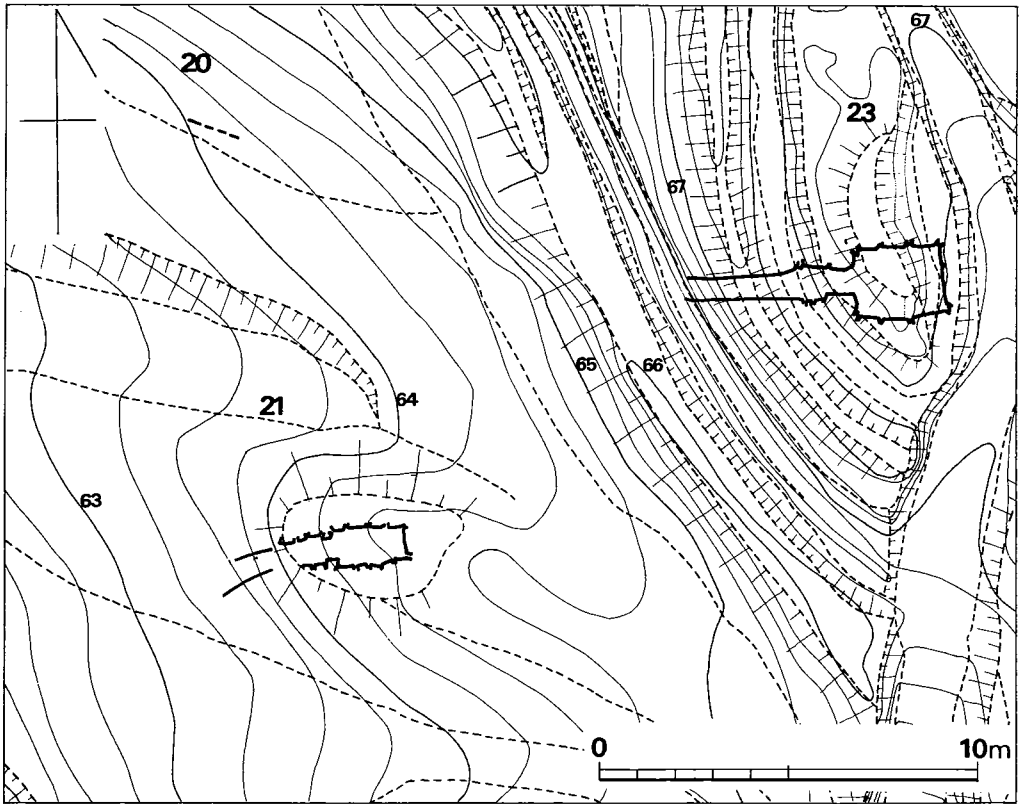


Fig. 115 汐井掛第20号・第21号古墳地形図 (縮尺 1/200)

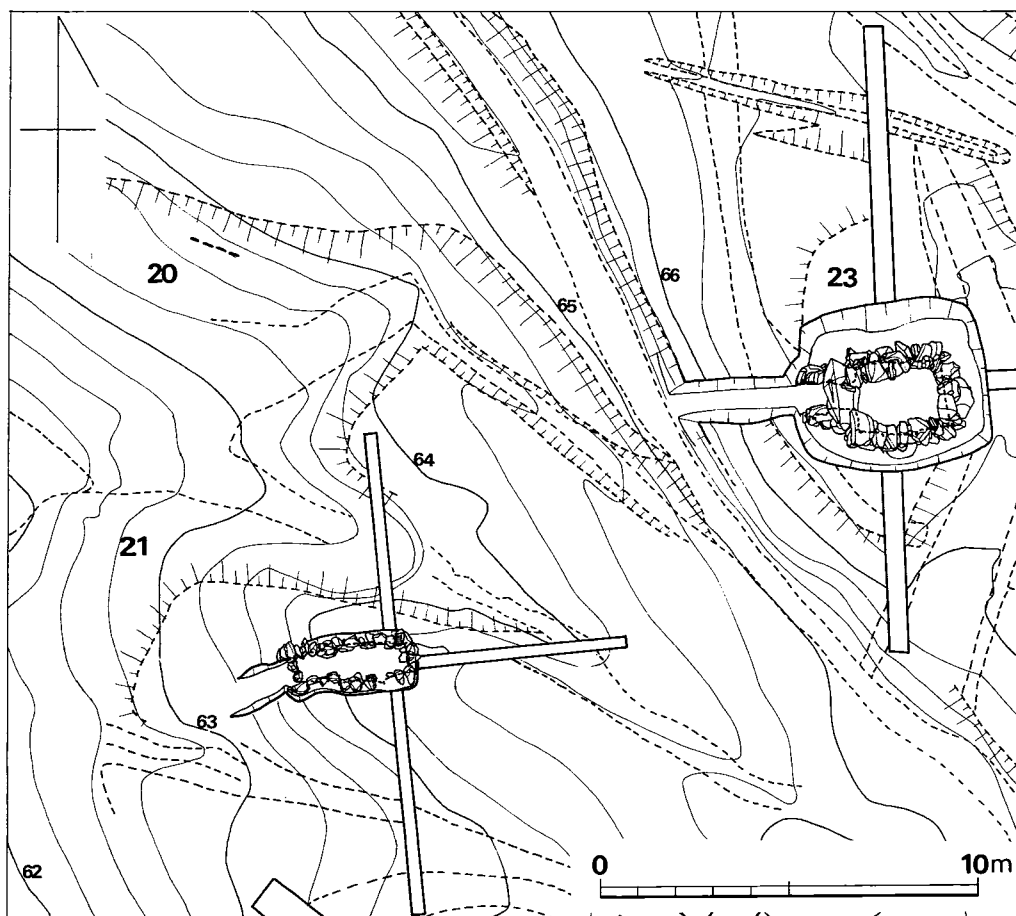


Fig. 116 汐井掛第20号・第21号古墳地山整形面測量図 (縮尺 1/200)

1) 立地 (Fig. 107, PL. 139)

第19号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。汐井掛の丘陵が南東に延びていて北西—南東に稜線をつくっている。その稜線の南西斜面の最下方近くで小さな谷が入りこんでいるが、稜線より谷の方に近い。

この古墳の北西方には第20号古墳、南東方には墳丘を接するように第22号古墳が在り、一直線上に並んでいる。さらに北東の斜面高所側には第23号古墳が位置している。

調査前の現状は、陥没あるいは石材の露出も認められなかったが、僅かに墳丘を思わせる低い高まりがあり、調査の対象とした。

2) 墳丘 (Fig. 21, PL. 142)

後世の開墾等により大きく削り取られており地山整形や、それに伴う溝などは不明瞭である。

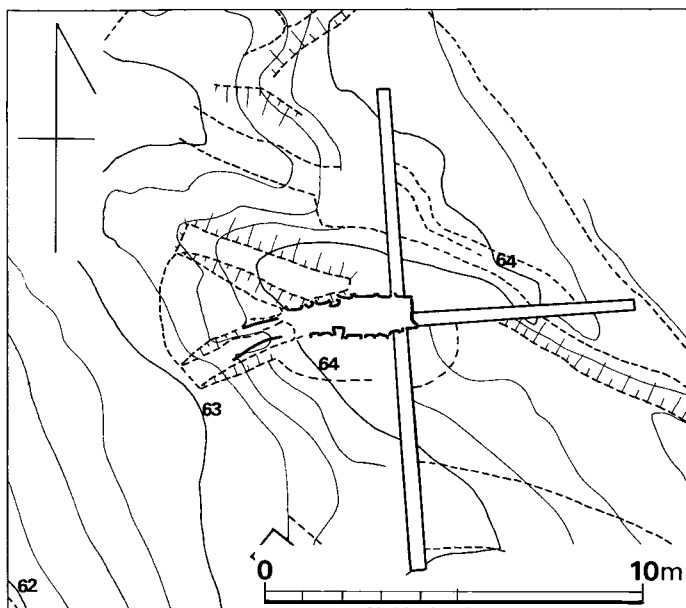


Fig. 117 汐井掛第21号古墳墳丘測量図 (縮尺 1/200)

又墳丘盛土も既に失われており表土を剥ぐと直接地山であり盛土は確認できなかった。

3) 主体部

(1) 石室 (Fig. ④, PL. 142・143)

ほぼ南西に開口する全長3.35mの小型単室横穴式石室を主体とし、S84度Wに開口する。

天井石と周壁の上部を欠く。基部には、谷底をさらに一段穿って大き目の石を配し、根石を詰める。右壁では腰石上端をほぼ同高に揃えている。玄室中央長(奥壁から仕切石内側まで)は1.95m、奥壁部幅0.75m、横口部幅0.95mと手前が広い。周壁の現存最高部で0.80m弱に過ぎず、当初の高さもこれをそう大きく超えないものと思われる。床には礫を敷き、奥壁側を僅かに高くしている。

横口部の左右に袖石を立て、その間の床に仕切石を置くが、幅0.5m強と狭まい。羨道部側壁は、幅0.7m、長さ1.1~1.3mであるが、正接せず墓道と同様に少しく南に歪む。墓道は地山を浅く掘り割ったもので、先端に向け緩く下降する。

(2) 石室掘り方 (Fig. ④, PL. 143-(右))

墓壇は墳丘の中央部にあると思われ、不整長方形プランで長さ約3.7m、最大幅1.6mであり、深さは奥壁側で0.55m、玄門側で0.2mである。

床面は水平であり、若干凹凸面がある。床面より約5cm浮いて一面に敷石があり、この敷石は小さく5×10cm大のものであり全面に一重に敷きつめられている。

各腰石下には掘り込みがあり、奥壁の掘り込みが一番深く根石は大きいものが用いられている。両側壁石の下にも根石がみられる。これら各腰石の外端と掘り方周壁との間は狭まて接する程である。

4) 遺物

(1) 出土状況 (Fig. 118, PL. 144-(1))

盗掘を受けており、原位置を保つものはない。ただ、玄室右袖石近くから装身具が集中して採取されており、差し違い二体葬を想定させるものがある。

土師器高坏の脚部が墓道近くの南方墳丘裾部よりと、墓道の北方左側墳丘より出土する。

なお、PL. 143-(出), Fig. 110にみられる羨道出土の須恵器と玄室内出土の土師器は現地で盗難に合い図示できない。

(石山 勲)

(2) 出土遺物 (Fig. 119・120, PL. 194-(2)・(3))

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |         |     |     |
|---------|-----|-----|
| (1) 土器  | 須恵器 | 1個体 |
|         | 埴   | 1個体 |
|         | 土師器 | 3個体 |
|         | 埴   | 1個体 |
|         | 高坏  | 2個体 |
| (2) 装身具 | 耳環  | 2個  |
|         | 丸玉  | 2個  |
|         | 管玉  | 5個  |
|         | 切子玉 | 1個  |

須恵器

埴 羨道部より出土するが、盗難に合い詳細は不明である。

土師器 (Fig. 119, PL. 144-(2))

埴 石室の右側壁でも袖石近くの隅に出土するも盗難に合い詳細は不明である。

高坏 (1, 2) とともに脚部のみを残存して全容を知り得ない。1は墳丘裾より出土し現高14.8を測る。器面の剥落が著しいが外面に縦位のへら削りの痕跡がみられ、内面にシボリ痕が見られる。色調は黄褐色を呈しているが脚裾

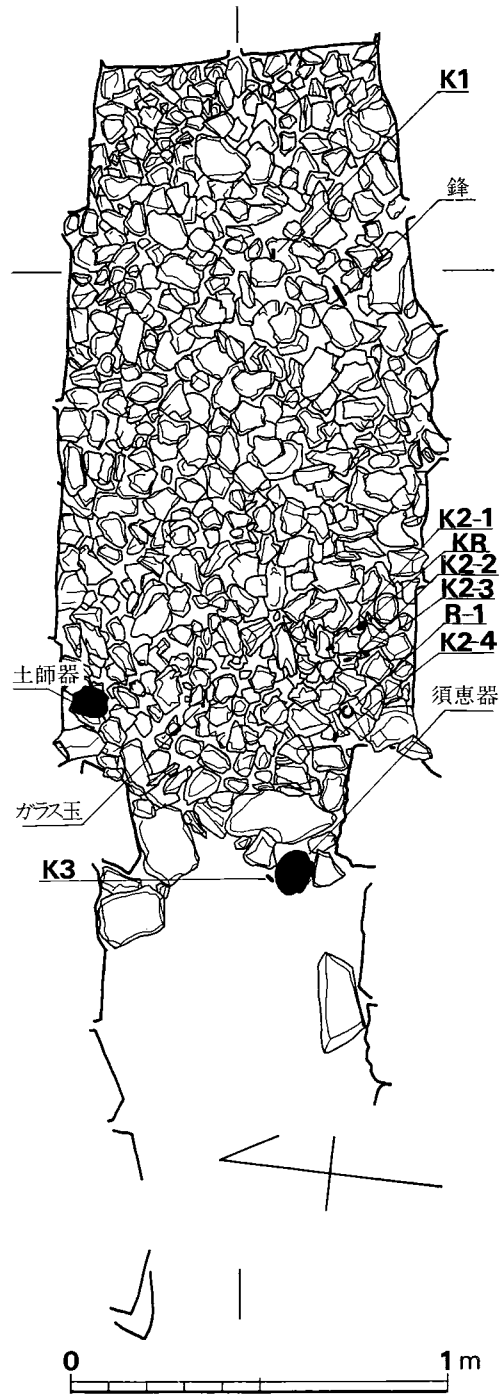


Fig. 118 汐井掛第21号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

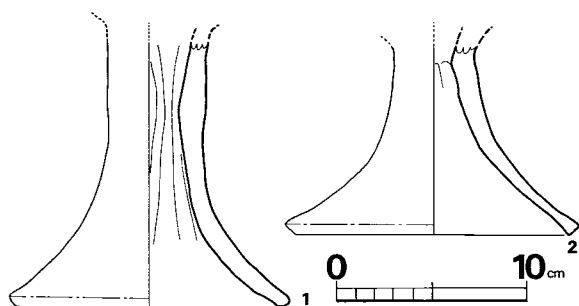


Fig. 119 汐井掛第21号古墳出土土師器実測図（縮尺1/4）

に丹彩りの痕跡を残す。焼成は良  
であり、胎土は砂粒子を多量に含  
む。2は現高14.6を測る。器面  
の剥落は著しく内面に僅かにシボ  
リの痕が見られるのみである。色  
調は黄褐色を呈し、焼成は良であ  
る。胎土は砂粒子を含む。

（渡辺健二）

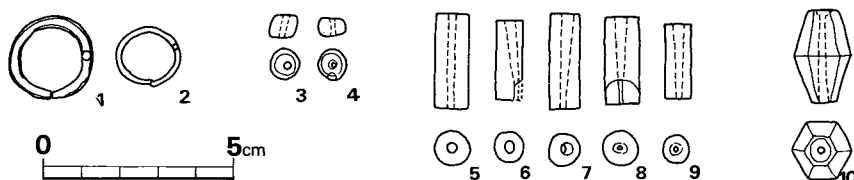


Fig. 120 汐井掛第21号古墳出土装身具実測図（縮尺1/2）

**耳環**（Fig. 120-1・2, PL. 144-(3)）大・小2個が出土しており共に銅胎であり鍍が  
でている。1は径2.1cmの正円形で、断面径0.2cmを測る。2は径1.7cmの正円形で断面径0.15  
であり突き合せ部が二重になっている。

**丸玉**（Fig. 120-3・4, PL. 144-(3)）共にガラス製で濃紺色を呈す。3は扁平形であり径  
0.75cm、厚さ0.6cmであり、孔径0.2cmを測る。4も扁平形であり径0.75、厚さ0.45cmで、孔  
径0.1cmを測る。

**管玉**（Fig. 120-5~9, PL. 144-(3)）いずれも石製で濃緑色を呈する。大形1・3・4と  
小形2・5とがあり、1は長さ2.5cm、径0.9cmで孔径は0.15cmを測る。穿孔は一方向から行わ  
れている。2は一部欠けていて長さ2.1cm、径0.7cmで、孔径は0.15~0.25cmであり外縁に対し  
て斜めに一方より穿孔されている。3は長さ2.5cm、径0.7cmで、孔径は0.3~0.15cmと大きい。  
4は一部欠けていて長さ2.3cm、径0.9cm、孔径0.3~0.1cmであり孔径の大きい端は孔部周囲が  
浅く凹んでいる。5は長さ2.0cm、径0.7cm、孔径0.3~0.15cmである。これは材質が悪く表面に  
気泡が現われている。

**切子玉**（Fig. 120-10, PL. 144-(3)）水晶製であり、一方の先端が少し欠損している。稜は  
鋭く最大の中央径1.6cm、長さ2.45cm、孔径0.2~0.1cmであり両端とも孔部周辺が凹む。

## 5) まとめ

第20号と第22号の中間の場所に位置し立地より汐井掛古墳D群とした一群に含まれる。

盛土が全く遺存しなく規模は不明であるが、径約6.7mの小円墳と推定される。第20号からこ

の第21号及び北東方の第23号古墳附近は開墾により大きく変貌してこの第21号古墳も墳丘基盤や周溝状の掘り込みも見られない程に壊されている。

石室は単室の小型の横穴式石室で玄室は長方形プランであるが、奥壁より玄門方が幅広いものである。石材は、いずれも小さなものでありたて長に立てている。天井石までの石室内空間は広くなく床面から天井石まで1 m弱と推定される。羨道が墓道近くより南方に曲っている。墓道も羨道の曲りを受け継ぎ南方へ歪んでいる。

玄室内の大きさが1.95m、幅80cm前後の小型の横穴式石室である点が注目される。葬法として差し違い二体葬が想定されている。

出土遺物は玄室内より装身具が奥壁寄りと玄門近くの二群より発見され、土師器、須恵器も出土しており、須恵器埴の特徴よりⅢ-B期と思われる。

(上野精志)

## 20. 第 22 号 古 墳

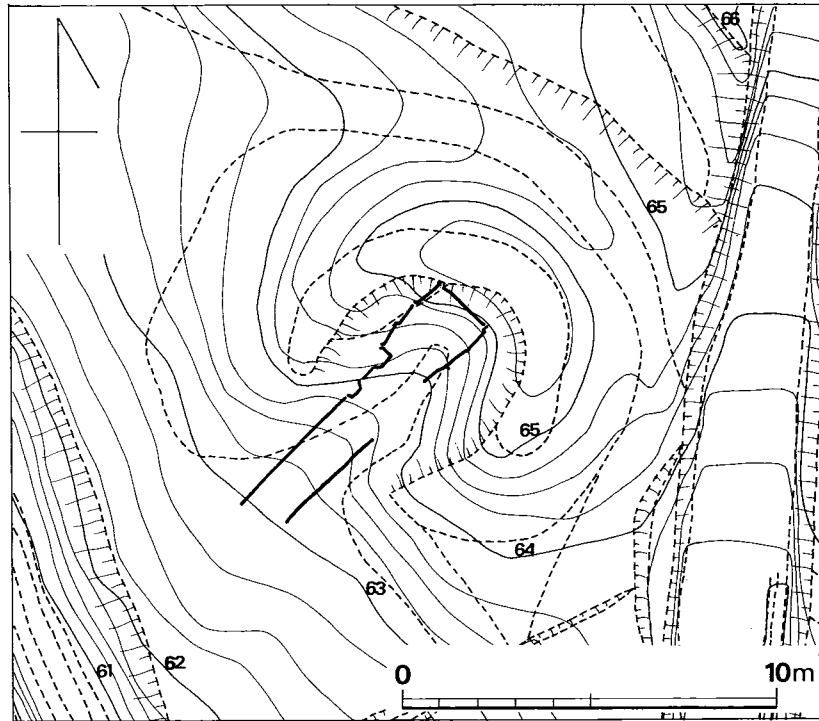


Fig. 121 汐井掛第22号古墳地形図 (縮尺 1/200)

### 1) 立地 (Fig. 107, PL. 139)

第22号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第21号古墳が北西方に在り、D群の最南端に位置し周溝を有する円墳で、東西径10m・南北径13m、見かけの高さ1m前後を示す。標高65mで尾根線の西側斜面に位置し、石室の構築は等高線に直交するようにつくられている。

盗掘孔が西側からはいり、大きな陥没孔が見え大々的な破壊をうけている。

### 2) 墳丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 121~123, PL. 145)

古墳は丘陵斜面にあり、石室入口方は傾斜面の低い下方に、奥壁方は高い上方に位置している。斜面の高い上方の北東側に三日月形の周溝状に掘り込みが見られる。これは本来なら半円形に墳丘の東側にも在るものと思われるが山道で墳丘裾部が破壊されているため詳細は不明である。

溝をつくり出すことにより斜面の高い上方の墳丘裾部を形成している。

墓道方の斜面の低い下方も若干の地山整形を行ない墳丘基盤をなしている。

## (2) 墳丘盛土 (Fig. ④①, PL. 146)

Fig. ④①のように地山整形をした基盤を基に盛土をしており、中央の墳頂部は失われている。

盛土は石室裏込め、さらにこれらを地山基盤面までの範囲で比較的細かく盛土版築をしている。そして地山整形をした周溝状の掘り込みや整形面裾を覆って最終的な墳丘盛土を行ない古墳の表土としている。この第22号古墳では各トレンチに石室掘り方内の埋土状態が良く看取される。径約12m、高さ約1.8mである。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ④②, PL. 147・148)

内部主体は主軸をS41度Wにとり略南西に開口する。複室の横穴式石室である。それに狭長な墓道3.5mが付設している。右側壁は玄室部分しか残っていない。前室長さ1m(仕切から仕切の間)幅約1m(中央部)玄室は長さ2.3m,中央部で2.6m,幅は奥壁部で1.7m,横口部で1.5m,中央部で1.8mと若干胴張りである。

基部には大形の花崗石を使用している。据えつけのための掘り込みは、極めて浅く、天井部

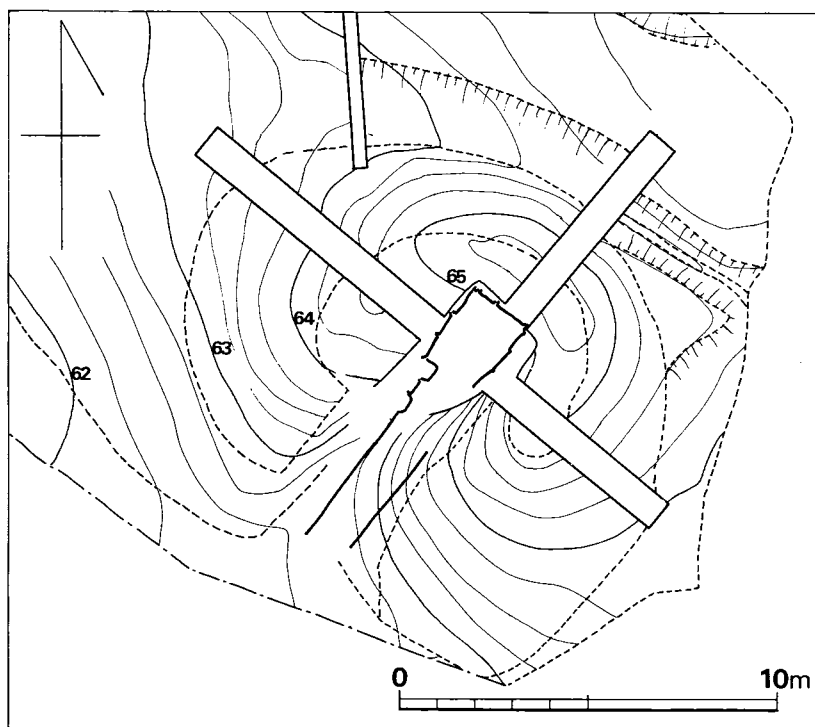


Fig. 122 汐井掛第22号古墳墳丘測量図 (縮尺 1/200)



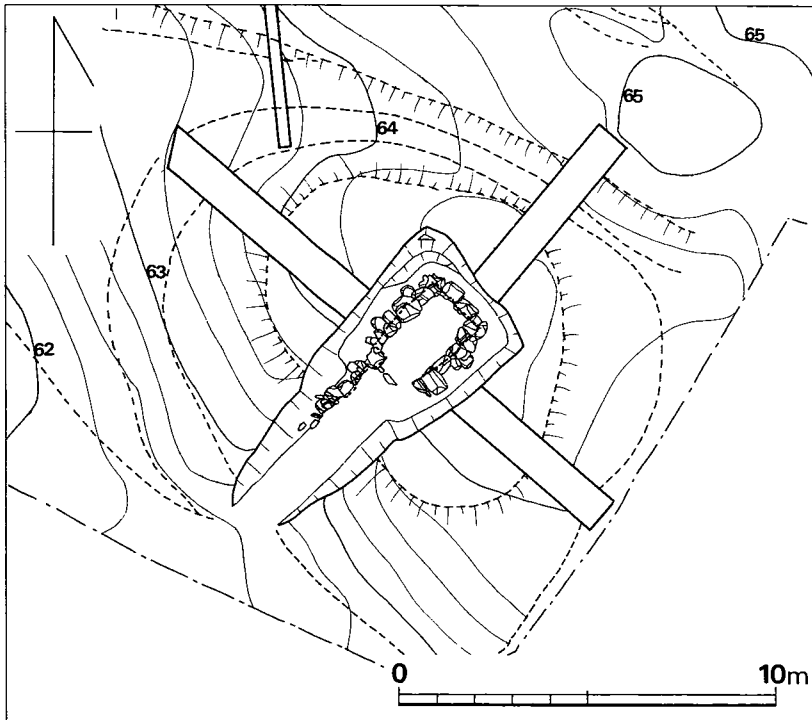


Fig. 123 汐井掛第22号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

および、側壁上面そして右側壁は相当に破壊されており、残高は1.5mが最高である。

石積みは、小石を各所に充満し各段が同じ・高水位となる様に払われ、控えも十分にとっている。右側壁は袖石及び前室の側壁の部分の基部の抜跡がとらえられる。

敷石は大部分が抜かれており、玄室の横口部附近と、前室の第2仕切石部分に残っていた。壇底は略水平に保ち、基部石と基部石との境に後室がわかれ50cm前後の手頃な石をもって、内側につめ、くさびにしている。

玄室の横口部の各1石を立て、袖石としたもので、袖石間には仕切石を置き、玄門の幅は約60cm(推定)で狭小である。また前室においても横口部の各1石を立石して袖石とし、袖石間に第1の仕切石を置いている。袖石と袖石との幅は約40cm前後(推定)でなお狭小である。

羨道部は長さ60cmで極めて短筒なもので、この部分の墓壇底は、玄室床面より高くなり、かつ玄室に比して石積みも粗雑である。

墓道は、地山に穿れた部分は長さ3.5m、幅2.7m、羨道寄り50cm前後までほぼ水平で、墓道の先端に行くほど漸次傾斜していく。

閉塞施設は盗掘によって破壊され残っていなかった。

(2) 石室掘り方 (Fig. ④2, PL. 146-(2))

墓壇は地山を大きく掘りくぼめていて不整長方形プランであり、上端値で長さ5.5m、幅4m、最深1mであり、掘り方周壁はいずれも若干のせり出しをもつ。掘り方幅の奥壁方が広く、羨門方が狭いことが明らかであり、左側壁と右側壁の長さが若干違うようである。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況

石室内よりの遺物出土はない。

墳丘のⅠ区。墓道近くの北方墳丘内より須恵器坏蓋・身片、高坏、埴、甕、高台付壺が各1個体、土師器高坏も1個体出土している。これらはいずれも細片であり図示出来ない。又墳丘内より弥生式土器も若干破片が出土している。

##### (2) 出土遺物

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	6個体以上
	坏蓋	1個体
	坏身	1個体
	埴	1個体
	高坏	1個体
	高台付壺	1個体
	甕	1個体
	土師器	1個体
	高坏	1個体
	弥生式土器	若干

これらはいずれも小破片である。しかし坏蓋は天井部から口縁部端まであり、天井部と体部に稜がつきやや外傾して口縁端部につづく特徴を有するものである。

(副島邦弘)

#### 5) まとめ

21号と並列していて当古墳の方が大きい。墳丘の築造や地山整形などの作業はA、E、B群などと同じである。石室は斜面に対してほぼ直交して開口している。径約12m、高さ1.8mであり石室の掘り方が1m弱であるので、地上に出ている分が高い。石室は複室の横穴式石室で玄室は長方形で若干胴張りとなる。前室は推定で正方形である。

出土遺物は墳丘内のみで土器類がみられ、須恵器の特徴はⅣ期のようにであり6世紀の末から7世紀前半に比定できよう。

(上野精志)

## 21. 第 23 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 107, PL. 139)

第23号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。尾根線近くに占地する1～3号墳の南下方斜面に第20号～第23号古墳の一群が位置する。中でも南西側の谷方向へ開口するものうち上位に構築される円墳である。

現状としては、東側（奥壁側）墳丘裾部を小径によって削られるが、西半はかなり残る。石室天井石を失ない、閉塞石は良好に残ることから、天井部からの盗掘を行なっているようである。

## 2) 墳 丘 (Fig. 124・125・㉔, PL. 149)

前述の如く東半を地山下まで削除されているため、地山整形の範囲・規模等は不明確である。石室縁辺においては旧表土が平坦に残るため、旧表上層から地山に周溝を掘り下げ、盛土を行なったものと推定される。

墓道前面も、近世溝等によって大きく変化しているため、周溝の規模、墳丘径など不明である。

盛土は石室上部で裏込め土上方にわずか2層みられ、全体に明確にできる類ではない。

## 3) 主体部

## (1) 石室 (Fig. ㉔, PL. 150・151)

本墳主体は、単室両袖式横穴式石室で、主軸をS89度Wにとり、等高線にやや斜めに西方の谷方向へ開口する。

玄室床面プランは、南

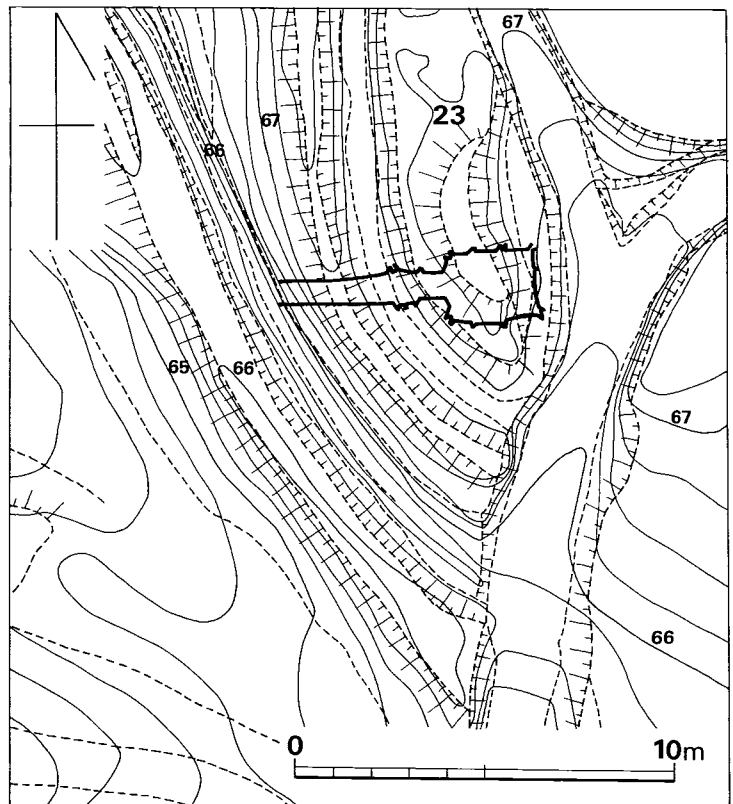


Fig. 124 汐井掛第23号古墳地形図 (縮尺1/200)

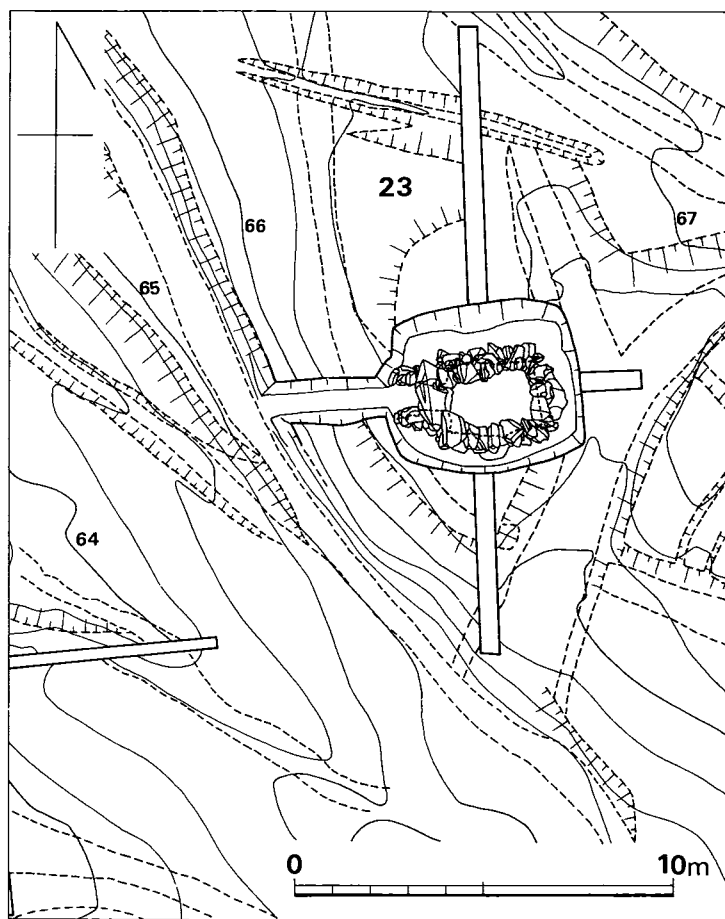


Fig. 125 汐井掛第23号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

上に石室部の天井石が置かれたものと推定される。これらより玄室内部の高さを測ると2m強となり、通常人間が立ち振るまうことの可能な大きい石室である。

玄室床面には敷石がみられ、盗掘によりかなり抜かれているが、大きめの扁平な石を敷き、その隙間に小礫を充満している。

玄門部外方に塊石を主として閉塞が行なわれる。石間には土が多く埋め込まれる。玄門部の梱石は袖石内端よりやや羨道寄りに設けられ、更に、その外方羨道部に梱石を設ける。羨道部は短かく、0.9mを測る。羨道部床面には玄室部同様に敷石を敷き、側壁は積石がやや小振りの塊石を主に墓壇壁際まで込めている。積石の状況は玄室のそれと明らかに様相を異にする。

墓道は直線状に長く伸び、3.5mが残る。地山深く掘り下げられており、床面はゆるやかに西へ傾斜し、同古墳群における竪穴系横口式石室のそれと全く異なることは明瞭である。

## (2) 石室掘り方

壁(右側壁)のみでやや胴張りをみせる。方形に近い長方形を呈する。玄室各部の計測値は、長さ左側壁2.25m、右側壁2.40m、中央で2.40m。幅は奥壁1.75m、中央部1.88m、前壁1.75mで現存側壁積石高さは1.8mを測る。

腰石は奥壁で大小2個、左右側壁で各3個を据えており、全体に大きめの厚い石材を用いる。積石は、腰石上の一段目においては腰石上面の凹凸をならすように、以上四段目まで、略重箱積み状に構築する。隙間に小礫等をくさび状にかませる。

玄門寄りにおいて上部の天井石が残り、この直

玄室を設けるために方形に近いプランの長さ4.80m、幅4.50m、深さは奥壁側で1.20m、玄門側で1.20m、左側壁の中央部で1.90mもの深い墓壇をつくる。

墓壇の下底部に腰石を据える壇を穿ち、腰石を固定するために、根石や裏込め石がみられるところもある。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況 (Fig. ④, PL. 152-(1))

玄室内の敷石上、玄門部近くに提瓶が出土する。

墓道覆土中より須恵器の坏蓋、坏身、台付壺、甕、土師器の高坏脚片が出土しているが、これらは攪乱土層内よりの出土で原位置は保っていないようである。

(中間研志)

##### (2) 出土遺物 (Fig. 126, PL. 152-(2))

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |        |       |       |
|--------|-------|-------|
| (1) 土器 | 須恵器   | 9個体以上 |
|        | 坏蓋    | 1個体   |
|        | 坏身    | 1個体   |
|        | 提瓶    | 1個体   |
|        | 台付壺   | 1個体   |
|        | 甕     | 5個体   |
|        | 土師器   | 1個体   |
|        | 高坏    | 1個体   |
|        | 弥生式土器 | 2片    |

##### 須恵器 (Fig. 126, PL. 152-(2))

提瓶(1) 玄室床面より出土。口頸部を欠損する。胴部最大幅12.7cm。背面は中央を若干くぼませておりへら削り、カキ目調整の順に仕上げている。他はカキ目、横ナデ調整で仕上げている。色調は灰青色を呈し、焼成は良好であ

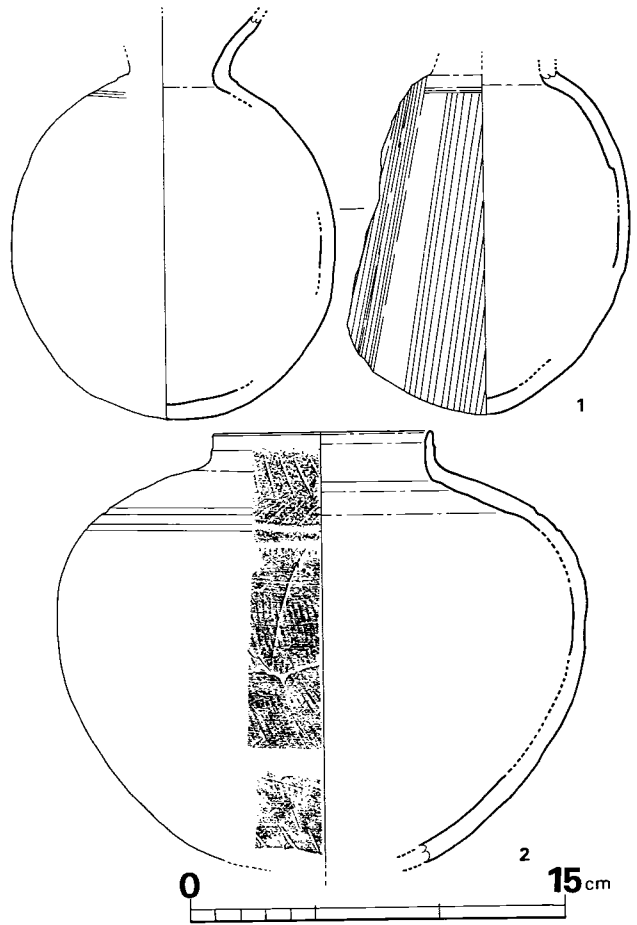


Fig. 126 汐井掛第23号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

る。胎土は小砂粒子を含む。

短頸壺(2) 墓道理土中より出土。口径8.7cm, 胴部最大幅21.0cmである。肩部に二条の沈線がめぐりその上にへら櫛線刻文を施している。胴部上半は横ナデ調整により仕上げられ, 下半は短い単位の平行叩きが入り, 底部近くはその上に横ナデ調整で仕上げている。内面は同心円文状の叩きが入るが横ナデ調整によりほとんど消されている。底部はへら描線刻文がめぐっており, おそらくこの下に脚部が付くものではないかと思われる。色調は灰黒色を呈し, 焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

図示出来るのは以上2点のみである。

#### 土師器

高杯 脚部の小破片であり, 図示できない。

(渡辺健二)

#### 5) まとめ

D群中では最っも高い丘陵斜面上にあり, 墳丘は大きく削られ変貌していて, 墳丘盛土は二層しか残っていない。墳丘の形状や, 規模など全く不明であるが, 推定すると径13.0mの円墳であろう。墳丘の高さは石室掘り方が2m近くもあって深く, 又羨門の楣石の状況より天井石が現在残っている側壁の僅か上に架構されると思われることなどからして, 約2m程であろう。

石室掘り方が深いのが特徴で側壁の3分の2は掘り方内に入りそうであり, 羨門上の楣石も若干掘り方内に納まっていて, 墓道も深く掘り下げられている。石室内の空間も広い。

石室は単室の両袖式横穴式石室であり方形に近いプランを呈するが, やや歪んでいる。両袖石は大きな石材で安定しており, 両袖石の幅は狭く, 全体的に第19号古墳の石室プランと類似している。

出土遺物は石室内より須恵器提瓶が出土しており, その他墓道覆土中より須恵器, 土師器が出土している。これらの須恵器はその特徴からしてⅣ期のものと思われる。

(上野精志)

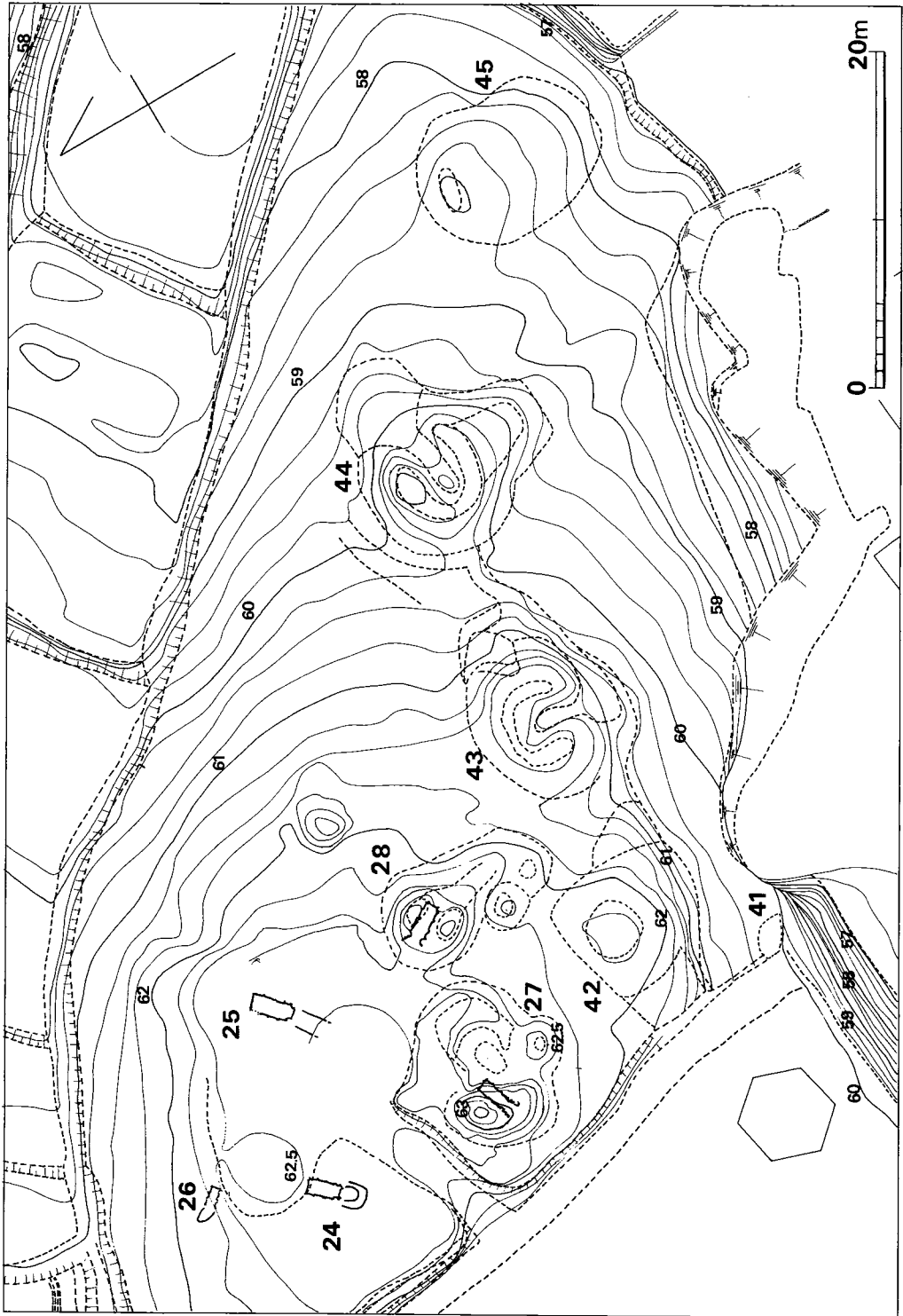


Fig. 127 汐井掛第24号・第25号・第26号・第27号・第28号古墳周辺地形図 (縮尺 1/400)

## 22. 第 24 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 127, PL. 153・154)

第24号古墳は鞍手郡若宮町に在る。第11号古墳を頂点として北西から南東に延びる汐井掛の丘陵がある。この丘陵より南方に続いて山口川方向に面した低い小丘陵が派生して、この

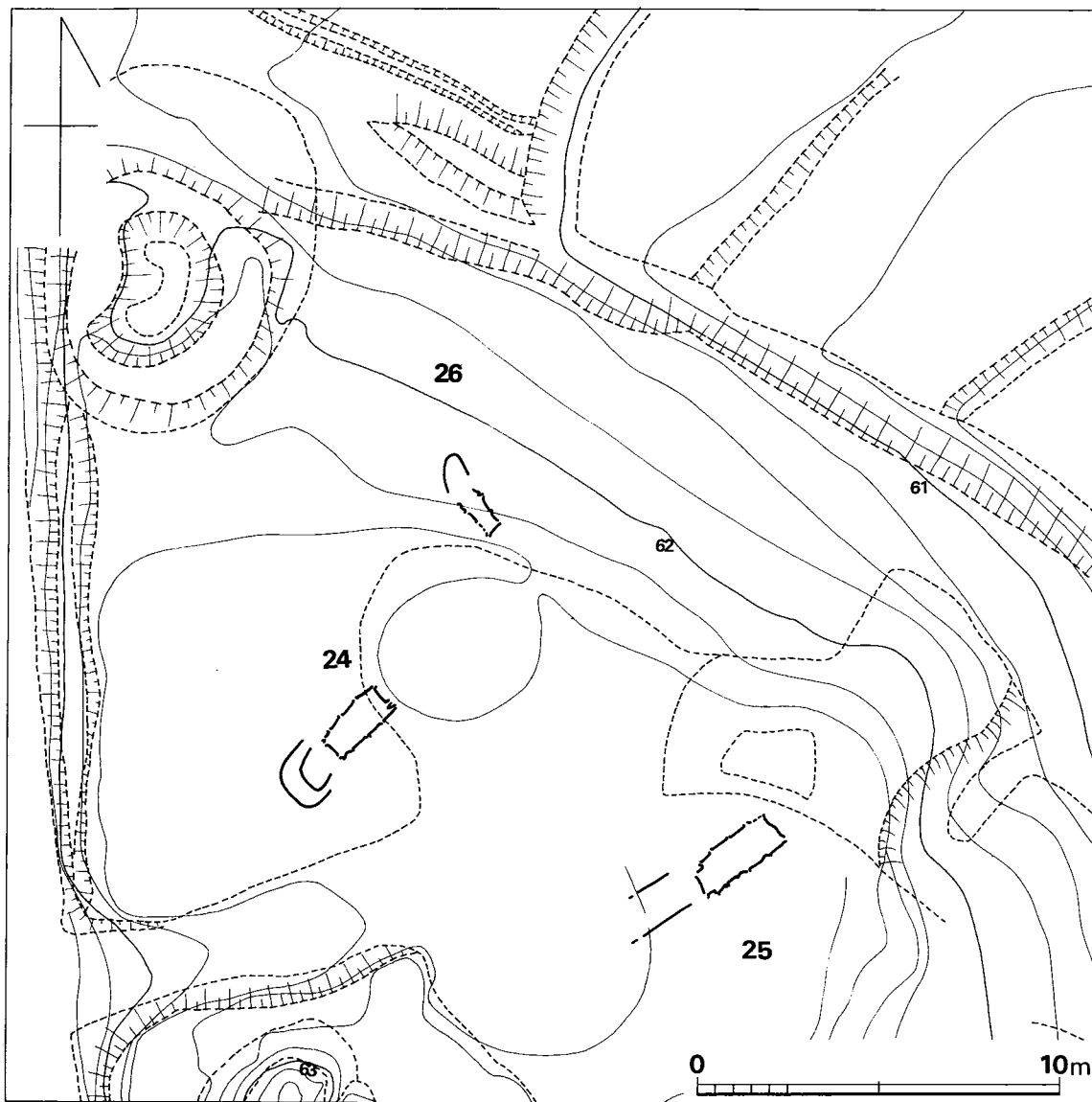


Fig. 128 汐井掛第24号・第25号・第26号古墳地形図 (縮尺 1/200)



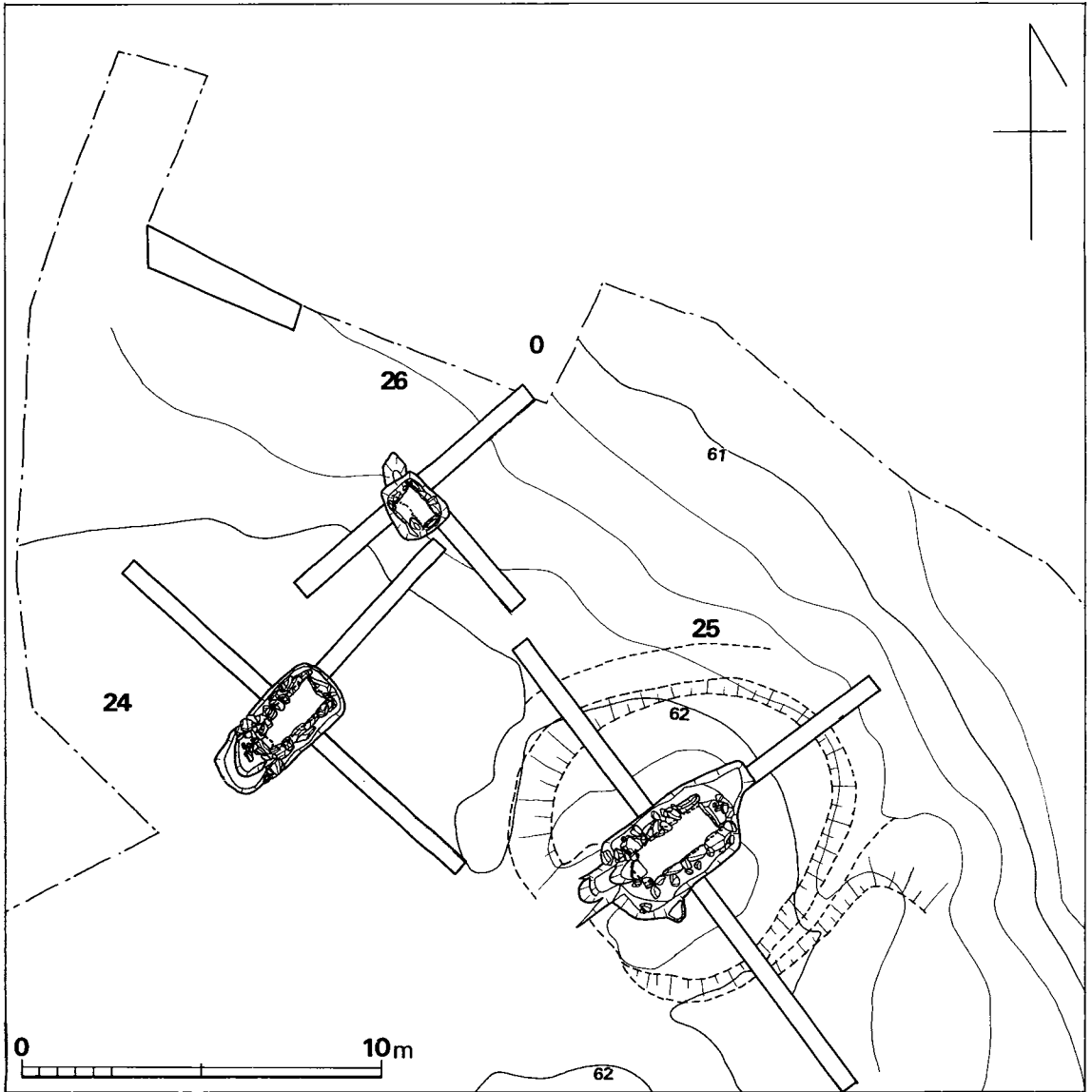


Fig. 129 汐井掛第24号・第25号・第26号古墳地山整形面測量図 (縮尺1/200)

小丘陵と第20号から第23号古墳が位置する丘陵斜面とは小さな谷を挟んで対応している。

第24号古墳はこのやや低い丘陵の頂部に位置しており、北東方には第26号古墳、略南東方には第25号古墳、南方には第27号古墳などがあり、今回発掘調査を実施した古墳5基、その他丘陵斜面にも5基の古墳がみられる。これを汐井掛古墳A群とする。

第24号古墳の在る小丘陵頂部は近世から現代の墓地となっており大きく削平されていて墳丘は全く失われている。この丘陵頂部を念のために表土を剥ぐと若干の石が見出せたのでそれ

らを拡張すると石室に当たり古墳の調査としたのである。

## 2) 墳丘 (Fig. 128・129, PL. 155-(1))

現状では全く墳丘はなく、表土を全面に剥ぎ地山面を出して掘り方の検出や、地山整形の検出に努めた。その結果、墳丘裾部や周溝等は検出されなかったが、古墳の範囲外に旧地表面を整形したことが知られた。

これらを考えて墳丘を推定すると径約8 mの円墳と思われる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ④⑤, PL. 156~158)

主体部は単室の横穴式石室であり、石室主軸はS45度Wを指す。

玄室の平面形は長方形の羽子板形プランで全体に長く、幅が狭いので細長い感じのするものである。長さは左側壁2.05m、主軸部の梱石端まで1.94m、右側壁1.92m。幅は奥壁下で0.90m、石室中央部で0.91m、玄門内側0.90mを測る。右側壁は床面より80cmの三段目の積石まで残っていて、奥壁と右側壁は腰石のみの部分が多く、左側壁は比較的残りがよいものである。

奥壁は一枚石で横積みし、高さ約60cmであり床面より40cmの高さである。玄室内にやや傾斜して持ち送りがみられる。床面方の奥壁面は凸面状に出ている。

左側壁の腰石は四石で奥壁より三石目までの腰石は大きな石材を横積みしており、二番目の石は高くない。四番目、袖石方の腰石は小さく二段積みして高さを他の腰石と同じようにしている。腰石より上の二段目の石は小さな石で、乱石積みであり、長方形の石をよこ長とたて長の方向に積んで高さを調整しながら間石を詰めている。右側壁も左側壁と同じように奥壁より三つの石を大きく横積みして、袖石方のものは小さい石を小口積みしている。

床面は敷石があり、両側壁下と前壁の方にすき間がみられるが全面に敷石が施されていたものと思われる。敷石は5×5cm大と、10×15cm大の大・小の石を乱雑に敷き詰めていて、石室掘り方の床面よりは5cm程浮いた状態で、全体的に一重敷きである。

横口部には両側壁より左右に15cm突き出て、袖石が立ててあり、左は50cm、右は40cmの高さであり幅20~30cmの細長い立石である。

この両袖石の上には左側で三個、右側で一個の石が積み上げられているが、ともに乱雑である。袖石の上に現状では楣石は存在しない。

梱石は長さ25cmで、両袖石間の幅50cmであり、右側の袖石の中央部が横口方にとび出していて、幅40cmと狭くなっている。

羨道(前庭部側壁)は、玄室に対して「ハ」の字状に開く短かいもので、左側壁は極端に短かく40cm程であり袖石方と墓道方は同じ高さに積んでいて50cm程の高さである。右側壁は袖石

より墓道方に向って石積みの数が少なくなり、袖石方では40cmの高さで三個を積んでいる。これらの両側壁の「ハ」の字に開く先端部は石室掘り方に乗った状況であり、貼石となる。玄室床面と貼石下端石との高低差が著しく、勿論前庭部貼石が高く雑である。

墓道は石室掘り方が石室部と同じ幅で袖石を過ぎ、奥壁方の掘り方壁と同じように隅丸で曲っていて、墓道となっている。この墓道掘り方端と横口部の間に一段、階段状に落ちがみられて、石室方からみれば舌状に突き出ている。

梱石端より墓道の掘り方端まで1.30 mであり、舌状の段までは0.9mの長さである。

閉塞石が比較的良く残っており、梱石の墓道方端に乗って両袖石に挟まれた状態で閉塞がなされている。梱石端に幅62cm、高さ44cmの板状石を立てて、その上に二石までみられる。板状石と両袖石の間には詰め石がしてある個所がある。板状石の外面にはさらに倒れないように支える石が用いてある。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ④⑤, PL. 157)

隅丸長方形で、石室の平面形と同じく羽子板形を呈していて長さ3.20 m、幅は奥壁側で1.90 m、羨道側壁端の部分で1.70 mであり、深さは60cmである。床面は水平で中央部が若干凹む。

各腰石の下には掘り込みがあり奥壁と梱石の下は特に深い。根石はみられなく、裏込め石は二・三段目の石と同じ大きさの石を用いて、周壁と腰石外端の間はあまりなく狭い。立ち上りは直に近いが、右側壁は緩傾斜である。

石室掘り方と墓道の幅はあまり変らない程であり、若干墓道幅が狭まる。墳丘裾方より羨門にかけて下降しており、墓道で一段がつき、さらに墓道内で一段が付き階段状になっている。

### 4) 遺 物

#### (1) 出土状況 (Fig. ④⑤, PL. 159・160-(1))

石室内の敷石上よりの奥壁寄り (A群) に装身具の勾玉1個と丸玉3個、小玉616個集中して、さらに玄門寄り (B群) に丸玉87個と小玉38個が出土していてこの群が原位置とすると追葬した差し違い二体葬が想定できる。

石室外では墓道端より墳丘裾の方に1 m弱離れた、前庭部とされる場所よりPL. 159のように須恵器の高坏と、土師器の甕が出土している。

(上野精志)

#### (2) 出土遺物 (Fig. 130~132, PL. 160-(2)・161)

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |        |     |      |
|--------|-----|------|
| (1) 土器 | 須恵器 | 1 個体 |
|        | 高坏  | 1 個体 |

土師器	1 個体
甕	1 個体
(2) 装身具 勾玉	1 個
丸玉	90個
小玉	654個

須恵器 (Fig. 130, PL. 160-(2))

無蓋高坏 (1) 口径13.8cm, 器高9.9cm, 脚裾径8.8cmである。坏部は深く、体部に幅の広い鋭角な凸帯をめぐらし、下に櫛描波状文を施すが、ヘラ削りにより削られて不明瞭である。脚部には三方向に幅の広い台形の透かしが入り、裾部の断面は嘴状を呈する。調整は底部以外は横ナテ調整により仕上げられ丁寧である。色調は灰青色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

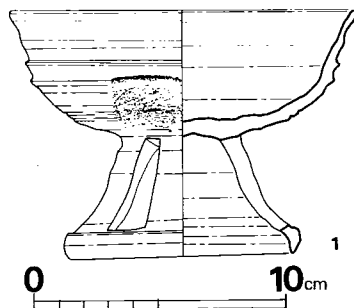


Fig. 130 汐井掛第24号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

土師器 (Fig. 132, PL. 160

-(2))

甕 (1) 胴部下半を欠損する。口径19.3cm, 胴部最大幅32.5cmである。器面剝落が著しく調整は不明である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良である。胎土は小砂粒子を含む。

(渡辺健二)

勾玉 (Fig. 132-1, PL. 161)

A群出土で硬玉製のもので、均一のとれた優品であり深緑色が鮮やかである。全体的に丸味を帯び

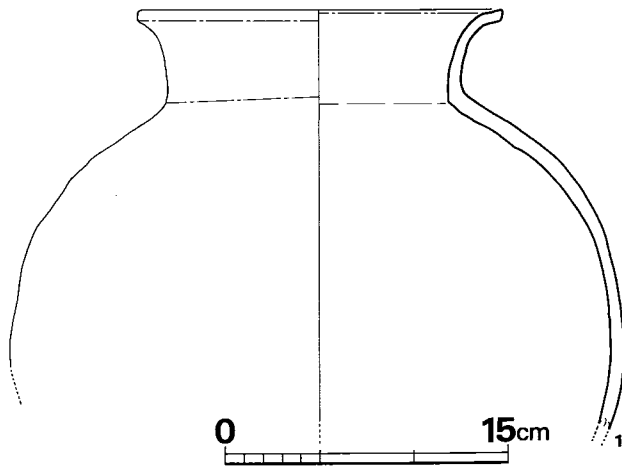


Fig. 131 汐井掛第24号古墳出土土師器実測図 (縮尺1/4)

ているが若干尾部に稜がみられる。孔は一方からの穿孔であり、他方には開け口がみられる。

A群の丸玉・小玉 (Fig. 132, PL. 161) A群より勾玉1とガラス製丸玉3個, 小玉616個が出土した内の丸玉3個と小玉12個である。丸玉は径5.80~7.40mm, で濃紺色, 小玉は径2.7~4.25mm, 色調は明青色が9割以上であり, 若干明緑色や空色のものが混っている。

B群の丸玉 (Fig. 132, PL. 161) B群よりガラス製丸玉7個と小玉38個が検出された。丸玉は径5.15~8.45mm, で総て濃紺色, 小玉の形状はA群のものと変りないが色調が淡青色と暗青色のものが若干みられる。

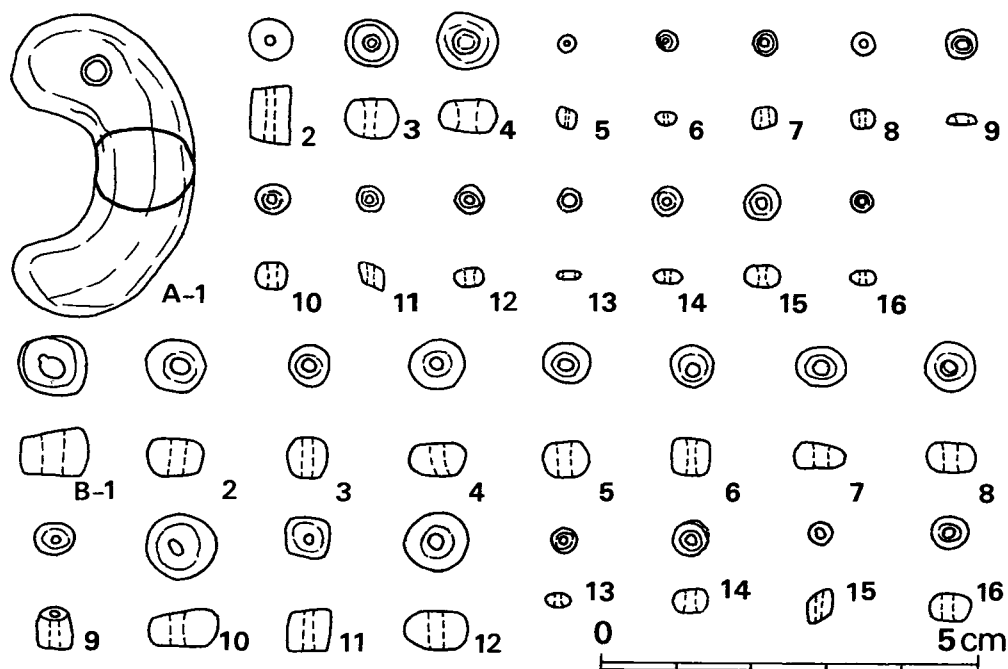


Fig. 132 汐井掛第24号古墳出土装身具実測図 (縮尺1/1)

Tab. 4 汐井掛第24号古墳出土玉類計測表

(単位 mm)

番 号	種別	径	厚さ	孔径	色	番 号	種別	径	厚さ	孔径	色
A-1	勾玉	13.1	3.92	4.0	深緑色	B-1	丸玉	8.45	6.0	2.85	濃紺色
A-2	丸玉	5.80	5.6	1.45	濃紺色	B-2	丸玉	7.4	4.75	1.90	濃紺色
A-3	丸玉	6.75	5.2	2.05	濃紺色	B-3	丸玉	5.15	5.70	1.10	濃紺色
A-4	丸玉	7.40	4.35	2.3	明青色	B-4	丸玉	7.05	4.35	1.60	濃紺色
A-5	小玉	2.7	3.2	0.85	明青色	B-5	丸玉	6.1	4.95	1.90	濃紺色
A-6	小玉	2.9	1.95	0.70	明青色	B-6	丸玉	5.8	4.95	1.85	濃紺色
A-7	小玉	3.95	2.5	0.95	明青色	B-7	丸玉	6.45	3.4	2.05	濃紺色
A-8	小玉	3.35	2.45	0.80	明緑色	B-8	丸玉	6.4	4.3	1.95	濃紺色
A-9	小玉	3.95	1.6	1.70	空 色	B-9	丸玉	5.5	5.3	1.25	濃紺色
A-10	小玉	4.1	3.3	1.05	明青色	B-10	丸玉	9.5	4.35	1.85	濃紺色
A-11	小玉	3.3	3.0	0.90	明青色	B-11	丸玉	6.1	5.8	1.15	濃紺色
A-12	小玉	3.7	2.5	0.85	明青色	B-12	丸玉	8.1	4.85	1.80	空 色
A-13	小玉	3.3	0.95	1.70	明緑色	B-13	小玉	3.1	2.0	0.80	明青色
A-14	小玉	4.0	2.1	1.00	明青色	B-14	小玉	4.55	3.25	0.90	暗青色
A-15	小玉	4.25	2.8	1.10	明青色	B-15	小玉	3.05	3.8	0.75	淡青色
A-16	小玉	3.15	2.0	0.80	明青色	B-16	小玉	4.9	3.4	0.95	明青色

## 5) まとめ

汐井掛の丘陵より南方に小さな谷を挟んで小丘陵が山口川に面しており、その丘陵頂部の斜面にかけて10基の古墳の存在が知られ、当古墳はその内でも頂部に位置するものである。

墳丘や地山整形の痕跡など全く近世の開墾により削平されていて見ることができない。周辺の古墳から推定すると径約8 m前後の円墳であろう。

石室は長方形プランの単室横穴式石室であり南西方向の山口川方面に開口する。長方形プランでも羽子板状で袖石は立石状となり墓道（前庭部側壁）は「ハ」の字に開き、梱石上に閉塞石があり、掘り方など諸形態からして竪穴系横口式石室である。石室の上半は欠失しているが、腰石下や、羨道部、閉塞部の残存状況が良かった為に、これら特徴が良好に知られた。又石室掘り方と、墓道もこの種石室の典型的な在り方である。

出土遺物は玄室内より2ヶ所に群をなして多量の玉類が発見される。奥壁寄りの一群には勾玉がみられる。この玉類の出土状況よりして葬法は二体葬差し違いが想定されないでもない。

石室外では羨門より2.30 m離れた地山面の基道と石室の主軸線上に須恵器高坏と土師器甕の上半が出土しており、古式須恵器の古墳墳丘内における在り方を考えさせる。高坏は陶邑古窯址群TK23型式（註1）に最っとも近い。この種の土器は県内でも最近いくつか発見されており汐井掛古墳群中でも他に後述の第25号・第27号古墳で古式須恵器が出土しておりこれらについては結語にて別述する。

（上野精志）

註1 田辺昭三（『陶邑古窯址群』1）1966年（昭和41年）4月

## 23. 第 25 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 127, PL. 153・154)

第25号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。大部分の古墳をのせる汐井掛丘陵の南西側の谷を挟んだやや低い丘陵上に第24号古墳から第28号古墳の一群が位置する。第24号古墳の東隣・第28号古墳の北隣の谷に面する部分に占地する。同台地上面は近世から近代墓地となっており、地形的に必ずしも残りは良くない。墳丘等、現状では全く判明せず、奥壁腰石上端の露呈により石室の存在が推定される状態であった。

### 2) 墳 丘 (Fig. 128・129, PL. 162-(1))

前述の如く、現状での墳丘は全く認められなかった。地山面を追った結果、旧表土を切って段落ち状に浅い周溝を削り出していたことがわかる。これによると、径8m前後の円墳を推定できる。盛土も全く残らず、旧表土にどれほど積んだか不明である。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ④⑥, PL. 162-(2)~165)

本墳主体は、単室両袖式の竪穴系横口式石室で、主軸をS52度Wにとり、南西方向に開口する。

玄室床面プランは、長狭な、長方形を呈し、小型の石室である。玄室各部の計測値は、長さ左側壁2.18m、右側壁2.40m、仕切石端までで2.28m。幅は奥壁0.95m、中央部1.02m、前壁0.90mで側壁積石は高さ0.65m残るのみである。

腰石は奥壁で鏡石状に1個、左壁で、抜かれている1個を加えて4個分、右壁で大小4個を用いる。右壁袖石寄りの1個を除いて他の両側壁腰石は横長に用いている。腰石以上の積石は左壁側で二段目まで残り、隙間に小礫を充満する。両袖石は柱状に縦位に据える。

玄室床面には奥壁側半分は抜かれているが小円礫を敷きつめてある。

羨道部は極めて短かく、0.65mを測り、「ハ」の字状に開く。玄門部の梱石は厚手の板状石を平坦に据えており、通有の梱石の用い方と様相を異にする。羨門外に閉塞石が残る。厚手の板状石を略水平に置き、小礫3個を補填する。

墓道は短かく、玄室主軸からずれて、より西寄りに屈曲して開口する。墓道床面は二段の段落ち状に玄門部へ急傾斜する。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ④⑥, PL. 163)

墳丘の中央部と思われるところに石室掘り方があり盗掘によって奥壁と右側壁の玄門方半分

を破壊されている。隅丸長方形プランの墓壇を掘り下げる。長さ3.80m、幅2.40mであり深さはほぼ0.80mである。

床面は奥壁側が深く、玄門側が高く約10cmの高低差がある。床面自体は平坦であり、各腰石下には安定を期するために壇を穿って腰石を据えている。

玄室内面には腰石の根込め石はみられないが腰石外端には多くの裏込め石がみられる。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況 (Fig. 133, PL. 165-(2))

玄室の床面より玉類と鉄鏃が出土する。

奥壁直下より玄室内でも奥壁方寄りに集中してガラス小玉3個と粟玉12個が検出される。しかし敷石が剥ぎ取られた部分にも見られるので原位置は保っていないと思われる。

鉄鏃は右側壁の中央部よりやや奥壁寄りの直下に三個が重なった状態で出土する。又玄室中央部のやや左側壁に鉄鏃の茎1個が出土している。

玄室外では羨道部の上層覆土中より須恵器提瓶(1)や甕片(4)、土師器高坏片が出土。又、周溝状削り出しの埋土中より須恵器罎、提瓶(2)が出土している。

前庭部とされる墓道の続き周辺一帯でも須恵器、土師器片が出土している。

これらの土器類は石室、墳丘が既に削平されしかも近代から現代まで墓地として利用されているため荒れがひどく原位置を保っていない。

(中間研志)

##### (2) 出土遺物 (Fig. 134, PL. 166)

出土遺物を列記すると次の通りである。

(1) 土器	須恵器	5個体以上
	罎	1個体
	提瓶	2個体
	甕	2個体
	土師器	4個体
	高坏	3個体
	甕	1個体
(2) 装身具	小玉	3個
	粟玉	12個
(3) 武器	鉄鏃	4個

##### 須恵器 (Fig. 134, PL. 166-(1))

罎(1) 周溝内埋土中より出土。口径12.4cm、器高11.4cm、胴部最大幅13.7cm、口頸高3.6



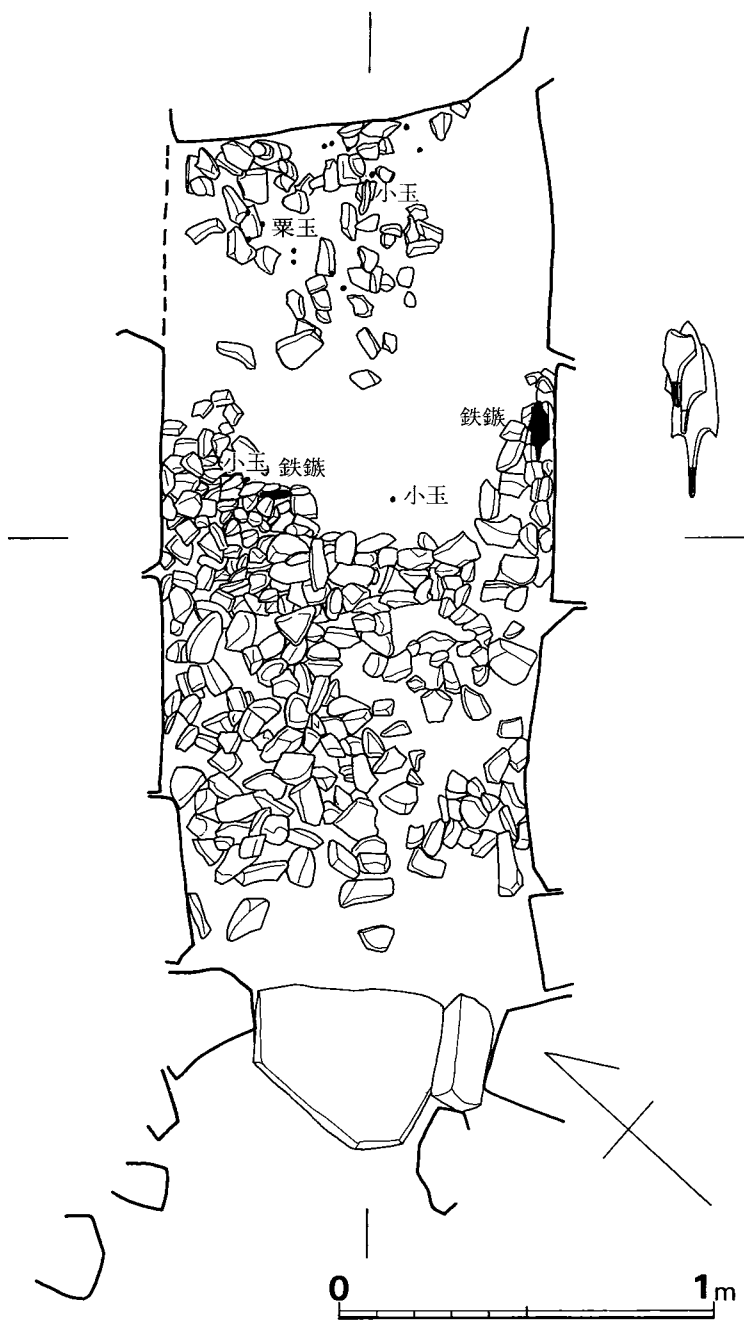


Fig. 133 汐井掛第25号古墳石室内遺物出土状況実測図 (縮尺 1/20)

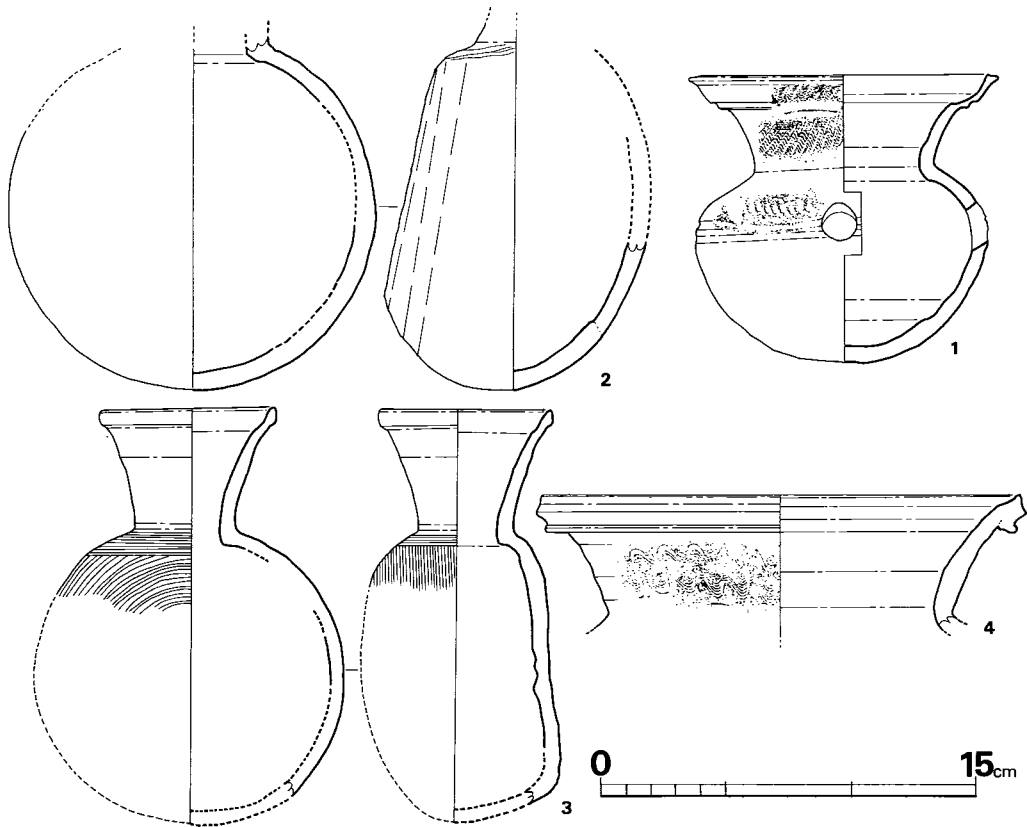


Fig. 134 汐井掛第25号古墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

cmである。口頸は短く開き櫛描波状文を施しており、口縁部にも狭い範囲で波状文を施している。肩部には刺突文がめぐっており、胴部下半は手持ちによるへら削りで、丁寧に仕上げられている。色調は黒青色を呈するが、肩部に自然釉がかかっている。焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

提瓶(2, 3) 2は周溝内埋土中より出土。口頸部を欠損する。現高14.6cm, 胴部最大幅14.4cmである。背面はへら削りを行い他は横ナデ調整を行っており、肩部にハケ目痕が見られる。色調は黄褐色を呈し、焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。

3は墳丘内より出土。胴部 $\frac{1}{2}$ を欠損する。口径6.3cm, 器高16.5cm(推)である。胴部のいたるところまでカキ目調整を行って丁寧に仕上げられている。背面はその前にへら削りを行っており、口縁部は横ナデにより仕上げられている。2と比べると極めて丁寧な調整を行っている。色調は紫茶褐色を呈し、焼成は良好である。胎土は小砂粒子を含む。

甕(4) 口頸部片を残存するのみで全容は知り得ない。口径19.0cm(推), 口頸高4.7cmであり、頸部に櫛描波状文を施し、口縁部は突帯をめぐらし端部は若干鋭角的である。色調は灰黒

色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒子を含む。

(渡辺健二)

### 5) まとめ

当古墳は第24号古墳の東方にあり墳丘は大きく削平されていて、形状、大きさなどは不明な点が多いが、径8m前後の円墳と推定される。

石室は単室の両袖式横穴式石室であり、石室の諸特徴より竪穴系横口式石室とされる。第24号古墳の石室と類似している。奥壁は一枚石であり長方形の石室プランで袖石は立石状であり、羨道部は「ハ」の字状に開き、閉塞石は板状石である。墓道は短かく、主軸とは若干ずれて曲りついている。しかし、石室、墓道ともに、ほぼ第24号古墳と同じ向きになる。墓道附近は近世の攪乱がひどく詳細には判別できない。

出土遺物に石室内より装身具のガラス小玉、粟玉と鉄鏃が4本出土している。石室外では周溝状削り出しの埋土中より須恵器鏃と提瓶があり、その他若干の須恵器がある。

出土須恵器の時期について考えてみたい。鏃及び甕口頸部は形態等から見て古式に属するものである。鏃は陶邑古窯址群内のTK23型式(註1)に最っとも近く、実年代で言えば5世紀終末に当るものである。甕は全容を知り得ないが、口頸部の形態から言って乙植木第3号古墳出土のもの(註2)に近く、鏃とさほどの隔りはないと思われる。他に提瓶が2個体出土しているが、ともに6世紀後半代の品であり、鏃との間に1世紀弱の隔りがあるが、石室形態、出土状況等を見て後世の流れ込みと見なす可能性が強い。

(上野精志)

註1 田辺昭三(『陶邑古窯址群』I)1966年(昭和41年)4月

註2 石山勲「乙植木3号墳」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-X-)1977年(昭和52年)1月

## 24. 第 26 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 127, PL. 153・154)

第26号古墳は鞍手郡若宮町沼口にある。第24号や第25号古墳などが位置する同小丘陵の最北部の丘陵頂部よりやや傾斜面になろうとするところにある。

現状では墳丘は全く認められなく、第24号古墳のⅡトレンチ調査中に発見したもので、奥壁や、掘り方が認められたので古墳と認定し調査に入る。

なお、この第26号古墳の北西約10mのところのところに大きく中央に凹みがありその周りが墳丘上に盛り上っていたので、古墳と思い調査をしたが石材や、掘り方など検出されず古墳でないことが判明した。

### 2) 墳 丘 (Fig. 128・129)

調査前では全く墳丘らしき高まりは認められなく、表土を剥ぐと直ぐに地山面が検出され、墳丘盛土は認められない。これは既に開墾等によって削平されたものであり検出した地山面も本来はもっと高い面にあり、調査で検出した石室掘り方の上端は地山整形面ではないと思われる。

以上のように地山整形面まで既に削平されており、周りに周溝状の造り出しも認められないので形状、大きさ等は不明である。しかし、石室が小型のものでありそう大きくない墳丘規模であろう。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ④⑦, PL. 167)

主体部は斜面に構築されており、等高線に対して直交でなく45度の角度をもって斜めに構築されている。

石室の残りが悪く奥壁と左側壁の腰石しか遺存していない。右側壁と横口部の石材が抜かれているが、幸い腰石の掘り方が検出できたのでこれを参考にして石室を復元してみる。

主体部は単室の両袖式(?)横穴式石室であろう。主軸をN43度Wにとり、玄室床面プランは長方形であり長さ約1.10m、幅約0.6mである。

奥壁は一枚の鏡石であり横積みし、高さ30cmで、床面よりは25cm程の高さと思われる。左側壁は四石であり奥壁方の石より大きくて玄門の方の石が小さい。奥方二つの腰石は大きく横積みしており、玄門方の石は極小で立て積みである。一段までしか残っていないが、積み方は雑のようである。

## 23. 第 25 号 古 墳

右側壁の腰石は全く遺存していないが、掘り方の腰石掘り込みよりして左側壁と同じく四石であり、奥壁方が大きく玄門方が小さな石を用いているようである。

玄門の石は抜き取られていて掘り込みが二つ見られる。左側が小さく右側の掘り込みが大きい。これはあるいは玄門としての石ではなく柵石の抜き痕かもしれないが一応ここでは玄門の石としておく。

床面は破壊されており、石室掘り方の床面しか検出できなかった。各腰石の在り方からして石室掘り方の床面より若干高い面に石室の床面が存在したと思われる。

羨道部は石材が残ってなく不明であり、石材の掘り込み痕もない。しかし石室掘り方が左側壁端より墓道方へ25cmありこの間に存在したかも知れない。

墓道は石室掘り方に対して斜めに取り付けられており、斜面の低位、下方より始まり石室掘り方に続く。長さ70cm、幅60cmと短い、実際は地山面が削平されていると思われるので、これよりやや大き目のものと推定される。床面は水平でなく、石室が低くて斜めに下降するものであり、現状では20cm程の高低差がある。

この墓道と石室掘り方をして本石室を両袖式の横穴式石室と推定した。

**(2) 石室掘り方**

墳丘の中心部にあると思われ不整長方形であり長さ1.50m、最大幅1.50mで、右側壁側は二段掘りの様相を呈する。周壁は斜めに立ち上がり、右側壁方は斜面の高所部を意識して広く掘っており立ち上りも緩傾斜である。

床面は水平であり若干中央部が凹んでいて、各腰石下には掘り込みがあり安定を期しているが、根石は一つもみられない。又裏込め石もないようである。

石室の掘り方と墓道との接点は石室掘り方を一段深く掘り下げるにより明瞭に境をつくりだしている。

出土遺物は皆無である。

**5) まとめ**

本古墳は石室のみでしかも左側腰石だけと遺存が非常に悪い。よって墳丘規模や盛土の状態など全く不明である。しいて推定すると石室、墓道が小さいので墳丘も小さいものと思われる。石室は前述の通り両袖式の横穴式石室と推定したが、それは墓道方の短側壁の石室掘り方が柵石の状態にあり、大きな要素は短かいが舌状の墓道が付いていることである。この石室掘り方のみを取り上げると他のA群やB群と同じような縦穴系横口式石室の範疇に入り小型化したものであると推定される。このことはA群の発掘調査した他の古墳が総てこの種の石室であることとも矛盾しない。

(上野精志)

## 25. 第 27 号 古 墳

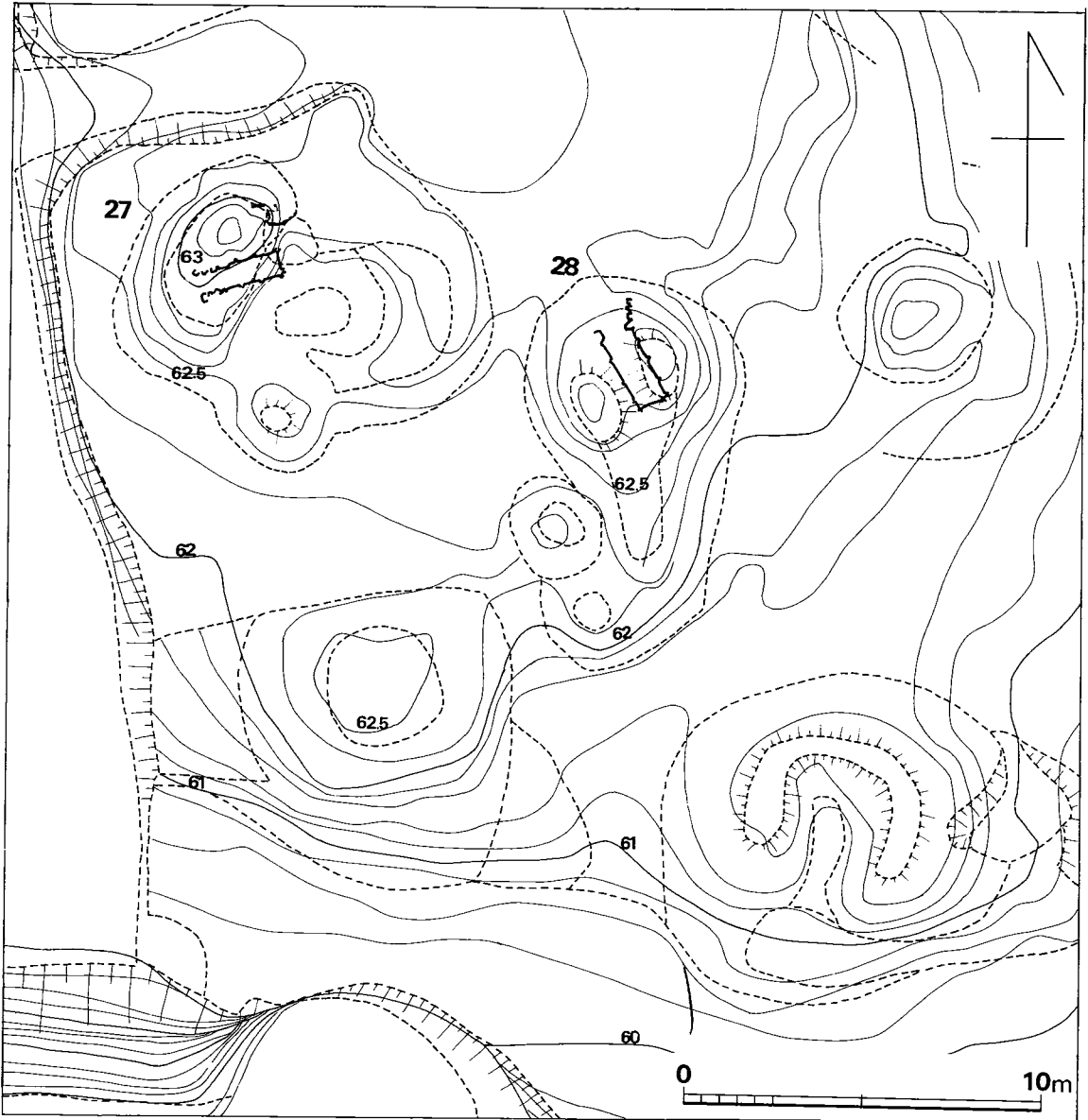


Fig. 135 汐井掛第27号・第28号古墳地形図 (縮尺 1/200)

1) 立地 (Fig. 127, PL. 153・154)

第27号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第24号から第28号古墳が立地する同丘陵上にあり、今回調査した古墳では最も西端に位置している。北方に第24号、北東方に第25号、東方に第28

号古墳と古墳が接近して営まれている。

この古墳周辺は現代の墓地となっているところであり墳丘の削平などがひどく、墳丘は大きく変形している。

## 2) 墳 丘

### (1) 地山整形と溝 (Fig. 135, PL. 168-(1))

後世の盗掘と削平の為封土の大半を失っており、わずかにその規模を推定し得るのみである。比較的残存状態のよかった北西部では石室中心より3.5m程の範囲で地山を削り出し、比高0.4m程の低いマウンドを形成している。この上に封土を盛って石室を覆うに足るばかりの低い墳丘を形成したものであろう。

### (2) 墳丘盛土

各トレンチの土層断面においては地山と黒色表土層の間に1~2層の暗褐色土層が見られ、これが封土ないしはその最下層を構成していたものと思われる。いずれのトレンチにおいても周溝は検出されなかった。以上より、本墳はもと径7m前後の小円墳であったと思われる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ④⑧, PL. 168-(2)~171-(1))

内部主体はS75度Wに開口する竪穴系横口式石室である。地山を穿った墓壇は一部二重になっており、内側の墓壇は2.5m×1.6m程の略長方形である。石室はこの墓壇一杯に構築されており、墓道の如き掘り込みは見られない。削平に会い、その深さは明確にし得ないが、もと60~70cm程はあったものと思われる。

石室は盗掘の際に破壊されており、特に後半部の破壊が著しいが、横口部付近はよく原状を保っている。石室内法は長さ195cm、奥幅78cm、前幅56cmを測り、羽子板形の平面プランを呈する。石室現存高は90cmであるが、当初の高さと大差ないものと思われる。両側壁は墓壇底をさらに掘り窪め、見かけの高さ30cm程の腰石を3個ずつ据えている。その上は控えを長くとった角柱状の塊石を小口積みにしており、持ち送りはわずかである。奥壁は腰石のみであるが、側壁同様20cm程墓壇底を掘り窪め、幅66cm、見かけの高さ40cmの腰石を据え、不足分は他の一石を立てて補っている。なお奥壁と右側壁の腰石の一部は青灰色の粘土によって根固めされている。

床面は墓壇底に5cm程暗褐色土を敷いて平らにした後、ほぼ全面に5cm大の角礫を敷き詰めている。特に枕石の如きものは認められない。

横口部には側壁よりわずかに突出して、高さ46cmと52cmの袖石が立てられている。袖石上には3~4個の塊石が積まれているが、楣石は架構されておらず、直接天井石を支えたものと思

われる。横口部幅は38cmと極めて狭く、両袖石間には厚さ13cm程の柵石が据えられている。閉塞は丁寧であり、まず柵石上に幅56cm、高さ44cmの板石を立て、板石と右前庭側壁との間に楔状の石をかませている。そしてその上に長さ65cmの大きな塊石を横積みしており、天井石との隙間には小形の塊石と礫とを詰めていたようである。さらに板石の外側には大形の塊石を4個立てかけてある。板石は両側壁としっかりかみ会っており、動かされた形跡は見られない。

横口前面部には側壁の延長の如き短筒な前庭側壁が構築されている。右前庭側壁は長さ45cm程で、比較的しっかりと積み上げられている。これに対し左前庭側壁はやはり長さ45cm程であるが、極めて乱雑に積まれており、ほとんど壁体をなさない。

なお両側壁および袖石には朱の塗布が認められた。

#### 4) 遺物

##### (1) 出土状況

本墳は徹底した盗掘をうけており、石室内からは一片の遺物も検出されなかった。しかし、この種の石室の通例より考えれば、当初より副葬品はそう多くはなかったものと思われる。石室外では横口部前面墳丘中より供献されたと思われる須恵器罍1個が正立の状態出土し、墳丘北裾部の地山最上部より当墳とは関係のない黒曜石の剥片1個が出土した。

##### (2) 出土遺物 (Fig. 136, PL. 171-(2))

出土遺物を列記すると次の通りである。

- |        |     |     |
|--------|-----|-----|
| (1) 土器 | 須恵器 | 1個体 |
|        | 罍   | 1個体 |

##### 須恵器 (Fig. 136, PL. 171-(2))

罍 口径10.5cm、胴部最大径9.9cm、器高9.6cmを測り、口縁の一部を除いてほぼ完形である。口縁端部は鈍く、端部上面は浅い凹面をなす。頸部との境には鋭い一条の突帯を有し、頸部には波状文がめぐる。胴部はその最大径をやや上寄りに有し、底部は尖りぎみである。胴部には浅い二条の沈線を有し、その間に櫛歯文をめぐらす。胴部下半はへら削りが施され、特に底部近くでは手持ちによるへら削りが認められるが、全体によこナデによって仕上げられている。胴部には窯詰時に融着したと思われる小粘土塊が認められる。全体に器肉は薄い胎土には細砂粒を含む。色調は黒灰色で焼成堅緻である。平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址群Ⅰ』1966のTK23型式に属しよう。

##### 5) まとめ

本墳は出土遺物と石室構造より5世紀末の築造が推定される。また閉塞部の状況と横口前面部から罍1個のみが出土した事実より単次葬であった可能性が強い。(増田精一・蒲原宏行)

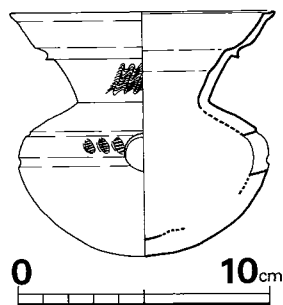


Fig. 136 汐井掛第27号古墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)



## 26. 第 28 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 127, PL. 153・154)

第28号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第24号から第27号古墳と同じ群を形成するもので、丘陵頂部より南東方向へ丘陵が延びているがその変換点に立地している。今回調査した古墳では最も南方にある。現状は墓地などで大きく変形しており、若干南方の斜面方向の墳丘が残っている程度であるが、このA群では残りの良い古墳と言える。

この第28号古墳の南東方の丘陵斜面には第43号・第44号・第45号古墳があり、南西方の斜面には第42号・第41号古墳が位置している。これらはいずれも墳頂部が陥没しており盗掘を受けていることが知られる。

なお第41号古墳は崖で大半が破壊されており石材が露出しているが、第27号や第28号古墳の石室と同じようなものかは判別できない。

### 2) 墳 丘

#### (1) 地山整形と溝 (Fig. 135, PL. 171-(1))

本古墳も第27号古墳と同じように盗掘と後世の削平の為大きく原形を失っており、残存度のよい墳丘南部より全体を推定する他ない。墳丘西南部石室中心より3.6m～4.6mの範囲においては地山を穿った周溝状の掘り込みが検出されたが、これは墳丘東南部までは延びず、周溝とすべきか疑問である。しかし墳丘東南部においてもやはり石室中心より3.5m程の所で地山整形による傾斜変換点が認められる。

#### (2) 墳丘盛土

墳丘南部では地山の上に黄褐色粘質土と暗褐色砂質粘土が互層をなして50cm程堆積しており、これが封土を構成していたものと思われる。この両層は石室中心より約3mの範囲で認められるが、当初は地山の傾斜変換点付近まで覆っていたものと思われる。

以上より、本墳も地山整形によって墳丘基部を形成し、その上に封土を盛った径7m程度の小円墳であった事が推定される。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ④9, PL. 172-(2)~174)

本墳の内部主体はN30度Wに開口する竪穴系横口式石室である。盗掘を受け、天井と奥壁の石材を失っているが他は比較的よく残存している。墓壇は3m×1.8m程の長方形であり、第27号古墳同様この種の石室に通有の舌状墓道は見られない。

石室はこの墓壇一杯に構築されており、石室内法は長さ216cm、幅88cmを測る。石室現存高は128cmを測るが、大略当初の石室高を示すものと思われる。周壁の構築にあたっては墓壇底を20cm程掘り窪め、側壁には幅50cm、高さ40cm程の腰石を4個ずつ、奥壁には幅70cm、高さ40cmの腰石を1個据えている。奥壁では幅の不足分を他の一石を立てて補っている。

腰石は特に根石を有さず、暗褐色の砂質粘土によって裏込めされている。両側壁は腰石の上に27号墳石室のものよりやや大きめの塊石をやはり控えを長くとった小口積みになっている。そして塊石と塊石の間には小礫を詰めて安定させている。

両側壁ともほとんど持ち送りを行なわず、石室は狭長な直方体を呈している。

床面は二重床となっている。1次床は墓壇底に約5cmの厚さで暗褐色土を敷き、その上に10cm大の扁平な川原石を敷き詰めている。2次床は盗掘の為奥壁側の3分の1だけが残存するが、1次床の上に10cm程暗褐色土を盛り、その上に1次床より小ぶりの川原石を敷き詰めている。これらの川原石は当丘陵の眼下を流れる山口川より採取したものであろうか。

横口部は両側に高さ60cm程の柱状の袖石を立て、その上には側壁の塊石が積まれている。楣石は架構されなかったものと思われる。横口部幅は60cmと比較的広く、両袖間には楣石を三段積み上げて横口前面部と同じ高さにそろえている。そして楣石と墓壇との空隙には板石を二枚据えてさらに出入りの便を図っている。

横口前面部には開きぎみの前庭側壁が付く。

右側は破壊されて基部の一石を残すのみであるが、左側は塊石を三段程積み上げており、袖石から70cm程延びている。

なお石室に朱の塗布は認められない。

#### 4) 遺物

墳丘中より土師器細片が数点出土したのみで石室内からは1片の遺物も検出されなかった。

#### 5) まとめ

本墳は石室規模および横口部の拡大、石材の大形化など石室の構造よりみれば第27号古墳よりやや発達しているが、第27号古墳と大略同時期、すなわち5世紀末から6世紀初頭の築造が考えられる。また床の張り替えより複次葬が行なわれたものと考えられる。

(増田精一・蒲原宏行)

## 27. 第 29 号 古 墳

## 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第29号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。南東から北西に流れる丘陵の南西側緩斜面上に位置する小型の古墳である。第2号古墳と第3号古墳の間に付随するように第29号・30号・31号・32号・33号・34号・35号と小型の石室をもつ古墳が群をなし、F群とする。その中では比較的大きな内部主体をもち残存状態も良好である。しかし墳丘は北側を溝が走って破壊され、表面観察ではわずかに盛りあがる墳丘が確認される程度で、墳形は明らかではない。

## 2) 墳 丘

## (1) 地山整形と溝 (Fig. 137・138, PL. 176)

墳丘盛土は、旧地表上に行われているが、墳頂部が削平されているためほとんど残存していない。築成にあたってはまず斜面を削り出すとともに周溝を掘る作業が行われている。周溝はIトレンチで確認されただけである。裾部の削平のため詳細は不明であるが、墳丘を際立たせ

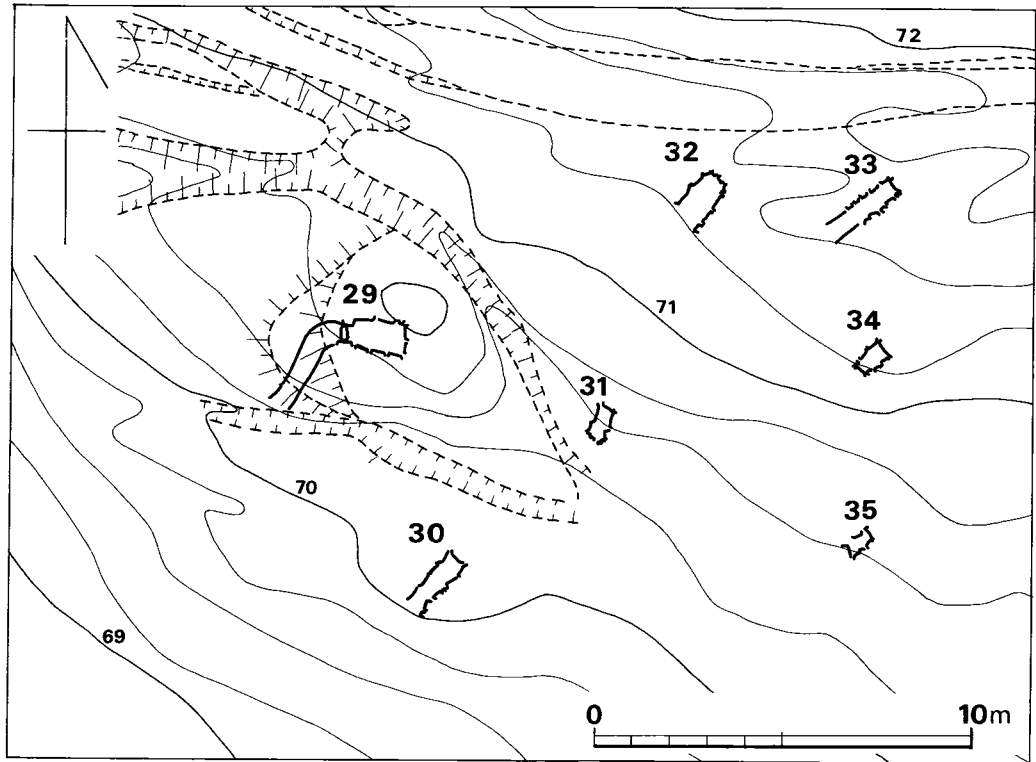


Fig. 137 汐井掛第29号・第30号・第31号・第32号・第33号・第34号・第35号古墳地形図 (縮尺 1/200)

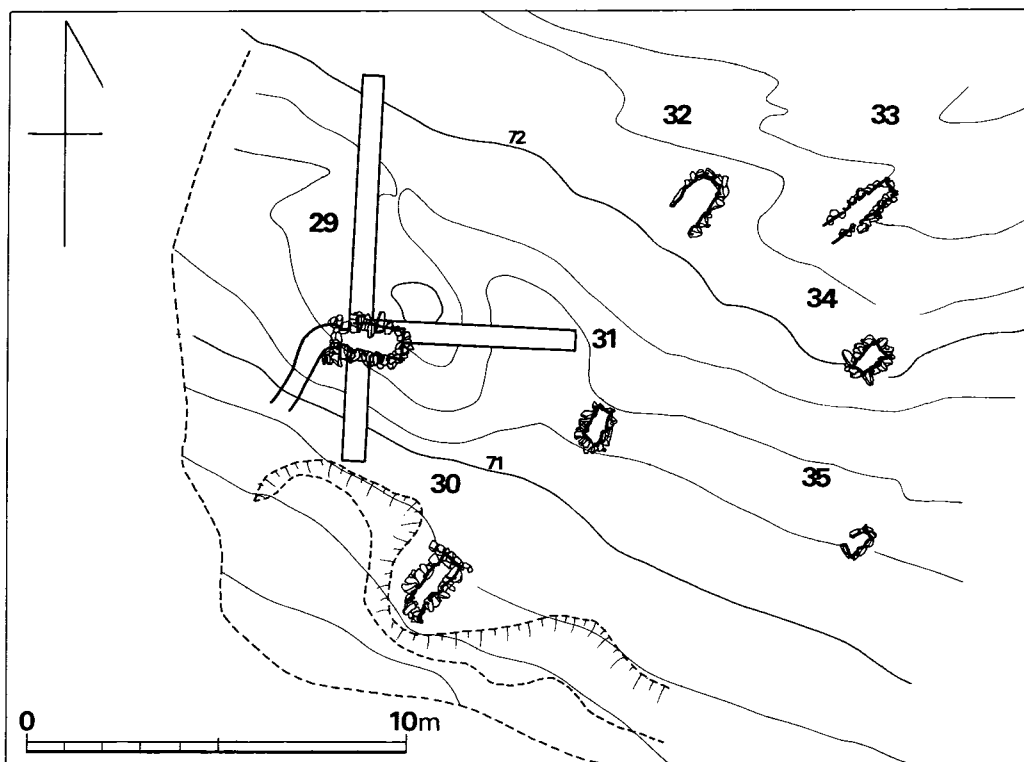


Fig. 138 汐井掛第29号・第30号・第31号・第32号・第33号・第34号・第35号古墳地山整形面測量図（縮尺 1/200）

るために北側だけに掘り込まれたものと考えられる。この整形状態とトレンチから判断して、5 mほどの円墳ではなかろうか。

### (2) 墳丘盛土 (Fig. ⑤0, PL. 177-(1))

墳丘の形成過程は一段階しか確認できない。つまり基底面から掘りこまれた墓坑内の壁体の裏込めのものである。墳丘の残存高は、石室底面から70cmを測る。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ⑤0, 177~179)

本墳の埋葬施設は、主軸をS82度Wにとり西側に向って開口する単室の横穴式石室である。石室はすでに天井石を失っているが、壁体の遺存は良好である。石室の平面は羽子板状のプランを呈する。玄室に短い羨道をつけたもので、石室の全長は、左壁で2.03m、右壁で2mを測る。

玄室の長さは、左側壁で1.35m、右側壁で1.35m、主軸線で1.6mを測る。幅は奥壁側で84cm、玄門側で74cm、中心で79cmを測る。側壁の構築法は、各壁とも共通している。基部は、坑底を

わずかに掘り下げて、奥壁三枚、両側壁四枚の腰石をやや内傾気味に立てて据えている。二段目以上は、不定形の石材を横積みし、次第にせり出す構築法をとっている。積み石は奥壁七段、左側壁七段、右側壁四段を残している。天井石はおそらくこの7段目の上に載るものと思われる。復元すると床面からの高さは、85cmほどであろう。

玄門部は両袖で、袖幅は左袖が18cm、右袖が10cm、玄門幅は45cmを測る。

床面には、20cm内外の扁平な礫を使用して全面に敷石を施こし水平を保っている。玄室から遺物は発見されなかった。

羨道部は、長さ40cm、幅は玄門部で47cm、墓道側で65cmを測り、「ハ」の字に開く形態をとる。羨道部と玄室の境は栴石で区切られており、この栴石の上部に閉塞石が在存する。

閉塞は、1枚の板石を置いた後に30cm内外の石材ですきまを塞いでいる。

墓道は、南側の谷に向かって大きく屈曲しており、長さ2.50m、上幅0.80m、下幅0.5m、深さ0.60mで検出される。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. 50)

石室の掘り方は全面発掘を実施していないので3本のトレンチより検出した大きさより復元すると隅丸長方形か長方形と思われ、長さ2.40m、幅1.75m、深さは奥壁側で60cm、玄門側で50cmである。奥壁と左側周壁方は石室の側石との間がやや広く空き、右側周壁方は側石と周壁との間がほぼ接するように狭い。

床面はほぼ水平であり、中央付近が若干低くくぼんでいる。周壁の立ち上りは緩傾斜である。各腰石下には、石室掘り方床面よりさらに一段深く掘り下げて凹地を造り出し、その内に腰石を安定している。これには根石や裏込め石はあまりみられないようである。

#### 4) 遺 物

遺物の出土は皆無である。

(池辺元明)

## 28. 第 30 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第30号古墳は鞍手郡若宮町沼口にあり、第29号～第35号の7基の内に含まれるものである。

第2号と第3号古墳の間の丘陵斜面下方にあってF群中では最も南方の低いところに位置する。第29号古墳の南西6m、第31号古墳の南5mと近接している。

現状では墳丘らしき高まりは見られないが、南側の低位斜面に地山整形による墳丘裾らしき

半円形の落ちが認められる。天井石は総てないが、石室は残りのよい方である。

## 2) 墳丘 (Fig. 137・138, PL. 179)

地山整形と溝、墳丘盛土は全く見られない。すでに墳丘盛土は削平されて地山層が直接検出される。表土と地山の間にある中間層は盛土ではなく、腐植土の攪乱土である。Fig. 138のように石室の周りに墳丘裾状の落ちがみられるが、これを墳丘の基盤とすると径3 m弱となる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ⑤1, PL. 180~183-(2))

内部主体は単室の無袖型横穴式石室である。丘陵傾斜面の低い下方である南西方向に開口し、石室主軸はS42度Wを指す。

石室プランは長方形でも羽子板形状の長さ1.40m、幅は奥壁方で50cm、玄門方の一番狭いところで40cmを測り、側石は65cmまで残り、現存の側壁の天井石が架構されると推定する。

奥壁は一枚の鏡石とその上に二段までの積石がみられる。腰石は幅55cm、高さ37cm、厚さ23cmで、床面より22cmの高さで正方形でなく左側上方が幅狭いので小さな石材を詰石としている。二段目から持ち送りとなり、左右二つの石で共に扁平たて長の石材を小口積みしている。ただし、石と石の間は5cm程の空間があり密着していない。三枚目は持ち送りが強い。

左側壁は三段から五段が現存している。腰石は四石で長方形の石材をよこ積みしていて、これらの石の大きさや高さはまちまちであって一定していない。腰石は直に据えられていて二段目から持ち送りの状態となる。二段目から五段目は乱石積みで大・小ささまざまな長方形の石材を小口積みし、袖石となる部分の二・三段目の石は腰石と同じくよこ積みである。これら左側壁の石材と石材の間は密着してなく空間が多い。この空間には小さな詰石をしていない。

右側壁も左側壁と同じような状態であり、腰石は四石で二~四段目は乱石積みとなっていて、石材と石材の間は空間となり小さな詰石はみられない。又、袖石の状況も同じである。ただ、奥壁より三番目の腰石は非常に小さく二段目の側壁の方が大きい点が目につく。

床面はほぼ全面に敷石がみられ奥壁方が若干高いがほぼ水平と言ってよい。敷石は10~15cm×5~10cm大の長方形の薄い川原石であり、奥壁直下には右側壁寄りに一石しかみられない。

袖石は両袖型ではなく奥壁よりの側壁が直線状に続いて四番目の腰石と腰石との間に梱石があり、この腰石が袖石となっている。袖石となる腰石は大きい石材である。

梱石は一枚石で幅43cmで、両側石間に整然と据えられていて、すき間がない。主軸方向の長さは7cmであり、高さは15cmで、床面より10cm程高く出ている。

羨道部、は梱石より袖石が「八」の字状に開いて左側で一石、右側で二石の長さしかなく、袖石端より25cmを測るにすぎない。その続きとして墓道があり先広がりとする。

閉塞は柵石上にはさされていなく墓道方の袖石と羨道間になさされていて、最下位に奥壁と同じような一枚石でよこ幅を塞ぎ、高さ20cmまで直立させておき、その上に小さな石材で二重・三重に閉塞をしている。閉塞石の支石は羨道部を越え、墓道部に達している。

墓道は柵石より80cmまで検出でき、地山整形面に続き、幅は約80cm、深さは20cm程である。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. 51)

石室の掘り方は全面発掘ではなく3本のトレンチより推定してみると、長方形で長さ2弱、幅は1.70m、深さは20~40cm程と思われる。石室が掘り方の右側(南東方)に片寄っており左側の周壁と腰石との間は広く、右側は狭い。床面は左側の北西方が高く、右側の南東方が低く12cmの高低差がある。腰石下の石室掘り方床面からの掘り込みはない。ただ、右側壁の腰石下には大きな根石がみられる。その他には根石や裏込め石はみられないようである。

石室の掘り方より墓道にかけて一つの段がつき、墓道方が高くなっている。墓道は墳丘裾部方より石室内に向って下降しており柵石の手前で段がつくのである。

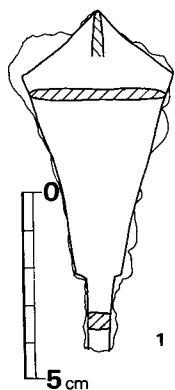


Fig. 139 汐井掛  
第30号古墳出土鉄  
鍬実測図(縮尺1/2)

#### 4) 遺 物

##### (1) 出土状況

石室内の奥壁より10cm離れた左側壁寄りに鉄鍬1個が、敷石より17cm浮いた充滿土内より出土しているのみである。

##### (2) 出土遺物 (Fig. 140, PL. 183-(3))

(1) 武器 鉄鍬 1個

だけである。

鉄鍬 (Fig. 140, PL. 183-(3)) 現存長9.0cmで、径の大部分を欠く。

尖根式の三角形であり身の最大幅4.1cmで、厚さは0.3cmである。

## 29. 第 31 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第31号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第29号古墳の南方5m、第30号古墳の北東方5m離れた小規模の円墳と思われる。第29号~第35号古墳の計7基でF群を形成していて、それらの中央部に位置している。

現状では、墳丘の盛土や地山整形の痕などみられなく平坦地であり、表土を除去すると天井

石は欠なわれ側壁の石材に達し、石室として調査を行う。

## 2) 墳丘 (Fig. 137・138, PL. 184)

発掘前の状況では削平されて全く墳丘など見られなく、調査後においても地山整形による溝や墳丘裾は明確に検出できないが、PL. 185-(1)のように石室の周りに円形状に若干の高低差が見られ、これが地山整形による墳丘造り出しかと推定されるも明らかではない。しかし、各古墳の位置間隔よりして径は約4 m前後のものとされよう。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ⑤②, PL. 185)

小型の石棺状の石室で、横穴式石室のように四壁の一つの壁方が閉塞される形態でなく四壁塞りの一見竪穴式石室とされる。しかし、この古墳の石室は一般的に言われる竪穴式石室とは違っており、後述するように横穴式石室の部類に属する。天井石は無く、側面が四段目まで残る。

長軸を第30号古墳の石室主軸とほぼ平行にとりS26度Wを指す。石室内の大きさは87cm×45cmの長方形を呈する。

北方の短側壁は四段目まで残り、腰石は一枚石で長方形の厚み10cm、高さ25cm、最大幅40cmの石材で横長に立ててあり床面では幅狭く35cmで、両側壁との間に空間が広くあいている。二段目より持ち送りとなり腰石よりも厚みのある石材で、左側の小さな石と二つの石で側壁を立て、三段目より上の石材は持ち送りが急で左右の側壁に大きく作用している。

南方の短側壁は三段目まで残り、腰石は二枚の石で西方が大きく、東方のものは小さく低い。西方の大石は最大幅が上位にあり、床面のところが最小幅の逆台形状で、東長側壁腰石とに空間が広くあいているので小さな石材を詰めている状況である。この大きな腰石の厚みは25cmで、高さは23cmであり、厚みの方が大きな石である。二段目には長方形の石材を小石積みしている。

西長側壁の腰石は二枚の石で、北側の石が大きく長さ55cm、高さ床面より20cmで長方形の石材を横長に立てている。南側の石は小さく長さ25cm、高さ24cmである。これらの腰石はすでに直立していなく持ち送りとなっている。二段目の石より乱石積みで不統一に構築されている。二段目よりの側石は長方形の石材を小口積みしている。

右側壁の腰石は三石で北方側のものが一番大きく、南方の石が小さい。大きな石一つで右側壁の2/3を形成しており長さ55cmで横長に立ててあり中間の石と南側の石は共にたて長に立ててある。二段目の石材は腰石よりも大きく横長に南側に寄せてあり、その他は乱石積みである。右側壁と同じように腰石から持ち送りがみられる。



床面に敷石はなく、水平で平坦である北方側の壁下にみられるのは敷石でなく根石であろう。石室掘り方の床面を直接石室の床面にしたものでなく、若干の土を敷いて床面としたものである。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑤)

4本のトレンチの調査のみであるが、石室と同じく長方形プランで長さ1.45m、幅1.15m、深さ西方で0.42m、東方で0.35mを測る。周壁体はやや緩に立ち上がり、床面は水平で平坦である。掘り方の床面より、各腰石下に掘り込みがあり深いところで10cm程であり、根石がみられる。周壁と四側壁石の外端とは空間が狭く裏込め石はない。

#### 4) 遺 物

出土遺物は皆無である。

## 30 第 32 号 古 墳

#### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第33号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第29号から第35号古墳の7基でF群をなしている。その内でも傾斜面の高い位置にあつて、第31号古墳の北東方6m離れていて第33号古墳とはわずか3mしか離れていない。第2号古墳と一番近く墳丘裾とこの古墳の主体部とは5m程しかない。

現状は墳丘や地山整形による痕など全くみられなく、わずかな高まりも見られない程に削平されている。

石室の遺存は悪く、天井石はなく、側壁は腰石を残すのみのところが多く、腰石も羨門方は欠なわれていて、閉塞石もない。石室床面上には各側壁と思われる石材が落ち込んでいる。

#### 2) 墳 丘 (Fig. 137・138, PL. 186)

地山整形による溝や墳丘裾は検出されず、又墳丘盛土も既に失われ、表土を除去すると直接地山層が検出され、石室掘り方の上面はすでに削平されていると思われる。墳丘の形状、大きさなど不明であるが、復元すると約4mの円墳であろう。

#### 3) 主体部

##### (1) 石室 (Fig. ⑤, PL. 187・188)

内部主体は単室の横穴式石室であり、南西方的に開口していて、緩斜面に直行している石室

主軸はS41度Wを指し、斜面の低所部に向いている。石室の遺存状況が悪いため、腰石のみの状態であり、その腰石も一部を欠いている。

石室の平面形は長方形プランであるが、奥壁と側壁の隅が角にならない逆U字形である。

石室床面の敷石現存状況からして石室の長さは $1.85\text{ m} + \alpha$ 、幅は奥壁下で $0.55\text{ m}$ 、中央部で $0.80\text{ m}$ であり、壁高は残りの良いところで床面より $0.45\text{ m}$ である。

奥壁の腰石は三石と思われ長形状の石材をたてに立てている。みな小さな石であって特別に奥壁の腰石として意識していないようであり、高さは $20\text{ cm}$ 程である。二段目の石材や西側壁の石材と変りない。三石が一直線上に並ぶのではなくかなりの丸味をもち、右側の石はとくにひどい。二段目の石材は一つのみ現存で腰石とほぼ同じ規模のもので持ち送りとなり長形状のものを小口積みしている。

左側壁は特に残りが悪く、腰石は三石のみである。いずれも長形状の石材をよこ長に立てていて、奥壁より三石目のものが一番長く $55\text{ cm}$ で高さは床面より $15\text{ cm}$ と低い。二段目の石材は腰石と同じくらいで長方形のものを小口積みしている。

右側壁は左側壁より残りがよく腰石は四石で $1.40\text{ m}$ ある。腰石はいずれも三角形に角のあるもので石材と石材の空間には詰石をしている。二段目の石材は腰石よりも大きい。二段目より長形状の石材を小口積みしている。

床面は、ほぼ全面に敷石がみられ、右側壁下の部分が欠けているが本来は全面に見られるものであろう。石材は $15\text{ cm} \times 10\text{ cm}$ 大の長方形の扁平な石でありやや雑に敷いているが、床面は水平である。

羨道、墓道、閉塞は遺存しなく全く不明である。この石室形態からすると、両側壁間に閉塞石がくるものと推定される。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 53)

三本のトレンチ調査より復元すると、石室平面形と同じような長方形プランとなろう。石室との関係をみれば石室は掘り方の左側北西方に寄っており、左側壁の腰石と掘り方周壁とはほぼ接してるのに対して右側壁ではかなり幅広くあいている。長さ  $2.1\text{ m} + \alpha$ 、幅 $1.35\text{ m}$ である。

掘り方の床面は水平でなく、凹凸がはげしくて、玄門の方にかけて若干下降している。各腰石下には石室掘り方の床面より掘り込みがあり、さらに腰石下には根石がみられ、掘り方周壁の間に裏込め石もある。

## 4) 遺物

本古墳よりの出土遺物は皆無である。

## 31. 第 33 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第33号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。F群では最も高い位置にある。第2号と第3号古墳の中間で両方に約6m離れていて、第32号、第34号古墳と接近している。

現状は墳丘や、地山整形による溝などみられなく古墳の存在は知られない。ほぼ平坦地である。表土を除去すると石室の石材を検出できたので古墳とし調査する。天井石はないがこのF群では比較的残りの良い石室である。

### 2) 墳 丘 (Fig. 137・138, PL. 189)

表面観察では墳丘などみられない。表土を除去し、地山まで検出すると石室を中心に若干の盛り上りがPL. 189-(1)のように見られるが、これが地山整形等によるものかは判断出来なかった。しかし周辺古墳と接近していることからしてほぼこの盛り上りぐらいの範囲に若干の盛土がしてあったと推定する。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 54 PL. 190・191)

内部主体は無袖単室の横穴式石室であり、斜面とほぼ直交し、低い下方に開口して、第30号、第32号古墳とは若干ずれているようでS53度Wを指す。

石室は長方形プランで玄室の大きさは、梱石内までで、全長1.08m、幅は奥壁方で0.41m、中央部で0.50m、梱石方で0.45mを測り、壁高は床面より0.62mまで残る。

奥壁は四段まで見られ腰石は一枚石で長方形の石材をよこ長に立てている。厚み10cm程であり、高さは30cmで床面よりは15cmである。二段目よりは乱石積みで角のある不整形の石材を用いて適度に架構している。腰石より若干持ち送り気味になっている。

左側石は四段まで残り、腰石は四石で奥壁の腰石よりも小さく三角形のものが多い。腰石はよこ長に立てている。二～四段は乱石積みで小口積みし、二段目より持ち送りとなる。

右側石も左側石と同様であるが、二段目に一石だけ腰石より大きな石材を使用している。他は六段目まで残っているが上段になるにつれて小さな石を用いている。

床面には二重に敷石があり、上面を二次、下面を一次床面・敷石とする。一次と二次の高低差はほとんどなく、二次敷石は一次敷石に若干の土を置いて水平にして固定するように敷かれたようである。一次・二次敷石とも5cm×10cm大の扁平な石材である。一次敷石は石室掘り方床面に若干の土を置いていて、一次、二次とも同じような敷石に敷いている。これらは共に水

平でなく中央部が凹んでいる。

柩石は二石で右方が大きく、左方の石が小さい。ほぼ一直線状となっている。よこ幅は二石で45cm、主軸の長さ12cmである。

柩石より墓道方に左右側壁が一石づつあり長さは柩石端より10cmほどである。

閉塞石はこの柩石の上に在って、一部玄室内まで達して閉塞がされている。両側壁に用いられた同じような石材であり、墓道方に70cmと三重になされている。

墓道は石室主軸と直線的に付くと思われ、長さは柩石端より2m近く残り、幅は0.55mと推定される。水平でなく、石室に向うにしたがい下降している。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. 54)

石室プランと同じような長方形と思われ、長さ2m近く、幅1.20m、深さ0.4mである。奥壁方は直に立ち上らない。石室は掘り方の中央にあつて、両側壁と周壁との間は狭い。

床面は中央部がくぼみ、凹凸がある。各腰石の下には、石室掘り方の床面より掘り込みがあり奥壁下と柩石下は深い。根石と裏込め石はほとんどないようである。

### 4) 遺物

#### (1) 出土状況 (Fig. 54)

石室内の二次敷石より5cm浮いた状態で鉄鏃2本が出土しているのみである。

#### (2) 出土遺物

出土遺物は

- (1) 武器 鉄鏃 2本

だけである。

**鉄鏃** 石室内より取り上げ後、遺存状態が悪く錆が腐食して原形を留めない。出土状態図よりして尖根式である。

## 32. 第 34 号 古 墳

### 1) 立地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第34号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。汐井掛古墳F群の7基中の一基であり、第33号と第35号古墳の中間で各々3m弱離れている。丘陵斜面の緩傾斜を意識して構築されているようである。

現状は、墳丘や、地山整形による溝など見られなく平坦地である。表土を取り除くと石材が検出され、石室と確認して調査に入る。

## 2) 墳 丘 (Fig. 137・138, PL.192)

伐採後の状況では墳丘の高まりなど見られなく、調査後においても明確にしがたい。Fig.⑤⑥のように表土層の腐植土の下に 1 暗茶色土、2 暗茶褐色土があって地山の 5 茶褐色粘質土に達する。2 暗茶褐色土は石室掘り方内まであって裏込めの土となっており地山の直上に見えることは盛土とされよう。その上層の 1 暗茶色土はこの古墳周辺一帯を削平して整地したときに地山の上層を覆った層と考えられて、その他の石室でも地山と表土の間にみられるものである。

Fig. 192-(2)をみると、石室を中心に円く地山整形の痕がうかがわれるようであるが、当初からのものかどうかは判断できない。しかし、第33号古墳、第35号古墳の存在からして小規模の盛土であったことと思われる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. ⑤⑥, PL. 193・194)

内部主体は長方形プランで石室掘り方などからして横穴式石室ではなく、石棺や、竪穴式石室のように四壁共に存在し、閉塞石がない石室である。長軸を丘陵斜面にほぼ直交するようになり第32号や第35号古墳の石室と長軸を平行にしている。

長軸は S 48度 W を指す。石室の大きさは長さ北西壁下で 90cm、中央主軸で 85cm、南東壁下で 80cm となっていて北西方がやや長い。幅は、北東壁下で 47cm、中央部で 41cm、南西壁下で 30cm と羽子板状を呈している。床面の平面形が不均一である。現存壁高は床面より 50cm である。

短側壁の北東壁腰石は一枚石で長方形形状の石材をよこ長に立てていて、高さ 25cm 程であるが約半分は床面下に埋まる。腰石より上は乱石積みで大・小の長方形形状の角ばった石材を取りまぜて小口積みしており、三段目の石より持ち送りとなる。

北西壁は長側壁で腰石は三石でありいずれもよこ長に立てている。南西壁寄りの腰石は小さくて多角形状であるために他の石材間に空間がある。

南西壁は北東壁に対応する短側壁で腰石は一枚石である。この石材は両長側壁の間に入ることなく外より構築されている点が注目される。二段目までしか現存しない。

南東壁は長側壁であり腰石は三石よりなり長方形形状の石材をよこ長に立てていて、床面よりわずかしか高くない。腰石の上には、中央に腰石より大きな石がよこ長に立ててあるが、他は両側壁の石材も長方形形状のやや角のあるもので小口積みしている。ともに三段目より持ち送りがみられる。

床面は石室掘り方床面の上に埋土をしてその上に敷石を敷く。石材は 5cm×10cm 大の扁平石が多くほぼ全面に渡りみられる。敷石の床面は水平でなく北東側の短側壁方が低く南西側の短側壁方が高い。

なお、石室掘り方に墓道が付属しないこともあって四壁塞がりの石室としたが南西方向の短側壁を閉塞部とした横穴式石室の可能性もある。羽子板状長方形プランの無袖式石室で羨道部が存在しないので横穴式石室の閉塞部を簡略化して形式的にのみ閉塞を行ったともされよう。

ここでは石室掘り方に墓道が付属しないことより横穴式石室の可能性についてのみふれた。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 55)

トレンチ調査であるが、全体の形を復元すると、長方形プランで石室と同じく長軸方が大きく1.7m、短い方で1.4mで、深さ30cmである。床面は水平で平坦である。腰石はこの墓壇内に掘り方床面の掘り込みがなく、根石や、裏込め石も見あたらない。北東壁の腰石は掘り方床面に接しているが、他の三壁の腰石は掘り方床面よりかなり高く離れている。

## 4) 遺物

出土遺物は皆無である。

# 33. 第 35 号 古 墳

## 1) 立地 (Fig. 2, PL. 5・175)

第35号古墳は鞍手郡若宮町沼口に在る。第34号古墳の南方4m離れて石室があり、第3号古墳に付属するように近い距離に位置する。第31号古墳と同じ標高であり汐井掛古墳のF群では丘陵斜面でも低位置の方である。

墳丘などは見られない平坦地であり、表土を除去すると石材に当たり、石室として調査を実施する。天井石はなく側壁はほとんど失われていて残りは悪い。

## 2) 墳丘 (Fig. 137・138, PL. 195-(1))

墳丘など削平されていて表土層の下には直接地山が検出される。石室掘り方が浅いのかもしれないが、腰石の下端近くまで削平されているので、地山上端は、現存状態よりは少々高いものと推定される。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. 56, PL. 195-(2))

主体部は小型の石室で、腰石の一部を欠く程であるが長方形プランを呈し、長軸はS52度Wを指す。横穴式石室のように四壁の内の一壁に閉塞がなく、四壁ともに腰石をなしており、石棺の様である。

大きさは長さ70cm、幅33cmで残存壁高は一番高いところで23cmを測る。

短側壁の腰石は共に一石で長方形の石材をよこ長に立てている。長側壁の南東壁の腰石は三石で、北西壁は一石しか残っていない。北東壁に二段目の石材が見られるのみである。腰石はいずれも直立していて持ち送りは見られない。

床面は敷石が施されていて南西壁方に小さな石が用いられ、北東壁方に大きな石材がみられる。いずれも扁平な石材である。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. 66)

隅丸長方形の掘り方で、長さ1.10m、幅0.7m、で深さは25cm程である。床面は凹凸がはげしく水平でない。石室の腰石下には、掘り方床面よりの掘り込みがあり根石や裏込め石はなく、腰石と掘り方周壁との空間はほとんどない。

#### 4) 遺 物

出土遺物は皆無である。

#### 5) ま と め

ここでは第29号古墳から第35号古墳までの7基についてまとめて述べる。第2号と第3号古墳の間で、これらの古墳より標高の低い丘陵斜面に位置している。これらをF群とする。

第29号古墳は小型の円墳で石室は小型の両袖式横穴式石室であり、羽子板状の長方形を呈す。袖石は両側壁との隅角を明確につくりだし、閉塞方法は柵石の上に一枚の板状石が主である。墓道は墳丘裾部より羨門に向けて上降し、大きく屈曲していて結果的には石室は丘陵斜面に平行するように架構されているが、墓道は斜面に直交するようになる。

出土遺物が皆無のため時期について遺物よりは何も言えないが、石室形態より考えるに主体部は小型の横穴式石室であり、C群やD群、E群の横穴式石室よりは退化型式であり新しいとされよう。年代については7世紀代と想定する。

第30号古墳より第35号古墳は総て墳丘は全く現在では見られなく石室の天井石もない。地山整形による痕跡は明らかにされない。墳丘規模など不明な点ばかりであるが、主体部の石室が小さいことより第29号古墳のような小規模のものと思われる。

これらの石室について詳しくみるといくつかの特徴がみられ形態より次のように区別できる。

- |                            |                |
|----------------------------|----------------|
| (a) 無袖式の風の字型?横穴式石室(小横穴式石室) | 第32号           |
| (b) 無袖式の横穴式石室(横穴式小石室)      | 第30号, 第33号     |
| (c) 四壁塞がりの小石室(横穴式石室系小石室)   | イ大型 第31号, 第34号 |
|                            | ロ小型 第35号       |

(a)型の第32号古墳の石室は所謂「風の字型」石室と呼ばれているものと思われる。奥壁と両

側壁との関係を見れば隅角ではなく隅丸になる。又両側壁の腰石は小さく幅が広いことである。「風の字型」とされる羨道に当る閉塞部外の側壁が「儿」状に大きく外開きするかどうかは判別出来なかったが、閉塞は両側壁間にて行われるものと思われる。これらよりして無袖式の横穴式石室と推定される。

(b)型の第30号・第33号古墳の石室は共に羽子板状の長方形プランで細長く、幅が狭く、梱石は存在する。袖石が明確になく閉塞石は短側壁側の長側壁端の間にあり第30号石室では梱石の外に第33号石室では梱石上よりなされて、羨道は形式的に付属するようであり、墓道が明確ではないが直線的に延びている。

以上のように無袖式の小さな横穴式石室であり、この石室で気になるのは葬法である。両側壁石が現存する側壁の近くの直ぐ上に天井石が架構されると想定し、あくまでも遺体を閉塞部より埋葬するとすると、第30号古墳では両側石間はよこ40cm、たての天井石まで約80cm程であり非常に狭いことである。

(c)型の第31号・第34号・第35号古墳石室は石室の大きさによってさらに二つの細分すると第31号と第34号は大型で(c)ーイ型、第35号は小型であり(c)ーロ型とされる。

(c)ーイ型の第31号・第34号古墳の石室は四壁とも塞がっている石棺様の石室であるが、構築方法が横穴式石室と共通するのでここでは石棺の用語は用いなく石室とする。横穴式石室の基本である横からの埋葬ではなく、天井部より埋葬する方法が取られたと思われる。

小型の縦穴式石室との違いは石室の構築方法が全く違い縦穴式石室とは呼びがたい。

石室掘り方は四壁の墓壇になり墓道は付属しない。あくまでも(b)型の横穴式石室の退化形態であり、(b)型の変化したものと思われる。第35号古墳の石室は長さ70cm、幅33cmしかない小型のものである。

これらの古墳よりの副葬品は(b)型の第30号古墳と第33号古墳石室内より鉄鏃が出土しているのみであり時期については明確にしがたい。しかし、第29号古墳の存在やD群、E群の単室横穴式石室より後出することは明らかであろう。

なお、このF群で注目されることは石室長軸の方向、墓道の方向が7基とも丘陵斜面の下方を向いており、羨門が開口していることである。このことはやはりこれら7基は一つの群として意識されよう。又「ハカ道」も想定されなくはない。このことよりも第29号から第35号古墳はほぼ同時期に築造された可能性が強と考える。

ただ(c)型の石室に天井石が存在したかどうかは判断できないが同じような石室形態の福岡県小郡市津古内畑遺跡第4号小型石棺墓には蓋石がみられるので当石室にも天井石は存在したと想定する。そしてそれには当然土が覆せられ墳丘を形成したとされよう。

註1 西谷正・副島邦弘・柳田康雄「小形石棺墓」(『津古内畑遺跡』第1次)1970年(昭和45年)3月



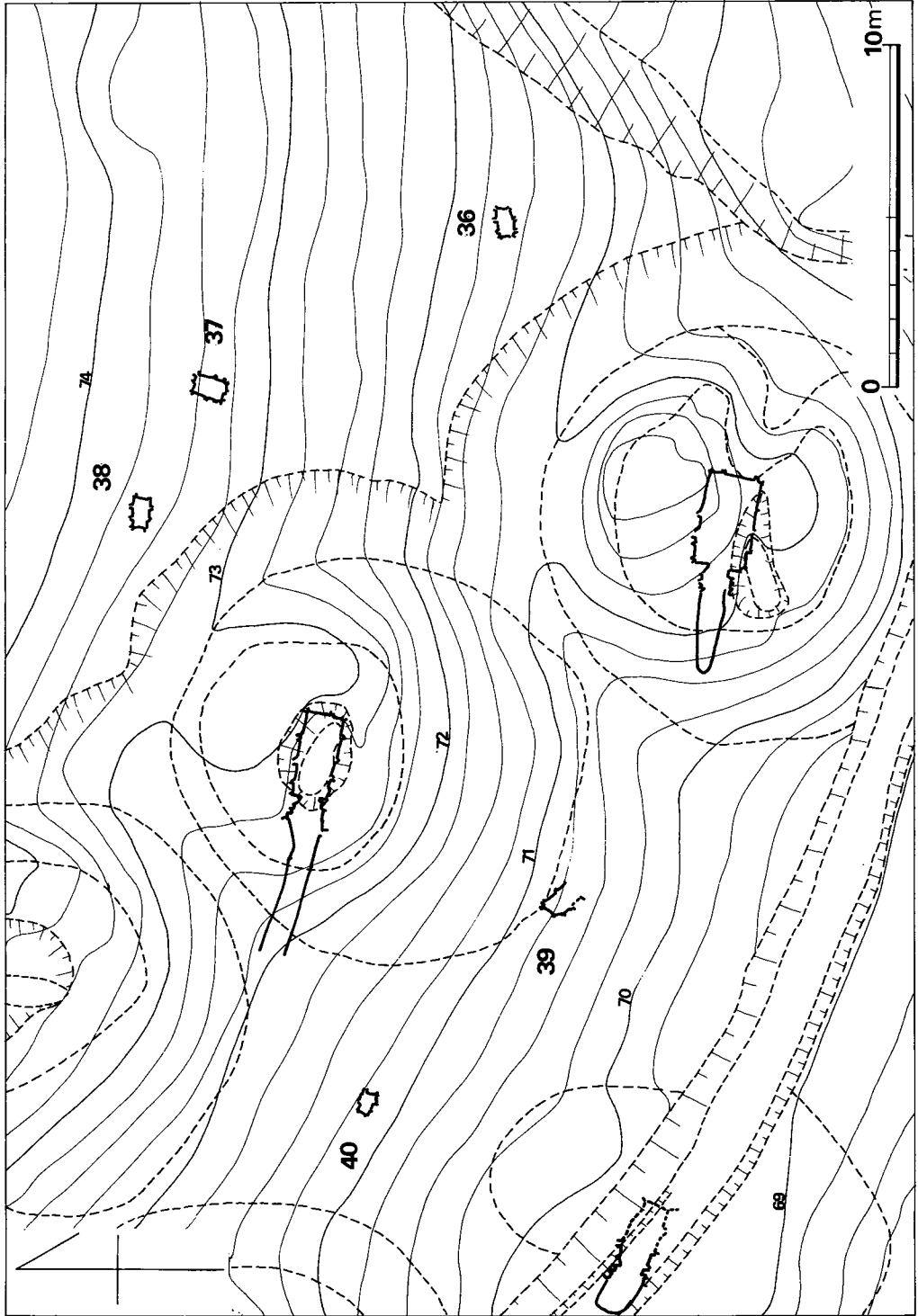


Fig. 140 汐井掛第36号・第37号・第38号・第39号・第40号古墳地形図（縮尺1/200）

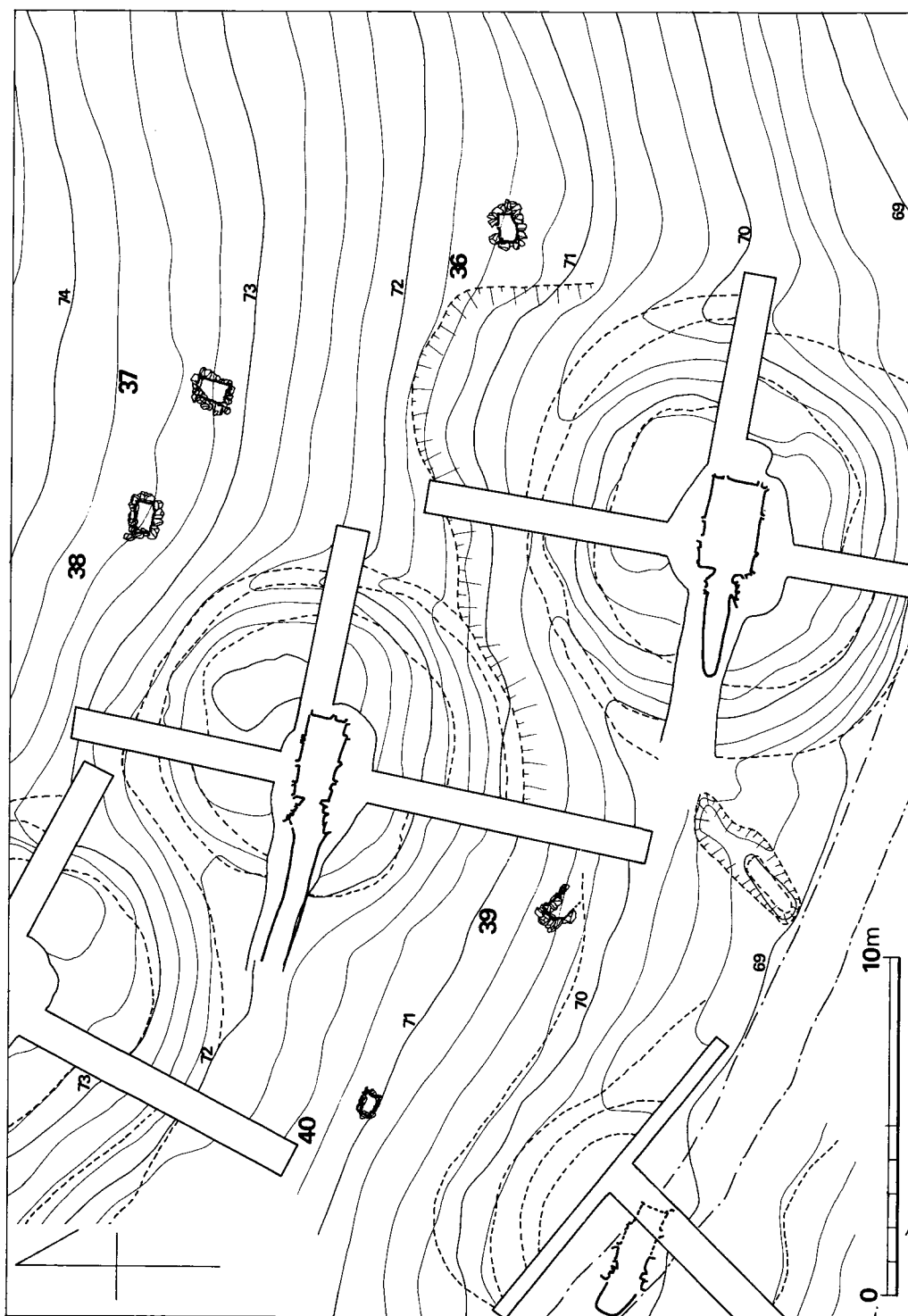


Fig. 141 汐井掛第36号・第37号・第38号・第39号・第40号古墳墳丘測量図（縮尺 1 / 200）

## 34. 第 36 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 196)

第36号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。汐井掛古墳B群の第13号、第14号古墳の周りに現状では墳丘を有しない小型の主体部を有する5基の石室が散在している。これらの5基をB群とは別に一つの古墳群としてG群とする。

第36号古墳はこれらの群で最も東方にあって、第14号古墳よりはやや高い丘陵斜面上に位置している。

現状では墳丘や地山整形による溝などの痕跡は見られなく第14号古墳の調査中に発見されたものである。石室の形態よりして墳丘を有するものと思われる。天井石はすでにない。

### 2) 墳 丘 (Fig. 140・141, PL. 196)

地表の観察では墳丘の高まりなど見られない。調査の結果では表土を除去すると腐植土があり、直ぐに地山を検出する。石室の形態よりして天井石が存在するもので、これを考えると若干の盛土が必要となりあまり高くない円形状の墳丘が存在したと思われる。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ⑤7, PL. 197)

主体部は長方形プランの小型石室で傾斜面にほぼ直交するように長軸をとり、N84度Wを指す。通有の横穴式石室のように長方形でも四壁中の一壁に閉塞部を有しない四壁塞がりの石棺のような石室である。遺存が悪く詳細には不明であるが石室の大きさは長軸82cm、短軸は両端側壁下で42cm、中央部で52cmと胴張り型となる。壁高は一番残りの良いところで床面より50cmであり腰石上二段目までしか現存しない。

石室の腰石は東壁と西壁が短側壁で共に一石、北壁と南壁が長側壁で共に三石よりなる。これらの腰石はみな正方形の板状石をよこ長に立てていて、持ち送りは見られない。床面より下の掘り方内に半分ぐらい埋っているものがある。腰石上の二段目の石材はやや角ばった長方形のものでよこ平に小口積みしている。これらにも持ち送りはみられない。腰石と二段目石には石材の形状が角ばっているため空間があき詰石をしている。床面に敷石はない。

#### (2) 石室掘り方 (Fig. ⑤7)

掘り方の形状は隅丸長方形で石室の形状とほぼ同じであり、大きさは長軸1.35m、短軸1.15mで、深さは丘陵傾斜面の高位所である上方で25cm、低い下方で10cm程であり、床面をほぼ水平にしている。

現状では石室の腰石より高くはなく掘り方上面が当初のものかどうかは調査の過程では判別できなかった。腰石外端と掘り方周壁体の間はほとんどなく狭い。

石室の腰石下には掘り方床面よりの掘り込みがあるが、腰石の下端が掘り込みの床面深くまで入って置かれているものが少ない。

#### 4) 遺物

出土遺物は皆無である。

## 35. 第 37 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 196)

第37号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。第13号古墳の東側で第38号古墳とは3 mしか離れていない。丘陵斜面に石室が直交するようにあり、このG群では標高の高いところに位置する。

現状では墳丘や地山整形による痕跡はみられなく、表面は削平されたと思われる。墓壇が深い関係で天井石は存在しないがG群では遺存がよい。

### 2) 墳 丘 (Fig. 140・141, PL. 198-(1))

表土より腐植土、地山と続き墳丘と思われる盛土はみられない。第38号古墳と時期を同じくして存在したとするならば小規模の墳丘を有する円墳であろう。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. 58, PL. 198-(2))

石室は小型で、長方形プランを呈する石棺のようなものであり長軸はN17度Eを指す。大きさは長軸90cm、短軸は北壁下で50cm、中央部で56cm、南壁で58cmと若干羽子板状となる。

短側壁は両方とも腰石は二石で、北壁は長方形の石材をたて長に立てており南壁は長方形の石材を、西側はよこ長に、東側はたて長にする。北壁は四段目まで残っていて腰石上よりはやや角のある長方形の石材をよこ平に小口積みし、三段目より持ち送りがある。

長側壁の腰石は左右側ともに三石で、北壁より大きな石を用いている。大きな石は全長の半分以上あり、一番小さな石のみ両方ともたて長に立てている。二段目から五段目の石材は短側壁と同じく小口積みしたものが多く比較的整然と積まれていて、よこに目が通るようである。西壁は腰石より傾き、床面に敷石は見られない。

#### (2) 石室掘り方

平面形は隅丸の長方形であるが、長辺である西壁の南壁分が張り出して二段状になっている。長さ1.40m、幅1.10~1.30mで深さは0.55mである。周壁の立ち上りは緩傾斜であり、石室の側壁石外端との関係は空間がほとんどない。掘り方床面は水平でやや凹凸状であり、各腰石下には掘り込みがあり根石、裏込め石も若干見られる。

#### 4) 遺 物

出土遺物は皆無である。

## 36. 第 38 号 古 墳

### 1) 立 地 (Fig. 72, PL. 196)

第38号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。第36号から第40号古墳の5基で汐井掛古墳G群を形成するがその内で最も標高の高い丘陵斜面にあり第37号古墳の石室とは3mしか離れていない。第13号古墳の北東方端である。

現状では緩やかな斜面上の平坦地であり第37号古墳と共に第13号古墳の調査の折発見される。

### 2) 墳 丘 (Fig. 140・141, PL. 199)

調査前の表面観察では墳丘らしき高まりや、地山整形による痕跡は見あたらない。しかし、PL. 90やPL. 103の第13号古墳発掘前の全景写真を見ると僅か若干の墳丘らしきものが見られないこともない。

表土を除去すると腐植土であり地山まで続いていて盛土は検出されない。

### 3) 主体部

#### (1) 石室 (Fig. ⑤9, PL. 199-(2))

第36号・第37号古墳の石室と同じく石棺のような石室で長方形プランを呈し、第36号古墳の石室とほぼ同じように長軸を向け、S84度Eを指す。大きさは長軸の長さ90cm、短軸の幅は西壁下で43cm、中央部で54cm、東壁下で51cmと僅かながら胴張り型となる。壁高は最も残りのよいところで床面より58cmである。

短側壁の腰石は両壁とも一石であり丸味のある石材でよこ長に立てている。長側壁の腰石は両壁とも三石で長方形の石材をよこ長に用いる。二段目の石材より腰石に比べて小さなものでよこ平に小口積みしているものが多い。これらの側石はよこに目が通るように配慮している。持ち送りは側石が60cm以上も残っているわりには無く、西壁は腰石より傾斜し、二段目の石は大

きくくり出す。

床面に敷石はないがほぼ水平であり平坦である。

## (2) 石室掘り方 (Fig. 59)

形状は隅丸長方形であり、一部東壁が側壁の大きさの関係で大きくなっている。石室と同じ向きであり長軸1.35m、短軸1.07mで、深さは丘陵斜面高位の上方30cm、同下方10cmである。周壁は緩傾斜に立ち上り、側壁石の外端と周壁体とはほぼ接して掘り方内にすき間なく石室を架構している。

掘り方床面は平坦で、各腰石下には両壁のみを欠き掘り込みがある。

## 4) 遺物

### (1) 出土状況

石室内の北壁と東壁の隅近くに、床面より18~20cm浮いた状態で青磁片が検出される。

### (2) 出土遺物 (Fig. 142, PL. 200-(2))

出土遺物は

(1) 土器 青磁碗 1個体

のみである。

青磁 (Fig. 142, PL. 200-(2))ほぼ完形に近い青磁碗である。口径16.7cm、器高6.9cm、高台径6.3cmである。内面にへら描き文様がみられ、外面にはない。釉は深緑色を呈している。高台の削り出しは浅く、高台にも釉がかかり、一部高台底面まで流れている。

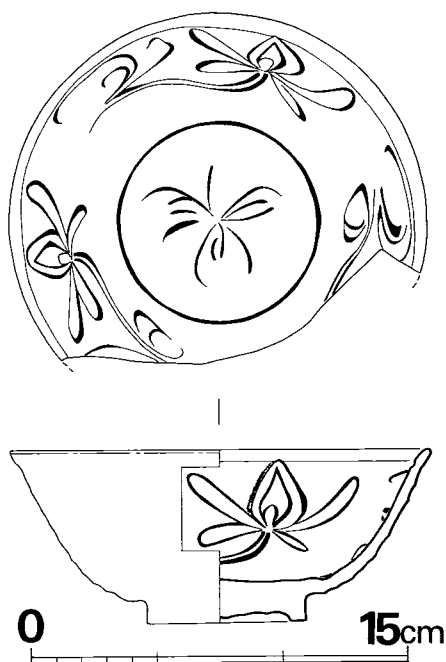


Fig 142 汐井掛第38号古墳出土青磁実測図  
(縮尺1/3)

## 37. 第 39 号 古 墳

### 1) 立地 (Fig. 72, PL. 196)

第39号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。第13号古墳の南側で、第14号、第15号古墳と三つの古墳に挟まれたように見える。F群では第40号古墳と共に丘陵斜面の下位、低いところに位

置している。

現状は平坦地であり墳丘の高まりや地山整形による溝の痕跡など見られない。

## 2) 墳 丘 (Fig. 140・141, PL. 199)

表土を除去すると石材に当り、石室として調査するも、表土下は腐植土、そして地山層であり盛土は確認できない。現存状態では天井石と腰石の一部は失われているが、側壁の上に天井石を架構するとし、さらにそれを覆う土を盛るとするならば若干の高まりが見られるものと思われる。

## 3) 主体部

### (1) 石室 (Fig. 60, PL. 201~203)

石室床面の形状は長方形プランと思われるが、南西方の長側壁の腰石と、短側壁の南東方側壁石が全く失なわれているので正確にはわからない。しかし石室掘り方の調査より腰石の抜き跡が検出されたので以下復元してみる。

長方形プランで大きさは長軸で1.05 m, 幅0.60 m, 長軸はN42度Wを指す。壁高は北東壁の斜面上方の長側壁が残りよく床面より50cmまで見られる。

長側壁は北東壁が遺存よく腰石は三石で、南西壁は二石まで在り掘り方よりすると三石である。石材をよく見ると両側壁とも北西壁寄りの腰石は長方形の石材をたて長に立てていて、他の腰石はよこ長に立てている。よこ長の腰石上には二段の側壁がみられ、角石材をよこ平に小口積みしている。

たて長に立てられた両腰石の間に北西壁の短側壁があり、最下位の大きな石材はよこ平に小口積みされその上の石材もよこ平の小口積みである。そしてこの石の北東方にある小さな石材も小口積みとなる。対面の南東壁は存在していないが掘り方よりして一石の腰石では一番大きな石材と推定される。側石の持ち送りは北東壁は腰石より強い持ち送りとなっていて、二段目の石材はさらにくり出している。

床面をみると現存する全面に敷石がみられ5cm×10cm大の扁平な石材を用い水平で、平坦である。しかし北西壁の大きな方の腰石下には敷石とは大きさ、形状が違う二石が腰石下端と平行に大きな方の腰石の幅と同じように在る。

以上のようにみるとこの石室は横穴式石室ともされよう。すなわち長側壁の北西寄りのたて長に立てられた石材は袖石であり、北西壁の石材の在り方は側壁よりも閉塞石であり、床面の腰石下の二石は梱石とされよう。又現存しないが南東壁の掘り方は奥壁の鏡石と考えて妥当であるが、石室掘り方には墓道が付かない。

羨道、墓道がないので、形式的のみに横穴式石室の形態を呈していると思われる。

## (2) 石室掘り方 (Fig. ⑥0, PL. 203)

石室の掘り方は通常の横穴式石室の石室とは違い石棺のような石室の掘り方と同じく四壁があり閉塞部の方には墓道としての掘り方がない。平面形は隅丸長方形プランで長さ1.66m, 幅1.2mであり, 深さは丘陵斜面の上方である北東壁で40m, 下方の南西壁で若干残っている。

床面は水平で平坦であり各腰石下と榊石下には床面より掘り込みがある。周壁と腰石外端との間は若干の埋土がみられる。

## 4) 遺物

出土遺物は皆無である。

## 38. 第 40 号 古 墳

## 1) 立地 (Fig. 72, PL. 196)

第40号古墳は鞍手郡宮田町上有木に在る。F群では最も西側で第12号・第13号・第15号古墳の三基に囲まれたような状況で第39号古墳より北西7m離れて位置している。石室長軸を丘陵斜面と平行にとる。

現状では平坦地で古墳の存在は知られなく, 墳丘や, 地山整形による溝などは見られない。

## 2) 墳丘 (Fig. 140・141, PL. 199)

既に平坦地となっており盛土はない。表土を取り除くと腐植土であり地山に達する。天井石や, 側壁の一部がないことより削平されていると思われる。

## 3) 主体部

## (1) 石室 (Fig. ⑥1, PL. 205~207-(1))

石室は第36号から第38号古墳の石室と同じ四壁塞がりの石室で長方形プランを呈し, 長軸はS60度Eである。大きさは長軸60cm弱, 短軸は西壁側30cm, 中央40cm, 東側35cmであり, 壁高は長側壁の北壁が残りよく床面から50cmである。

長側壁である北壁、南壁の腰石はともに三石で正方形の石材を用いている。二段目、三段目の側壁は不整形の石材が多く, よこ長に架構している。北壁は腰石より持ち送りがあり三段目は強くくり出している。

短側壁の腰石は両方とも一石であり, 持ち送りは二段目の石材より見られる。

床面に敷石はなく石室掘り方の床面に若干の土を敷いているようである。



## (2) 石室掘り方 (Fig. ⑥, PL. 207-(2))

掘り方の平面形は隅丸長方形で、石室主軸と同じく長軸をとる。大きさは長軸1.08m、短軸0.80m、深さは0.45mである。周壁はやや急に立ち上り、床面は水平で各腰石下の床面よりの掘り込みは東側方のみに見られる。周壁と側壁間は接するように狭く根石や裏込め石は見られない。

## 4) 遺物

## (1) 出土状況 (PL. 204)

石室内よりの出土遺物は皆無である。

この古墳に伴うかどうかは調査で明らかにされなかったが、東壁端より東へ1mほど離れた地山上よりPL. 204-(2)のように須恵器坏蓋・身が出土している。

一応第40号古墳周辺出土遺物としてこの項で取り扱う。

(上野精志)

## (2) 出土遺物 (Fig. 143, PL. 208)

第40号古墳周辺出土遺物は列記すると次のとおりである。

(1) 土器	須恵器	5 個体
	坏蓋	3 個体
	坏身	2 個体

## 須恵器 (Fig. 43, PL. 208)

出土土器はすべて第40号古墳付近から出土している。

坏蓋 (1, 3, 4)

)

I 類 (3, 4)

口頸13.8~14.6cm

, 器高4.5cmである

。焼成が不良である

ため器面剥落が著しく、

体部と天井部の境及び口縁部内面の

段は不明瞭である。

天井部はへら削り、

他は横ナデを行なっ

ている。色調は茶灰白

色を呈し、胎土は砂

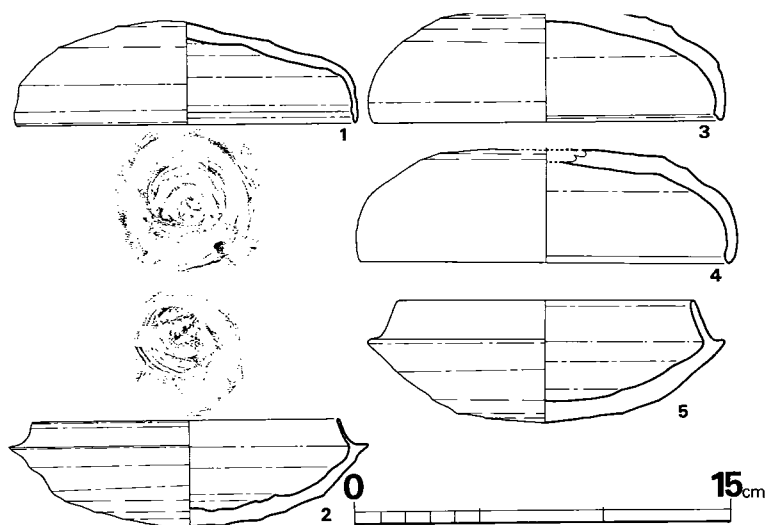


Fig. 143 汐井掛第40号古墳附近出土須恵器実測図 (縮尺1/3)

粒子を含む。

Ⅱ類(1) 口径13.4cm, 器高4.1cmであり薄手なつくりである。体部と天井部の境は凹凸をなし体部から口縁部は直立し, 口縁部内面には段を有する。天井部は広範囲なへら削りを行い, 内面に叩き痕がみられる。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は左方向である。

坏身(2, 4)

Ⅰ類(4) 口縁部をほとんど欠損する。器高4.8cm, 立上り高1.5cmである。底部はへら削りを行っている。色調は茶灰白色を呈し, 焼成は不良である。胎土は砂粒子を含む。ロクロの回転は右方向である。

Ⅱ類(2) 口径12.2cm, 器高4.2cm, 立上り高1.0cmである。立上りは薄く内傾し, 端部は尖っている。底部はへら削りを行い, 内面に叩きがみられる。色調は灰青色を呈し, 焼成は良である。胎土は砂粒子を多量に含む。ロクロの回転は左方向である。

(渡辺健二)

## 5) まとめ

第36号から第40号古墳は汐井掛古墳B群の第13号を中心に東西二群に分れてとり巻くように位置しており, これら5基を石室形態の違いより汐井掛古墳G群とする。第39号古墳の石室は横穴式石室の範疇に入り, 他の石室はF群の第31号, 第34号, 第35号と同じ(C)型の石室であって四壁とも開口しない四方塞がりの石棺のようであり, F群と同じ形態, 特徴からG群のものも石室とする。

第36号の石室は長軸82cm, 短軸は50cm前後, 第37号の石室は90cm×55cm, 第38号の石室は90cm×54cm, 第40号古墳は60cm×30cmといずれもF群でみたように(c)ーイ型の1mを越えるものではなく, (c)ーロ型と同じような大きさである。石室の石材構築方法はF群の(c)ーイ型と同様であり, 竪穴式とはされずやはり横穴式石室の構築方法と共通し, 特質を備えていることから考えて石室である。しかし, F群の同類のものとは若干の相違があり, F群では石材が大小さまざまな乱石積みであるが, G群では比較的大・小のものを区別して目が通るように整然差が出ている。

第39号古墳の石室については横穴式石室とも見られたが, 形式的のみで, まず, 石室掘り方に墓道のないこと, 閉塞部の北西方向でありそれは丘陵斜面の高所部の上方に当り, 奥壁方が下方にあたることであり, 石室掘り方の壁高も高い。しかし, 袖石状の立石や, 側壁の在り方は横穴式石室の閉塞部の状況にある。これは, F群の第34号古墳の石室でも見られたことであり, 意識的には横穴式石室であるが, 実際は形式的のみで済ませ実際は石棺形式をとらざるをえなかったものであろう。

G群よりの出土遺物として第38号の石室床面上より18~20cm浮いた状態で青磁碗が出土している。天井石が失なわれ、しかも床面上でない点が大いに疑問点として残る。汐井掛古墳群中より中世の遺物が出土している古墳では他に第19号古墳があり墓道、及び羨道上層の覆土中より糸切り底の土師器小皿等が出土していてこの青磁碗と合せて2基のみである。これらの両遺物は共に12世紀代のものとされ、石室の再利用も考えられる。

第40号古墳では石室内よりの出土遺物はないが、周辺の1m離れたところより須恵器坏蓋・身が出土している。これを直接第40号古墳に伴う遺物と断定はされない。第13号古墳に伴う遺物の可能性もありちなみに墳丘裾部からは5m離れており、又第12号古墳の墳丘裾部からも5m程離れていて、墳丘よりの転落の可能性はある。他に考えられることは第13号古墳か第14号古墳の墓道の延長としての「ハカ道」上に当る可能性もある。

出土状況を見るとこの付近だけ凹地となっており土器はその内より出土している。このことは第13号古墳からの転落や「ハカ道」ではないようであり単独出土かも知れない。出土須恵器の特徴はⅢ-B期である。

(上野精志)

## IV 結 語

## IV 結 語

### 1 汐井掛古墳群の諸問題

今回の調査によって38基の古墳を検出できた。これらの古墳はいくつかの群に分れており、年代も5世紀末から7世紀と年代幅があり、これらの古墳は種々の問題をはらんでいるがその内のいくつかについて述べ検討したい。

#### 1) 各古墳の立地と小支群について

汐井掛古墳群53基の内、今回調査した九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査の範囲内では計38基が調査対象となり調査した。なお第16号・第17号古墳は今回の対象地より外れているが昭和52年春に地域振興整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査により福岡県教育委員会文化課が調査を実施したのでその内、正式報告書が刊行されるのでそれによらねたい。

38基の古墳は発掘調査前の表面観察時において、立地、位置の相違からいくつかの群をなすと判断された。それらの各グループは調査後においてより明確になり、Ⅲ章でも既にふれたが次のように小群として分ける。

<b>A群</b>	第24・25・26・27・28号	5基
<b>B群</b>	第11・12・13・14・15号	5基
<b>C群</b>	第1・2・3号	3基
<b>D群</b>	第19・20・21・22・23号	5基
<b>E群</b>	第4・5・6・7・8・9・10号	7基
<b>F群</b>	第29・30・31・32・33・34・35号	7基
<b>G群</b>	第36・37・38・39・40号	5基
<b>H群</b>	第18号	1基

でA～H 8小支群の合計38基となる。

各群の関係については再述しないがA群は南方の山口川に一番近い小丘陵上頂部にあり主体部は竪穴系横口式石室で三基は南西方向に、二基は北西方向に開口する。

B群は汐井掛の丘陵頂部に第11号古墳があり、南西斜面にかけて第16号・第17号古墳を含めて7基であり、主体部は竪穴系横口式石室の範疇に入るものと単室の横穴式石室でいずれも丘陵斜面と平行方向の西側に開口する。

C群は丘陵頂部より南東方の稜線よりやや下方の斜面に3基が一直線上に並んでいる。主体部は単室の横穴式石室と複室の横穴式石室があり第1号はB群と同じ西方向に開口しており、第2号・第3号は斜面に直交するように南西方向に開口している。

D群はC群の斜面下方にあって丘陵頂部より谷間の丘陵裾部の方が近いぐらい下位にあり、主体部は横穴式石室の単室が主で複室が1基ある。開口方向はほぼ斜面に直交しており南西方向である。

E群は汐井掛の丘陵頂部より北東の斜面で、稜線近くである。B群、C群とは稜線を軸にして対応しているように見え、ほぼ一直線上に並んでいるが、第8号古墳のみがはずれて下方にある。主体部は単室・複室の横穴式石室であり、ほぼ斜面の下方である東方向に開口している。

F群はC群の第2号・第3号の間からやや下方の斜面にあって点在する。小円墳と推定され墳丘の遺存しているものは第29号古墳だけであり墳丘の規模など不明な点が多いが、内部主体は単室の小型の横穴式石室である。墓道のあるものは丘陵斜面の低い下方に開口している。

G群はB群の第13号古墳の周辺にあり二群に分れている。主体部は小型の石棺様の横穴式石室であり、石室の長軸は斜面にほぼ平行するものと直交するものがある。

H群は第18号古墳のみでB群のさらに斜面下方にあり内部主体は木棺直葬であり第18号古墳の北西方と西方に古墳があるのでこれらを含めてH群とした。

以上のようにAからHまでの8群に分けられるが汐井掛の丘陵頂部を中心として北側のみを欠き南西斜面に多く分布していて、山口川方向に派生する小丘陵にも古墳がみられる。丘陵頂部には第11号古墳が存在するが、南東方面の稜線上には一つも古墳がみられないことは不思議である。

なお、これらの各小群には墓道が墳丘裾を越えて非常に長く検出できたものがあり「ハカ道」が考えられる。

## 2) 墳丘について

汐井掛古墳群の墳丘形はいずれも円墳であり、その築造方法は共通したものがみられる。ここでは、a地山整形と溝及び、b墳丘盛土の方法について述べる。

### a 地山整形と溝

各古墳とも石室の架構に先だって石室掘り方の墓壇を掘り又、旧地表を整地してさらに地山整形を行ない墳丘基盤面を造り出し同時に周溝状の削り出しを行っている。

A群では墳丘が削平されているものが多く全体を把握できないが現存しているものをみると、第28号古墳では平坦地から緩傾斜面にかけてのところに古墳が位置するが、墳丘西南部において地山整形による周溝状の掘り込みがあり同時に墳丘裾部を形成している。この溝は短く、溝でない部分においては地山整形により傾斜変換点を造り出しており墳丘基盤としたことが伺える。

第25号古墳では墳丘盛土は全く見られないが墓道の右側の南方から東方向にかけて浅い周溝を削り出して平坦地との境を造り出している。奥壁側の北東方向に斜面は低くなるが、こ

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

の方向から北側、西側の墓道左側までには削り出しのみで周溝の続きは認められない。そしてその中央部に石室掘り方がみられる。

B群では第11号古墳が汐井掛の丘陵頂部にあつて大規模な地山整形の痕跡がみられる。頂部のため前記のA群とほとんど変らなく西半分で周溝を造り出し、東側半分では墳丘裾部の削り出しだけである。

以上は平坦地に近い位置に墳丘を築造している場合であるが、いずれも周溝状の造り出しと墳丘裾の削り出しとを行なつて墳丘基盤を形成するが周溝状の造り出しの場所には不統一であり、規則性がない。

これに対して丘陵斜面に位置する古墳の場合は企画性がみられ地山整形による周溝状の造り出しは石室の主軸方向に関係なく総て、丘陵斜面の高所部である上方にみられる。これには周溝状のものと、第4号や第7号古墳にみられるように最高所部を分水嶺的にして左右に下降するものの二形態がある。周溝状の造り出しのない斜面の下方は墳丘裾部のみを削り出している。

以上のような墳丘盛土作業以前の地山整形は最近の大規模な発掘調査による古墳では数多く見られるものであり、既に指摘されている通りである。汐井掛古墳の調査方法の墳丘全面排土の調査もこの点を十分に考慮してのことであつた。

## b 石室掘り方と墳丘盛土

石室掘り方と地山整形は石室築造前における作業でありその後墳丘盛土はなされるが、これらの関係は表裏一体であることは言うまでもない。石室掘り方は地山整形による墳丘基盤面の中央部に掘られるものであり、この深さと墳丘盛土は密接な関係にある。

石室掘り方と墓道を見ると石室掘り方には三つのタイプがある。一つは平地に立地し、墳丘基盤を造り出している古墳では、墳丘基盤面上端が水平になるように削られているようである

丘陵斜面に位置し、石室の開口部を斜面に平行している場合のB群では斜面上方の北側が高く、下方の南側が低くなっている。

丘陵斜面に位置し、石室が斜面に直交して開口する場合は当然奥壁の方が高くなり墓道が斜面下方に付属する。

石室掘り方の床面はどれもほぼ水平であり各腰石下には掘り込みが見られることがほとんどである。周壁はほぼ直に立ち上るものから約70度位に傾斜するもので摺鉢状のものはない。深いものでは2 mに近いものがありこれらは石室の大きさには比例しないようであるが、やはり大きな石室ほど掘り方が深い傾向にはある。特にE群は深いものが多いが、第10号古墳は深く、天井石の一部を掘り方内に納めてしまう程であり、竪穴系横口式石室をみてもA群では浅く腰石までのようであるがB群のものは比較的深いものも多く1.50 m弱もあるものがあり、単室の横穴式石室である。

墳丘盛土は石室掘り方の深いものは低く、浅いものは高いという関係にあり、これは見かけ

の問題になる。

石室掘り方と墓道の関係はA群では墓道が極端に短く玄室に向って下降して段が付き、又石室掘り方と墓道の続きである羨道部との接点にも段が付くのがほとんどであり、**縦穴系横口式石室**の特徴の一つにもなっているほどであり、玄室から平面的にみると墓道が舌状になっている。

B群では第11号を欠いて第12号から第15号古墳にもみられることであるが、舌状の墓道がA群に比べてやや長くなっている。第11号古墳ではほぼ水平である。C群からF群までは墓道が低く石室掘り方床面が高い関係にあり墓道が非常に長く掘り込まれているものに第3号や第19号古墳がある。

### 3) 石室構造について

汐井掛古墳群中の調査を実施した38基中、第18号古墳の木棺直葬を省く37基について各古墳の項で報告したように内部主体の石室を見ると平面形、構造等よりいくつか特色があり玄室を主にして分類することが出来る。そこでⅢ章の各古墳の石室形態を取りまとめると次のようになり、これはそのまま石室の分類となる。

- I 縦穴系横口式石室<sup>註(1)</sup> 第12・13・14・15・24・25・26(?)・27・28号古墳
- II 単室の両袖式横穴式石室 第1・2・5・6・7・8・10・11・19・21・23号古墳
- III 複室の横穴式石室 第3・4・9・22号古墳
- IV 小型の横穴式石室 第29・30・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40号古墳

であり、さらに細分できる。

#### I 縦穴系横口式石室

縦穴系横口式石室はA群、B群に見られるものでA群では丘陵頂部に位置しておりB群では丘陵斜面にある。さらにA群は玄室平面形がより狭長の長方形プランであり、B群のものは主軸長さに対して幅が広がる。又、出土遺物からして時期も違う。以上のようにA群とB群では立地、石室構造、墓道の在り方、年代など相違するのでIをI-a類はA群、I-b類はB群と細分する。

#### I-a類 (第24・25・26(?)・27・28号古墳)

縦穴系横口式石室については近年特に盛んに調査され、又、研究もなされており、ここで石山勲氏<sup>註(2)</sup>、佐田茂氏<sup>註(3)</sup>、柳沢一男氏<sup>註(4)</sup>の業績の上にたち比較してみたい。石山勲氏は横口部前面の構造をA・B・Cの三分類、柳沢一男氏は横口部の構造をI・II・IIIの三分類されて諸特徴を示されていて、汐井掛古墳群I-aの縦穴系横口式石室もこの分類の範疇に入るものでありこれらと対比させる。



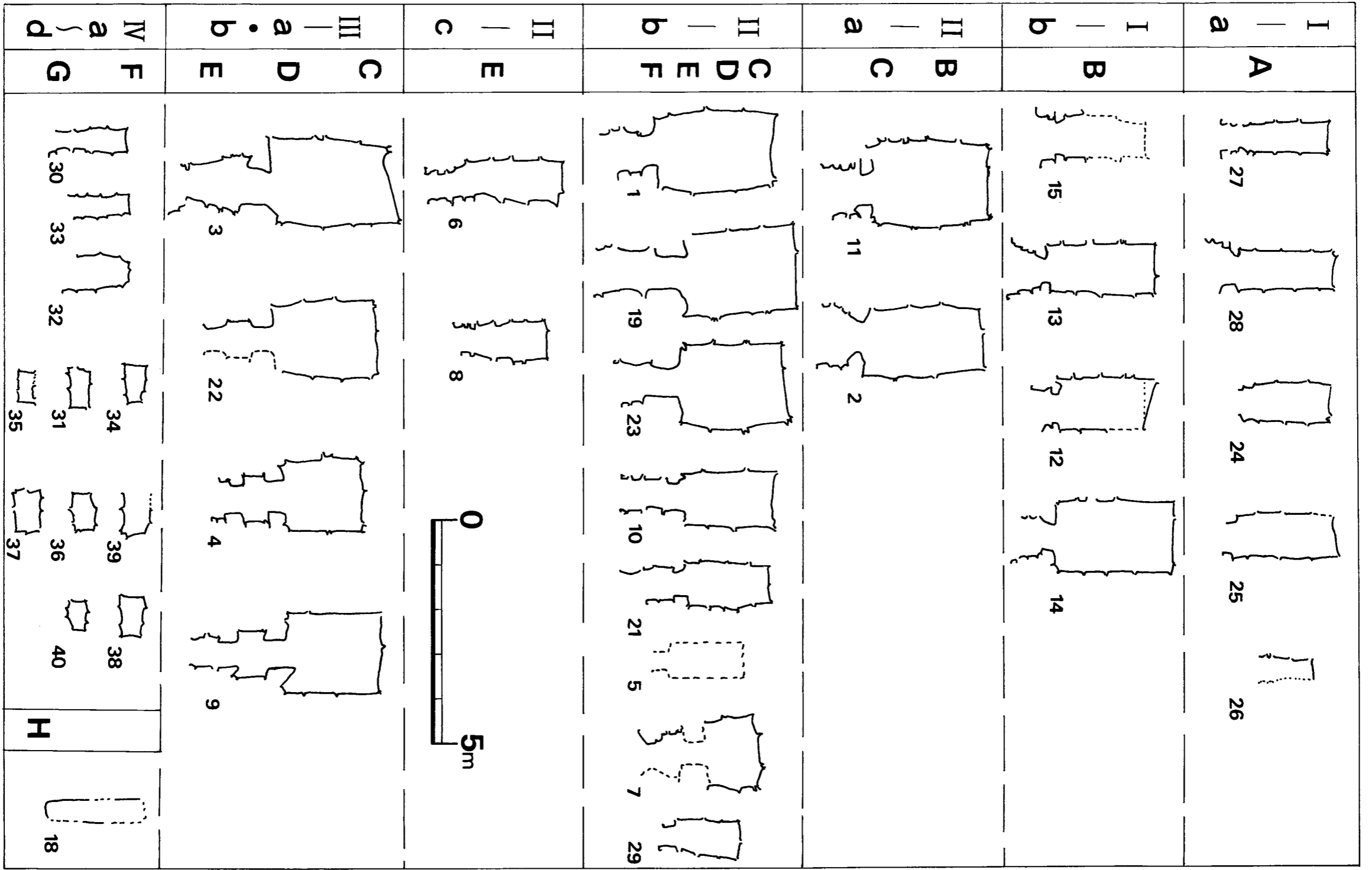


Fig.144 汐井掛古墳群各石室平面図 (縮尺1/100)

1. 汐井掛古墳群の諸問題

Tab. 5 汐井掛古墳群墳丘及び石室各部計測表

墳	墳丘		開口方向	掘り方		玄室		前室		羨道		全長 左 右	備考
	現 径 × 高	復 径 × 高		主体部	方向	長さ × 幅 × 深さ	左 中央長さ × 中幅 × 高さ	右 中央長さ × 中幅 × 高さ	長さ × 幅 × 高さ	羨道 × 高さ	羨道 × 高さ		
1	12.0×2.5		単室横穴式石室	N84° W	斜面略直交	4.4×3.35×1.4	左 2.8 中央長さ × 中幅 × 高さ 2.8 × 1.55 × 1.60 + α 右 2.65 1.55	左 2.8 中央長さ × 中幅 × 高さ 2.8 × 1.55 × 1.60 + α 右 2.65 1.55	0.82 × 0.93 + α	0.6 × 0.95	3.70	3.65	
2	15.5×1.80		単室横穴式石室	S60° W	斜面直交	4.5×3.10×1.20	2.44 1.38 2.62 × 1.60 × 1.40 + α	2.60 1.40 2.62 × 1.60 × 1.40 + α	1.2 × 1.13 × 0.85 + α	1.35 × 0.85 + α	3.55	3.75	
3	13.0×2.3		複室横穴式石室	S40° W	斜面直交	5.9×4.3×1.75	2.65 1.65 2.80 × 1.95 × 1.10 + α	2.60 × 1.95 × 1.10 + α	1.15 0.77 1.28 × 1.15 × 0.7 + α	0.5 × 1.10 × 1 + α	4.9	5.25	
4	13.0×1.8		複室横穴式石室	S80° E	略斜面直交	4 × 3.3 × 1.80	1.74 1.60 1.76 × 1.68 × 0.7 + α	1.70 1.60 1.76 × 1.68 × 0.7 + α	0.5 1.0 0.5 × 1.0 × 0.7 + α	0.3 × 0.8 × 0.7	3.15	3.38	
5	9.0×1.5		単室横穴式石室	N85° E	略斜面直交	3.24×2.0×1.0	2.60 × 0.9 × 0.26 + α	2.60 × 0.9 × 0.26 + α		不 明	不明	不明	
6	5.60×1.0		単室横穴式石室	N87° E	略斜面直交	× 0.8 × 0.9	2.10 0.8 2.24 × 0.9 × 0.45 + α	2.10 × 0.6 2.24 × 0.9 × 0.45 + α	0.6 × 0.6 × 0.6 + α	0.6 × 0.5	3.10	2.90	
7	8.5×1.2		単室横穴式石室	S65° E	斜面斜交	3.45×3.0×1.68	1.2 1.66 1.2 × 1.60 × 0.65 + α	1.2 1.4 1.2 × 1.60 × 0.65 + α	0.70 × 0.8 × 0.8 + α	0.70 × 0.45 × 0.7	2.40	2.40	
8		7×1.0	単室横穴式石室	N67° E	斜面直交	2.8×1.74×0.8	1.8 0.8 1.8 × 0.7 × 0.8 + α	1.8 0.5 1.8 × 0.7 × 0.8 + α	3.0 × 0.42 × 0.3 + α	0.42 × 0.3 + α	2.0	2.0?	
9	10.0×2.8		複室横穴式石室	S88° E	略斜面直交	5.7×4.4×2.0	2.03 1.8 2.2 × 1.75 × 1.0 + α	2.03 1.8 2.2 × 1.75 × 1.0 + α	1.0 0.70 0.95 × 1.05 × 0.7 + α	1.2 × 0.55 × 0.9 + α	4.85	5.0	
10	9.0×0.5		単室横穴式石室	N67° E	斜面直交	4.1×2.80×1.70	2.1 1.20 2.1 × 1.20 × 1.5	2.0 1.05 2.1 × 1.20 × 1.5	1.30 × 0.6 × 1.0 + α	1.30 × 0.6	3.40	3.32	
11	11.5×1.4		単室横穴式石室	N72° W	丘陵頂部	4.7×3.3×1.0	2.60 1.65 2.55 × 1.53 × 1.3 + α	2.55 1.65 2.55 × 1.53 × 1.3 + α	1.25 × 0.95 × 0.75 + α	0.8 × 1.02	3.70	3.70	
12	12.0×2.0		整穴系横穴式石室	N59° W	斜面平行	3.30×2.00×1.50	1.85 1.15 1.95 × 1.05 × 0.7 + α	1.85 1.15 1.95 × 1.05 × 0.7 + α	0.6 × 0.80 × 0.9 + α	0.6 × 1.40 × 0.9 + α	2.65	2.55	
13	10.7×2.0		整穴系横穴式石室	N78° W	斜面平行	3.70×2.2×1.4	2.35 1.05 2.40 × 1.10 × 1.35 + α	2.35 1.05 2.40 × 1.10 × 1.35 + α	0.7 × 0.65 × 0.9 + α	1.05 × 0.9 + α	3.20	3.30	
14	13.0×2.0		整穴系横穴式石室	N80° W	斜面平行	4.0×3.0×0.5	2.5 1.55 2.6 × 1.53 × 1.5 + α	2.5 1.55 2.6 × 1.53 × 1.5 + α	0.80 0.9 × 1.0 + α	0.50 × 1.00	3.45	3.40	
15		6.5×0.5	整穴系横穴式石室	N68° W	斜面平行	3.0×2.0×0.8	1.75 0.8 1.77 × 0.82 × 0.85 + α	1.75 0.8 1.77 × 0.82 × 0.85 + α	0.45 × 0.9 × 0.8 + α	0.9 × 1.0	2.60	2.50	
16													
17													
18	8.3×1.6		木 棺	N60° W	斜面略平行		1.8 × 0.45 × ?	1.8 × 0.45 × ?					
19		10×1.5	単室横穴式石室	S34° W	斜面直交	5.4×3.5×1.4	2.50 1.90 2.50 × 1.90 × 1.10 + α	2.50 1.90 2.50 × 1.90 × 1.10 + α	1.3 × 0.9 × 0.8 + α	0.95	4.50	4.60	

(単位 m)



## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

第24号石室は玄室長と幅は（ここでは各中心の計測値とする）は1.94mと0.91mでありその比は2.13：1となる。横口部はⅢ—横口部に袖石を配置する石室で、横口部前壁はC—前庭側壁に続いて墓道が付加されるものでありさらに柳沢一男氏の竪穴系横口式石室の形態上の概念1～4についてはⅢ章の各石室の報文によられたい。

第25号は玄室長2.38m、幅1.02mでありその比は2.24：1となる。これは第24号と比較するとかかなりの狭長となる。横口部はⅢ、同前面はCである。第26号は一応この種に入れると玄室長1.0m、幅0.6mで比は1.8：1で、横口部はⅢ、同前面はCである。第27号は玄室長1.95m、幅0.67mであり、比は2.91：1で、横口部はⅢ、同前面はCである。第28号は玄室長2.16m、幅0.88mであり、比は2.45：1で、横口部はⅢ、同前面はCである。

一応この種の石室とした第26号の石室のみの比率が1：2以下となる。

以上のことよりI—aとしたA群に位置する石室の玄室たて×よこの比は1：1.80～2.91であり、横口部は総てⅢの袖石を配置する石室である。横口部前面はCの前庭側壁に続いて墓道が付加される類となり、玄室の平面形において違いはあるが構造上の違いはない。又、石室掘り方や墓道の形態、在り方なども同一とされよう。

I—a類の古墳より出土した遺物よりこれらは5世紀末頃に築造されたとされる。

I—b類（第12・13・14・15号古墳）

I—b類はI—a類のA群とは離れたB群の丘陵斜面に位置している。各石室ともI—a類のものに比べて玄室の長さに対して幅が広い。

第12号石室は長さ1.85m、幅1.15mであり、比は1.61：1で第13号石室は長さ2.40m、幅1.1mであり、比は2.18：1。第14号石室は長さ2.6m、幅1.53mで比は1.70：1。第15号石室は長さ1.77m、幅0.92mで比は1.92：1となる。横口部は総てⅢ、横口部前面も総てCである。第13号の石室のみが1：2以上の比率となる。

I—b類の古墳より出土した遺物よりしてこれらは6世紀中葉代には築造されたものである。石室形態からすれば第15号古墳が先行するようである。

遠賀川下流域でこの種の石室をみると石山勲氏が「竪穴系横口式石室」とされた遠賀郡岡垣町手野の片山古墳群中の第9号、第12号、さらにその後昭和52年に二度の調査が実施され第15号と第16号がやはり竪穴系横口式石室であることが判明している。同町には高倉古墳・東田古墳群もある。

鞍手郡鞍手町新延の鎧塚第4号古墳は昭和45年小田富士雄氏を中心に調査されたものであり、直方市上境の福地神社第2号古墳は昭和41年に筆者が調査したものでありこの種の石室である。

犬鳴川流域では鞍手郡宮田町下有木の下有木第1号古墳があり、同郡若宮町竹原の八幡塚古墳がある。

遠賀川上流では飯塚市の栗崎山古墳群が知られている。又豊前になるが彦山河流域の田川市

セストノ古墳<sup>註(12)</sup>もある。

遠賀川流域ではないが比較的近い距離の宗像郡内にも在り、宗像町の城ヶ谷古墳群中の第19号古墳1号石室等、同町の稲元古墳群中の第1号～第5号古墳、<sup>註(14)</sup>三郎丸第6号・第7号古墳など、津屋崎町には新原・奴山第10号古墳の前方部石室<sup>註(16)</sup>がある。

遠賀川流域でも下流域でみられる竪穴系横口式石室は5世紀後半から6世紀中葉代に比定できるものであり、石室構造では柳沢氏のⅢ、石山氏のCが多いが、宮田町下有木第1号古墳はⅢとAの組合せで横口部前面には前庭側壁は存在しない。又石室内赤色顔料が塗布されていることは特筆され、時期は5世紀後半とされる。巨視的にみて犬鳴川流域におけるこの種石室の出現は、玄界灘沿岸の宗像地方や遠賀地方よりも後出するようである。これは副葬品をみても犬鳴川流域の古墳では貧弱であり、おのずと性格を示しているようである。

この時期をもって各地域に横穴式石室を有する古墳の出現をみることができるのである。

II 単室の両袖式横穴式石室 (第1・2・5・6・7・8・10・11・19・21・23・29号古墳)

この種の石室も石室構造からして長方形の玄室プランで羨道が付くが未だ天井石が架設されなく「ハ」の字状に開き、一部貼石がみられるものをII-a類とし、玄室プランは長方形・正方形で羨道部が玄室の石室と平行になり天井石が架設されるものをII-b類、さらに、玄室は長方形であるが明確に袖石とならないものをII-c類とする。

II-a類 (第11・2号古墳)

単室横穴式石室で最大の特徴は、羨道部は「ハ」の字形に開き、天井石は架構されないものである。石室平面は第11号が胴張り形で、第2号も胴張り形であり、いずれも中央部の幅が少々張るものである。羨道部側壁の積石状態は腰石がなく石室掘り方床面上から掘り方上端にかけて続いて、掘り方上端側は一部貼石状である。時期は6世紀中葉代である。

この種の石室は犬鳴川流域には未だ発見されていないようで、鞍手郡鞍手町高木B-1号古墳<sup>註(17)</sup>があり、汐井掛古墳群のII-a類石室の古墳が墳丘盛土内に須恵器がみられるように高木B-1号古墳においても墓道左側墳丘盛土内に須恵器がみられ、時期は6世紀中葉代である。

他に同町の神崎第1号古墳<sup>註(18)</sup>があり、「石室は長方形横口式単室で……入口の両側に石積みの壁があり、一種の外開きの羨道の壁の如き観を呈する。この石積みは石室の袖石との周囲の地山の壁をつなぐ貼石と言った方が適当かも知れない」とあり、時期は「5世紀後半代或いは6世紀初頭を下らない頃と考えられる」とされている。

この種の石室は宗像地方には多く見られるようで宗像郡津屋崎町の新原・奴山古墳群にて5世紀後半から6世紀代のこの種石室の古墳が数基報告されている。このことは汐井掛古墳群の性格を考える上で非常に重要である。<sup>註(16)</sup>

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

## II-b類 (第1・7・10・19・21・23・29号古墳)

玄室プランは長方形が多く第7号古墳のみよこ長の長方形、両袖石は定形化しており羨道部には天井石が架構される単室の横穴式石室である。

第1・10・19・21・23・29号古墳の石室の平面は長方形で典型的な両袖式の横穴式石室である。第29号古墳の石室は超小型の石室で羽子板状を示しており、羨道部は短い。一応この種石室の範疇で考えるべきものと思われる。第21号は小型で狭長な長方形であり、石室空間は狭い。第1号古墳の羨道はII-a類に大差ない平面形を示し、第10号古墳は中型の長方形で、第19号、第23号は長方形でも正方形に近いものの大型であり、石室空間は広いものと推定される。第1号古墳はこれらの内でも最っともII-a類に近く、6世紀中葉代に比定される。他の古墳は6世紀後半である。

石室形態からすればこの種の石室は犬鳴川流域でも一番多く存在しているもので分布調査の折に見た限りでは広く分布している。調査されたものが少ないので例として挙げられるものが少ない。若宮町内では小原古墳<sup>註(19)</sup>、沼口・荻野古墳、平古墳、宮永古墳群中の数基、稲光古墳、高野東古墳、庄屋村古墳、庄屋村東古墳、上金生古墳、大浦西古墳、大浦東古墳、天神山古墳<sup>註(20)</sup>群など現在開口している石室のほとんどはこの種の石室である。

宮田町内では百塚古墳群中の石室は総てと言ってよい程この種の石室であり、中有木古墳、井掘古墳、高平第2号古墳<sup>註(21)</sup>等がある。これらの時期は6世紀後半代から7世紀前半代のものようである。

## II-c類 (第6・8号古墳)

小型の石室であり、明確に袖石とならず、側壁との隅角が失なわれ、石室中央方へ突き出ること少ない。しかし、玄室と羨道は敷石、閉塞石に区別されるものであり無袖式までにはいたらないものである。第6号古墳石室は狭長の長方形であり、第8号古墳の石室は小型化したものである。天井石が存在しないので詳細は不明であるが、玄室空間はあまり高くないものと思われる。時期は不明であるが、他の石室形態の比較より7世紀前半代以後とした。

この種の石室が検出されたのは犬鳴川流域では初めてであり、後述するIV類の石室と共に注目されるものである。

## III 複室の横穴式石室 (第3・4・9・22号古墳)

III類は4基で、複室を構成する前室の在り方よりして方形でなく、しかも羨道が短かく「ハ」の字状に開き、天井石が架設されないもののIII-a類と、前室は方形で、羨道部が長くて石室の側壁と平行関係にあるもののIII-b類に分けられる。

## III-a類 (第3号古墳)

玄室は歪な長方形であるが、両袖石は大きく安定しているが左右の大きさはかなり違う。前室は逆台形状であり羨門方が狭い。羨道は、石室掘り方の床面上よりではなく、掘り方内の埋土

中に貼り付けられた状態で僅か50cm程の長さである。

### Ⅲ－b類 (第4・9・23号古墳)

第4号古墳石室の玄室はほぼ方形に近く、前室は主軸に対してよこ長の長方形である。第9号古墳の玄室はやや長方形であり、前室はよこ長の長方形を呈する。

第23号古墳は前室右側壁が盗掘により失なわれていて復元プランであるが、玄室は少しの羽子板状長方形であり前室は主軸に対してよこ長の長方形である。

複室構造の横穴式石室を有する古墳も犬鳴川流域や、鞍手郡鞍手町の西川流域に多く、若宮町では小原古墳群、里古墳、竹原古墳、宮永古墳群、大浦東古墳群、金丸古墳などが在り、宮田町では竜徳第1・第2号古墳、谷第1号古墳、本白第2号古墳、南ヶ浦古墳群があり鞍手町内にも多く存在する。しかしこれらは皆Ⅲ－b類のものである。

これら複室構造のものについては小田富士雄氏が指摘されているように遠賀川流域は他の地域に比べて出現が一時期おくれ須恵器編年Ⅲ期からであるとされている。汐井掛古墳群を含む犬鳴川流域や、西川流域の今日の資料をもってしても未だ小田説は変ることではない。これらのうちでも汐井掛第3号古墳は注目され時期は須恵器Ⅲ－B期であり石室形態が先述のごとくⅢ－a類であることよりⅢ－b類より先行するものと思われる。このことは竹原古墳や、金丸古墳よりも古い時期である。この地域の複室の横穴式石室は6世紀後半代から7世紀前半代にみられるようである。

### Ⅳ 小型の横穴式石室

これらの石室構造の特徴についてはすでにⅢ章の第29～35号古墳のまとめにて詳述したが、E群に見られる両袖式で小型の単室である横穴式石室が退化したものと思われ、石室構造の項にてⅣ類とし、さらに細分化しすぎとの批判がないでもないが(a)～(c)類とし、さらに(c)をイとロに分けたもので、Ⅳ－a類が横穴式小石室、Ⅳ－b類が小横穴式石室、Ⅳ－c類が横穴式石室系小石室でイが大型、ロが小型である。これらの石室からの出土遺物は鉄鏃と中世の青磁しかなく古墳の時期は決め難いのでここでは他の同種石室より憶測してみる。

Ⅳ－a類とした石室に鞍手郡鞍手町の向山第5号古墳があり、石室の遺存が悪いが、玄室の長さ1.35m、幅1.05～1.20mで両側壁間に閉塞石があり、玄室を袖石や、柵石で区別せず閉塞でもって始めて玄室とされるもので、閉塞部より墓道方に玄室幅と同じに側壁が続いている。墓道方は開壜により破壊されていて明らかでないが、無袖式の「風の字型」石室としたものである。なお、出土遺物はガラス製小玉だけであり明確な築造年代は不明であるが、向山古墳群として把握した場合に7世紀代に比定されている。

県内では小型の横穴式石室は比較の実態が明らかにされている群集墳として著名な福岡市西区今宿地方、同市西区早良平野の西方丘陵上の古墳群と東方の油山山麓に存在する古墳群。筑紫郡那珂川町でも那珂川流域に群集墳がみられ、これら群集墳の内部主体にみられるものである。

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

なお、これらの群集墳は福岡県内でも最大級のものである。この地域の群集墳の石室形態はたて長の長方形プランが基本であるが、正方形プランとよこ長の「T」の字型のプランの石室があるようで、内には片袖式のものがある。しかし石室は小型であるが明らかに袖石が認められ玄室と羨道を区別しているものがほとんどである。

Ⅳ－a類とⅢ－b類の小型の横穴式石室との中間的な石室を有する古墳に福岡市西区今宿の相原第4号古墳<sup>註(27)－(8)</sup>がありたて長の長方形石室で「縦穴式石室的な性格も合せ持つ」小形の横穴式石室で、時期は6世紀後半の終末頃に造営され7世紀後半前後までの使用と近接した造営年代とされている。

同市西区油山山麓の倉瀬戸第2号古墳<sup>註(27)－(6)</sup>は玄室方形プランで中心部の長さ1.37mであり袖石や羨道の在り方が類似している。年代は7世紀後半であり、初葬のまま終始している。

油山山麓の終末期古墳でも末期群集墳として注目されるものに駄ヶ原古墳群C地区<sup>註(27)－(6)</sup>の古墳があり石室形態がバラエティーに富んでいるが、この種の石室は見られないようである。

福岡市西区にある群集墳の石室にはⅣ－b類とした石室は報告されていないようであり、どんなに小型の石室でも基本的には袖式を取るようであり、Ⅳ類の石室は県南部の終末期古墳の石室にもみられないようである。

遠賀川流域をみるとこの種の石室は鞍手郡鞍手町の向山第6号古墳があり、Ⅳ－b類、Ⅳ－c類のどちらにでも取れるような石室であるが、諸特徴よりして、よりⅣ－b類に近似しているとされ、横穴式小石室とした。

Ⅳ－c類は小郡市津古内畑遺跡や筑紫郡那珂川町観音山古墳群<sup>註(29)</sup>、筑紫野市八隈古墳など<sup>註(30)</sup>で知られており、津古内畑遺跡では合計16基が検出されているが出土遺物が皆無であり明確に年代を示していないが構造の特徴などから古墳時代末期とされている。観音山古墳群の中原支群では6基検出され、その内4基に副葬品が伴っている。これら副葬品の須恵器の示す年代は7世紀末頃でありこの時期に築造されたといわれる。八隈古墳には出土遺物はなく時期は不明で、福岡県内ではこの種の石室の類例に乏しく明確に築造時期のわかるのは観音山古墳群のみであるが、いずれにせよ古墳時代終末期であることには間違いない。これらのことより汐井掛古墳群のものも終末期とされよう。

## 4) 出土遺物の考察

## a 出土状況について

汐井掛古墳群は第18号古墳を除いて他に総て盗掘を受けており石室内よりの出土遺物は少ないものと思われた。トレンチ方式ではなく調査はできるだけ全面発掘をして、石室の解体、石室掘り方の検出などできるだけだけの努力をして行なった。その結果、石室内よりの出土遺物は少なく又、原位置を保っているものもほとんどないような状況であった。しかし墳丘盛土内や墳



丘基盤面上より多くの土器が検出されている。出土遺物は土器が多く、須恵器は総数217個体以上であり報告していない少破片も多数ある。

装身具は耳環、勾玉、丸玉、小玉、管玉、切子玉などがあるが量的には第24号古墳の勾玉、丸玉、小玉を除けば非常に少ない。鉄製品では武器としての鉄鏃、鉄刀、農具としての鉄斧、鉄先、紡錘車、工具では刀子、たがねがある。

馬具として留金具の類があり、これも全体的には少ない。土器以外の遺物は主に石室内に副葬されるものであり石室内が盗掘を受けているための結果と思われる。

石室内で出土遺物が原位置を留めていたのは第4号の前室、第9号(?), 第10号, 第12号(?), 第14号, 第19号, 第21号(?), 第24号, 第25号古墳で、これらは石室内出土遺物の総てが原位置のものでなく僅かの数である。

石室外の墓道で若干遺物が発見されたが、これらは第4・24号古墳を除き石室内よりのかき出しの可能性が高い。

第24号古墳では石室主軸とほぼ一直線に当る墓道上と推定されるところより須恵器高坏と土師器甕が破損している状態で出土している。高坏は古式須恵器であり、その在り方については既に石山勲氏が指摘されている通りで、この第24号古墳の場合は葬送儀礼用具とされよう。

墳丘盛土と墳丘基盤面上など石室、墓道以外において多くの土器が発見された。近年の大規模な開発に伴う事前調査などで広範囲に渡る調査が実施されて、従来の石室内や、トレンチのみの方法から全面発掘調査がなされている例が多い。その為、従来あまり調査されなかった墳丘基盤上よりや、石室掘り方内などの出土遺物についてみるものがなかったが、汐井掛古墳では全面発掘の成果(?)とされようか。

墳丘内(基盤面も含めて)よりの遺物出土状況としては以下のような所に集中している。

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| ① 墳丘基盤面上に埋置する場合     | 第2・4号                |
| ② 石室掘り方内に遺物があるもの    | 第4号                  |
| ③ 墳丘盛土内にあるもの        | 第27・11・14・1・2・5・6・7号 |
| ④ 墳丘表面にみられる場合       | 第14・4号               |
| ⑤ 墳丘裾部に小孔を掘って埋置する場合 | 第12・13号              |

の五例である。なお、周溝状の掘り込み内より原位置を保って出土した遺物はないようである。

F・G・H群ではこれらの出土状況を示す土器の出土はない。これらの出土状況は墳丘盛土作業以前、盛土作業中、墳丘完成後における行為である。

墳丘盛土以前の祭祀として「墳丘墓底面および墳丘外土壇」<sup>註(32)</sup>があり、土壇以外の①の例に遠賀郡岡垣町の東田古墳や鞍手郡若宮町の小原第1号古墳、福岡市西区拾六町の高崎第2号古墳、筑紫郡那珂川町の観音山第6号古墳、八女郡広川町山の前第2号古墳<sup>註(34)</sup>などがある。

②の例はあまり知られていないようで福岡市西区拾六町の高崎第4号古墳、筑紫野市萩原古

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

註(36)

墳より耳環の出土があり、掘り方内の裏込め土中より出土している。

③は最も多いようで前述の遠賀郡岡垣町の東田第11号古墳では墓道の左側墳丘盛土中に土器290個体と滑石製白玉が出土しており供献品とされている。汐井掛第2号古墳の在り方はやや東田11号古墳に共通するところがある。鞍手郡鞍手町高木B-1号古墳、宗像郡津屋崎町新原・奴山第17号古墳、同第123号古墳、同第18号古墳などがある。

④は明確に検出できたのは第3号古墳のみであるが、周溝内出土の土器が多く、あるいは他の古墳でもみられたものかもしれない。前述の若宮町小原第1・2・4号古墳や宗像郡津屋崎町新原・奴山第17号古墳、福岡市西区相原第3・6号古墳註(27)-(8)や同区片江第6号古墳註(27)-(5)にみられる。

⑤はB群のみのものであり興味深い。例として前述の若宮町小原第1・8号古墳、片山第14号古墳、宗像郡津屋崎町新原・奴山第123号古墳がある。

これら遺物類の在り方については種々理解がなされているが①の場合は墳丘基盤整地作業終了時であるところに意義があるものと思われ、墳丘盛土前の葬送儀礼、又古墳築造作業の安全を加味したものとも推定される。

②については葬送儀礼の意味もあろうが、副葬品としての方が強いと思われる。

③については遺物の種類、在り方、数などの出土状態の違いによりその機能もおのずと違ってくることであり、初葬時、追葬時の区別、飲食器としての供献品、副葬品、古墳墳丘盛土作業の進行に伴う儀礼など多目的要素を含んでいるものであろう。

④や⑤も③と同様と思われる。

汐井掛古墳群中の在り方で注目されるのは甕の出土状態である。第11号・第12号・第1号古墳などはいずれも直立しており、甕口縁部が意識的に破損されており底部に穿孔がみられないことである。第14号と第2号は土器の量からいえば汐井掛古墳群中では異常である。第14号の場合は土器に時期差があることより追葬時に取り集められた可能性もある。

又、古式須恵器のA群5世紀末段階では墓道に、B群の6世紀前半代になると墳丘裾部に移り、墳丘盛土内にみられるようになり、C群の6世紀中葉から後半にかけては墳丘基盤面上にも置かれるように推移していることは葬送儀礼の在り方が多様となり変化していることを示しているといえようか。さらに7世紀代と推定する新しい時期の古墳ではみられなくなる。

石室・墳丘外の出土遺物として第40号古墳周辺出土遺物とした須恵器がある。この土器は土器留のような浅い掘り込みのある穴内より出土しており、この土器留がどの古墳に伴うものか判別できない。このような土器留の例に鞍手郡鞍手町高木A-2号古墳の周溝北側に土器留が検出されていて、古墳築造後の祭祀とされている。

古墳時代以外の遺物として第19号古墳より土師器、瓦器、第38号古墳より青磁碗が出土している。これら中世の遺物と汐井掛古墳について見てみると、第19号古墳の場合、出土状況からみて再葬による副葬品かどうかの判別はつきにくい。第40号古墳の場合は床面上より約20cm浮

いた状態であるが、再利用の副葬品の可能性が強い。

福岡県内においても奈良時代後半から平安・鎌倉時代にかけて横穴式石室が再利用され墳墓として利用されている例が多くある。この利用の仕方について泉森<sup>註(37)</sup>氏は次のように分けて、

- (1) 石室内に土砂等を入れ、床面を整地して木棺等を埋葬する。
- (2) 石室内を火葬場に再利用し、火葬・埋葬場所とするもの。
- (3) 本古墳（奈良県フジヤマ1号墳）のように分骨葬を行うもの。
- (4) 入定所として石室を利用するもの。

以上4種を示され奈良県内における類例を示されている。

福岡県内でみられるのは泉森氏の(1)の例がほとんどと思われるが、この方面に関しての研究が待たれるところである。

汐井掛第19号古墳の場合は出土状況より直接的にこの古墳と関係ある遺物とは断定できないが、やはり何らかの係わりがあると考えた方が妥当であろう。

第40号古墳については既に酒井仁夫氏は(『くらでのむかし』—その3—)1976年(昭和51年)3月にて平安時代とされたが、この第38号古墳は天井石が失われていることと、床面より約20cm上面にて出土していること、石室形態などからして一言に平安時代とはされないようである。再葬とすれば泉森氏の(1)にストレートに当てはまるものである。

消極的であるが、ここでは既に述べたように石室形態からして第30号から40号は小支群(H)とされ、又これらの石室形態はF群と共通性を持つことにより少なくとも古墳時代の石室であり古墳と見た方が妥当性があるように思われる。とすれば第38号古墳の青磁碗の在り方はやはり泉森氏の(1)とされようか。

この種の中世遺物の出土した古墳として周辺例を挙げると、同じ若宮町の八幡塚古墳や横穴墓<sup>註(38)</sup>であるが、直方市の感田第5号横穴墓がある。又県内をみると後述する朝倉郡朝倉町の狐塚古墳<sup>註(39)</sup>や筑紫郡太宰府町の君畑第1号古墳<sup>註(40)</sup>などがあり、石室内に骨蔵器を納めて再利用された筑紫野市唐人塚第6号古墳<sup>註(41)</sup>などがある。

ただし、八幡塚古墳の場合今一つ考えられるのは盗掘時のものとして可能性があり、又近世になると古墳の石室が住居として利用されている例があり、これらの他利用と再利用の区別は判別しにくい。

(上野精志)

## b 出土須恵器について

本古墳群における古式須恵器とへら記号について若干述べてみたい。

### (1) 古式須恵器について

A群いわゆる竪穴系横口式石室から出土した無蓋高坏、隙、甕口頸部が上げられる。これらは先述したように陶邑古窯址群内におけるTK23型式<sup>註(42)</sup>に比定するのが妥当である。25号、27号

古墳 番号	時期	I	II	III		IV	V	VI
				A	B			
A	27	—						
	24	—						
	25	—						
B	13			—				
	14			—				
	11			—				
C	1			—				
	2			—				
	3			—				
D	19			—				
	23			—				
E	9			—				
	4			—				
	5			—				
	6			—				
	8			—				
	7						—	

Tab. 6 汐井掛古墳群出土須恵器の時期対比表

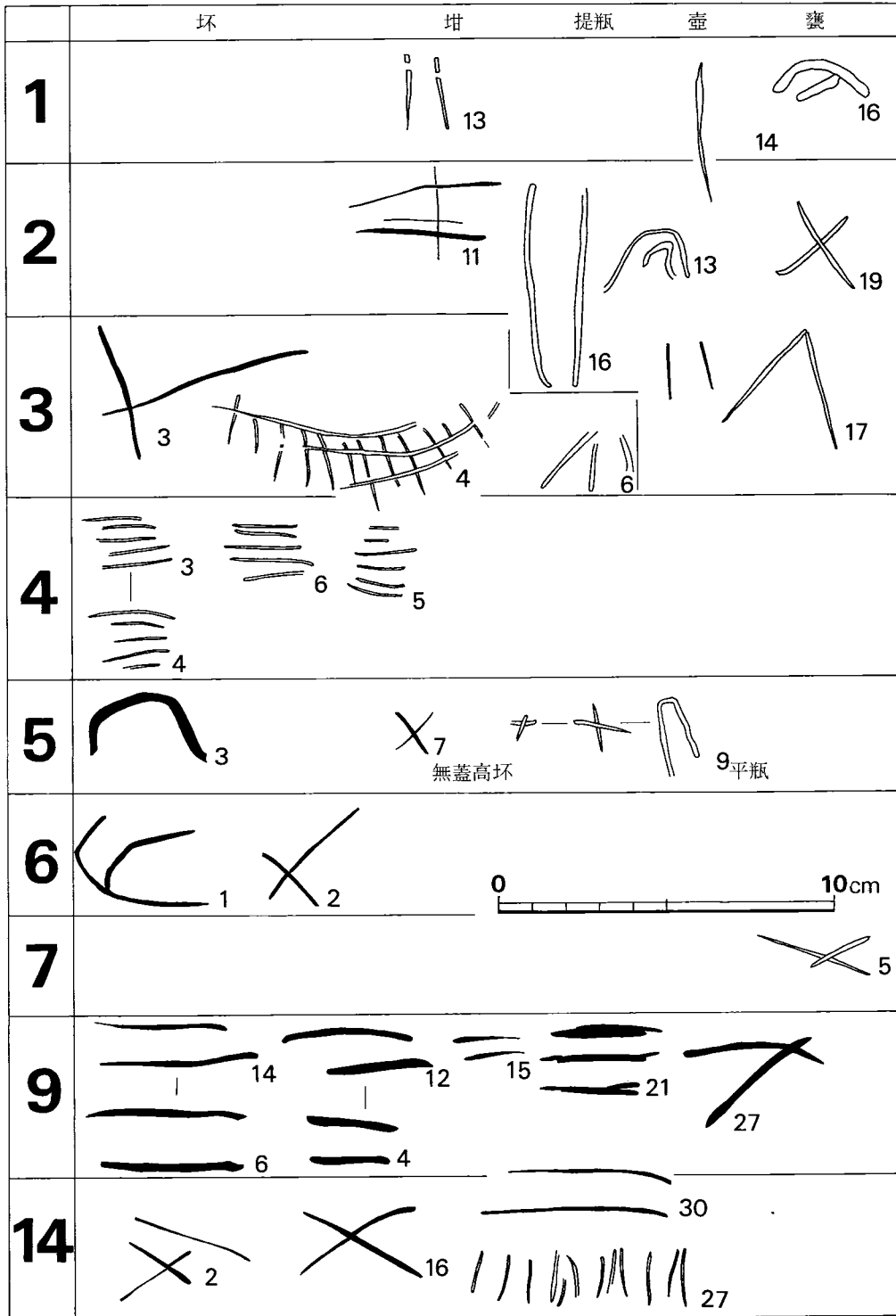


Fig. 145 汐井掛古墳群出土の須恵器へラ記号集成図 (縮尺1/2)

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

の隙はともに口径、胴部最大幅はほぼ同一であるが、より27号のものの方がシャープであり、27号のものより下がる感じを受ける。又、24号の無蓋高環は坏部は外反し、端部は丸くおさめているが脚部は短く台形を呈し全体的にシャープさが見られ、TK23型式でも古いほうに位置するのではないだろうか。

TK23型式は実年代にするならば5世紀末期に比定され、従来5世紀代の須恵器を九州においてI期とされてきたが、この時期における須恵器の在り方については解明されていない。<sup>註(43)</sup>田辺昭三氏は5世紀末期から6世紀初めにかけて陶邑窯で独占して来た須恵器生産がはじめて地方へ拡散したとしその範囲として中部、東海、北陸、山陰、山陽に及んでいるとして、九州にも遅れず波及した可能性を上げている。<sup>註(44)</sup>又、小田富士雄氏は九州において須恵器生産が始まる以前、いわゆる朝鮮系陶質土器及び陶色系の初期須恵器のみが存在する時期を九州の須恵器編年の0期としている。現在九州において須恵器生産がいつ開始されたか不明であり（現在九州で最古の須恵器窯跡は福岡市西区新貝窯とされているが、未報告のため詳細は不明。）陶色系、朝鮮系陶質土器のみが存在する時期いわゆる小田氏の言う0期の範囲は定かではない。現段階においては田辺氏の述べるように初期の須恵器の分布の在り方を追うことによって畿内との歴史的な関係をさぐる手がかりを得る。古式須恵器の出土例をおさえて行って分布の在り方を検討すべきであろう。

最後に、宮田・若宮町周辺において古式須恵器の出土例として鞍手町の向山住居址群の溝状遺構よりTK208型式に近い隙が出土していることをつけ加える。<sup>註(46)</sup>

## (2) 汐井掛古墳群におけるへら記号について

Fig. 145は各古墳における図示可能なへら記号をすべて網羅したものである。なお図中黒く塗りつぶしているのはへら記号が内面に付されているものである。

出土須恵器の総数は217個体+ $\alpha$ であり、へら記号が記されているものはその内の38個体で全体の17.5%にあたる。器種は坏蓋・身が圧倒的に多く、38個体中21個体であり半分以上を占めている。他の器種においては提瓶(4)、埴(3)、壺(3)、甕(3)、高環(1)、平瓶(1)と全体から見ると少ない。

坏蓋・身を中心に時期ごとのへら記号の在り方について見て行きたい。坏蓋・身は82個体出土しており、その内へら記号が記されているものは21個体有り、25%を占めている。

III-A期にはへら記号は見られない。III-B期には3個体記されており(14号-2, 16, 30)、ともに異なる記号であるが、2, 16は非常に似かよっている。又、30は調整の際ナデによったが、IV期以降のものについては資料的制約があるため省くが、興味深いものとして9号の21蓋内面にみられるへら記号は一度記されてその上を再度付け直しているのがみられる。

本古墳群において統一されるへら記号はないが、「ニ」=9・14・2、「メ」=14・7・6・5・3・2のように各古墳に点在する記号がある。「ニ」、「メ」は単純な組合せの記号でどこにで

もあり、即座に結びつけることは出来ないが、供給範囲を考える上で、注目されることであろう。また、本古墳群の出土須恵器の在り方に注目されるのは内面にへら記号を有しているものが多く、特に坏蓋・身に関しては4号墳を除き皆、内面に記されてある。また内面に記するのが工人のくせならば生産地を見い出す一つの手がかりとして興味深い。へら記号の意味については今日さまざまな説があるけれども、ここではなんといい難い。しかし、時期別に見た結果、IV期にへら記号が多く、種類も統一される傾向が見られた。この時期は器形の小型、規格化及び成形、調整の粗雑化の傾向にあるが、それは裏を返せば量産化の進展によるものとされているが、それとともにへら記号が増す傾向になることはへら記号の検討の中で留意すべきことではないだろうか。<sup>註(47)</sup>

付図の石室と遺物の一覧表においては一応各古墳から出土した須恵器を築造、追葬年代を考慮して各時代の代表となす坏、高坏、隙等を掲載したものであり、Tab. 6 はそれを表に現わしたものである。

(渡辺健二)

### c その他の遺物

#### (1) 鉄製紡錘車について

土器以外の出土遺物で特記される遺物は少ないが鉄製紡錘車が第19号古墳の玄室床面より2個出土しているので若干ふれてみたい。

我が国の鉄製紡錘車については既に松田真一氏等の論考があるが、この時点では九州において一例も知られていないとある。最近、福岡県内で数点が出土している。<sup>註(48)</sup>

1. 汐井掛第19号古墳<sup>註(39)</sup> 鞍手郡若宮町沼口
2. 狐塚古墳<sup>註(49)</sup> 朝倉郡朝倉町入地
3. 八並遺跡<sup>註(40)</sup> 朝倉郡夜須町
4. 君畑第1号古墳<sup>註(50)</sup> 筑紫郡太宰府町太宰府
5. 門田遺跡<sup>註(51)</sup> 春日市上白水
6. 剣塚遺跡 筑紫野市杉塚

以上の6遺跡であり、これらの各遺跡出土の鉄製紡錘車について紹介する。

#### 1 汐井掛第19号古墳 鞍手郡若宮町沼口

本報告によるものである。

#### 2 狐塚古墳 朝倉郡朝倉町入地

複室の横穴式石室であり装飾古墳としても知られている。「傘付鉄棒」南部前室の中央部の床面上約60糎の充満黒土中よりの出土古墳のものとしてやや疑問がある。完形鉄製品で中部最大径0.55糎長さ24.4糎の中空、両端とがりの鉄棒のほぼ中部に径4.8糎の傘形中空円板が貫通されている」とあり、報告者の渡辺正気氏（九州歴史資料館調査課長）にご教示を受け鉄製紡錘

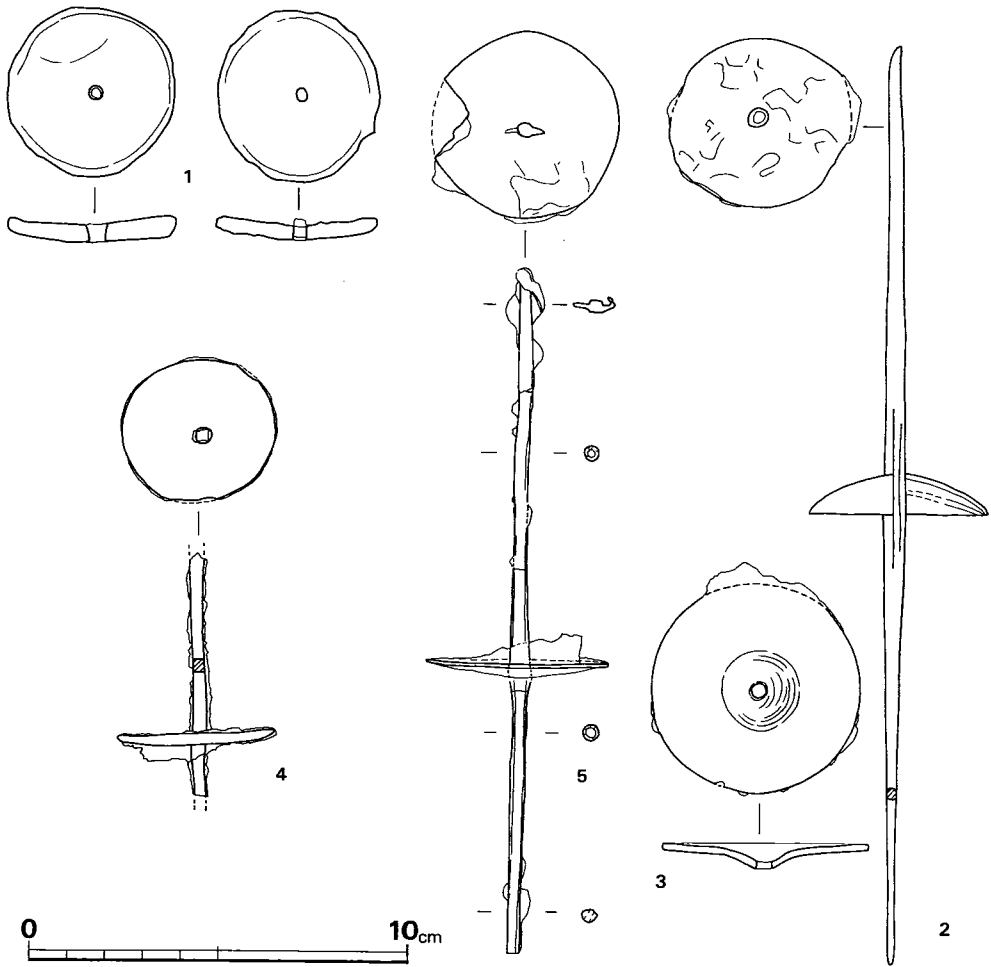


Fig. 146 福岡県内出土鉄製紡錘車実測図（縮尺1/2）

車とする。

3 八並遺跡 朝倉郡夜須町

土塚墓よりの出土で、時期は平安時代後期から鎌倉時代にかけてのことである。現品は調査者の鈴木重治氏の手元にあり実見できなかった。

4 君畑第1号古墳 筑紫郡太宰府町太宰府

玄室内の床面より60cm程上の黒色灰層がありこの灰層から主として平安時代の土器、須恵器、青磁、瓦、ふいご羽口と共に出土しており、完形品ではなく紡錘車に鉄の軸が遺存している。紡錘車は直径3.8~4.15cm、厚さ2.5~3.0cmでほぼ正円形であり、円周端は細く尖り気味であり、全体的にみて凹面状を呈していて先端は強く折れる。軸径は0.5cm内外である。鉄棒軸は



現存長6.4cmで断面方形を呈する。はめ込み状況は錆で詳細は判別できない。時期は平安時代初頭以降である。

#### 5 門田遺跡 春日市上白水

木棺墓の棺内副葬品で、完形品である。「鉄軸は断面が丸く全長18.2cm、紡錘車から上部が10.6cm、下部が7.6cmである。鉄軸先端には糸カケ部が作られている。紡錘車は径4.9cm円形を呈し、厚さは1mmと薄い。」紡錘車の形状は傘状である。木棺墓は10世紀後半頃の平安時代のものである。

#### 6 剣塚遺跡 筑紫野市杉塚

瓦窯の周辺に溝状遺構がありその内より瓦と共に出土している。紡錘車のみで心棒軸は出土してなく直径5.5cmの正円形で、厚さ0.2cmで軸径は0.4cmである。紡錘車は中央部のみが大きく凹み状となっていて、円周端は丸い。瓦が10世紀代のものより、この紡錘車も平安時代のものである。

以上6遺跡より出土しており、完形品は2個、紡錘車は7個を数える。入手できた資料の6個をみると狐塚古墳のものは大きく全長24.4cmであり、門田遺跡のものは18.2cmと短い。紡錘車は径5.5～3.8cm、厚さは0.1～0.3cmの間であり、傘状を呈している。軸と紡錘車の取り付け方法は錆で詳細は判別できない。

年代については、汐井掛第19号古墳のものが一番古いようで6世紀末から7世紀初頭、最っとも新しいものは門田遺跡の10世紀後半頃のものである。全国的にみても6世紀から平安時代にかけて出土しているようである。

これらは生活遺跡からの出土が圧倒的に多く、古墳としては、奈良県の丹切43号墳、静岡県かぐや姫古墳、他に石川県の小谷屋横穴墓が知られている程度であり、福岡県内出土の遺構別をみると古墳3、木棺墓2、包含層1で墳墓関係が多い。

弥生時代には円形の土製紡錘車、古墳時代では土製、石製と多くの紡錘車が住居跡や古墳より出土している。土製品には扁平のもの、古墳時代の石製品では逆台形のものも多く厚みのあるものが多いようである。

### 5) 古墳群の形成過程について

汐井掛古墳群の調査を実施した38基について報告し、各古墳の主体部構造や年代、各古墳との関連性などについて述べてきたが、これらの総括として古墳群の形成についてとりまとめてみたい。

古墳の築造年代、追葬時年代はⅢ章で、各古墳群の設定や、各石室の特徴などはⅣ章で述べたのでそれらの結果よりすると汐井掛古墳群はA→B→C→D・E→F→Gの順序で築造されたものである。

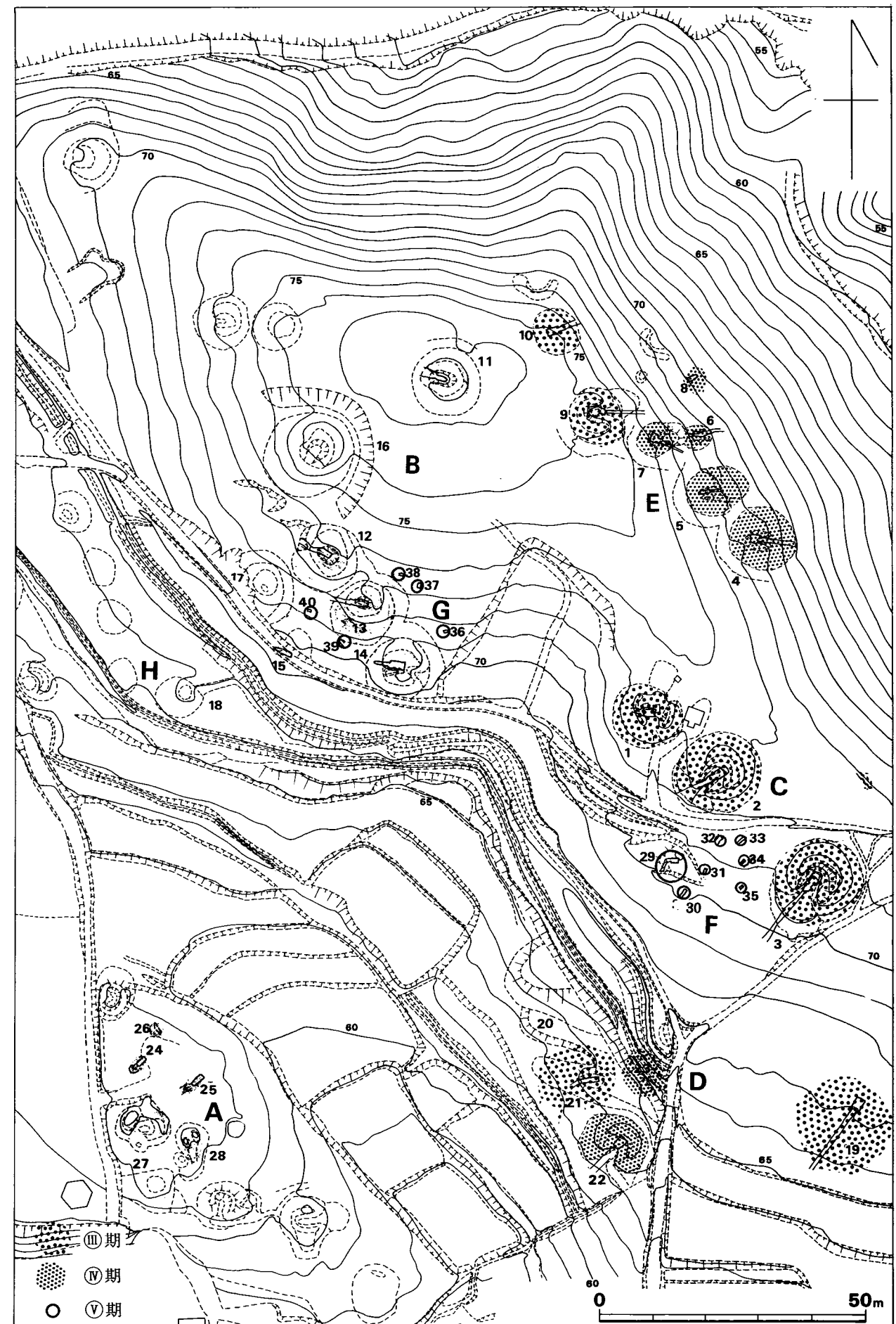
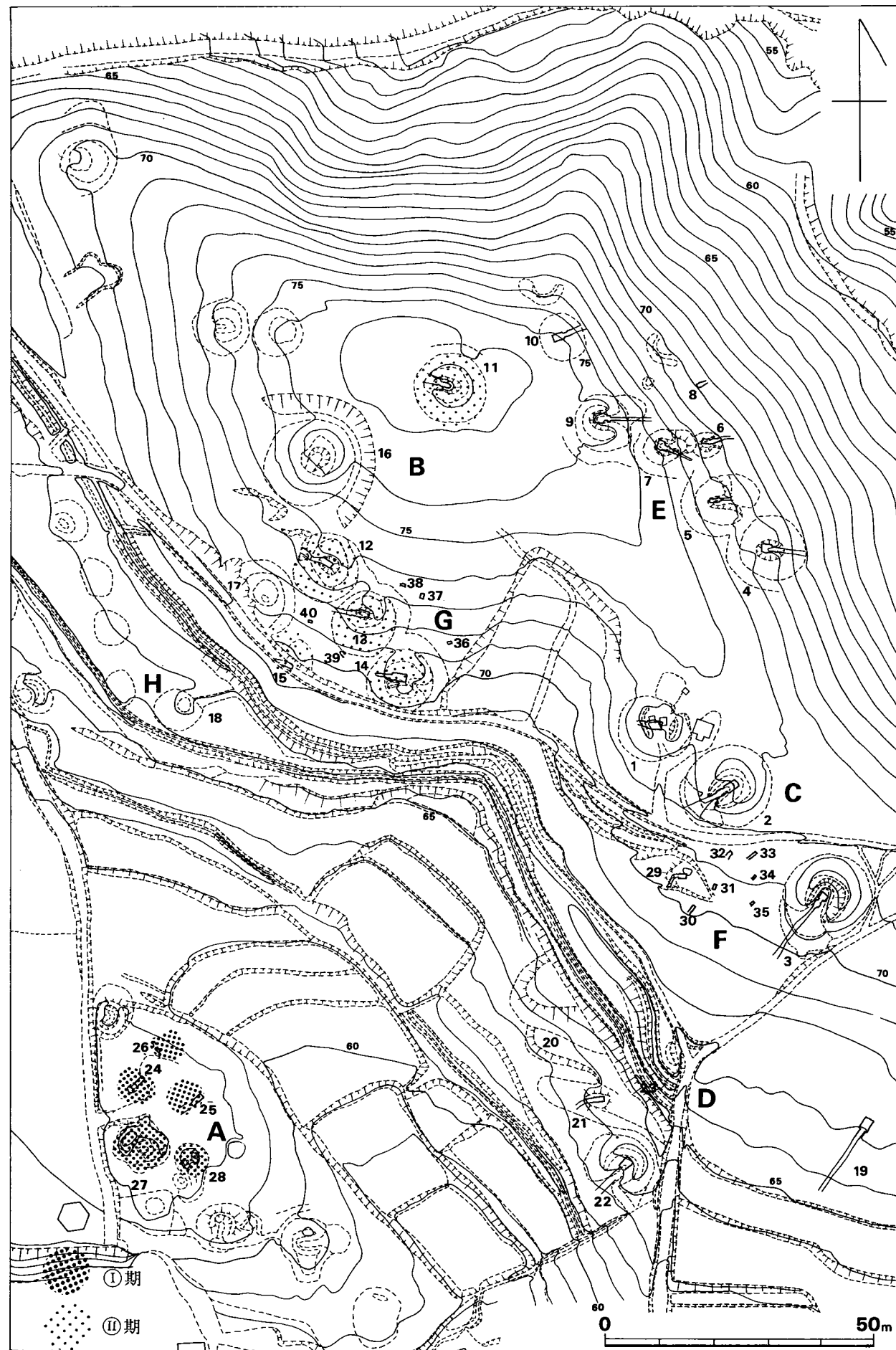


Fig. 147. 沼井掛土層群の形成過程図 (縮尺1/1,000)

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

要約すると汐井掛古墳群における古墳の出現は①、5世紀後半（Ⅰ期）でも末に近い時期にA群の第24号・第25号・第27号古墳で内部主体は竪穴系横口式石室（Ⅰ-a類）である。

第24号・第25号・第27号古墳よりは古式須恵器が出土してほぼ同時期のものであり須恵器からみて新旧は表わせないが、石室形態からすれば第27号古墳の前庭側壁部は玄室側壁と平行であり、第24号・第25号と出土遺物のない第28号古墳の石室は前庭側壁部が「ハ」の字状に開く違いがあり、この点から見ると第27号古墳が先行するといえようか。

なお、第24号・第25号・第27号古墳の石室は同じ方向に開口しており、第28号と第26号はほぼ同方向に開口する。

汐井掛古墳群の出現は、この汐井掛丘陵頂部にみられる汐井掛A遺跡とB遺跡が弥生時代後期から古墳時代前期に営まれた集団墓地から脱して支配者層が出現したことを思わせるものである。

このA群には他に5基の古墳が存在しており調査がなされていないので不明であるが少なくとも前記A群よりは後出するようである。

② やや時間を置いて6世紀中葉代（Ⅱ期）にB群の第12号・第13号・第14号・第15号古墳で内部主体は竪穴系横口式石室でも発達した竪穴系横口式石室（Ⅰ-b類）であり、第11号はこれらより若干後出すると思われる、単室横穴式石室（Ⅱ-a類）であり、竪穴系横口式石室から単室横穴式石室へと変化がみられる。

このB群の内では須恵器をみると第13号古墳が先行し、第14号、第12号古墳が続くようであり、その後、第11号古墳となる。石室からすると第15号古墳が第13号古墳より先行する。これらのB群は皆石室開口方向を同じにする。

③ 6世紀後半（Ⅲ期）になるとこれまでは1ヶ所に集中していたものがC群、D群、E群の3ヶ所に分れ、C群では3基の同時性が強く、D群では5基中2基が、E群では7基中の2基が出現する。この3群のうち、最も古い時期と思われるのにC群があり、ここでは単室横穴式石室のⅡ-a類とⅡ-b類とさらにこの時期より複室の横穴式石室（Ⅲ-a類）をみる。D群では第19号・第21号、E群では第10号・第9号が先行するようであり、それらの内部主体は単室の横穴式石室（Ⅱ-b類）と複室の横穴式石室（Ⅲ-b類）である。

C群では出土遺物からみると第1号古墳が若干先行し、第2号・第3号古墳は同時に後出するようである。石室からみると第1号は単室の横穴式石室であり、第2号は第11号と同じ単室横穴式石室で、第3号古墳は複室であり、各々の石室形態が違う。第1号古墳の墓道はB群と同一方向であり、第2号・第3号古墳は同じで、第1号古墳と違うところに意味があるものであろう。これらの3基は各々強く独立性を示すものとも理解される。第11号から第2号と第1号、さらに第3号と分化の兆しがみえる。

次のD群とE群でこれらは二手に分けられて二支群が平行してその後も築造され二支群併立

の状況にある。

④ 6世紀末から7世紀初頭(Ⅳ期)では前のD群とE群に新たに築造されたのは、D群では2基、E群では5基である。

D群、E群の二支群併立はこの時期でも続いてD群では第22号の複室と第23号の単室で、E群では第4号が複室で他は単室である。この段階でD群は築造されなくなる。E群では第6号・第8号が石室形態からすると第4号・第7号古墳より後出すると思われるが、第7号古墳の出土遺物は新しく7世紀前半代のものであり、D群よりは長く利用されたことは明らかである。

⑤ その後F群の7基とG群の6基が築造される時期について調査では明らかにされなかった。F群とG群についてはE群との連続性は明らかではないが、県内における後期～終末期群集墳の在り方や石室形態をみるとE群より新しく位置付けられるのは明らかであり、諸例より7世紀の後半代に位置付けられるものと推定する。

なお第10号古墳は木棺直葬であり、出土遺物もないため不明であるが、木棺直葬については福岡県内では類例が少なく最近いくつかの古墳より報告されているにすぎず犬鳴川流域を含む遠賀川下流域では初見のものであり、しいて推定するならば②のⅠ期といえようか。

これらの築造過程を図に示したのがFig.147である。

註1 石山勲「第12・9号古墳の石室構造について」『片山古墳群』（福岡県文化財調査報告第46集）1970年（昭和45年）3月。によりこの種石室の名称が提唱されて以来この名称に統一された観がありこれにしたがう。

註2 石山勲註1。同「平原古墳群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』—Ⅲ—) 1972年（昭和47年）1月

註3 佐田茂「竪穴系横口式石室の一側面」(『史淵』第112輯) 1975年（昭和50年）3月

註4 柳沢一男「北部九州における初期横穴式石室の展開」(『九州考古学の諸問題』) 1975年（昭和50年）3月

註5 小田富士雄・黒野肇「筑前高倉古墳群調査概報」(『九州考古学』17) 1963年（昭和38年）2月

註6 川述昭人『東田古墳群』1977年（昭和52年）3月

註7 鞍手町誌編集委員会編(『鞍手町誌』上巻) 1974年（昭和49年）9月

註8 牛島英俊「古墳時代の直方」(『直方市史』上巻) 1971年（昭和46年）8月

註9 石山勲「下有木1号古墳」(『宮田町誌』上巻) 1978年（昭和53年）3月

註10 鶴久嗣郎「第6—3地点(八幡塚古墳)の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1973年（昭和48年）3月。では墳丘測量と周濠の一部が調査された報告であり、この時点では主体部の調査がなされていない。その後昭和50年4月に同じ福岡県教育委員会技師柳田康雄氏等により主体部が調査された。その結果、内部主体は横穴式石室でも初期のも

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

のでやはり竪穴系横口式石室とされよう。なお時期については5世紀後半代とされる。この主体部については柳田康雄氏よりご教示を受けた。

- 註11 佐田茂他『栗崎山古墳群』1973年（昭和48年）3月
- 註12 花村利彦「セスドノ古墳」。同「セスドノ古墳」（『田川市史』上巻）1974年（昭和49年）3月
- 註13 波多野暁三編『城ヶ谷古墳群』1977年（昭和52年）11月
- 註14 西谷真治，毛利光俊彦，山内紀嗣，土生田純之『稲元古墳群第1期調査報告』1976年（昭和51年）3月
- 註15 波多野暁三「宗像郡宗像町三郎丸古墳群調査」（『福岡教育大学紀要』第21号）1971年（昭和46年）3月  
同「三郎丸古墳群」（『筑紫史論』第三輯）1975年（昭和50年）10月
- 註16 石山勲・川述昭人『新原・奴山古墳群』（福岡県文化財調査報告書第54集）1977年（昭和52年）3月
- 註17 石山勲「高木B-1号古墳」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XIII-）1977年（昭和52年）3月
- 註18 小田富士雄「神崎古墳群の調査」『銀冠塚』（福岡県文化財調査報告第28集）1963年（昭和38年）3月
- 註19 松村一良・児玉真一「小原古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XI-）1977年（昭和52年）3月
- 註20 昭和40年頃よりの現地調査による。
- 註21 上野精志・小方良臣「古墳時代」（『宮田町誌』上巻）1978年（昭和53年）3月
- 註22 池辺元明「鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-VIII-）1977年（昭和52年）2月
- 註23 森貞次郎「福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳」（『美術研究』194）1957年（昭和32年）他
- 註24 浜田信也『金丸古墳』1976年（昭和51年）3月
- 註25 小田富士雄「横穴式石室古墳における複室構造の形成」（『史淵』第百輯記念特輯）1967年（昭和43年）3月
- 註26 拙稿「向山5号墳」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-XII-）1977年（昭和52年）3月
- 註27 福岡市西区の群集墳については下記によった。
- 1 福岡市教育委員会編『福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集）1971年（昭和46年）3月
  - 2 亀井明德「古墳時代の早良平野」（『宮の前遺跡（A～D地点）』1971年（昭和46年）6月
  - 3 浜田信也「今宿一飯氏地区の遺跡」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集）1971年（昭和46年）3月

- 4 緒方勉編『大谷古墳群Ⅰ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集）1972年（昭和47年）3月
- 5 柳田純孝編『片江古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第24集）1973年（昭和48年）3月
- 6 小田富士雄他『倉瀬戸古墳群 付・駄ヶ原古墳群』1973年（昭和48年）3月
- 7 島津義昭『牟多田遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集）1974年（昭和49年）3月
- 8 藤田和裕・柳沢一男『相原古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第28集）1974年（昭和49年）3月
- 9 福岡大学歴史研究部編『駄ヶ原古墳群・霧ヶ滝古墳群分布調査概報』1976年（昭和51年）12月
- 10 山崎純男「広石古墳群とその周辺」『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）1977年（昭和52年）3月
- 11 福岡大学歴史研究部編『鳥越古墳群』1977年（昭和52年）8月
- 註28 西谷正・柳田康雄・副島邦弘（『津古内畑遺跡』第1次）1970年（昭和45年）3月
- 註29 井上裕弘「観音山古墳群の調査」『昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報』1972年（昭和47年）1月
- 註30 酒井仁夫「八隈9号墳」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－Ⅶ－）1976年（昭和51年）7月
- 註31 石山勲「古墳における古式須恵器の在り方について」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－Ⅹ－）1977年（昭和52年）3月
- 註32 浜石哲也「墳丘墓底面および墳丘外土壌について」『広石古墳群』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集）1977年（昭和52年）3月
- 註33 浜田信也「高崎古墳群」（『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第1集）1970年（昭和45年）3月
- 註34 西谷正他「山の前古墳群の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－Ⅲ－）1972年（昭和47年）1月
- 註35 浜田信也氏（福岡県教育委員会）のご教示による。
- 註36 川述昭人「荻原古墳の調査」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』－Ⅳ－）1975年（昭和50年）3月
- 註37 泉森皎「フジヤマ古墳群」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』（奈良県文化財調査報告書第28集）1976年（昭和57年）3月
- 註38 拙稿「福岡県感田横穴群の調査」（『考古学ジャーナル』第79号）1973年（昭和48年）3月
- 註39 渡辺正気・古墳精里「筑前朝倉群狐塚古墳」（福岡県文化財調査報告書 第17輯2分冊の1）1954年（昭和29年）3月
- 註40 前川威洋「君畑遺跡」（『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集）1977年（昭和52年）3月
- 註41 川述昭人「唐人塚古墳の調査」（『九州縦貫道関係埋蔵文化財発掘調査報告』－ⅩⅧ－）1977年（昭和52年）11月

## 1. 汐井掛古墳群の諸問題

- 註42 田辺昭三(『陶邑古窯址』Ⅰ) 1966年(昭和41年) 4月
- 註43 九州においてⅡ期を6世紀前半とし、それを基準にしているためそれ以前をⅠ期に入れる。  
樋口隆康「須恵器」(『世界陶磁全集』Ⅰ) 1958年(昭和33年)
- 註44 田辺昭三(『陶磁大系』4 須恵) 1975年(昭和50年) 10月
- 註45 小田富士雄・武末純一「西日本出土の初期須恵器—大阪府堂山古墳を中心として—」(『古文化研究会会報』№3) 1977年(昭和52年) 3月
- 註46 中間研志「向山住居跡群の調査」(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—ⅩⅡ—) 1977年(昭和52年) 3月
- 註47 Ⅲ—B期からⅣ期にかけてヘラ記号が多いのは汐井掛古墳群のみならず、他においても言えることではなかろうか?
- 註48 松田真一「鉄製紡錘車とその出土遺跡」『宇陀・丹切古墳群』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第30冊) 1975年(昭和50年) 3月  
小泉俊夫・伊藤勇輔『大王山遺跡』 1977年(昭和52年) 9月
- 註49 鈴木重治氏(現同志社大学)調査、宮小路賀宏氏(福岡県教育委員会文化課)ご教示
- 註50 木下修「歴史時代の遺構と遺物 木棺墓」(『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第3集) 1977年(昭和52年) 3月
- 註51 石山勲氏ご教示。同(『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』—ⅩⅣ—) 1978年(昭和53年) 3月

## 2 考 察

### 1) 犬鳴川流域の古墳文化と汐井掛古墳について

汐井掛古墳群の調査結果は犬鳴川流域では古墳が多く分布する割には装飾古墳で有名な竹原古墳のみが特筆され他の古墳についてはほとんど触れられることがなく、遠賀川下流域の弥生文化については多数の論考等があるが、古墳文化についてはほとんどないといえる。

汐井掛古墳群の諸問題をふまえながら、再度犬鳴川流域および鞍手郡鞍手町、直方市を含めた旧『くらて』の地域における古墳文化について考えてみたい。

#### a 犬鳴川流域における古墳の出現

犬鳴川流域における古墳の発生は、遠賀川下流域でも早い方である。4世紀に成り九州において畿内型古墳が畿内に一番近い瀬戸内海よりの豊前・豊後地方に出現する。その後、玄界灘周辺の筑前北部や肥後地方に伝播して行き、さらにそれから内陸部へと畿内型古墳は進展してゆくが、犬鳴川流域の古墳発生は筑前でもおそい方で5世紀前半から後半に若宮町の剣塚前方後円墳が築造された<sup>註(2)</sup>と想定される。その後徐々に犬鳴川流域には古墳が築造され始める。

古墳出現以前の墓制をみるとそれは弥生時代の墓制の踏襲であり石棺墓や木棺墓、土塚墓が主体である。

遠賀川流域でもいち早く古墳が出現する上流域に比べて下流域は古墳の出現がおそく、未だ弥生時代の墓制が変わることなく用いられていて畿内文化の浸透が他の地域よりおくれていて古墳時代の4世紀代には古墳を築造できるような在地勢力は存在していなかったのであろう。

これは犬鳴川流域に限らず遠賀川下流域全域についてもいえることであり遠賀郡内や中間市、鞍手郡鞍手町、直方市内でも4世紀代の古墳はみられない。

汐井掛古墳の存在する宮田町内の汐井掛丘陵において九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査及び、昭和51年度に地域整備公団宮田・若宮地区工業団地に伴う発掘調査で、汐井掛遺跡が調査された<sup>註(3)</sup>。前記調査では丘陵上に100m離れてA・B二つの墓地群が検出される。A地点から木棺墓166基、箱式石棺墓27基、石蓋土塚墓11基、甕棺墓1基が発見され、これらの遺構に伴い数多くの遺物が出土している。B地点では木棺墓15基、箱式石棺墓5基、石蓋土塚墓1基が検出される。

後記調査では前述のA地点の隣接地を調査対象として木棺墓、箱式石棺墓など約50基を検出している。これらは弥生時代後期から古墳時代にかけてのものである。

以上のように古墳出現以前の犬鳴川流域の墓制は汐井掛遺跡のみであり、これに代表される。

犬鳴川流域における古墳の出現と想定する剣塚古墳は犬鳴川・黒丸川・山口川の合流点の西側小金原丘陵の先端部の低位置に立地する。二段築成の前方後円墳であり、全長約58m、後円



## 2. 考 察

部径28m, 前方部幅約25mを測る。内部主体は不明で、遠賀川下流域では最大級のものである。後円部の南側の大半が興玉神社の建築の際に削り取られているが、そのほかはよく形状を留めている。昭和37年に後円部に半円状に15個の円筒埴輪の配列が確認されている。

前方後円墳の形状は古式であり墳丘には葺石が部分的にみられ、又後円部の埴輪の在り方などからして少なくとも5世紀中葉を下らない古墳と推定する。それは畿内型古墳文化が5世紀後半頃までに九州全域に渡って拡充されていく一現象としてとらえることができ、この犬鳴川流域にも畿内型古墳文化が進展してきた過程としてとらえられよう。

さらに剣塚古墳の南方約600mの丘陵頂部に高野第1号古墳<sup>註(2)-(3)</sup>がある。この古墳は帆立貝式前方後円墳で全長約40m, 後円部径約30m, 前方部幅約10mを測り原形をよく留めている。内部主体は未発掘のため不明であるが墳丘上より円筒埴輪片が採集されていて、剣塚古墳に後出する古墳とされ5世紀中葉から後半代のもものと推定する。

以上二つの古墳は墳丘測量調査のみであり出土遺物は円筒埴輪片だけであるが諸特徴より少なくとも5世紀代に位置付けられることは許されるであろう。

## b 竪穴系横口式石室の出現

犬鳴川流域において今日の資料で明確に年代が明らかにされるのは竪穴系横口式石室を主体部とする古墳である。

5世紀末頃になると遠賀川下流域の各地において横穴式石室の出現をみる。下流の遠賀郡岡垣町に片山古墳群、遠賀川右岸の直方市上境の福地神社境内第2号古墳、そして犬鳴川流域では宮田町の有木川左岸の下有木第1号古墳、若宮町では上記剣塚古墳や高野第1号古墳と黒丸川を挟んで対岸の丘陵上に位置する八幡塚古墳と汐井掛第24・25・27号古墳などの汐井掛古墳A群が出現する。

この竪穴系横口式石室が出現する時期はIV章-1でみたように片山古墳や汐井掛古墳の出土須恵器より5世紀末である。犬鳴川流域では3ヶ所にみられ点在している。

これらの古墳は、いずれも小古墳群を形成していることは前の剣塚古墳の段階では見られなかった現象で、片山古墳では同丘陵上に点在しており、鎧塚第4号古墳の場合は主盟的な鎧塚第1号古墳（内部主体不明、竪穴式石室又は竪穴系横口式石室と推定される）を取り巻くように5基がある。下有木第1号古墳の場合でも5基の古墳があって、いずれも4、5基からなる古墳を形成し始める。

これら古墳の副葬品は片山古墳を欠き、他の古墳の副葬品をみると貧弱であり後出性を現わしている。

一方では、5世紀代に依然として箱式石棺を主体とする古墳も見られる。遠賀川右岸の遠賀郡芦屋町夏井ヶ浜箱式石棺<sup>註(4)</sup>は副葬品として古式の特徴を示す須恵器があり、壺の中に高坏と罫が収納してあって高坏は口径18cmを測る大形無蓋高坏で脚部を失っているが二個の把手がつく

もので甌や壺と共に須恵器編年 I 期後半とされるものである。

犬鳴川流域では若宮町金丸の西の浦古墳<sup>註(5)</sup>も内部主体箱式石棺で須恵器の出土はないが鉄器が出土しており 5 世紀中頃から後半に比定されている。さらに嘉穂郡であるが鞍手郡に近い頼田町<sup>註(6)</sup>きょう塚古墳も箱式石棺で墳頂から出土した須恵器壺は古式の特徴を示しており I 期から II 期の過渡期にわたるものとされている。

このように 5 世紀末には各所で弥生時代の伝統的な墓制である箱式石棺を内部主体とする古墳と新たにこの地域に出現した竪穴系横口式石室を内部主体とした古墳の併立をみるのである。犬鳴川流域の竪穴系横口式石室は玄界灘沿岸の宗像地方や福岡平野におけるこの種石室より後出するものであるということは IV 章 - 1 で述べた通りであり、現状では宗像地方や遠賀地方の影響下に出現したと言わざるを得ない。

竪穴系横口式石室に葬むられた被葬者達は、この犬鳴川流域では先見の明を持っていた。それとも必要に応じて仕方なくかは別として勝れた在地豪族層であり九州北部沿岸地域に目を向けた結果であり、さらに遠く海の向うにまで係わりを持ったものと想定され、決して沿岸地域よりはその域を出ないが、この犬鳴川流域においては卓越した人々と考えられよう。これ以後の当地方の古墳文化に多大な影響を与えたとして把握出来るものである。

#### c 単室横穴式石室と横穴墓

6 世紀になると遠賀川流域では本流の左右沿岸に横穴墓が出現し、直方市感田第 10 号・第 11 号・第 12 号横穴墓<sup>註(7)</sup>では古式須恵器が出土しており同市明神横穴墓<sup>註(8)</sup>でも 6 世紀前半に比定できる須恵器が出土している。横穴墓は犬鳴川流域では宮田町に 2 ヶ所、又、鞍手町に 3 ヶ所所在るぐらいで本流の遠賀郡水巻町や中間市、直方市、鞍手郡小竹町に多く分布しており、この地域には逆にあまり古墳はみられない。

他の地域では竪穴系横口式石室の古墳が引き続き存在しており、汐井掛古墳 B 群の第 13 号・第 14 号・第 15 号古墳や遠賀郡岡垣町東田古墳群などであり、その後単室横穴式石室が出現し、汐井掛第 11 号古墳や、鞍手郡鞍手町の神崎第 1 号古墳などで、6 世紀の前半から中葉代である。

犬鳴川流域では竪穴系横口式石室の古墳が一時期おくれて出現したのと同様に単室横穴式石室の出現も玄界灘沿岸に比べて一時期おくれて出現する。このことは複室の横穴式石室でも前に述べたように他の地域よりおかれて出現することは古墳文化受容体制の弱体化を示しており、玄界灘沿岸地域の影響化にある事を如実に表わしていると言えよう。

犬鳴川流域と玄界灘沿岸地域との交渉を示すものとして宗像郡津屋崎町の新原・奴山古墳群があり、これらは「宗像君」を彷彿させるもので、在地首長にとどまらず周辺地域に多大な影響を与えたものと受け取られ、犬鳴川流域ではその影響をまともに受けて後期古墳文化が発達・展開して行ったものとされよう。

#### d 群集墳について

## 2. 考 察

汐井掛古墳群のように約53基からなる大群集墳は犬鳴川流域において数ヶ所存在しており、若宮町の山口川右岸にある茶白山古墳群は一部発掘調査が行なわれた小原支群、前方後円墳の里古墳（内部主体は複室の横穴式石室で玄室内に石棚がある）を含む里支群合せて約80基を数える。黒丸川の左岸では宮永古墳群（約70基と言うが現在みられるのは20基）、犬鳴川右岸の上金生古墳群では32基+αが在り、その他10数基で形成される古墳群もあってこれらが点在している。宮田町の有木川右岸では百塚古墳群があり現在約50基の古墳がみられる（第1号古墳は「Tの字型」石室で石室の右側壁に石棚がある）。群集墳の中でも卓越したように大型の古墳がみられ、装飾古墳の竹原古墳や、二段築成で複室であり玄室に死床を設けている金丸古墳や、宮田町では谷頭前方後円墳<sup>註(9)</sup>、西川流域では新延大塚古墳<sup>註(10)</sup>や銀冠塚古墳<sup>註(11)</sup>など6世紀の後半から7世紀の前半にかけて爆発的に古墳の出現をみるのはやはり玄界灘沿岸地域と深い係わりを示しているといえよう。

なお、この地域における群集墳の在り方については汐井掛古墳群のように5～7基ぐらいの各群が年代の幅を広く持ちながら点在して数十基の古墳群を形成するものと、茶白山古墳群や百塚古墳群のように時期の判明しているものや開口している石室などからして、一時期の古墳が集中して古墳群を形成している二つのタイプがあるようである。

汐井掛古墳群では古墳群形成過程Ⅹ期においてより群集化して行き、古墳群形成過程Ⅸ期になると横穴式石室の単室、複室とも小型化をたどりその後複室の横穴式石室はみられなくなる。両袖型の単室の横穴式石室が退化したものであろうと思われるものにE群の第6号・第8号があり小型の横穴式石室構造を呈している。これらの古墳はE群では最も新しく築造されたもので6世紀末から7世紀初頭である。

## e 終末期古墳

汐井掛古墳群ではD・E群の築造が終り、古墳群形成過程Ⅷ期になるF・G群が築造されるのは所謂「終末期」を思わせるものである。北部九州における終末期については空白の部分が多く、古墳の終焉問題や奈良時代の火葬墳墓との係わりなど不明な点が多い。

遠賀川流域でも終末期古墳の資料がほとんどない内で汐井掛古墳群は良好なものとされよう。しかし、汐井掛古墳群のF・G群についても不明確な部分が多くなお一層の検討を要するものである。ここでは汐井掛の丘陵には奈良時代の火葬墳墓が5基検出されており、これらの係わりについてはなお不明であるとしか言いようがなく終末期古墳について広い視野で考えねばならないことを痛感する。

畿内地方において古墳終末期にやはり小型の石室（小石室）<sup>註(12)</sup>が見られるが、竪穴式石室にちかい横穴式石室が終末期でない例もあってなお検討を要するようであり、九州地方においては終末期古墳の類例を待ちながら又、畿内の小石室との関連も検討しなければならない。

以上、みてきたように犬鳴川流域の古墳文化について考える時には玄界灘沿岸の古墳との比

較検討がより一層深められることが待たれるところであり、その成果が犬鳴川流域の古墳時代後期の人々は遅ればせながら、沿岸地域と深い係わりを保って常に有機的関連性を保持しながら存在していたことをより深く理解させるものになろう。

なお、「宗像君」との関連だけに絡らず、さらに遠賀川上流との係わりについても考えてみなければならぬことはいうまでもなく、他日機会があればふれてみたい。

(上野精志)

- 註1 拙稿『古門窠跡』（福岡県文化財調査報告書第50集）1973年（昭和48年）3月
- 註2-1 島田寅次郎「剣塚」（福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第1輯）1925年（大正14年）3月
- 2-2 鞍手教育研究所『鞍手郡郷土史』1965年（昭和40年）6月
- 2-3 池辺元明「鞍手郡若宮町・宮田町所在遺跡群」（『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』-Ⅷ-）1977年（昭和52年）2月
- 註3 福岡県教育委員会編（『くらでのむかし』その3）1976年（昭和51年）3月 石炭鉱害復旧事業団による調査については池辺元明氏（福岡県教育委員会文化課）よりご教示をうけた。
- 註4 小田富士雄編『夏井ヶ浜古墳』（芦屋町文化財調査報告書第1集）1971年（昭和46年）3月
- 註5 亀井明德・佐野一「福岡県鞍手郡若宮町西の浦古墳調査概報」（『九州考古学』36・37）1969年（昭和44年）7月
- 註6 児島隆人・渡辺正気・佐野一『嘉穂郡穎田町きょう塚古墳』（福岡県文化財調査報告書第21集）1961年（昭和36年）3月
- 註7 拙稿「福岡県感田横穴群の調査」（『考古学ジャーナル』第79号）1973年（昭和48年）2月
- 註8 牛島英俊「古墳時代の直方」（『直方市史』上巻）1971年（昭和46年）8月
- 註9 上野精志・小方良臣「古墳時代」（『宮田町誌』上巻）1978年（昭和53年）3月
- 註10 鞍手町誌編集委員会編（『鞍手町誌』上巻）1974年（昭和49年）9月
- 註11 渡辺正気他『銀冠塚』（福岡県文化財調査報告書第28集）1963年（昭和38年）3月
- 註12 楠元哲夫「黒石東古墳」『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』（奈良県文化財調査報告書第28集）1976年（昭和51年）3月
- 菅谷文則「丹切35号墳の調査」『宇陀・丹切古墳群』（奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第30冊）1975年（昭和50年）3月

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —XXII—  
(本文編)

昭和53年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 株式会社西日本新聞印刷

福岡市中央区天神1丁目4番1号